

Title	台湾日本語俳句に関する文化史的考察－「台北俳句会」を中心として－
Author(s)	染川, 清美
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/51841">https://doi.org/10.18910/51841</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

2014年12月大阪大学大学院文学研究科提出

博 士 論 文

台湾日本語俳句に関する文化史的考察  
—「台北俳句会」を中心として—

染 川 清 美

## 目 次

序 章 台湾日本語俳句を語る視座とその方法	
第一節 台湾日本語俳句の概念と本論文の目的	1
第二節 日本語俳句と「台北俳句会」を結ぶ歴史背景	2
第三節 台湾日本語俳句の視座と先行研究	7
第四節 各章の概要と分析方法	10
第一章 戦前日本統治期における台湾俳句結社	
はじめに 本章の問題と方法	14
第一節 『ホトトギス』と新傾向俳句派	15
第二節 虚子の『ホトトギス』俳壇復帰	24
第三節 『ホトトギス』と台湾季題	32
おわりに	41
第二章 黄霊芝の『軍民導報』と『台湾俳句歳時記』	
はじめに 本章の問題と方法	45
第一節 黄霊芝の略歴とその周辺	46
第二節 『軍民導報』と1950年代初期の社会と文化	46
第三節 戦後の日本俳句会との関わり	52
第四節 「台北俳句会」の創設	53
第五節 黄霊芝の『台湾俳句歳時記』	55
おわりに	63
第三章 日本統治後の台湾日本語俳句の空間 ―日本語残留孤児の居場所―	
はじめに 本章の問題と方法	65
第一節 「台北俳句会」創立と主体性の行方	67
第二節 「政治には関わらない」ことと「日本語残留孤児」の居場所	73
第三節 一句に内包される台湾排除の世界空間	79
おわりに	83
第四章 「台北俳句会」俳句自分史アンソロジーの語りを中心に	
はじめに 本章の問題と方法	87
第一節 黄霊芝と頼天河の俳句における台湾に生きること	87
第二節 「台北俳句会」会員の俳句とその語り	93
第三節 「台湾川柳会」の変遷	102
おわりに	106

第五章 張繼昭 (Andy Chang) と「台北俳句会」の関わり	
はじめに 本章の問題と方法	108
第一節 張繼昭から Andy Chang への軌跡	110
第二節 張繼昭と Andy Chang のはざまから生まれくるもの	118
第三節 張繼昭にとっての台湾独立運動とその周辺	123
おわりに	130
終章 戦後の台湾空間に存続する「台北俳句会」	
第一節 先行研究との比較から導かれるもの	136
第二節 「台北俳句会」存続における周縁化と中立性・中間性	139
第三節 「台北俳句会」と永続性の希求ということ	141
資料	144
参考文献	149

## 序 章 台湾日本語俳句を語る視座とその方法

### 第一節 台湾日本語俳句の概念と本論文の目的

本稿は、外国の地、台湾において、日本語で俳句を詠む「台北俳句会」の活動を、歴史的・政治的・文化的に、特に国家・国民・言語と文化という文脈から分析するものである。中でも特に、「台北俳句会」の「政治に関わらない」という暗黙の共通認識の解明を中心に据える。

この「政治に関わらない」の「政治」とは、狭義に言えば、その社会生活空間における直接的な議員立候補とか選挙活動をする等の政治活動を指し、広義に言えば、台湾の歴史的経過から生じる必然的諸処に関わる要件、特に戦前日本統治期において、皇民化教育を受けた世代が、戦後の国民党政府の戒厳令<sup>1</sup>で、植民地政策ツールであった日本語を新聞・雑誌等メディアにおいて禁止された<sup>2</sup>ことに依拠していることも関連している。したがって、戦後の台湾社会では、日本統治時代を懐古し称揚することも、反政府的行為となり、政治活動となるのである。その戒厳令の最中に、日本語使用の文芸の会「台北俳句会」は発足したのであるから、広義では、日本語俳句をすること自体が政治に関わることであり、戦後の政府に逆らうことであった。その俳句会において会員達が、「政治に関わらない」という意識を共有し、しかも戒厳令が解かれて久しい現在に至っても、そのことが継続されているという事実の本質を究明しようとするものである。本論の分析期間は、1895年（明治28）から2010年代初期までとする。

ところで日本起源の文芸である俳句が、世界50カ国200万人に、自国語で嗜まれていることを知る人は少ない。中でも台湾の「台北俳句会」は、唯一、外国人が外国の地で日本語による俳句を詠んでいる会である<sup>3</sup>。ここで言う日本語俳句会とは、外国の地において外国人が主宰し、その会員の殆どが外国人で、日本語によって俳句表現をする会のことであり、日本からの移民俳句や個人的に外国人が日本語俳句を詠んでいる例は含まないものとする。

以上の要件から、台湾日本語俳句を調査・分析することは、台湾と日本の歴史的関係のみならず、台湾そのものの置かれた東アジアと世界の中での立ち位置を明確にし、文化文芸の文脈の枠を超えて、近代歴史における貴重な研究位置を占めるという観点から、意義あるものとする。

さて外国台湾の地で、何故日本語の俳句かと問われれば、表層的には日本の植民地政策により日本語教育を受け、日本語を習得した世代の人々が創設し、現在に至っているからと言えよう。したがってその台湾日本語俳句とは、歴史的背景からして、台湾が日本に割譲された1895年以降の台湾に移入された明治期の俳句から、昭和期の戦中・戦後を経て、平成期日本の今日に至るまでのものを指す。中でも戦後日本統治以後の台湾において、未だに日本語俳句を詠む「台北俳句会」の日本語俳句が中心である。

ところで、日本特有の文化財産である俳句文芸が、いかなるものであるかは、日本人なら当然理解しているとの前提で本論に取り組んでみると、日本人自体に理解されていないということに、当惑させられる。日本固有の文芸であることは、知識として分かっている

ものの、その特性についての理解は、忘却の彼方へ消えうせてしまっているのが実情である。小学校・中学校で基礎知識を得て、一部の者は作句した経験はあるかもしれないが、その後は俳句会等に所属しない限り関心は失せてしまっている。まして、俳句の起源や近代俳句の起源など知る由もなく、台湾に当初移入された俳句が、日本俳句の歴史において、如何なる位置づけにあったかを知る人は少ないことであろう。

そこで、簡潔に俳句の歴史を要約しよう。

俳句の起源は『古事記』からと言え、驚く人もいるかもしれない。その中に歌の詠み合いらしき文章が綴られ、旋頭歌（五七七・五七七）なる歌の詠み合いも収録され、これが連歌の始まりとなった。連歌は一人が五七五と詠むと次の人が七七と付けて詠み、次にまた五七五と詠んで、その次の人が七七と続ける。それを何人かが続けて詠み合っていく、一つの形式にまとめたものを言う。これらは時代が下るに従って、平安朝貴族達の遊びとして盛んになり、その五七五と七七だけで独立させて和歌とし、和歌の詠み合いも貴族社会の嗜みとなっていった。和歌はもともと、「やり取りして和する」の意である。

一方、室町末期から、貴族の社会ではなく、武士の社会に連歌を広める人が連歌師として登場し、飯尾宗祇・山崎宗鑑・荒木田守武・松永貞徳・西山宗因などが、その名を馳せたが、これらの連歌師はまた、連歌から俳諧を独立させるに尽力した人々でもある。江戸前期の古典学者北村季吟もその一人であり、その門人の松尾芭蕉に到ってその完成を見るのであるが、俳諧の祖宗祇から約150年後の江戸前期の松尾芭蕉が、この詠み合いの特に三十六歌仙を俳諧と称して、武士・町人の遊戯の域から文芸の高みへと到達させたのであった。

その後、明治期に入り、この俳諧について新論を唱え<sup>4</sup>、俳諧の最初の句つまり発句のみが価値あるものとして、「俳句」と命名したのが正岡子規である。彼がその新風を起こしたちょうどその頃の1895年(明治28)に、台湾は日本に割譲され、日本人が台湾へ移住を始めると同時に、俳句も台湾へと移入されていった。したがって、新天地台湾は、新興俳句と旧俳諧が同時に移入され、新旧俳句の入れ替わりをも経験する新境地の舞台でもあったと言えよう。つまり、日本での俳句の改革は即、台湾の地にも引き継がれ、1945年の敗戦まで、「内地」日本の俳壇の様子は、台湾の地においても影響を受けていた。その詳細は、「内地」の高浜虚子主宰の俳誌『ホトトギス』<sup>5</sup>に、或いは『台湾日日新報』<sup>6</sup>の文芸欄と「日日俳壇」等に掲載されている。台湾からの『ホトトギス』への投稿は、戦中も多数あり、台湾俳句の底力を示した後、戦争激化によって減少し、終戦で最後となる。そういう意味で『ホトトギス』は、台湾の地での俳壇情勢を知る上で、最適の俳句雑誌である。そのため、台湾の俳句の歴史を辿る手がかりとして、本稿の第一章にも、分析資料として採用した。

## 第二節 日本語俳句と「台北俳句会」を結ぶ歴史背景

### 1 日本に割譲されるまでと日本語教育の始まり

本稿研究の主対象である「台北俳句会」の日本語俳句と戦前の台湾俳壇とは、如何なる

つながりがあるかと問われれば、俳句結社の流れとしての直接的な関係は全く無いと、主宰黄靈芝<sup>7</sup>は言う。結社としての繋がりはないとは言え、台湾の地での日本語教育の基盤がなければ、日本語俳句が成立しなかったことは言うまでもない。そこで、日本語教育の中で、俳句はどのようにその教育課程に採用指導されてきたのかを概観する。その上で、戦後の「台北俳句会」との関わりへと繋ぐ。

その前提として、割譲に至るまでの台湾の歴史の変遷の概略を述べておこう。

先ず、日本が割譲によって台湾に上陸するまでには、オランダ統治時代(1624-1661年)・鄭氏統治時代(1661-1683年)・清朝統治時代(1684-1895年)の3時代を経て日本統治時代(1895-1945年)となり、過去4時代を刻んで戦後の中華民国統治時代の現在に至る。詳述は本論文に譲るが、歴史の重要地点として恵濟宮(別名開漳聖王廟)を取り上げる。

「漳」は中国福建省漳州の意味で、同じく福建省泉州と広東省嘉應州と共に、台湾の漢民族系の住民の3大出身地のひとつである。こうした中国本土からの移民が、相次いで押し寄せ、それ以前の先住民「平埔族」と後の日本命名の「高砂族」と交易や婚姻によって次第に勢力を拡大し、支配勢力となった。そうして、台北盆地に住んでいた「平埔族」をその地から追い出し、恵濟宮にその祖を祀って今日に至っている。したがって、この廟はこの地の漢民族の開拓史の象徴であると共に、それはまた、先住民族の歴史の象徴でもある。

ところでまたこの地は、台湾の歴史のみならず、奇しくも台湾と日本の歴史を象徴する場所でもある。1895年4月、台湾が日本に割譲された時から、台湾住民はすんなりと日本政府に屈服したわけではないが、日本軍は台北に無血入城し、6月に台湾総督府を開いた。その翌月、総督府初代学務部長に任ぜられた伊沢修二が、芝山巖恵濟宮に数名の教師と共に学務部を置いた。これが最初の植民地教育の始まりであった。とは言え、その後も、各地に土着勢力による抵抗は続き、その抵抗勢力の一団が翌年、この芝山巖恵濟宮の「国語伝習所」を襲い、6名の教師が殺された。それがこの公園に、今もなお「六氏先生」の墓として、また「学務官僚遭難之碑」として、大切に保存されており、日台間の歴史的な場所<sup>8</sup>となっている。

もともと台湾語で日常会話していた台湾の人々に、ここを日本語教育の発祥の地として、日本語教育が突然同化政策のもとで行われるようになった。殆ど人生の大半に当たる歳月を、最終的には7割強の台湾の子供たちが、日本語の小学校教育の環境下に置かれ、社会人に成長していった。すなわち、この50年間に植民地として、日本語教育を受けた世代を中心に、日本語教育とその一分野に、日本固有の短詩文学としての俳句が、知識として移植されることになったのである。

こうして漸次日本語教育が実施され、皇民化政策教育によって日本語教育に更に拍車がかかる。当然の成り行きとして、日本語に関わる文化文芸が学校教育の中に導入され、台湾での日本語と日本語文芸は、殊に皇室の教養である短歌を筆頭に、それより遅れて俳句が、台湾の小学校読本に掲載された。日本語と日本語短詩文芸とが同調しつつ、小学校教育の段階から台湾人の教養として移入されていくのである。しかし実作の能力が身に付く程度までに到ったのは、小学校卒業後の一部、上級学校での生徒たちであった。その小学校期の具体的な例を、当時の公教育教科書によって示す。

台湾の初等教育用国語教科書に短歌が最初に現れるのは、1926年から使用の台湾総督府編纂第三期国語教科書『公学校用国語読本 第一種 卷12』(第六学年後期用)「第一課 明

治天皇御製」からであり、俳句が現れるのはかなり遅く、第四期国語教科書『公学校用国語読本 巻12』の1942年である。短歌・俳句両方が載ったのは1944年発行の日本統治期最後の第五期国語教科書『初等科国語 七』（第六学年前期用）と同『初等科国語 八』（第六学年後期用）においてであるから、公学校国語読本に記載された短歌や俳句を読ませることは出来ても、詠ませることまでは国語能力的にも出来ない。したがって、中等学校以上の1930年ごろまでに生まれた人々だけが、短歌や俳句の教養を身につけたため、現在台湾の日本語文芸の会の会員は、本稿を手がけ始めた2004年の時点では、殆ど70歳以上になっている。磯田は、「短歌や俳句は皇民化における意義が強調された時期に、戦争によって授業できなくなるという皮肉なことになった」<sup>9</sup>としている。

確かに台湾学校国語読本記載の短歌・俳句の始まりは、殆どそのとおり<sup>10</sup>であるが、皇民化教育の視点から論じてみる。

台湾総督府編纂第三期国語教科書『公学校用国語読本 第一種 巻12』（第六学年後期用）の「第一課 明治天皇御製」は、1918年～1923年使用の日本文部省出版の第三期国定国語教科書『尋常小学国語読本巻12』（第六学年後期用）「第一課 明治天皇御製」の短歌10首をここに収録し、内地の教科書に準じている。更に台湾総督府編纂第五期国語教科書『初等科国語 七』（第六学年前期用）「六 ばらの芽」になると、天皇御製ではなく、正岡子規・島木赤彦・能因法師など、一般の優れた歌人の短歌を10首挙げている。それは、第四期国語教科書『公学校用国語読本 巻12』の1942年に、俳句採用時の意図を汲んでのことと見られる。但し第五期『初等科国語 八』（第六学年後期用）には、内藤鳴雪<sup>11</sup>の「十一、元日や」の俳句と共に、冒頭の「一、玉のひびき」に、天皇・皇后などの12首を載せ、その皇民化教材を顕示することに、怠りはなかったのである。

また、この第六学年後期用の俳句には、子規・芭蕉・蕪村・一茶・千代女が挙げられながらも、鳴雪の「元日や一系の天子不二の山」が最初に配置される等は、皇民化のための苦肉の策が感じとれるのである。以上のことから、中でも俳句が最も「皇民化」の影響が少ない教材であって、その意味では、ある程度日本独特の短詩文芸を純粋に味わう機会を持ちえたのではないだろうか。一般的に俳句教材指導の際、学年能力に併せて作句法も指導する機会が多いため、句作の初歩も学んだであろうが、その能力がその後どれだけ多くの人に結びついたかは分からない。そのことについては、次の2で「台北俳句会」会員の句作意識調査<sup>12</sup>と「台北俳句会」の実態において示すことにしよう。

## 2 「台北俳句会」の実態との関わり

本論文では、会員の句作意識調査17項目のうち、「俳句は何時作りはじめましたか」と「俳句はどこで知りましたか」のみを資料とし、その他の質問項目は、ここでは取り扱わない。

「台北俳句会」会員は俳句を作り始めた時について、殆どが成人になってからの「台北俳句会」などであり、小学校・高等小学校・高女など以外は、戦後かなり経ってから句を作り始めている。但しその中の高等小学校のひとは1941年小学で俳句を知り、翌1942年高等小学校の時、新聞投稿で入選しており、後の『ホトトギス』「昭和18年8月号」の入選へと繋がって現在に至っている。後の高女のひとは花蓮港高女で、もうひとは京



都の高等女学校、小学校のひとは家庭で父母から習ったとしている<sup>13</sup>。

また、俳句はどこで知ったかについて、会員たちは台湾の小学校・日本の小学校・女学校時代・高校時代であって、女学校が東京であったり、当時満州の大連であったりする<sup>14</sup>。そのことが、当時の台湾・日本・中国の人々の往来を伺わせる。そしてまた当時の日本人が進出していった先と、日本の留学政策によって台湾から日本に留学した人たちが少なからずいたことを物語る<sup>15</sup>。その先々で日本の俳句が伝えられていたと考えられるが、『ホトトギス』の1923年6月号「雑詠」<sup>16</sup>には、大連・撫順・奉天・天津・青島・台湾・印度など外地からの投句が認められるのは、名前が俳号であるから、大方が日本人であると思われる。各地からの投句は、この号に限らず毎回存在する。但し、以上の会員の回答例から、「台北俳句会」会員の小学校での俳句に対する記憶は少なく、実作は戦後の「台北俳句会」創立以後であることが分かる。

また、山口誓子は樺太に、尾崎放哉は朝鮮・満州・台湾へ、高浜虚子が満州・朝鮮・香港・シンガポール、山口青邨は満州、河東碧梧桐が台湾・満州・朝鮮に、その他の多くの俳人・歌人がアジアの各地に旅して<sup>17</sup>、その地で句作しているのは、そこに日本人たちが進出していたからである。それらの地の俳句結社の有無についてはここでは述べないが、先の『ホトトギス』への投句からも、俳句が各地で詠まれていたと言える。しかし台湾以外の地での俳句教育については、ここでは触れない。

「台北俳句会」会員のひとは、東京の公立高等女学校へ留学していたが、戦争が激化し、日台間渡航が危険となり、帰台したという。同じくある会員の兄は慶応大学に、弟は盛岡高等学校に、そして夫もまた慶応大学に留学した人であった。また、日本の小学校を出た1名の日本人は、東北大学出身の地質学者の台湾人の夫と1942年に結婚し、現在この俳句会でのキャリアの長い人である。このことも、東アジアの人々の交流の一端を実証していると言えよう。また、台湾人の留学生と1949年に結婚し、渡台した日本女性は、インタビューの折、他にもこの俳句会には、元日本人女性は何名かいると言っている。これらの会員の平均年齢は2004年時点において77.2歳で、ひとりを除いてみな70代である。ということは植民地時代の日本語を話す人々は、かなり高齢化しているということである。

こうした歴史を持つ台湾日本語俳句について、最終的には「台北俳句会」との関わりを裏付けに、概略を述べた。戦後になり、大陸から敗走してきた国民党政府の戒厳令下において、禁止された日本語の文芸をすることは、容易なことではなかった。戦前戦後の日本語俳句の流れの上に立ちながら、戦前戦後の日本語俳句結社とは全く繋がりなく、戦後初めて台湾の人々による「台北俳句会」が設立された。会員たちも、学校や家庭で句作の指導を受けた人は、前述の4人のみで、その他はみな「台北俳句会」設立後、この会で作り始めている。ではなぜ日本語禁止令下に、このような日本語文芸である俳句結社が起こされたのか。次に「台北俳句会」設立に関わる歴史背景を見てみよう。

### 3 「台北俳句会」創立の時代

黄霊芝を主宰とする「台北俳句会」の創立は、1970年である。この時期について、松永正義の説<sup>18</sup>を中心に台湾文学史的に紐解いてみる。1967年、呉建堂（弧蓬万里）主宰の「台北短歌会」が創設され、短歌雑誌『台北歌壇』が1968年に創刊されている。その2年後、

「台北短歌会」の会員が殆どそのまま「台北俳句会」の会員となって、黄靈芝主宰の「台北俳句会」が創設され、その翌年 1971 年に、『台北俳句集』が創刊されている。それ以前の 1964 年に、『台湾文芸』と『笠』の二つの文学雑誌が創刊されていた。これら両雑誌共、当時日本語禁止令下において国語（北京語）を創作言語とし、70 年代以降の文学作品に基礎的影響を与え、次代の後継者育成に多大な貢献をした雑誌である。これに対して、『台北歌壇』『台北俳句集』は、日本語による日本伝統文芸の短詩雑誌であるから、国民党政権の日本語禁止令下の雑誌としては、前記 2 雑誌とは対峙した関係にあった。

『台北歌壇』主宰呉建堂の説明では、「本来ならば『台湾歌壇』であるが、『台湾』の 2 字を冠すると、『台湾独立』のイメージがあって、中華民國政府の忌避に触れる恐れがあり、また『中国歌壇』とすれば、日本の中国地方、或いは中国大陸と紛らわしいので『台北歌壇』とし、会の名称もいつしか『台北歌壇』と呼び習わされ、『台北短歌会』という名称はあまり使われなくなった」<sup>19</sup>とする。また、「台北俳句会」の主宰黄靈芝は、「台北」の 2 字について、「実質的には、会員が全島に跨り、『台湾俳句会』であるべきだったが、当時台湾の地には、反国思想の嫌疑が実しやかにかけられやすかったため、殊更にこれを避けたのであった」<sup>20</sup>としていることから、「台北俳句会」も「台北歌壇」もその時代状況把握では一致していた。

一方『台湾文芸』を創設するとき呉濁流は、台湾本土の文学を育てる目的から、「台湾」の 2 字の代替はないとの強い意思があったということから、「台北俳句会」「台北歌壇」とは表裏一体となった表現活動であったと思われる。

また、『台湾万葉集（続編）』の 14 人目の同人として収録されている巫永福のプロフィール<sup>21</sup>の中に、巫が『台湾文芸』の賛助顧問としてスポンサー的存在であることに触れている。あるいはまた、陳秀喜・張彦勳・黄靈芝らが、『台湾文芸』と『笠』にも作品を発表している。それらのことなどから、人脈的にもこれら 3 雑誌は、重なり合う部分があり、言語も方向性も異なるが、書く行為においては共通性があるとしているのは、松永の見解である。

更に「台湾語で文学を書こう」<sup>22</sup>という動きが 80 年代後半から始まり、民主化の進展に伴い、台湾の独立性が強調され、台湾意識が主張されるようになった。郷土文学論争が文学の枠を超えて社会的注目を浴びるようになると、郷土文学は台湾文学と呼ばれるようになり、90 年には台湾語等の言語教育が実施され始め、台湾語の復権要求は大きく、政治的な台湾ナショナリズムと分かちがたく結びついていったとする。日本語文学を含めて多元的表現・価値観が容認される時代の到来により、『台北歌壇』の 60 年代末創刊以来、80 年代から形を成したことは、台湾における日本語文学と台湾語文学が、背中合わせの側面を持つとするのである。本来ならば台湾社会で疎外され対立すべきであった日本語使用の日本語文学が、台湾語文学と競合して、無意識あるいは意識的に台湾ナショナリズム<sup>23</sup>を支援したことになる。そのことは、後述の黄靈芝の自著からも伺われる。

主宰呉建堂が、「台北短歌会」後の「台北歌壇」を起したきっかけは、1965 年、呉振蘭の短歌が宮中新年歌会始詠進に入選したこと<sup>24</sup>である。その後 1970 年に、「台北俳句会」が創設される。こうした戦後台湾の日本語俳句を取り巻く背景を背負いつつ、「台北俳句会」の現在がある。更にその背後には、歴史的には台湾語で社会生活が営まれていた時代から、日清戦争後日本に割譲されて以来、第二次世界大戦終了までの 50 年間、台湾人は日本人と

して日本語を強制され、戦後においては中国本土から来台した外省人の指定する北京語へと、使用言語を三遷させられた。同時にその都度、彼らのアイデンティティも動揺させられてきた。彼らは三カ国語の変遷を肌身に刻みつつ、今や順次、その人生の終焉を迎えつつある。本稿は、ひとり減りふたり減りして先細りしていく「台北俳句会」会員の、歴史の生き証人としての有様を、個々の事例を含めて分析していくのである。

### 第三節 台湾日本語俳句の研究視座と先行研究

第一章では、台湾に俳句が移入されてから終戦までの、台湾俳句の変遷を辿る。そのことは、現行の台湾俳句との差異性・類似性の発見に繋がるからである。「台北俳句会」は、日本人も少数参加しているが、台湾人が主宰の、台湾人による台湾人のための俳句会である。そこで詠まれる日本語俳句は、単なる日本語俳句という使用言語だけを取り上げるならば、第一章で調査する明治後半から昭和の戦後に至る間の、日本人による日本人のための日本語俳句と変わらないはずである。そういう観点に立つならば、どこかに共通性や類似性が現出されるであろう。また、日本統治以後において、中国語が公用語であるはずの台湾で、何故日本語俳句かという見地に立てば、その要因は際限なく噴出して来る期待をも抱かせる。単純に、植民地政策による日本語を、強制された残滓であるとしてだけ表現するには、あまりにも多大な事情を孕んで、現今の「台北俳句会」が存在するのである。

第一章の方法論として、阿部誠文の「台湾俳壇史」<sup>25</sup>を取り上げたのは、台湾日本語俳句のルーツを探るうちに、戦前の台湾の俳句結社がかなり多いことに、興味を喚起させられたからである。丁度その時、阿部のこの論稿に出会い、戦前の俳壇史の中でも特に、文学史のみでなく、俳句結社の変遷が述べられていることが分かった。しかし、詳細に『ホトトギス』を追調査していくと、高名な阿部の文学史的論考にあっても、『ホトトギス』内の「地方俳句界」上にある台湾からの投句作品あるいはその限定された範囲のみで考察しているが故の、一部納得しがたい論述に遭遇することになった。文学史的に、年ごとに俳句を例示し、詳細に表現内容を分析していく手法で、歴史を辿る点では優れており、大筋の俳壇史は阿部の論に相違はない。その詳細な分析は、秀逸である。

しかし、結社の興亡について、部分的に齟齬が見受けられる。そこを具体的に訂正し、その上に立って、拙論は文学史ではなく、文化史的研究を目指すため、他資料の活用を必要性を論じたい。他資料の活用については、沈美雪が『台湾日日新報』等を引用して、結社変遷の事実を明確にするなど、多角的迫り方を工夫している<sup>26</sup>。そのことによって、新事実を掘り起こしている点で、阿部の「台湾俳壇史」の結社関係を更に詳細に、個々の俳人の繋がりまで深めたと言えよう。本稿では『台湾日々新報』も参照資料に加えたが、『ホトトギス』内部の「地方俳句界」や「雑詠」の投句以外の欄も、結社の動向を探るに良い資料を提供することを、実証したいのである。

更に台湾開発に伴い、俳句結社の会員たちが職場を移動するための転勤との関係性についても分析して追加するのは、筆者の論考の特質と捉える。

そして、台湾に移入して俳句をする人たちにとって、永遠の課題となった内地の「歳時記」に適合しない台湾風土と気候に対して、如何に悪戦格闘して俳句を作っていたかを

分析する。但し、阿部が黄霊芝の『台湾俳句歳時記』<sup>27</sup>に関して論じる部分は、『台湾歳時記』<sup>28</sup>を著わした小林里平という人物が、台湾人か日本人かという点に集中していて、両書に関する比較が十分とは言えないため、第二章で新たに筆者の望む比較をした。

第二章は、本論文の中心となる第三章の「台北俳句会」が創設される以前の、黄霊芝主宰の略歴を追いながら、関連する時代の変容を述べ、「政治に関わらない」ことを不文律にして運営される「台北俳句会」の深層に迫る前段階の部分である。黄の生い立ちに内在する経験は、「台北俳句会」を創設し運営するにあたっての重要な基盤となった。そのことを文学の視点から述べた岡崎郁子の『黄霊芝物語』<sup>29</sup>を中心に検討する。

黄が俳句をする契機となったものは、『軍民導報』<sup>30</sup>という国民党政府が発行した新聞であった。そのコラム欄に投稿して同様の趣味をもつ仲間を得たことが、黄の日本語文芸への目覚めであった。岡崎の論をより発展させ、筆者は、その新聞の機能を包含するその時代の政治・社会・文化情勢を探りつつ、その後の黄の人生の展開と「台北俳句会」との関係性との繋がる事柄を浮き彫りにする。

また、第一章で詳述した台湾俳句における季語の悩みは、なお現在の台湾で俳句を詠む人々の悩みであることを明らかにし、黄が如何にして『台湾俳句歳時記』<sup>31</sup>によって解決したかを探る。前述の阿部の「台湾歳時記」論を先行研究とせず、筆者独自に小林里平の『台湾歳時記』と比較する。戦前の台湾へ移入した日本人の季語の悩みは、戦後の台湾人の俳句をする人々の悩みに継承され、黄の命を削る大事業によって、解消されたことを述べる。

次に第三章においては、次の諸文献が、本題分析の契機である。それは、ポストコロニアル都市台北の日本語文芸活動の中から、俳句を含む短詩を、二重植民後の心理的抵抗の表現形態とした黄智慧の論文「ポストコロニアル都市の非情—台北の日本語文芸運動について」<sup>32</sup>である。また、日本語文芸活動を皇民化教育期から説き起こし、俳句その他の短詩の将来に言及すると共に、俳句は短歌のような叙事性に乏しいから、黄智慧の言う「抵抗」と「悲哀」などの二重植民後の心理的抵抗の表現ができないため、俳句にそうした内容の作品はないとした磯田の論文「台湾における日本語文芸活動の過去・現在・未来—俳句を中心にその教育文化史的意義を点描する—」<sup>33</sup>もある。

そこで本章では特に、磯田の前掲論考における、日本語俳句についての考察に着目する。この磯田の論について、筆者は異なる見解を持つものである。

まず、黄智慧は、戒厳令下の公式の場において、表現の自由が奪われたため、最後の手段としての日本語で、「植民される者」としての心情を寄せていた（先の植民地化で得たものを「武器」として、後の植民地化に対して抵抗することを、「二重植民化後の抵抗の形態」と呼んでいる）<sup>34</sup>としている。しかし、筆者の見るところ、黄の例は、短歌と川柳に限った論である。この論に俳句例は挙げられているが、他の短歌・川柳と同様の抵抗の例句はややその傾向ありという1句を除いて取り上げられてはいない。そのことについて磯田の論では、短歌には叙情性とともな叙事性があり、川柳は社会風刺に富んでおり、短歌は感情を詠むものだが、俳句は感覚で詠むものであるとし、俳句は短歌のような叙事性に乏しいから、黄智慧の論に俳句が殆ど出て来ないとする。9.11同時多発テロの時、日本の新聞の短歌欄には何週間にもわたって多くの作品が寄せられたが、俳句欄にこれを詠んだ作品が非常に少なかったのは、短歌と俳句の違いを示す<sup>35</sup>と言う。

しかし、黄智慧の論文において、政治的俳句がないのは、短歌・俳句・川柳の形式や表現内容の違いというよりも、俳句として表現できるにも拘らず、それを詠んだ俳句が無いからと言える。何故無いのか、そこを筆者は重視するところから、磯田説に異論を唱えるものである。

それは「台北俳句会」に、俳句表現において「政治には関わらない」という暗黙の共通認識があるからだと仮説する。また、この俳句会には、政治的俳句は全く無いのか。そのことは重要であるから、後述する。更に「政治に関わらない」ことを詳細に説明すると、日本語禁止令の最中に、日本語文芸をするだけでも政府への抵抗の現われであるが、その表現内容も2種類あり、直接政府に抵抗する内容表現と、日本統治時代の懐古表現の二つがある。大陸から台湾に敗走してきて、台湾に政府を打ち立てた国民党にとって、敗戦国日本の残滓は一扫したいものであり、日本語禁止令もその一つであった。故に、更にその内容が日本最良となると、いっそう政府に対する反抗と見なされることになるのである。このように、先行の諸論は、「台北俳句会」が持つ暗黙の共通認識が「政治には関わらない」ということの独自性に注目してはいないのである。

黄靈芝の「政治には関わらない」と主張することと、「政治には関わらない」の共通認識の存在を仮定して、事例とともに分析していく。同時に、暗黙のうちに意識しなければならない理由があり、植民された側同士のせめぎあいと、去った支配者日本と來台した支配者国民党のはざままで、強かに生きつつ呻吟する人々の、諸相が見えてくるはずである。それは、生活経験の俳句表現と密接な関わりがあるはずである。

第四章では、「台北俳句会」会員の「俳句自分史」に綴られ、俳句として表現されていることについて、更に深く分析し、垣間見えてくる「政治に関わる」俳句について述べる。ここでは、第三章を更に裏書きする事例を挙げるので、先行研究との関わりはない。一見、「台北俳句会」の不文律に沿った、「政治には関わらない」と思える俳句の中に、「政治に関わる」俳句が存在していることについて詳述する。但しこれは、一部の俳句のみに存在することである。如何に暗黙の規則があろうとも、抑えきれない感情が無意識に迸り出ていることを感得し、「台北俳句会」会員の政治性のない俳句表現の特性の底に潜むものを探りたいのである。

第四章の中で述べているが、特筆すべき事例として第五章にも取り上げるのは、海外在住の特異な会員の張継昭 (Andy・Chang) である。張に照準を合わせることによって、「台北俳句会」との関わりとその立ち位置を証明する。この章では、成瀬千枝子の「戦後台湾におけるアメリカ留学 (I)」<sup>36</sup>の論考を基盤にする。この論考は2001年に発表され、戦後の台湾からアメリカへの留学事情について、その背景と影響を、台湾国内、対外情勢、およびアメリカ国内情勢などから、多角的に考察を進めたものである。翌年2002年に、陳天璽の「台湾系華人移民」<sup>37</sup>が発表され、その後の台湾留学生の生き様を論じている。その時代と同じくアメリカ留学をした、「台北俳句会」会員である張の半自伝的「私の俳句歴」を基本にして、成瀬のこの論考によって検証しつつ、これには詳述されていない二・二八事件による台湾の若者たちへの影響や個人的事情を、つづさに調査分析していく。また、陳の論文で、張の台湾独立運動に込められた祖国への意気込みを検証する。

これら日本語俳句をする「台北俳句会」の人々は高齢化し、物故者も多くなり、会員は減少の一途を辿っている。日本語俳句存続の危惧を論ずる以前に、彼らの日本語俳句表現

に込めた思いと葛藤を、現在に刻印することこそ急務であり、文化研究に携わる者の責務と信じる。

#### 第四節 各章の概要とその分析方法

第一章では、日本へ割譲されるまでの台湾の歴史の概略と、割譲されて台湾へ俳句が流入されてからの、日本人俳句結社の動向と結社への台湾人の参入を、日本の俳句誌『ホトトギス』や台湾で当時発行された新聞『台湾日日新報』の「文芸欄」および「日々俳壇」欄、台湾の俳句結社出版の俳誌『相思樹』<sup>38</sup>『緑珊瑚』<sup>39</sup>等をもとに、補強分析する。先ず、『ホトトギス』をもとに、阿部誠文の著した「台湾俳壇史」を、筆者の視点で『ホトトギス』を調査し、沈美雪の「俳句の地域性と国際化：台湾俳壇を中心に」<sup>40</sup>と島田譲二「正岡子規と渡辺香墨」<sup>41</sup>と『台湾日日新報』を資料に、俳句移入時代から第二次世界大戦での日本敗戦に到るまでを分析する。『台湾日日新報』は、当時台湾で最も多い発行部数を誇り、台湾の短歌・俳句・漢詩・小説等の日本語文芸のレベル向上に貢献した新聞である。

『ホトトギス』の中で、特に「地方俳句界」に見られる台湾からの投句は、1899年(明治32)10月号が初見であり、1942年(昭和17)2月号が、戦前における台湾からの投句の最後である。その間に約100結社が存在する。こうも多くの結社が興隆衰退する理由について、日本統治初期の台湾開発と関わっているとの仮説を立て、その他の文献からも補足して、その立証を企てた。台湾俳句と特に台湾鉄道開発との関係性に言及した論考は、管見の限り未だ見当たらない。

また、当時内地から來台した台湾俳句を詠む人々に、台湾独特の季語を創設することにより、内地の「歳時記」では適切に俳句に読み込めない困難性を軽減させた、小林里平の『台湾歳時記』のもつ意義を掘り下げて考察する。そして、当時の台湾の気候・風土と俳句の関わりに苦しんだ人々の苦闘の跡を探る。そのことが、第二章の黄靈芝の『台湾俳句歳時記』に受け継がれる前提となる。

一方『ホトトギス』に、台湾の月刊雑誌『臺灣婦人界』(以下台湾婦人界)<sup>42</sup>も加えて、その中から、当時の台湾人において、俳句がどのように存在したか、その影響も探る。

第二章では、「台北俳句会」主宰黄靈芝の略歴をもとに、「台北俳句会」創設までの経緯と、生い立ちに流れる「台北俳句会」の根本精神である「政治に関わらない」ことと、関係性の前提となるものを探っていく。そのための重要な契機となった国民党政府発行の日文新聞『軍民導報』本文とコラム欄との役割の関係性を分析し、当時の政治・社会・文化の背景を探る。更に第一章との関わりである『台湾俳句歳時記』の発行について、編纂者黄靈芝の思いとその意義を述べる。

第三章においては、日本統治下において日本語を身に付けた台湾の人々が、戦後日本から解放された戒厳令下で、日本語禁止令が出ているにも拘らず、台北市で創設された「台北俳句会」に参加し、日本語俳句を詠み続けたことを述べる。故に「台北俳句会」は、当時の台湾社会では、周縁化された存在であった。その日本語俳句を詠むことと、禁止されることとの葛藤と、その状況に置かれることの混迷を分析する。「台北俳句会」は、その疎外された立ち位置が更に周縁化されないように、俳句会の不文律である暗黙の共通認識「政

治に関わらない」ことを標榜することによって、存続を可能にする方策を取り、現在に至っている。そのことを、故頼天河や日本語俳句をする人々の俳句や、会員の「日本語俳句に関わる自分史」（以下「俳句自分史」と略表記する）<sup>43</sup>の事例を基に、他の台湾短歌や台湾川柳と比較しつつ分析する。

「台北俳句会」会員の希望者による「俳句自分史」の寄稿をもとに、更に聞き取りを実施し補強することにより、戦後台湾の戒厳令下で、日本語俳句を詠むことについて考察する。分析の基になるのは、日本語俳句に関わる「俳句自分史」である。この内容は自由記述でよいが、俳句との出会いとその頃の社会状況、更に「台北俳句会」に入ってから詠んだ代表作、また日本語俳句を詠む理由とそれに対する周囲の反応、「台北俳句会」の今後についてなど数項目を例示し、その中の自分の書きたいことを選択する方式をとった。それ以外に自分の言いたいことを重点的に述べた人もいる。本稿には、それらから適宜抜粋した。事例の実名公表については、本人たちの承諾を得ているものが大半だが、諸般を考慮して匿名とした。但し、構成上実名を必要とする人物は、本名を採用した。

なお俳句・短歌・川柳の例は、各々『台北俳句集』『台湾万葉集』『台湾川柳会会報』から引用した。その他の引用文献については、各章にて詳述する。その他、黄靈芝の著作や引用文献については、その章にて詳述する。

第四章では、「台北俳句会」会員の「俳句自分史」と、主な会員の作品のアンソロジーから表出されたものについて述べる。それは、「台北俳句会」主宰黄靈芝とその会員頼天河の作品を中心に、その他の会員の「俳句自分史」に内包する台湾俳句への思いとその奥底に潜む本心を詳述するためである。如何に「政治に関わらない」表現をするという不文律があると雖も、已むに已まれぬ思いがどこかに潜み、それが垣間見えてくることを、明示するのである。それは、芸術本来の姿であろう。ただしこれは、「台北俳句会」の特徴ではなく、極一部の俳句表現に限定される。

同時に「台湾川柳会」の方向性に言及する。「台湾川柳会」主宰への聞き取りを中心に、台湾社会情勢の中での、「台湾川柳会」の表現の変遷を辿る。そのことが、如何に政治と「台北俳句会」と関わっているかを検証する。

第五章では、第四章の「俳句自分史」の中の一つとして、アメリカ在住の張継昭の「私の俳句歴」を取り上げるが、会員の中では独特な資料としてクローズアップし、「台北俳句会」の現在における世界と台湾での立ち位置を証明する事例とする。ディアスポラの知識人張継昭と「台北俳句会」の関わりについて、生い立ちから詳述する。更に、東アジアにまたがる「台湾独立運動」にかける彼の生き方について述べる。張継昭による「台湾独立運動」に関わる方法についても、張の著作やAC通信をもとに、他稿や台湾独立運動家の事例と比較しつつ分析していく。その結果、張の日本語俳句は、無意識の日本時代を懐かしむ心情に関わると推察する。

「台北俳句会」は、台湾社会から周縁化されながらも、「政治に関わらない」という不文律を掲げて、「台北俳句会」の未来性と存続性に繋げようとしている。台湾日本語俳句を分析・解明することは、台湾と日本の歴史的関係のみならず、台湾そのものの置かれた東アジアと世界の中での立ち位置を明確化すると意義付けるために、本論を進めていくのである。

＜ 注 ＞

- <sup>1</sup> 国民党政府によって、1949年5月台湾全土に、戒厳令が布かれる。
- <sup>2</sup> 戒厳令より先立つ1946年10月に、国民党政府は、公文書・新聞・雑誌などの日本語使用を禁止する日本語禁止令を発令した。
- <sup>3</sup> 外国人が主宰し、殆どの会員が外国人である俳句会に限定している。したがって、移民俳句や個人的に外国人が日本語俳句を詠む例は含まない。
- <sup>4</sup> 俳諧よりも発句のみを重視し、1893年（明治26）『日本新聞』に「芭蕉雑談」を連載、「連句（俳諧）非文学論」発表することにより、与謝蕪村を尊重しつつ俳句の独立尊重を唱えて新境地を開いた。発句を俳句と命名したのは子規で、その弟子高浜虚子は俳諧を連句と命名し、以後その呼び名が定着した。
- <sup>5</sup> 正岡子規を主宰とし、1897年（明治30）に創設された俳句結社の俳句雑誌。
- <sup>6</sup> 台湾で2紙合併して1898年5月1日初刊、1944年に他5紙と合併し『台湾新報』を創刊してその名は消滅した。  
「1945年以前に台湾で発行された日本語新聞」国会図書館、発行部数：1924年調査189702部、『台湾報業史』、亜太図書出版（台湾）、2003年。
- <sup>7</sup> 「台北俳句会」主宰のみならず、日本文台湾作家（小説・短歌・俳句・川柳等）であり、美術家（彫塑）、中国古玉器収集鑑定家でもある。
- <sup>8</sup> 「学務官僚遭難之碑」は2001年5月時点では、罵倒する言葉が赤ペンキのスプレーで大きく落書きされていたが、2004年12月時点ではそれもなく、2008年には、「六氏先生の墓」も真新しく整備されていた。台湾人の日本人に対する感情の変化を示唆しているかのように、筆者には映った。
- <sup>9</sup> 磯田一雄「台湾における日本語文芸活動の過去・現在・未来—俳句を中心にその教育文化的意義を点描する—」成城大学文芸学部紀要『成城文藝』第197号、2006年、37-38頁。
- <sup>10</sup> 最初の短歌：「明治天皇御製」10首、台湾総督府編纂第三期国語教科書『公学校用国語讀本 第一種 卷12』（第六学年後期用）1926年、1-2頁。  
最初の俳句：「俳句」8句、同、第四期国語教科書『公学校用国語讀本 卷12』（第六学年後期用）1941年、55-56頁。  
短歌・俳句両方：「六、ばらの芽」短歌10首、同、第五期国語教科書『初等科国語 七』（第六学年前期用）1944年、40-43頁。「一、玉のひびき」12首、同『初等科国語 八』（第六学年後期用）4-6頁。「十一、元日や」10句、同教科書、70-72頁。その他、「第一 明治天皇御製」第四期国語教科書『公学校用国語讀本 卷10』（第五学年後期用）1941年、1-3頁がある。
- <sup>11</sup> 明治大正期の俳人、明治政府の官吏も務めた。
- <sup>12</sup> 2004年から実際常時俳句会に出席している約30名とその他台湾に住む会員と海外在住の会員等10名計40部配布、各回答の詳細な聞き取りは、部分的に後日インタビューした結果の一部である。本調査の全回答結果は、以下に掲載。  
染川清美「俳句が海外に与えた影響～日本語残留孤児としての台湾日本語俳句」『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」第5巻「イメージとしての<日本>」最終報告書』松本工房、2007年、83-84頁。  
染川清美「日台俳句会の国際俳句的視座による一考察—「なると俳句会」と「台北俳句会」の例をもとにして—」『なると』2009年8月号、69-92頁。
- <sup>13</sup> 句作意識調査、問16の、「台北俳句会」会員回答の詳細内訳の記述による。
- <sup>14</sup> 句作意識調査、問15の、「台北俳句会」会員回答の詳細内訳の記述による。
- <sup>15</sup> 1924年に日本内地で高等学校に在籍している学生の数は813名、1923年に823名、1922年に737名、1921年に622名、1920年に473名である。これらの数字は日本で能力を発揮し、高等教育を受けている台湾人学生が増えていることを示している。1925年、800名の台湾人が日本で学んでおり、150名が専門学校と大学に入学し、さまざまな専門分野で学業を続けている。  
林茂生『日本統治下の台湾の学校』拓殖大学海外事情研究所華僑研究センター 2003年、175頁。  
1945年までに日本に留学した学生は合計で20万人、その中で大学や専門学校の卒業生の総数は6万余人、医学を学んだ者が最も多く、法律、商業、および経済がそれに次ぐ。留学は台湾での高等教育の不足を大きく補った。  
国立編訳館 主編 易達・永山美樹 訳『台湾を知る』2002年、91-92頁。
- <sup>16</sup> 『ホトトギス』1923年6月号「雑詠」1923年、61-89頁。
- <sup>17</sup> 『朱夏』特集「俳人と歌人のアジア地図」せらび書房、2000年、51-59頁。
- <sup>18</sup> 松永正義「台湾の日本語文学と台湾語文学」『一橋論叢』第119巻 第3号 平成10年号 日本評論新社、1998年。



- 
- 19 孤蓬万里（呉建堂）『台湾万葉集』物語』岩波書店、1994年、56頁。
- 20 黄靈芝『黄靈芝作品集』巻18 自費出版、2000年、225頁。
- 21 孤蓬万里『台湾万葉集（続編）』集英社、1995年、100-101頁。
- 22 台湾語は書き言葉としての伝統が殆どなかったため、漢字で表記できない語が多くある。そのため、ローマ字に頼るもの、漢字ローマ字の混ぜ書き、漢字にローマ字で注音をつけるなど、三種類の工夫した表記をした。
- 23 今日我々が目にしている台湾ナショナリズムとは、端的に言えば、「台湾独立」の思想と運動、即ち、台湾における独自の政治共同体である。つまりはnationが存在している、あるいはネーションを形成すべきであり、その共同体には国際社会において、固有の名前と主権的地位が与えられるべきであるとする思想と運動である。
- 若林正文「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」『思想』2004年1月号、108頁。
- 24 「日本短詩形愛好の風気に拍車をかけたのは、呉振蘭の一首、『魚群（なむら）追ふ鷗の群が朝なぎの海を变速しつつ飛び行く』が、昭和四十年の宮中新年歌会始詠進に入選したことであろう」とある。
- 孤蓬万里『台湾万葉集』物語』岩波書店 1994年、58頁。
- 25 阿部誠文「台湾俳壇史」俳誌『燕巢』、2000 - 2006年。
- 26 沈美雪「俳句の地域性と国際化：台湾俳壇を中心に」沈博士論文弘前大学、2007年。
- 27 黄靈芝『台湾俳句歳時記』言叢社、2003年。
- 28 小林里平『台湾歳時記』政教社、1910年。
- 29 岡崎郁子『黄靈芝物語』研文出版、2004年。
- 30 中華民国国防部政治部が、1950年6月1日創刊、1951年12月1日に停刊の約一年半の短期間に、中国語が読めず日本語が多民族間の共通語であった台湾人のために、政府の反共政策を浸透させる手段として、便宜的に発行した広報紙。一日一万部発行。
- 31 黄靈芝『台湾俳句歳時記』言叢社、2003年。
- 32 黄智慧「ポストコロニアル都市の非情—台北の日本語文芸運動について」大阪市立大学院文学研究科アジア都市文化学教室編 橋爪紳也責任編集『アジア都市文化額の可能性』清文堂、2003年、150頁。
- 33 磯田一雄「台湾における日本語文芸活動の過去・現在・未来—俳句を中心にその教育文化史的意義を点描する—」成城大学文芸学部紀要『成城文藝』第197号、2006年。
- 34 黄智慧前掲論文、150頁。
- 35 磯田前掲論文、37-38頁。
- 36 成瀬千枝子「戦後台湾におけるアメリカ留学（I）」『交流』634号 交流協会、2001年、21-29頁。
- 37 陳天璽「台湾系華人移民」『アジア遊学』39号、2002年、19-30頁。
- 38 服部烏亭『相思樹』は、「日治時期台北地区文芸期刊目録」によると、発行は台湾民報で、1904年に創刊、1910年の6巻4号が終刊とあるが、1916年に『終刊 相思樹』五平太号が、吉川五平太追悼特別号として刊行されている。本稿引用は、酒井邦之輔『相思樹』3巻11号明治40年8月号と『終刊 相思樹』五平太号による。
- 39 渡部常三郎『緑珊瑚』台北緑珊瑚会、1907年-1911年5巻2号で停刊。
- 40 沈前掲論文、2007年。
- 41 島田譲二「正岡子規と渡辺香墨」『華麗島文学史：日本詩人の台湾体験』明治書院、1995年。
- 42 台湾婦人社によって、1934年から1939年発行。廃刊は分かっていないという中島利郎の言があるとしている。
- 和泉司 西川満「轟々と流るるもの」試論—「台湾新文学運動」期ではない1930年代を考える端緒として— 交流協会、2005年。
- 43 「俳句自分史」のアンケートとその詳細についての聞き取りは、2006年から2007年にかけて実施した。寄稿者6人、回収率33.3パーセント。

## 第一章 戦前日本統治期における台湾俳句結社

### はじめに 本章の問題と方法

戦前の植民地台湾において、俳句とはどのような存在で、如何に台湾と関わってきたかを、日本と台湾の植民地歴史と社会を背景としつつ、先行文献を紐解きながら検証していく。特に台湾の俳句結社の歴史を辿り、台湾俳壇の有様を概観することによって、その特殊性を分析する。そのことは、第二章からの問題分析の基盤づくりと、台湾と日本との俳句の関係性を、顕現させることになると思うのである。

本稿で扱う台湾俳句に関わる特殊性として筆者が注目するのは、日本本土の「俳句歳時記」とは異なる台湾のための初の『台湾歳時記』<sup>1</sup>が明治末期に編纂されたことと、俳句結社の盛衰の激しいことの2点である。戦前の台湾俳壇の俳句結社の変遷を辿ってみると、『ホトトギス』のうち特に「地方俳句界」に見られる台湾からの投句は、1899年(明治32)10月号が初見であり、1942年(昭和17)2月号が戦前における台湾からの投句の最後である。その間、台湾での俳句結社は生まれては消え、または合併して、創設された結社数は約100社にも上る。こうも多くの結社が興隆衰退した理由について考察する。

そして、結社の数の多さの根底に、日本統治初期の台湾開発と関わっているという仮説を立て、その立証を企てた。台湾俳句と特に台湾鉄道開発との関係性に言及した論考は、管見の限り未だ見当たらない。また、台湾の地に滞在して最初に感じることは、日本よりかなり暖かく、四季が明確に体感できないという点である。そのことは即、平成の現在に至ってもなお、黄霊芝の『台湾俳句歳時記』<sup>2</sup>が編纂されたことの特異性に繋がり、戦前の台湾俳壇にも、そのことが問題性を持って語られるはずとの仮説に立っている。この四季が明確に体感できない問題は、台湾の風土と文化とを伴って構築されたことによって生じたものであり、台湾の開発と文化は、俳句の歴史を辿るうえで、恰好の2要件であると思うのである。

台湾の俳句と言うと、一般的にはその存在そのものを訝しく思うのが常である。現代感覚では、台湾の若者達が日本のポピュラーカルチャーを好み、旅行で日本に来るという程度の知識で、日本特有の文化と見なされる俳句と台湾とを結びつける者は、皆無に等しいかもしれない。しかし、こと年配の日本人にとって、その関係性はすぐ繋がる。戦前の台湾は、日本の統治下に置かれた植民地であったからである。したがって、戦前の台湾は、地理的に近いのみならず、当時、日本国の政治・社会・経済・教育・文化・宗教等々によって、皇民化という日本人になることを強制されてきた歴史を背負って今日にあることを、彼らの多くは認識している。或いは台湾の地で何らかの形で過ごした経験を持ち、脳裏にその記憶を未だに留めている人もあろう。そういう意味で、日本と台湾は非常に近接した関係性を持つと同時に、植民する側と被植民側の相克が、台湾島の地層深部に蠢いていることをも、日本人の筆者として感受せねばならないと思うのである。そこで、日本が公式に台湾との関わりを持った時点から、その歴史を追ってみよう。

日清戦争後台湾が日本に割譲された1895年(明治28)より、人々の移動によって日本のあらゆる分野が、新天地を求めて流入していった。人々が各々落ち着いた先では、日本

独特の文芸である俳句や短歌を嗜む人同士の交流が生まれ、自ずと俳句結社がそこここに創設されることとなる。当時内地日本では、1897年に、俳句誌『ホトトギス』が創刊され、伝統文芸復興の著しい時期であった。それ以後台湾に、日本短詩文芸がどのように影響していくか、その動向についての詳細を、先行文献をもとに辿る。

その方法として、阿部誠文の「台湾俳壇史」と沈美雪「俳句の地域化と国際化」を中心文献として分析していく。同時に、台湾で当時発行された新聞『台湾日日新報』と、俳句誌『相思樹』<sup>3</sup>と俳句誌『緑珊瑚』<sup>4</sup>、更に小林里平(李坪)の『台湾歳時記』と島田譲二の「正岡子規と渡辺香墨」<sup>5</sup>とを引用文献とした。また当時日本で発行されていた俳句誌『ホトトギス』<sup>6</sup>と「日治時期台北地区文芸期刊目録」<sup>7</sup>を比較参照資料にして、詳細を分析する。その前提として、俳句移入から台湾人参入まで、台湾俳句の明治時代・大正時代・昭和時代戦前の流れを辿る。これは、「台北俳句会」と直接の関係性は見出せないが、台湾という地に俳句がどのように浸透し、俳壇が如何に進展していったかを見ることにより、台湾という地での俳句の歴史とその特殊性を概観するものである。こうした背景のもとで、戦後の俳句結社「台北俳句会」の歴史も存在するのである。

台湾の俳句結社が『ホトトギス』に最初に現われるのは、創刊2年後の『ホトトギス』1899年10月号のただの3人であるが、昭和10年代の「雑詠」においては、142句も入選するほどの、台湾俳句の華々しい時期に至る。そこに集う人々は日本人であり、『ホトトギス』に投句して入選を競っていた。その中に俳句会は分からないが、陳武王の「門松に螢とびかふ蕃社かな」が1928年(昭和3)5月号の「雑詠」<sup>8</sup>に入選している。『ホトトギス』において、台湾の人の名前とはっきり確認できるものはこれが最初であるから、このあたりから地元の人にも俳句が受容され始めていると言える。それまでの「地方俳句界」の台湾地方俳句会の投句名を調べた中には、台湾人の名前は見当たらない。こうして以下では、台湾において日本の俳句界が、如何にして構築され、どのような俳句が詠まれていったかを分析していく。

## 第一節 『ホトトギス』と新傾向俳句派

### 1 台湾俳句の黎明

台湾に俳句結社の存在が明らかになるのは、台湾統治開始の1895年から4年目の時期に当たる。1899年10月号の地方句会情報を伝えるページに、報告者は台北市在住の「台北会」の人の3句を載せている<sup>9</sup>。これは、現存紙面で確認できる日本の一地方としての台湾で、初めて催された句会の作品である。

赤蜻蛉稗も刈りたる畠かな	陽 洲
白菊やもの静かなる朝の庭	湾 風
一輪の白菊生けし花瓶かな	初 心

この3句は、阿部誠文が「台湾俳壇史」にも述べるものであるが、俳句の個人投句は実

は、1898年11月号に3句と12月号に2句、上記の初心という俳号で募集課題句<sup>10</sup>の中に入っている。台湾在住者の俳句は、これが『ホトトギス』における初見であるとするのは沈美雪の前掲論文である。この時点では「台北会」の存在記述はまだ無いので、阿部は俳句結社の作品の初見として、上記の3句を示したのであろう。これらの作風には、台湾の特色は殆どなく、日本の作品との差異は感じられない。

次に台湾の俳句会として『ホトトギス』に登場するのは「南蛮会」である。その7作品は、1901年8月号「地方俳句界」の中で空鳥が記す句会記<sup>11</sup>の中に、「四月十八日臨時小集」とある。これまで19世紀末から句会を開いていることが分かり、「南溟に於ける」とあるから、南国らしい句を心掛けていると思われる。特に「苦力(クーリー)」や「棕櫚蓑」の語に、台湾の土地らしさを表出している。当時は、蘭医もいたのであろう。日本統治時代に入っても、過去のオランダ領時代の名残があるのかもしれない。その情景に、作者の驚きを感じられる。

麦の里蘭医の籠の通りけり	香 墨
苦力(クーリー) 多く昼寝もしたり夏木立	可 也
五月雨や棕櫚蓑を着て苦力の群	鳳 梨
短夜や名残惜しむも舟の中	紫 紅
舟寄せて酒を買はすや夏の川	李 坪
引越は苦力の肩荷に牡丹かな	空 鳥
苦力小屋の土墨潰れて茨の花	田 貂

苦力を台湾の点景として詠んでしまうこと自体が、日本人の植民地主義的・支配者的な眼差しがあるとの見方があるとするれば、筆者には異論がある。なぜなら「五月雨や棕櫚蓑を着て」「肩荷に牡丹かな」「土墨潰れて茨の花」の付け合せの語に、優しい眼差しを感じるからである。植民地主義の視点から言えば、憐みの眼差しということになるが、支配者的な冷たい感情ではなく、むしろ、筆者は温かさを感じる。五月雨が降る中、棕櫚蓑を着て働く姿に、心を寄せて描写しているのである。肩荷に牡丹花を指してやって、重い荷物を運ぶ労苦を労ってやっているのは、引越しする作者であろう。これは、支配者の視点というより、人間同士が、心を通い合わせている情景である。苦力小屋の土墨潰れに注目し、茨の花を付け合せて、憐憫の情を表すのは、支配である日本人の心情ではない。17文字の短詩文芸であっても、芸術における表現には、真の人間としての心情が、意識的にも無意識的にも込められているのである。

芸術とは、本来そういうものである。人間の本質的な部分を芸術的に表現する場合は、日本人であろうと台湾人であろうと同様であり、本音を俳句に込めて顕すものと思われる。このことは、筆者が本論文を手掛けた上で、実感したことである。ここに論じたことは、第四章の「台北俳句会」会員の一部の俳句に、会の規則に反して、本音を吐露している句が少数あることを詳述するが、それにも繋がることだと思う。

明治末のこの当時、台湾人の俳句結社への参入はないので、日本人の作句意識や表現と、台湾人の作品との比較は出来ないが、ここでは、季語について中心的に述べるため、この続きは、「第3節の2『ホトトギス』への台湾人参入」において、少しばかりまとめること

にする。

ここからは、また、これらの句の季語に戻って考察する。

この7人のうち、香墨（渡辺香墨）と李坪（小林里平）は特記すべき人である。李坪は『台湾歳時記』を初めて著した人として、また香墨（渡辺香墨）は『相思樹』の創刊に尽力した人として、台湾俳壇史において著名である。ここに7人全員載せたのは、「南蛮会」が台湾色を表現しようとして、その結果、日本の季題とは合わない矛盾を感じ、李坪の『台湾歳時記』が編まれたのではないかと考えられるからである。その根拠をこれらの例句で言うならば、4月に開いた句会でありながら4月であっても、夏の季節感であるために、夏の俳句を詠んだのであろう。「夏木立」や「夏の川」という夏の季語が入っており、日本の季節や季語とのずれを生じているのである。この「南蛮会」の『ホトトギス』での初見において既に、李坪の『台湾歳時記』が編纂される萌芽が、垣間見えるのである。

その後「南蛮会」の作品では、第2回目は1901年12月号に7句、句会記に16名参加とあるのが最高参加者数で、翌年から激減して3回目・4回目・5回目は各々3句・2句・4句のみ採られており、空鳥ひとりが常連である。第5回目の1903年5月号の掲載以後、この結社名は『ホトトギス』から消える。阿部誠文は「南蛮会」の香墨を例にして、「メンバーが急減したのは、おそらく、転勤に因るためではなかろうか」と推測し、「これは、外地句会には、しばしば見られる宿命的な現象である」<sup>12</sup>とする。台湾への転勤や出向により、台湾に数年いるにしても、結局内地日本に戻っていくパターンが多かったため、句会の成立が不可能になるのであろう。確かにそれは説得力がある。そのことについては、俳句の台湾移入から台湾俳壇が戦前での終末を迎え、『ホトトギス』への投句が絶える時点までの各所において考察する。

次に「南蛮会」消滅の一年後に結成された「竹風吟社」は、庄子瓦全を主宰とする台湾俳壇の有力な句会の一つである。『ホトトギス』に現れるのは、1904年6月号中、下記の瓦全の1句のみであるが、その時初めて「竹風吟壇（社）」の句会記が載り、この結社の発足が伺われる。

種蒔をあなどり穿る鳥哉

瓦 全（1904年6月号1句のみ）

特に「竹風吟社」の功績は、下記の「放水燈」・「水燈排」を台湾の盂蘭盆の季題として初めて詠んだことである。「樟脳」は台湾の特産物である。台湾色の表現が認められる。

魂の返れと廻す燈籠哉

鳴 球（1905年12月号5句）

霧はるる樟脳間の煙哉

鬼 空 同上

月白く放水燈の泛びけり

烏 槌 同上

うそ寒く脳丁山を上りけり

枯 草 同上

灯の水燈排を押したつる

烏 亭 同上

放水燈、放水燈皆盆雑題の一つなり

鳴海風暖かき日や大根蒔く

枕 流（1907年2月号2句）

五車反古に古き紅葉の一葉かな

樵 山 同上

竹筏（テツパイ）を繕ふ土手の芒哉

五平太（1909年4月号7句中の1句）

しかし、これから3回目までに会員の数を増やし、それをピークに1908年1月号の第7回目を最後に「南蛮会」と同様、『ホトトギス』からその名を消した。別に結社したり、他の結社に移ったりしたためであった。転勤もあったかもしれないと阿部は言う。筆者が彼らのその後を辿ると、例えば、烏亭・枕流・樵山が中心となっていたが、枕流・樵山が別の「荔枝郷」を創設し、烏亭と五平太は後の「台湾五句集」に参加していた。結社は分裂したにしても、瓦全は日本統治開始後の台湾俳壇初期における有力な俳人のひとりとして、大正期の『ホトトギス』雑詠でも度々目にする名前であった。俳号が瓦全であるため、過去の筆者の台湾人俳人の調査の際、既にこの時期に、台湾人の会員の登場かと思ったのであるが、台湾人ではなかったと記憶される人物である。

「台湾五句集」が初めて『ホトトギス』に現れるのは、1909年3月号の2句である。第6回目が載る1909年9月号がそのピークである。この頃から、いつもの台湾内の人事異動が増えて、人数は減っていく。以下主な同人の句を割愛して、同人名のみ挙げる。

五平太、 烏亭、 鳴球、 星橋、 董哉、 釜村、 風雨楼

以上の経過後、第9回目（1910年1月号）の掲載を最後に、この結社名は『ホトトギス』から消える。風雨楼は最初からこの会の創設に関わり、9回目までいたが、「同じ基隆に『二二吟壇』を青甫と二人で結社した」<sup>13</sup>と阿部は言う。しかし、筆者はここに異論がある。

1909年11月号地方俳句界に台湾から、「台湾五句集」（基隆）の6人の句と「二二吟壇」（同）として青甫の1句「工成りて就役の艦も初涼かな」が載るのみであるから、先に青甫が創設したと思われる。しかも1910年1月号の「国分け表」<sup>14</sup>には、台南「菩提子会」基隆「台湾五句集」「二二吟壇」彰化「璉霧郷会」嘉義「羅山吟壇」の5結社が記載され、その後、1910年2月号に青甫「峡中の船に惜しむや返り花」と風雨楼「焼き芋に苦学の銭を敷寝かな」の2句が「菩提子会」（台南）の泉南・星橋・烏犍の3句とともに掲載されている。したがって青甫の「二二吟壇」に風雨楼が加入したという方が、妥当なのではないだろうか。風雨楼は後からの加入者と見受けられる。したがって筆者は、その部分で阿部とは異なる見解を持つ。そして風雨楼は同じ基隆の「二二吟壇」へ出て行ったのであるから、人事異動とは言えないかもしれない。更に阿部の同箇所「風雨楼は、自ら作った台湾五句集の俳人と決別したのである」について沈美雪は、「決別したのではなく、風雨楼の死により五句集が解散になったためではないか」<sup>15</sup>としている。このことに関しては、筆者には検証の資料がないため、何とも言えないが、沈の指摘する「『ホトトギス』の限られた情報による判断ミス危険性を物語っている」というのは尤もであると同時に、筆者の挙げた事例のように、『ホトトギス』内部でもなお、「地方俳句界」に限定せずに検証していくことの必要性を感じた。なお、「菩提子会」（台南）の泉南・星橋・烏犍の3句によって、星橋は台南の「菩提子会」へ移り、そこで烏犍との出会いがあったことの裏付けとなっている。その烏犍が台南に移動する折の送別句会の様子は、後述する。

その頃の台湾俳壇では、虚子の率いる「ホトトギス」派と『台湾歳時記』の「序」を書いた河東碧梧桐の新傾向俳句派とに分かれてきたのではないかと阿部は言う<sup>16</sup>。その点から言えば「台湾五句集」は、碧梧桐派が多いという。当時「内地」日本では、子規死去後、虚子が小説を書き始め、夏目漱石に勧めて1905年1月号から翌年8月まで、「吾輩は猫である」を11回連載させたことは知られている。文芸誌的傾向が強まり、とうとう1908年

8月に、虚子が俳句と決別宣言をするまでに至った。したがってこのことから阿部は、碧梧桐が第二次全国行脚に出発した1911年4月ごろは、碧梧桐の影響が台湾へも色濃くなっていったのではなかろうかとする。しかし、『台湾歳時記』の「序」を書いたのが碧梧桐であったことと、1908年の碧梧桐訪台時の『緑珊瑚』同人たちとの歓迎交流の部分では、その傾向があったにしても、新傾向俳句派ブームが持続したわけではない。碧梧桐が『ホトトギス』と決別したのちも、常に台湾の俳句結社は『ホトトギス』を発表の場として、投句を継続していたという事実が、その影響が一時的だったことを証明する。そして当時、日露戦争後は殊更に、日本と台湾の政治・経済の往来は著しく、それに伴う人々の往来や俳句結社と同人の動向も編成される時でもあったろう。

## 2 台湾鉄道の開発と俳句結社の移動・興亡

この頃台湾では、1908年西部平原南北鉄道全線開通によって、北部の基隆から台南の高雄まで一直線に結ばれたため、その工事や完成に伴う企業の拡大・移動などによる人事異動が大幅に起こったものと思われる。ささやかな俳句結社の動向も、社会の変容と連携している証左であろう。しかも俳句を嗜む人々の属する職業は、台湾開発に関わる大中企業か政府や法曹関係者<sup>17</sup>が少なくなかったであろうから、開発が南下するに従ってそれらに所属する人々も、活動していた俳句会を退いて南下し、移動したその地で、既存の結社に入会するか、新たに俳句結社することを余儀なくされたのである。それは台湾俳句結社の特殊性を表示するものでもある。過去・現在の日本における俳句結社は、概ね構成会員が定着しているのである。勿論転勤などの結社移動はあるだろうが、台湾のように狭い土地の範囲内の移動で会員が入れ替わるのは、当時の開発盛んな台湾ならではの現象と捉えられるのではないだろうか。その移動の一例として、渡辺香墨が1901年1月に、台中地方法院検察官長に補せられ、台中地方法院の建て替えのため、仮法院の存在する彰化に赴任する折の軽便鉄道の様子が、香墨の日記の形で述べられている。それによると、「軽便鉄道と云へば名は立派だが、其の実は内地で石などの運搬に供するトロのことで、漸く三人ばかり乗ることが出来る台車のことを云ふので、まるで人間の乗るべきものではない」<sup>18</sup>とあるから、今日で言う鉄道列車とは遥かにかけ離れたものであつたらう。これは、1908年の西部平原南北鉄道全線開通より7年前であつたから、区間によっては、そういう箇所もあつたであろう<sup>19</sup>。また、以下の記事にある烏榑の南遷は、全線開通一年後の1909年10月といえども、容易なものではなかつたであろう。

この移動の特殊性を裏付ける『台湾日日新報』の記事を挙げてみよう。先にあげた「台湾五句集」の星橋は、台南の「菩提子会」へ移り、そこで烏榑との出会いがあると述べた。烏榑が先に台南に転勤した時の送別句会について、1909年10月5日から同年10月9日の間に、4回に亘ってその模様や送別句などを、四面の「俳壇小語」に掲載している。

「俳壇小語」百七十一回に句若翁が、烏榑君送別句会と題して、北部文壇の盟主烏榑が南下に際しての送別大句会を、10月6日午後7時から古亭庄の安田葛南宅無日庵で催すことを告げている。そのため、5日中に台日の杏堂方へ申し込むことと、会費五十銭を広告している。次の10月7日の百七十三回に、烏榑は南遷する自分に対し、天南より掉尾の一篇を草せよと言われたが、何も本壇から離縁・絶縁するのではないからと、「無能なるを功

と誇らむ案山子哉」の一句を添えて、惜別の挨拶としている。更に10月8日の同じく（百七十四）回において句若が、昨日の烏榑の南下する送別会の模様を報告している。

その送別会の模様を要約すると、送別会の前の6時から鉄道ホテルにて法曹及び官民有志により開催された烏榑送別会に烏榑は出席して、9時頃に現れた烏榑の、洋行帰りというシルクハットにフロックコートの俳殻（はいから）姿や、参加者などを詳述している。緑珊瑚俳壇からは病気の李坪を除き全員出席し、壇外の烏亭など3人も来る。貉は約束があって欠席し、深坑拳会からは素濤等3人、桃園月桃会からは句坊等3人、柄来北の碎石などが出席している。また、11時になって清書互選した結果も述べ、烏榑が例になく振るわなかったのは、明日一番に出立のため、胸中は句作どころではあるまいと労っている。

この記事から、烏榑がどういう仕事関係者か、当時の緑珊瑚会がどのような職種の人々によって構成されていたかを、推察できる。烏榑の例にしても、先の香墨や李坪、空鳥などを代表に、当時の法院関係者が少なくないのである。開催宅亭主葛南は、弁護士である。彼らはその役職の関係上、そして台湾という新天地において、反抗勢力の首謀者達の裁判に携わるため、必然的な仕事上の転勤・移動であった。渡辺香墨が任地台湾を転勤しながら、如何に多くのそれらの裁判を行い、処刑執行していったかは、同じく島田の前掲論文に詳しい<sup>20</sup>。その俳句結社の盛衰が、転勤・移動であることは、台湾歌壇の特徴的な歴史的要因となって、日本の敗戦まで続くのである。

一方台湾でも、結社同士の対立による攻防があったのは確かで、岩田鳴球の『相思樹』とそれに反発して創刊された小林李坪『緑珊瑚』の対立関係は、沈美雪の前掲論文に詳しく説明されている<sup>21</sup>が、台湾俳句の特殊性とは言えない。以下、沈における鳴球の『相思樹』と小林李坪の『緑珊瑚』の対立関係を概略示す。

虚子一門で一目置かれていた岩田鳴球は、渡台によりすぐさま、竹風吟壇の俳誌『相思樹』の選者として推挙された。そして、これまで台湾俳句の指導者であった香墨が、病のため離台するのを機に、台湾俳壇の第一人者として『相思樹』の主導権を握るようになった。さらに鳴球は、俳句の質の向上と俳句研究という名の下に、当時の台湾俳人の作品を酷評したため、多くの俳人の怒りを買って、『相思樹』創刊発起者5人のうち烏亭を残して4人まで会を離れ、その中の空鳥や李坪が、次の『緑珊瑚』創刊に繋がっていくのである。その詳細については、沈の前掲論文にあるので、ここでは省略する。

しかしここで筆者がその抗争を、『台湾日日新報』文芸欄「俳壇日々」の1907年1月26日から同年9月19日までの短期間<sup>22</sup>のみ抜粋してみても、双方相乱れての論戦は凄まじい。1907年9月10日のこの欄の末尾には、担当者から、「俳壇寄稿者に一言」として、「近来俳論若くは句評を投寄せらるゝ雅友多く日々数篇に上る尚に俳壇の盛事と謂ふべし惜むらくは概ね長文にして百行二百行に亘り而かも枝葉の論評多く余白に乏しき本欄は為に収録を躊躇するに至る斯道の雅友以後簡潔の短篇を投寄せられんことを望む」と編集後記し、苦言を呈している。このことから、当時の白熱した状況が伺い知れるのである。

また、1908年5月発行の『緑珊瑚』一周年記念号には、天南の「発刊の辞」の中で、「緑珊瑚は相思樹の様に恋愛的で、一種弱い観念を起こさない、洵に詩的である」「そもそも俳壇文林豪い作者計り、独占すべきではない、斯道の発達普及を計ふとするには、廣く幼稚異派を包容するの雅量がなければならない、聖人でなければ生まれながらにして知り且つ斯道巧みなる者がいないと云う事を知らねばならない、若し幼稚者としてこれを排斥し、異



分子として之を毛嫌いし自分免許の天狗連が集まって、高く自ら標榜せば、此等の徒は斯道の賊子、斯道の外道である、文学は世界的で、趣味は普通的である、況して平民文学と云はるゝ俳句に於てをやである、故に我が緑珊瑚の雑駁幼稚は寧ろ当然で何も怪しむに足らない、若し過渡の時代、修養の時代にある、我が緑珊瑚を指して幼稚であると批評する者あらば、彼らは文学上の見地ない者と云はねばならない」<sup>23</sup>と、『緑珊瑚』会の目的と『相思樹』への批判を込めて力説しているのである。さらに『緑珊瑚』一周年記念号の中には、次の記事「俳三昧記事」も含まれ、同じ『緑珊瑚』会の貉でさえ、これら二派の間で立場が微妙になることを裏付けている。

同書の『緑珊瑚』「俳三昧記事」第二日目に、「僕が貉翁は道場を知ってをるだらうかと言ふと、葛南が今夜は鳴球が来るさうだから 席上相顧みて苦笑した、苦笑の意味はかうなのだ、貉の主宰する四月八日の『中部日報』に緑珊瑚の句より秋水会の句の方が好い、又相思樹の鳥亭の句を見たが、争はれぬのだと褒め千切つてあつたからである、で僕が兎に角、貉翁は我同人中真面目なる俳人だと褒めると、葛南も亦貉の秋水会席上の句に『庵の灯の若葉に映る小庭哉』と云ふものがあつて、蕪村より、出でて蕪村以上だと褒めた(空鳥)」<sup>24</sup>とあり、また、次のようにも述べる。

「今日の『中部日報』を見ると、貉は又々我緑珊瑚を罵倒してをる、貉も仲々偉くなったものだ、我が緑珊瑚からは選者に挙げられるし相思樹からは地方委員に推挙せられるし、秋水会からは後見人の優遇を受けるし、お忙しいことである、台湾俳人多しと雖も、かう八方から袖を引かれるものは恐らくあるまい、三日ホ句師をすれば生涯忘れられぬとの諺は貉紀元をなすものであらう、貉の鼻の益々高くなるのは結構だが、是非折れぬやうにして貰ひたいものだ(葛南)」<sup>25</sup>と。このように貉に対する揶揄を一例に、2派の対立は、各所で非難の応酬を繰り広げたのである。

したがって南蛮会会員の急激な減少は、指導者香墨の離台もさることながら、鳴球の酷評に耐えられない台湾俳人たちの離反の方が、その理由としては濃厚ではなかったろうか。しかし、こういう結社内の紛争で離脱する事例は「内地」にもあることであり、台湾独自のものではない。但し人々の転勤による新しい結社が創設されるという点においては、多くの結社の存亡の回転が速い台湾において、その一助を為してはいる。これら有力俳誌も廃刊の時が来る。『相思樹』は鳴球の厳しい指導によって次第に衰退し、その上鳴球の離台により、1916(大正5)年2月に13年足らずの発刊に終止符を打った。その指導的にも経済的支援者としても中心的存在であった吉川五平太が、その年の9月に突然の事故により死去したため、1916年9月に、『終刊 相思樹』五平太号<sup>26</sup>を出して、完全なる廃刊となった。また『緑珊瑚』は、1907年から1914年まで、『台湾日日新報』においては『緑珊瑚』会の機関誌ではと思うほどの勢いで、連日その句会やその関連の句が掲載されていたが、会の中心となっていた空鳥は1908年に朝鮮へ転勤し、天南が1910年に欧州へと去って行った。李坪は1915年以後作品の発表が見られなくなったので、一戦を退いたか内地へ戻ったのであろう。その後は経済的に生き詰まり、1911年3月に廃刊となる。期せずして両俳誌が同年の月を前後して廃刊となったことに、両俳句会の縁を感受するのである。このように筆者は、香墨や鳴球らをはじめとして有力俳人たちの渡台・離台・移動に関わる関係性も含めて考察してきた。

### 3 『台湾歳時記』 発刊

次に、ここからは、台湾俳句の特殊性の象徴である『台湾歳時記』について述べる。

『台湾歳時記』は、1910年に李坪（小林里平）によって刊行された。これを重視するのは、日本以外の地で著された最も古い歳時記であり、台湾俳句の特殊性を象徴する歴史的な意義を持つからである。また1904年に「竹風吟社」が発足し、『相思樹』を創刊する。『相思樹』を取り上げるのは、当時内地以外の土地において発行された、最初の本格的な俳誌だからである。『台湾歳時記』は、「南蛮会」発足の1901年から1909年までの活動により蓄積されたものをもとに、台湾の俳人の必要性に迫られて生まれたと言えよう。烏榎・葛南などが主力となって材料の蒐集説明をし、小林里平が編纂執筆した。また、「台北会」「南蛮会」と後述の「竹風吟社」も台北に置かれたが、1905年9月号の『ホトトギス』には、台南に初めて「苦吟会」が生まれ、同年台北にも「くろがね会」が出来ることによって、台北は更に、俳句結社が盛んな地となったことが伺える。それらのことも背景にあって、『台湾歳時記』は発刊されたと思われる。

ところで小林里平の俳号が李坪であって、この「序」で河東碧梧桐が「李坪子」と呼んでいたのも、台湾人と間違ったと阿部が書いている<sup>27</sup>。李坪については既に、『台湾歳時記』と共に記憶にあったから間違わなかったが、筆者は、台湾人の結社参入の時期を特定すべく調査していたため、そのことには共感できる。日本人の俳号と台湾人名の判別には、苦労させられたのである。そして『台湾歳時記』の必要性と必然性と、台湾在住の俳人たちの内地と台湾の季語・季感の誤差と相異に関する苦悩は、『台湾歳時記』が発刊された後においても、昭和期の戦前に至っても、なお継続したのである。このことについては、後述する。

ここでは李坪の『台湾歳時記』を中心に述べるが、島田の前掲論文によると、香墨の1900年5月24日づけで、高浜虚子に当てた手紙によって、台湾在住の俳人たちの内地と台湾の季語・季感の誤差と相異に関する苦悩は、明らかである。「さて『文学上の趣味と申しては殆ど無之、四季の順序等も相立たず、今頃桂花若しくは鳳仙花の如き内地に於ては秋季に於て見るべきものの花盛りなるが如き、内地人の眼より観れば実に奇々妙々にして季の感じ乱れ、俳句など出来不申候』とあるのこそ、彼の哀情を物語って、句作のなかった理由を説明しているのである。この季感の相違ということは、外地における俳人の一様に悩むものであるが、おそらく台湾在住の知名な俳人としては、香墨こそこの苦悩を最初に表白したひとりであろう<sup>28</sup>とする。李坪と香墨いずれが最初の表白者かと言うのは愚問であり、台湾に着いた句心ある内地人は皆、そのことに直面せざるを得なかったと言えよう。『台湾歳時記』出版が、1910年6月であり、その出版に至るまでに李坪は、『台湾日日新報』に台湾独自の季語について書いている。

1907年2月27日の「水引草」（三二）には、「春銭」（ツンナン）と「甜茶」（チンテイ）を新年の季語とする旨、その理由を自句各2句と共に詳述している<sup>29</sup>。その句を1句ずつ挙げる。

春銭や遣い余りを五六文	李坪
甜茶を人様々に祝いけり	李坪

また、1909年11月17日「俳壇小語」(二百)には「千歳蘭」と「馬茶花」(ばちやくわ)について詳述し、秋の季語とするとし、1909年11月21日「俳壇小語」(二百二)には、「釈迦果」(しゃかくわ)と麵包樹(ぱんのき)について、それぞれに初秋と秋の季語と定めている。1909年12月3日「俳壇小語」(二百十)にも「薊苳」(しきう)一語について冬の季語としている。こうして日々、読者に台湾季語の普及を図っていたのであろう。

また余談だが、『台湾歳時記』の出版した2ヶ月後の『ホトトギス』1910年8月号前付の三に、この本の宣伝が1頁大で載っており、河東碧梧桐序・小林李坪著として定価金五十銭・送料四銭とあるのが、当時の俳壇傾向を偲ばせる。本書の表紙には、小林里平著とのみあるのだが、台湾訪問した河東碧梧桐の序は、新傾向俳句が主流であった当時の台湾俳壇にとって、価値あるものであったのだろう。

『台湾歳時記』は台湾俳人の必要性から出来たものであるということは、前述したが、また『台湾歳時記』の「凡例」<sup>30</sup>に、「一、本書の目的は人事、動物、植物の3部類中台湾に特殊なる行事季物を蒐集説明するにあり。一、仮令台地に特殊と雖も、既に内地の歳時記類に記載説明しあるものは概ねこれを略す。但し台地に見るもの、其説明する所と全く異なるものは間々之れを再説す」とあり、台湾独特の季題を集めたものであることを表示する。解説は、俳句の語句についての学問的なことや詩文や実際の見聞を含め、由来や歴史にまで及ぶ。

しかし、1910年に『台湾歳時記』が発刊されたとき、その中に春銭(ツンナン)・刮茶(テンテイ)・馬茶花・釈迦果(しゃかくわ)・麵包樹(ぱんのき)は、季題として入れられていたが、千歳蘭と薊苳(しきう)は、入ってはいない。その理由も不明である。また、『台湾歳時記』が、どのように用いられていったかに関する資料はない。ただ筆者が言えることは、真に台湾俳句の句作に悩む人々や専門家が購入しただけで、新聞程に流布することは、あまり期待出来なかったのではないだろうか。

次に、『台湾歳時記』の中の、春銭(ツンナン)の具体例を挙げる。

春銭は是又土音春、存に通ずるよりして、去年の生計余りある意にかけて之れを祝ふのである、一に棹銭、過年船又は隔年銭と称し、大抵五六銭づゝの孔方銭を絡に通して、新年飾りの卓上、春飯両側に二行に供へるのである、尤も近年は土人間にも新銅貨が非常に多く流通するので、孔方の台湾銭の代わりに、銅貨七八銭位づゝを供へて置く家もある、又稀れには古金古銭などを供える家もある<sup>31</sup>。

と言う具合に、台湾で初めて目にする、日本の文化には無い正月の飾りについて、『台湾日日新報』に掲載時と同文の説明をする。

これは正月飾りだから、春の季語の部に入れてあるのである。春銭は、見てすぐに分かるものであるから、簡潔な説明となっているが、刮茶(テンテイ)については、274字で1頁以上の紙幅をとり、「香茶や烏龍茶でも何でも平常用の茶でよいから、それに砂糖を入れて甘くしたものである」として、正月以外にも慶事にも飲むが、正月に多用し、その人に合った縁起のいい言葉と共に出すと説明する。内地人のために供する『台湾歳時記』であることが分かる。

更にこの書には、新聞に拙句として載せた前述の李坪の例句2句は載ってはいない。刮茶（テンテイ）についても、李坪の例句2句は入っていない。

例句が黄霊芝の『台湾俳句歳時記』に比較して数えるほど極端に少ないのは、台湾に日本人が流入してから15年しか経っておらず、台湾季題そのものが新語であり、初体験の日本人の作句における内地の季語との齟齬の経験が、悩みながらもまだ浅かったからと推察する。そのため、李坪以外の俳句を例句にするほどのものはなかったのだろう。したがって、台湾に於ける日本人俳句結社の人々のための台湾歳時指針記であった。それならば尚更、李坪の例句なりとも載せたら、初心者には分かり易いと思わなかったのであろうか。その点で言えば、戦後、黄霊芝の台湾人による台湾の俳句結社の人々のための『台湾俳句歳時記』とは、お国柄の違いによる季題の受け止め方も差異があり、例句をたくさん配して、俳句会全員で「台湾歳時記」を作成しようとした黄霊芝とは、意図が異なるのではないかと筆者は推察する。つまり、小林里平の書は、台湾に初めて来た内地人のためのものであり、黄霊芝の書は、台湾の人のためのものであった。

この2書の比較を阿部は、前掲論文の(五)(六)の中でしており、「新正」(しんせい)を小林里平の書には採用していないことや、例句が少ないことの原因等を例に挙げているが、ここでは比較しない。第二章では、現代における台湾人のための「台湾歳時記」が黄霊芝によって、編まれるのであるが、その箇所、再度、小林里平の『台湾歳時記』を取り上げる。

以上、『ホトトギス』に初めて台湾の俳句結社である台北会(台北)の名前が載って以来、主な結社しか論じてこなかったが、これは、阿部誠文の「台湾俳壇史」を中心にまとめたからである。したがってそれ以外に明治の末までには、次々に結社が現われては消えていった。それも『ホトトギス』に現われた句会のみであるから、以下の結社以外に存在したものは他にもあるはずである。例えば、前述の烏榑送別会に参加した拳会(深坑)と月桃会(桃園)<sup>32</sup>はその例で、『台湾日日新報』から見出せる台湾俳句結社である。これらは、『ホトトギス』には掲載されていないため、このことが、他に多くの結社の存在を推察させるものである。以下阿部の本論には結社名のみか或いは取り上げられてはいないもので、明治年代末までの『ホトトギス』に掲載されている台湾の俳句結社名を、例句を割愛して発行年代順に挙げておく。

「むらさき会」(基隆)	1905年1月号	「秋水会」(台北)	1908年5月号
「苦吟会」(台南)	1905年9月号	「田螺会」(台南)	1908年7月号
「くろがね会」(台北)	1906年1月号	「璉霧郷会」(彰化)	1909年4月号
「南溟会」(打狗)	1906年2月号	「羅山吟壇」(嘉義)	1909年10月号
「如月会」(橋仔頭)	1907年1月号	「二二吟壇」(基隆)	1909年11月号
「荔枝郷」(台北)	1908年2月号		

等である。

## 第二節 虚子の『ホトトギス』俳壇復帰

## 1 台湾鉄道開発の支線拡張期と結社の動向

日本の時代史は、明治から大正へと変わると共に、日本俳壇にも大きな動きが現れ、それに伴って、台湾俳壇も変化を見せてくる。先ず虚子が、1913年(大正2)に俳壇復帰したため、明治末期には河東碧梧桐の影響が強い新傾向俳句が主流であった台湾俳壇も、写生中心の「ホトトギス」派が主流となってきた。日本と台湾間の人々の往来は、大正時代になって更に、あらゆる分野に亘って付随的に盛んとなる。特に1914年以降、日本の南洋進出に伴って、台湾はその寄港地として重要になった。日本はドイツに宣戦布告し、赤道以北のドイツ領南洋諸島を占領した。このことによって南方に向かう船は増加し、それらの寄港は、北部の基隆であった。そのため人々の出入りが増大し、俳壇も即日本の俳壇の動向に左右されたのである。しかも前節に述べたとおり、鉄道全線開通に即応して、俳壇創設が漸次興り、南下のみならず一時期には、南部から北上する一面も見せる。1908年4月20日に「基隆」から「打狗(現在の高雄)」まで開通した後、大正期に入り、鉄道の支線網が、以下の通り、次々と開通していった<sup>33</sup>。

平溪線開通(宜蘭線平溪—菁桐)、阿里山森林鉄道開通(嘉義—阿里山)、(1914年)

淡水線新北投支線開通(淡水—新北投、1916年)

宜蘭線着工、(花蓮—玉里、1917年)

阿里山森林鉄道、客運営業開始、(1920年)

平溪線開通(玉里—関山)、集集線開通(二水・集集—下車堤)、(1921年)

集集線 客運開始、縦貫線海線開通、(1922年)

潮州線開通(高雄—屏東—潮州、1923年)

宜蘭線全線開通(八堵—蘇澳)、太平山鉄道(宜蘭線羅東駅—太平山—土場)、羅東森林鉄道開通、(1924年)

台東線開通(花蓮—台東、1926年)

以下、昭和期も述べると、台南駅開業。(1936年)屏東線(南廻線：台東～高雄)(1941年)などがある。

以上、鉄道開発のことと、「河東碧梧桐が明治四十一年に台湾を訪れたのは、南北縦貫鉄道完工の取材が目的であった」<sup>34</sup>と「内地」との関係性について述べたが、筆者は、台湾内の俳句結社の多くの盛衰と、人々の移動との関係性に注目するのである。したがって、大正期の鉄道開発に伴う民間企業や法院関係に従事する人々の移動は、明治期のような一定の方向性を持つというより、支線開発の方々に分散していったと言えよう。

阿部は『『ホトトギス』1912年10月号に「バショーマ(芭蕉実)会」(鹽水港)が載るまで、台南の『菩提子会』が明治44年1月号まで続いていたが、その後空白のままであった。つまり台湾の句会は、全て消失し、大正期は新たな句会をもって始まった。明治と大正で時代の断絶が存在する」と述べる<sup>35</sup>。しかし筆者には、異論がある。そのことについては、後で述べる。

「バショーマ(芭蕉実)会」が初見するのは、『ホトトギス』1912年10月号である。この会は台南市に生まれ、1913年まで掲載されて後消える。台南市の北部鹽水港に結社したので、その地名で碧天朗が報告している。作品と投句者名は、文学史ではないので、特記

の必要性のあるとき以外は割愛する。以下同様である。

その翌年、『ホトトギス』1914年4月号には「台東会」が台東に生まれ、8月号に二度目  
が載ったが消える。「璉霧郷会」もその年、台湾中部の彰化に出来たが、7月号、8月号、9  
月号、10月号にひとりかふたりの句が載った後、その名は消えた。

しかし「璉霧郷会」は実は、前述の『ホトトギス』1910年1月号の「国分け表」に、台  
南「菩提子会」、基隆「台湾五句集」「二二吟壇」、彰化「璉霧郷会」、嘉義「羅山吟壇」の  
5結社が記載され、既に台湾にそれは存在していたのである。したがって阿部の言う『ホ  
トトギス』1913年7月号の掲載が初見とは言えない。したがって、この句会は、1909年頃  
から発足継続していて、1914年になって俳句が、「地方俳句界」に載せられたのであろう。  
その結果言えることは、明治の結社は全て消滅していたのではないということである。

前にも述べているが、このような結社の例は、『ホトトギス』上には報告されなくとも、  
処々に存在していたことと、この事例では、前述の「国分け表」に顕現されているのであ  
る。この例は、後にも取り上げる。またこの件については沈も同じく指摘しており、明治  
期の風雨楼と「台湾五句集」「二二吟壇」の関係を阿部が説明した箇所述べているのと同  
様、『ホトトギス』の情報のみによって台湾俳壇の状況を推断するのは危険であるとして、  
阿部の「明治期と大正期の断絶」というのは誤解であるとする。その詳細については、他  
の資料から論じているが、筆者の論を中心とするため、ここでは述べない。先に述べたよ  
うに、沈のこの指摘以前に筆者もこの点を、『ホトトギス』の内部掲載の「国分け表」から  
指摘していたのであるから、他からの資料のみならず、この俳誌内部の資料に限定しても、  
阿部の判断は妥当でないことは、立証出来るのである。

1915年からの新結社の中心地は打狗で、「クロトン会」「クロトン別会」「打狗クロトン  
会」（これらはメンバーが同じなので、同一句会と見られる。）「三人会」「鼓山俳句会」な  
どみな打狗での句会であり、それ以外では、『ホトトギス』9月号に台東に「聴涛吟社」が  
一回だけ掲載され、以下その2句中の1句であるが、もう1句は「台東会」にいた原田千  
子である。その移動については不明だが、やはり仕事上の、南からやや北上したパターン  
ではなかろうか。

この年の『ホトトギス』9月号に現れたのは、台北の「蟾蜍会」であり、打狗の「三人  
会」「鼓山俳句会」、1916年から出てくる「打狗俳句会」と共に、大正中期から末期にかけ  
ての中心的な存在になっていく。そのことから筆者は、大正初期は、台湾南部の地方から  
結社が生まれては消えるという経過を辿りつつ、次第に北上して有力な俳句会の礎が固ま  
っていき過程であると分析する。南北縦貫鉄道の支線（潮州線）が打狗（後の高雄）を開  
発拠点として北上しつつ、支線を延ばしていった。そのため人々は打狗に結集し、その地  
に結社も数増していったと思われる。そして小俳句結社の興亡は、いつもの台湾の例に漏  
れず、開発と人々の移動との関係性を具現しているのである。

打狗の1915年結成の句会を挙げると、『ホトトギス』（俳誌はすべて『ホトトギス』であ  
り、以下略）1915年6月号の「クロトン会」、同1915年6月号の「クロトン別会」、1915  
年7月号の「三人会」、1915年11月号の「鼓山俳句会」、1915年9月号の「蟾蜍会」など、  
5つもの結社がある。

水牛に乗れる小供や青田道

跳 泥（1915年9月号）「蟾蜍会」

釣り上げし魚落としけり青田中

孤 羊 同上

上記「蟾蜍会」のたったの2句は、『ホトトギス』初掲載であるが、ここから大正中期の俳壇を支える句会に成長していくので、作品と投句者を一応挙げておく。

## 2 「雑詠」への台湾俳句進出

1913年虚子は、碧梧桐に対抗するために俳壇に復帰し、「雑詠」の選も始めた。「雑詠」の中では、台湾の俳人で大正になってからの入選者はなかったが、1916年になって、初めての入選者が出た。下記の通りである。

靴墨を歯痛薬や秋の風  
纏足の布干してあり木犀花  
討蕃も済みて連峰眠りけり  
流木を拾いためたる年木哉

駄句郎 (1916年1月号)「クロトン会」  
芳仙女 (1916年1月号) 結社所属無  
貫 城 (1916年2月号)  
不 為 (1916年4月号)

上記の芳仙女・貫城・不為の3人は、いずれの句会にも参加していない。このように結社に所属しないで作句する台湾の俳人は、多かったと思われる。特に俳句結社に所属しない台湾俳人たちが、個人で投句する先として、「雑詠」は格好の場であったと思われる。この虚子の「雑詠」欄が、その後の台湾俳句の隆盛に拍車をかけたことは、容易に推察される。但しそれは、昭和年代に入って本格化する。更に結社所属と非所属俳人との論議は、後にする。

先の「三人会」の智佳子・酉子は、1916年6月号まで作品が載せられた後、「打狗俳句会」に合併して会を解消した。

さて俳句結社「鼓山俳句会」に戻ると、『ホトトギス』1916年1・4・6・9月号で掲載が終わり、「クロトン会」が3月号に一度だけ、「椰樹会」が5月号に初見し、この会と「三人会」が合併して「打狗俳句会」となり、これを改称して「打鼓俳句会」とし、8・10・12月号に掲載される。打狗地方の俳句会は、小句会であったが、それ以外の台北の「蟾蜍会」は、9人程度の作品が毎号載せられ安定している。

それ以外に1916年に特記すべきは、新しい有力俳句会「川堀吟社」が結成されたことである。台中西部の「彰化」から近い西岸の港町である。南北縦貫鉄道の主要駅である「彰化」から程ない場所に結社されることは、その近隣が開発されていくことを示しているのである。集集線の基点二水是彰化に近く、台東市や彰化を拠点に集集線が開発されていくために、港から資材の運搬など人々の集散が起こり、その開発と移動を顕示していると思われる。後の1917年6月号に初出する塩水港の「月津会」も同様と推察される。

上記の5月号には、久しぶりの台東の「聴涛吟社」も見られる。このように、有力な俳句会が継続的に活躍する時期であると共に、小句会の会員の結社の移動によっても、俳壇の下支えのエネルギーを育成している時であるとも言えよう。

台湾の明治期の俳壇は、正岡子規によって旧派から新派に代わり、さらに河東碧梧桐の新傾向俳句の影響を受けたことは、明治期の台湾俳壇において詳述した。そしてまた阿部

は、虚子の俳壇復帰によって、『ホトトギス』の影響力が更に強くなり、「内地」日本の俳壇史的流れを、そのまま反映していると言えるが、台湾の俳人の数の少ないことから、台湾俳壇独自のアピールを、日本本土に向けてするというほどではなかったと言う<sup>36</sup>。これは前述の筆者の推察と同じことを言っているのかもしれないが、台湾俳人の数の問題ではなく、虚子の傾向に戻るのに、時間がかかったと見るべきではないだろうか。しかしその中でも、1917年の『ホトトギス』「雑詠」に入選したのは、駄句郎ひとりの2句で、いずれも当時の写生俳句の傾向を示している。その中の1句は、下記の通りである。

尿りして嗅ぎ去る猫や草いきれ 駄句郎

この年の句会は、「蟾蜍会」「打鼓（鼓）俳句会」を中心に、「打狗ゲンゲン句会」や「月津会」（塩水港）、「二人会」「常夏俳壇」（旗後）などによって催され、「打鼓（鼓）俳句会」は「打狗俳句会」と「堤山俳句会」が、1916年に合併したものである。

次に1917年に引き続き10年までにかけて、台湾俳壇の動向を見てみよう。『ホトトギス』1917年7月号「打鼓俳句会」から、投句者名のみ挙げる。駄句郎、花関、黙空、竹句生、はる女などである。駄句郎も黙空も、以前の句会からここに来て活躍していることから、句会間の出入りが伺い知れるのである。結社間の出入りや興亡については、詳述しない。第一節に述べた結社間の興亡に該当するほどのものは見当たらないし、敢えて特記するほどのものもないためである。

1918年の台湾句会は、「蟾蜍会」「打鼓俳句会」があるが、「蟾蜍会」の孤羊が「孤羊会居偶会」を開き、これをきっかけに台北に「台湾五句会」が生まれた。これによって「蟾蜍会」は杉本藻花が中心となり、「台湾五句会」は孤羊が中心となっている。孤羊は同時に「蟾蜍会」にも参加しつつ、後の1920年3月号の「地方俳句界」には、「みなみ吟社」の同人となって、「みなみ吟社」と「蟾蜍会」の合同俳句会に名を連ね、同年10月号では山本孕江が報じる打狗の「哨船頭吟社」に一句を載せている<sup>37</sup>。したがって、同じ台北内のみでなく俳句会相互の交流は、広域的に自由に行われていたと思われる。

一方、打狗では、山本孕江を中心に「哨船頭吟社」が結成され、哨船頭句会が開かれたことが7月号に見え、金瓜石鉾山の「金華吟社」（6月号）と同地の「白露会」（6月号）と基隆の「骨肉会」（7月号）も初見したが、その後は見えない。「台湾五句会」も7月号まで孤羊が報じて終わった。以上の中で重要なものは、「哨船頭吟社」である。この句会の1918年前半の句から抜粋した特記の一句は、下記のとおりである。

訊問の生蕃（しこ）<sup>38</sup>が後やおこり炭 東 舟

「訊問の」の句は、反日活動をした人を捕らえての、訊問光景であろう。その時々歴史と場所とその瞬間が彷彿としてくる。渡辺香墨ら法院関係者が関わっていたその空間は、この時期に至っても、なお継続している。東舟が生蕃の立場にいることが、生蕃の後にある「おこり炭」の4文字に投影される。「炭がおこる」と「怒る」が懸け詞になっているとみる。生蕃の怒りであるとともに、作者の生蕃に対する憐れみと、統治者日本人に対する怒りであろう。「おこり炭」が、生蕃を拷問するためのものであるならばなおさらのこと、



作者の憤りを感じざるを得ない。日本が統治を始めて以来、抵抗する生蕃を次々に屈服させていった日本人は、植民者であり征服者であったはずである。したがって、生蕃の立場に立ったこの句は、当時としては斬新だったのではなかろうか。或いは本来の人間性のまなざしが吐露されていると見たい。こういう俳句は、その他多くの俳句の中であって、特筆すべき句であると思う。

1919年『ホトトギス』7月号「雑詠」に、通年で山静のただ1句が台湾から入っているが、「地方俳句界」の入選句は、137句に及び、句会は盛んであると言えよう。句会は以上「蟾蜍会」「打鼓俳句会」「哨船頭吟社」の3句会に加えて、「みなみ吟社」(8月号)と「濁水会」(3月号)「加鶴会」(8月号)が初見し、これらの後ろ2会は、この回のみである。

1919年後半は、「蟾蜍会」と「みなみ吟社」が中心となる。

1920年の『ホトトギス』「雑詠」には、12句が入選、そのうち美酔が3句、白雉が2句、山静が2句入り、台湾俳句の存在を見せ始めたと言えよう。3月号から、花蓮港の「大樹吟社」が初出し、ますます盛んとなる。風仙、桜紅、山静、東柯、白雉など「大樹吟社」同人の名前が見える。「みなみ吟社」では、孤羊、眞琴、黙山らの名前がある。

1920年8月号の「地方俳句界」の台湾の項に、二つの送別句会とひとつの歓迎会記が載っている。人事異動によって、俳人も移動する。それは再三述べてきたが、句会の存亡に関わってくることになる。1920年10月号に打狗で「港の会」が結社されているが、会員は孕江・狸言・海扇らであるから、「哨船頭吟社」と同じである。報じているのも、同じ山本孕江である。なぜそうなったのかは分からないが、孤羊の場合と同様、同じ土地であるから、孕江を中心に地区ごとに名づけて句会を開き、主な会員が出張したのかと思われる。11月号には「大樹吟社」の句しかない。12月号には「哨船頭吟社」の句だけである。

1920年の台湾俳句を「雑詠」と句会作品を通してみる阿部の見解は、「表現技術や写生や対象の把握も多様で、レベルも高くなっている。したがって全体的に充実し、活発化している。先ず作品ありて俳句史あり、その作品を作り評価する場が句会であり、または雑誌における入選である。作品を読みつつ、その流れをつかみ、また、句会の消長や雑誌、句集などの俳書、事件や社会背景や人間関係も含めて書かれていくべきであろう。しかし、理想を果すには、なおその資料が十分ではない」<sup>39</sup>ということである。確かに、『ホトトギス』のみを資料として分析していくと、沈の阿部に対する指摘そのとおりに、誤謬も起きるし、興味喚起の部分で物足りなさはある。しかし、『ホトトギス』の範囲内でと限定すれば、その範囲での可能性を見出そうとした阿部の努力は、それなりの評価は与えられるべきとも思う。更に言えば、これを基に、適宜焦点を絞って、各専門分野の視点から展開していくことは、新たな分析方法として興味が湧いてくる。この俳壇史を辿る中で発見した点を、今後展開する課題としたい。筆者の本論文の第一章は、第二章以後の中心論の前提として、台湾の地に俳句が移入された頃からの俳句結社変遷の概略を、台湾開発に伴う人々の移動と、台湾の風土における作句上の苦悩の2点に絞って、阿部の「台湾俳壇史」を辿っているのである。この2点に絞る根拠については、この章の冒頭に述べているが、結社の数の多さの根底に、日本統治初期の台湾鉄道開発と関わっているという仮説を立てたのである。更に現在においてもなお、黄靈芝の『台湾俳句歳時記』が編纂されたという台湾俳句の特殊性と必要性に繋がる部分で、戦前の台湾俳壇にも、そのことが問題性を持って語られるはずとの仮説に立っている。したがって、文学史的には考察せず、その点は阿部の論に委

ねる。

### 3 「雑詠」と「各地俳句界」の関係性

1921年の『ホトトギス』「雑詠」入選は全13句で、そのうち5月号の「雑詠」に山静の句が4句も入選していることは注目すべきである。この年の1月号の「各地俳句会」には、打狗の「南方俳句会」と「大樹吟社」の句が見える。「大樹吟社」の句は、白汀・花涯・東柯・白雉・山静・凡仙など「雑詠」の入選者が多い。2月号の「孤羊居会」には、迷庵・藻花の句がある。また、同号の「哨船頭吟社」には、露羊・水城・きゆう・孕江の句が見られる。同じ年12月号に、台北の「古亭吟社」、屏東の「潮吟社」の名が挙げられており、新たに生まれていることが分かる。

次に1922年から1926年(昭和1)までを概観する。1922年の『ホトトギス』「雑詠」は、36句入選のうち海扇の句が19句で、凡そその半数を占める。以下、その一部であり、海扇が船乗りとして体感した事柄を、船のスピード感と共に詠み上げ、また、苦力(クーリー)の生活のリアルな表現つまり、苦力の粗末で不潔な服から、蠅が生まれる、あるいは出てくるという、酷使している苦力に対する不潔・汚穢感が表出され、苦力と蠅を同一視するような差別意識が滲み出ているのであり、植民地主義的な意識が濃厚で、読者の感性を刺激しているとして、その意味で、単なる写生ではなく、虚子の推奨する真の意味での写生を標榜しているとの見方があるなら、筆者は、差別意識や植民地主義的な意識が濃厚であるから入選したとばかりは解釈しない。苦力の脱いだぼろきれのような衣服にわく蛆から生ずる蠅の誕生が、苦力の生活の過酷さ・悲惨さ、ひいては日本人である植民者の傲りをも、詠み込んでいると思う。ここにも、人間本来の姿を追い求める芸術性を垣間見るのである。

海原や寒月駈ける夜もすがら	海 扇 (3月号)
クーリーの脱ぎ置くぬのこ蠅生まる	同 (6月号)

この年には、台北の「古亭吟社」花連港の「ホトトギス会」、台東の「実桑会」、高雄に「無名会」、台北に「台北句会」、新竹に「雅橋庵月見会」が新結社している。この「台北句会」は、改名した「各地俳句会」や昭和に入るとまた「地方俳句会」になったりしたその欄に、毎回多数の句が掲載され隆盛を極めていた。しかしそれは1924年4月号までで、その後は「ユウカリ句会」の多数の句にとって代わられる。しかし構成員は同じ人も多く、後述の阿部の説も出てくる。それについては、後に述べる。

ところで阿部は山本孕江について、「台湾俳壇では大切な人だが、句会には見えても「雑詠」には作品がとられていないということは、『雑詠』入選句と『句会』の句とでは、俳句世界がはっきりと違うことが分かる」<sup>40</sup>と言う。筆者の考察からすると、それは当然のことであって、その差は「雑詠」と「地方俳句界」の選者が異なるからだと思う。筆者の調査によると、「雑詠」は虚子選(一時渡辺水巴選の時もあり)であっても、「地方俳句界」は「雑詠」が始まる以前から他の人が行っており、最初創刊時から1909年までの目次には選者名は無記入であったが、同年途中から松濱選に、1912年から水巴選となった。1913

年1月にはその選者は禾人と虚子、後半はまた長谷川零餘子が1917年までと1920年初めから「俳句大会」や「各地俳句会」などに名称変更して選句し、1922年から西山泊雲選に、そして昭和年代になると飯田蛇笏と二人で選句し、あるときは月毎に交互に選句するようになる。同じ結社であっても、俳人によって句風にも個性があり、同じ俳句でも選者によって採・不採は往々にしてあることであるから、「雑詠」は虚子ひとりであればなおのこと、双方の選句に差異があることは頷けるのである。

1923年の「雑詠」は1922年と一変し、全32句の中に活躍著しい人が居なくなり、メンバーも入れ替わっている。海扇は、7月号に一度に3句入ったのみで、「翠汀・孕江・山静・東柯などがとって代わっているが、その3倍近くが、かつて『地方俳句界』には見られなかった顔ぶれである。ということは、句会に入っていないが、『雑詠』に入選するほどの力量を持ち始めたということであり、台湾での俳句の広がりの意味する」「そして、虚子はこの年から、写生の効いた明瞭な句の方向に本格的に舵を切った」<sup>41</sup>と阿部は言う。確かにそれは事実であり、句会に所属しなければ句作技量が磨かれないと言う前記の阿部の説に些か異議を唱えたく思っていたが、やはり日本人は、国民性として自然と四季の変移に敏感な感性を養成されており、その生活習慣の中で過ごしてきた生活感覚の発露が、句に自ずと表現されるのであろう。阿部の考察では、如何にして力量を持ち始めたかに言及していないが、四季の変化に感性を研ぎ澄まされ、生活体感の中から表現する技量が、「雑詠」のレベルに達したことを示すものと思う。そのことが、「雑詠」の選者である虚子の選句方向と合致した年であったのではなかろうか。したがってこの点では、阿部に賛同はしない。

1923年前半には、「相思樹会」「大西会」「青葉会」「常夏会」「はにふち会」「榕樹会」「高雄吟社」「蛙青会」「うしほ吟社」「鳳吟社」が生まれ、後半には、台北に「まめずみ会」「やしのみ会」「落穂会」「赤道句会」「芭蕉会」の五つの句会が生まれたが、「台北句会」が引き続き盛況であった。

また阿部によると、1924年前半『ホトトギス』の「雑詠」は、客観写生の俳句となっていた。虚子の選句を経ない「各地俳句界」の作品は、どの句を見ても写生句である。この年から「雑詠」も句会句も同じ傾向になってきたのは、虚子が写生句以外を排除したというよりも、虚子の指導が、台湾の句会まで浸透してきたということだ<sup>42</sup>とする。それのみでなく、更に筆者は、虚子と当時の「各地俳句会」の選者西山泊雲が、虚子と同傾向を持つ選者であったからではなかろうかと思う。その選者が、虚子の肝いりで人選されたか否かは不明であるが。そしてそれに続けて阿部は、その「各地俳句会」の様子についても、全体的に「台北句会」が中心で、4月号に「包水居句会」「その夜の会」の名も出てくるが、「台北句会」とメンバーが重複していて、「台北句会」の焦りが見えるから、このときが「台北句会」の全盛期と考えられると言う。しかし焦りというのがどうして感じられるのか、筆者には理解できない。次に5月号から様相が変わり23人の大所帯「ユーカリ句会」が初見し、この年の後半にかけてもよく見られる。これについても阿部は同頁で、メンバーは「台北俳句会」と殆ど同じであるから、改称したのであろうと言うが、そうではない。その経緯は沈の前掲論文「俳句の地域性と国際化」に詳しい。

沈によると、「ユーカリ句会」の前身は、総督府土木局勤務の綾部王春を中心に10名ほどで1920年に創設した「ミナミ吟社」である。そこに同局勤務の山口碧城・丸木翠江が加わり、その後の『ゆうかり』創刊以後の財政に尽力した大久保黙山とその最初の選者とな

った佐藤夜牛、そして農事試験場勤務の三上孤羊が加わり、翌年高雄の税関に勤務していた山本孕江の転勤により、この結社に入ったとする<sup>43</sup>。沈の前掲論文は、結社の構成員やその出入りについて、各所で詳細な資料を掘り起こしている点で、傑出している。そして筆者が繰り返し述べてきたこととの関係性を見るに、この句会とこの大正時代は、明治期には法院関係者やそれに関連する諸機関の人々が主導権を握っていた。これに対して、工業・農業・税務等関係者が多くなり、台湾の政治・経済・工業・農業も、当初の開発時期の根幹にあたる領域から漸次細分化されてきて、枝葉を繁茂させる分野が定着を見せてきていると言えるのではないだろうか。ここでも台湾の開発状況と進捗状況を、俳句結社を移動する人々の職業から推察出来るのである。

また「ユーカリ句会」について話を戻すと、「ユーカリ句会」は「台北句会」の改名ではなく、「ミナミ吟社」が俳誌発行のためその名を夜牛発案の「ゆうかり」に決定した上で、句会の名前も「ゆうかり社」に改名したのである。したがって、「台北句会」の会員殆どが「ユーカリ句会」に編入したということだろう。その他の句会からも多数入会したということである。こうして、この句会は、1945年まで続いて行く。そして『ホトトギス』1924年9月号には「月桃会」と「鳳吟社」が見えるほかは、「ユーカリ句会」と「蟾蜍会」だけが継続している。投句者は、「ユーカリ句会」に中洲、撫松、坡牛ら、「蟾蜍会」に兆田らがいる。

1925年の『ホトトギス』「雑詠」には、台湾から毎月入選しており、総41句の入選は、健闘している。大体台北の俳句会のものが多いが、台南からもいるし、初入選者もいる。特に浜田坡牛は7回、山本孕江が5回である。

この年の台湾句会は、「ユーカリ」から「ゆうかり」に変更した「ゆうかり句会」が9周年を迎えて、全盛時代であった。その次の活躍は「蟾蜍句会」で、この二つは台北であったから、句会は台北に片寄っていた。言い換えると、この二つの句会の活躍で成り立っていたし、同じ「ホトトギス」系の句会とあって、交流があり、山本孕江は、両方の句会に参加している。これらの句風にも差はない。したがって、この時期の台湾俳壇は、台北を中心に着実に進歩し、かつては、台中・台南に広がっていた句会が、台北中心になったことは惜しいと阿部は言う<sup>44</sup>。筆者の分析によると、確かに孕江は、1921年に台北に転勤して来るまでは、高雄（打狗）の「哨船頭句会」や「港の会」で活動し、1923年にも8月号には、「蟾蜍句会」「台北句会」「まめずみ会」の3句会に同時に名を連ねていた<sup>45</sup>。このこともあり、同じ台北市内に限らず、他結社との交流は多々あったことが、孤牛と同様の例として孕江も挙げられるのである。このことから、鉄道工事を中心とする台湾の開発が、潮州線（高雄—屏東—潮州、1923年開通）、宜蘭線（八堵—蘇澳、1924年開通）、太平山鉄道（宜蘭線羅東駅—太平山—土場、1924年開通）、台東線（花蓮—台東、1926年開通）など、支線の開通によって一段落して、人々が地方の現場から台北へ、徐々に帰還してきたことの証左と推察する。

### 第三節 『ホトトギス』と台湾季題

#### 1 『ホトトギス』の池内たけし訪台

先ず、1926年から1935年までを概観する。

阿部は、昭和元年の前半6ヶ月で、「雑詠」の入選句数が40句で、前年は一年間で41句であったから、その発展は著しく、句会も3月から「ゆうかり句会」「蟾蜍句会」に続いて、花蓮港の「うしお吟社」が登場すると言う<sup>46</sup>が、「うしお吟社」は既に1923年8月号に初掲載されているから、初見ではないであろう。

1928年に入って「雑詠」の投句者が多くなり、その句数も年間82句に増える。台湾俳壇でも同様に、今までに見ない投句者名が増え、投句地も台北・基隆・花蓮港・台中・台東・台南に広がり、その中には句会に属さない人の名もある。1927年前半の「雑詠」も同じ傾向にある。後半も前半40句に対して42句であるから、勢いは持続している。山本孕江は、10月号で3句、12月号で3句の入選をしている。また「地方俳句界」を見ると、台湾各地に句会が広がり、台南の「蘭白吟社」や台中の「真菰吟社」、高雄の「無名会」、橋仔の「さわらび会」、新竹の「望洋吟社」、高雄の「高雄鳩の子会」などの句会が見える。そのうち「蘭白吟社」「真菰吟社」「無名会」「さわらび会」「望洋吟社」「高雄鳩の子会」などの句会が新俳句会である。その地域は、南部から西中部地域に連なっている。台北のみならず地方の句会も新結社され、活動を始めたと言える。各地方の産業の定着化に伴う、その従事者たちが結社し、中心的活動の地台北に戻った指導的立場の人々は、それら地方の結社とも交流しつつ、台湾の地方俳句会の資質向上に尽力したのではないだろうか。

ところでこの年『ホトトギス』の重鎮池内たけしが、4月から5月にかけて台湾の旅をした<sup>47</sup>。そのため『ホトトギス』は、2年7月号から9月号にかけて、たけしの「台湾の旅」を掲載し、8月号では、山本孕江の「台湾の俳句と私」、山本岬人の「台湾」、江副東洲の「面舵取舵」、大野きゆうの「偶感」、西岡塘翠生の「台湾作句者の苦悩と私観—季題観やら俳材観やらその他」<sup>48</sup>などを合わせて「台湾特集」として掲載している。そのことによって台湾の俳人は、台湾俳句について再認識したことであろう。

では、たけしの台湾訪問の影響は、どのようなものであったか要約すると、次の通りである。山本孕江はその稿「台湾の俳句と私」の中で、台湾での句作の困難さについて、「一つは中央俳壇を去ること遠きこの台湾、四季の変化に恵まれること甚だ薄い台湾、そして優れた指導者を持たない台湾に於いて殆ど無我夢中に唯俳句を作るといふことだけに過ぎなかったことにも、本当の意味の進歩を阻まれたのであろうかと考へます」と言いつつ、下記のたけし來台の折の質問をすることについて、「未だにかうした事柄に悩まされることが往々にしてあります」<sup>49</sup>と記している。これは他の台湾俳人も異口同音に発する思いであることは、西岡塘翠が先の特集の中で、台湾作句者の苦悩する季題と俳材について、「遂に台湾に季感なく季題なしと叫んで苦悩せざるを得ない」「内地俳人も台湾を理解し研究してほしいものである」<sup>50</sup>と台湾作句者の希望を述べていることから分かる。また、江副東洲も同特集の中で、「台湾にリーダーとなって采配を振って示導(原文通り)して被下る大俳人が居られぬ事である」<sup>51</sup>と言っている。

これらのことについて山本孕江は先の孕江の稿に、このたけし來台のおり、「台湾には水馬が年中あます、仏桑華が年中咲いてあます、かうした事実を俳句としてどう取扱つてよいものでせうか」と尋ねたところ、たけしは言下に、「水馬が年中居ることといふことそのものが、面白いではないか、佛桑花が年中咲いてあるといふ事を句にすればいいのではな

いか」と喝破された<sup>52</sup>と書いている。つまりたけしは、季題に合致するか否かを拘泥するのではなく、発想を転換して見せたのである。孕江もこれを機に一層深く台湾を研究し、台湾の俳句という特殊的地位を、ホトトギス雑詠の一角に築き上げたいと述べている。また、同じ特集で山本岬人が「台湾」の中で、彼はたけしの次の句を挙げ、

生蕃の頭目らしき裸かな

池内たけし

「これは、本質的に純台湾句である、単に大屯山とか榕樹とか生蕃を配した『内地』句を見せられてゐる私は長夜の眠りから覚まされたやうな気がした。たけしさんのやうな直観直叙の天賦を得た人には満州も台湾もあったものではない。台湾の俳人諸子にしてたけしさんに依って眞に台湾を觀、台湾をたのしみ、台湾を詠うことに眼を開かれた方も少なくないことゝ思はれる。たけしさんの今度の台湾行は眞に台湾俳句界のエポックメイキングである、台湾俳句界の覚醒期を作るものである」<sup>53</sup>と述べている。

また、大野きゆうは同特集の「偶感」において、たけしによって多大の影響を受けたことを綴っているが、ここでは割愛する。

以上、その池内たけし訪台の影響について掻い摘んで説明した。その特集について、阿部の俳句論が多数見受けられるのであるが、次に一部をまとめて記す。「俳人は対象素材の俳句の中から、自ずと滲み出てくるのが地方性であり、それは第二義的なものである。これからみれば、地方性というものは本質的なものではなく、二義的なもので、個性とか普遍性とかが優先されている。だから、台湾俳人も、台湾製を詠む義務を負ってはいない、と言い放つことができればいい」とし、「池内たけしの訪台によって、そのスタートラインにつくことができたといえる」<sup>54</sup>と言う。筆者もその意見に共感できるものの、明治期に来台した渡辺香墨を先鋒に、小林里平を中心とする台湾俳人を苦悩させ、幾多の工夫を試行しつつ、池内たけしの来台によって開眼した台湾俳人たちがいて、それでもなお、「内地」の季語と台湾季語との齟齬を意識しつつ作句する苦労は常に付き纏い、1936年、虚子が欧州旅行からの帰国の途、3・4時間、基隆港に立ち寄って山本孕江と会った際も、話題は台湾俳句をすべて「内地」の夏の季語にくくるのではなく、台湾独自の歳時記の確立が早急の課題であるとして、孕江が熱心に虚子に訴えたという。池内たけし来台の約10年後であるこの時にも、孕江らの悩みは継続されていたのである。このことは、今井祥子が詳述している<sup>55</sup>が、ここでは、台湾の俳人たちは、台湾季語創設のため苦闘したが果たせなかったことの一例に留め、その内容の詳細には触れない。本論文では、小林里平と戦後の黄靈芝の「台湾歳時記」の比較を中心に置くからである。こうして、この時点においてもなお、台湾俳人の季感との苦闘は持続されていると言えるのである。里平の1910年に編纂した『台湾歳時記』では、網羅しきれない状況に至っていたのである。そして現在に至ってようやく、黄靈芝が「台湾俳句歳時記」の新たな区分を創設し、台湾の現在を詠む台湾俳人に寄与しているのである。

次に1928年の「雑詠」は前半だけで53句あり、後半の89句を合わせると計142句となり、過去最高の入選数となる。阿部はそのことについて、次のように言う。特定の人に片寄っていないから、台湾における俳人の裾が更に広がったし、集団的にある塊になって、力量を伸ばしている。更にその特徴として、日本人は台湾にさまざまなものを持ち込んで

いることをそれら俳句が示す。例えば「衣紋竹」「案山子」「生け花」「羽織」「障子」「門松」「内地桜」「神社」など、日本人が伝統的に生活習慣としてきた文化であり、日本人にとっては、生活上必要であり、かつ日本を偲ぶよすがであったと言える。それと同時に特徴的なのは、台湾の風物詠がある。「纏足靴」「生蕃壺」「首棚」「渡台」「蕃瓢」「椰子」「蕃屋」「蕃人」など数多く、虚子が台湾の風物を詠んだ句をとった。海外詠の難しさの中から佳句を生むのは、台湾の生活にもなじみ、俳句の表現力を身につけたということで頼もしい<sup>56</sup>。阿部は以上のように言うが、筆者は、『ホトトギス』主宰虚子の戦略的指導力ではなかったかと思う。

台湾風物とそれに対応する日本独特の文化産物に込める虚子の、俳句詠への意気込みと姿勢を感受せずにはいられない。前年の池内たけし訪台を契機とする「台湾特集」が、虚子の台湾俳句への関心を、大いにかき立てたものと思われる。それは、台湾俳人への示唆であり、鼓舞でもあったであろう。大野きゆう・山本孕江・山本岬人・深堀迷子・赤田せき牛らに次いで、この年、三上惜字塔・下村非文・三好月踏らが輩出している。

この年の新結社は基隆の「雨港吟社」「高雄五の日会」、台中の「菰吟社」「高雄龍舌吟社」、台中の「新高会」、台北の「ロパンノキ句会」であり、阿部の調査<sup>57</sup>とは一致する。特に「雨港吟社」は42人の投句で、台湾からの句会としては、最多の大所帯である。ゆうかり句会など他句会と掛け持ちの会員名も見受けられるから、合同的句会を発足させたのかもしれないが、その後この句会の報はない。

1929年前半の「雑詠」は66句で、山本岬人の入選がひとりで15句もあり、活躍著しい。後半は59句で、山本岬人の入選が徐々に減っていく時でもある。花蓮港の「草の実句吟社会」台中の「台中吟社」が誕生している。1930年前半の「雑詠」は34句で少なくなっているが、後半は54句と増えていく。この年の「各地俳句界」は、1月・3月・7月の3号のみで、それ以外の号にはない。その中でも活躍しているのは、基隆の「うてな会」である。

1931年前後半の「雑詠」は、前半33句、後半26句で、かなり入選の数が減っている。とはいえ、特に初入選者が増えている。それらの多くは、句会に参加していないのではないか。確かにこの年の「各地句会」も3月号・6月号・9月号・11月号の4回のみ、そのうち台湾句会が報じられたのは、3月号・11月号の2回のみである。昭和7年前半は何年ぶりの55句で、4年半ぶりの大量入選、そのうち特に山本岬人が14句入選し、第二位は山本孕江の4句であり、後半は36句である。昭和8年の「雑詠」は通年39句で、決して多くはない。小林きよし・山本岬人・山本孕江・藤田芳仲・三好月桃らが、この頃活躍した俳人と見られる。中でも8月号の河合都女の3句入選、10月号の山本孕江の3句入選が目すべきである。

この年は、「各地俳句会」への作品掲載が少ない時期であるので、その作品も解説も無く、その理由の考察も阿部はしてない。しかしこの年については、次のように述べている。1934年の句会は、7年、8年に続いて振るわない。そしてまた、「雑詠」入選作品も振るわない。句会が振るわない時は、「雑詠」入選作品も振るわない。多くの俳人の句作活動を支えるのは句会だ。句会が開かれなければ、句作数も少なくなり、俳人の批評・練磨の場がなくなれば、俳人も育たない。したがって「雑詠」入選作品も少なくなるという台湾俳壇の悪循環に陥っているようにも思える。だから句会を活性化すべきだと<sup>58</sup>。ここに来てまた以前

の、句会と「雑詠」投句者との関係性を述べているが、句会に入らなくても、「雑詠」に入選する人が増えてきたのではなかったのか。より詳細に調べてみたい。

台湾からの句会報告がないからだろうか、1934年1月号の「各地俳句界」に台湾と書かれた箇所に、朝鮮の雄基鞍馬会（咸北、雄基）の報告がある。これは編集者のミス記載であって、台湾の地名ではないことが、筆者の調査で分かった。「雑詠」で台湾俳人が掲載された13句中6句は山本孕江であり、その活躍のほどが知れる。

1935年の「各地俳句界」には、台湾の句会は記録されていなし、作品もない。

1936年から1945年までを概観する。

1936年『ホトトギス』「雑詠」には26句挙げられている。この年の「各地俳句界」には、6月号と10月号に「台南三和句会」の2回のみであるが、その6月号の「選後寸評」の中に、下記の「台南三和句会」への批評がある。以下、その概略である。

台湾俳人各位は、内地の自然現象に重点を置いて編まれた歳時記に拘泥することなく、台湾に於いては台湾の自然現象に季題を求め、その季題を捉へて句作すべきであると主張する所以なのでありますと言ひ、歳時記にある季題だからと言って台湾の季感と一致しないものを、強いて歳時記の解説と一致さすように詠むのは意義をなさないと指摘する。更に初心者ばかりと見えて一寸批評に困るので、台湾内に指導者を得るか、または「ゆうかり」という俳句雑誌によって勉強してほしいとも述べている<sup>59</sup>。1927年に来台の池内たけしの指導があったにも拘らず、やはり台湾俳人は、季感における日々の苦闘を、この年になっても継続しているのである。理屈では理解しても、実作の上では、表現困難などところがあるのである。そしてこの批評は、この時期の台南地方句会と「ゆうかり句会」の立ち位置を端的に表示しているのである。

次の1937年には、「雑詠」では、変わらず山本孕江が入選句43句のうち10句入選している。句会報では、7月号に台中の「竹鷄吟社」と8月号に同じく台中の「椰子の実会」が生まれている。その7月号の「竹鷄吟社」の選句評の中に、内地の風物を基礎として出来た歳時記の季題に囚われることなく、飽迄実際に即して台湾風景をそのまま詠むべきであると思う旨書かれている<sup>60</sup>。目次にこの批評者の名前はないが、1938年1月号に選者交代の上林の挨拶があるから斉藤雨意であろう。台湾から送られてくる作品が、必ずしも、台湾の実態を伝えていないことに、戸惑いをみせているのである。それについては台湾俳人も同様に台湾の実態と季感の関係性を、いかに表現するかの苦悩を味わいつつ作句しているのである。

## 2 『ホトトギス』への台湾人参入

ここから、台湾の地における台湾人による俳句について、述べたい。これは筆者の本論文で取り上げたい「台湾の台湾人による台湾人の俳句」にとって重要なポイントだからである。

阿部は1937年において、台湾人と思われる陳緑泉の1句と黄朝木の4句が入選して、注目すべき<sup>61</sup>としているが、実は筆者の調査によると、この年のみでなく、それ以前の、1928年に台北から陳武王が、29年には花蓮港から呉金城が34年には台北から陳緑泉が、その後には1938年にも、陳鎮城と黄朝木が選句されている。次はそれらの年代順の句である。



門松に螢飛び交ふ蕃社かな	陳 武王 (1928年5月号)
月見する蛇木の下でありにけり	呉 金城 (1929年2月号)
甲板や煤に汚れし霰掃く	陳 緑泉 (1934年1月号)
春草や親牛仔牛看牛児	陳 緑泉 (1937年5月号)
水車小屋壁一面の苔の花	黄 朝木 (1937年6月号)
参道の竹の春なる遺跡かな	陳 鎮城 (1938年2月号)
椰子の空月行くところただまさを	黄 朝木 (1938年4月号) <sup>62</sup>

いずれの句も、内地人と同等の「雑詠」に入選するだけの力を見せている。特に黄朝木は、1937年6月号に入選して以来、7月号・8月号・10月号と1938年にも選句されている。しかしこれら5人のうち黄朝木と呉金城以外は、「各地俳句界」に報じられるどころの俳句会にも、その名は見当たらない。まだこの時期においても、内地人と台湾人が同じ結社で句会をするのに、何らかの支障が存在したのであろうか。これほど内地人が盛んに句会し、俳句文化を移入・定着化を図っている時期に於いてである。しかし、結社に属さない俳人たちは多かったわけであるから、恐らく3人は同人としてではなく、市井にあって俳句力を磨いていたのであろう。黄朝木は「各地俳句界」において、岩方南晡が報ずる台中の「椰子の実会」に、朝木と言う2文字で投句しているので、一見、他の内地人名と錯誤しそうであるが、黄朝木と思われる。以下、その一句である。

仰向けに脚をたゝみて晝の蜘蛛 黄 朝木 (1937年6月号)<sup>63</sup>

呉金城は、後述するが、沈の前掲論文の指摘により、結社に参加していたと推測される。しかし、阿部が1937年に初めて話題にするのは、何故だろうか。台湾人の「雑詠」または俳壇参入について、あまり関心がなかったのであろうか。それとも、文芸を主眼として論じているためであろうか。

ところで、1938年5月号以降から1945年の終戦に至るまで、台湾人の名前は『ホトトギス』のどこにも見出せないように思える。しかし、実は1937年8月号・1938年4月号・同年11月号と1943年2月号の「雑詠」に、下の台湾人の作品が掲載されているのである。以下、その作品と背景である。張子鴻は東京からの投句であり、一見台湾人として見落とすところであるが、何らかの都合で、内地の東京に滞在していたと見られる。張子鴻は、3例の中の2例を示す。

退け時の彼女彼氏や梅雨近し	張 子鴻 (1937年8月号)
曼珠沙華恐ろしき程かたまりて	張 子鴻 (1938年11月号)
朝顔に白金の星大きかり	李 錦上 (1943年2月号) <sup>64</sup>

台湾人の李錦上は、三重県から投句した。李は戦後、黄霊芝主宰の「台北俳句会」の一員として活動中の俳人である。戦前から俳句をしていた会員は李錦上ひとりだけである。この句が代表作であると、李自身が句作意識調査に回答している。日本から投句というの

も、当時戦時中の日台間の移動の跡がしのばれる。張や李のこれらの作品は、阿部の18年「雑詠」の中には採られていない。それは投句地が内地の東京や三重になっていた上に、戦時中の儉約のため三段割り付けになって、かなり小さく見えにくくなっているからであろう。また、台湾からの投句と限定すれば、これ等は枠外と言えよう。筆者は、台湾人に俳句文芸が如何に波及していったかという視点から調査しているので、阿部との差異が出たのかもしれない。張の詳細は不明だが、李が地名三重として投句した事情は、李自身の語りから次の通りである。当時台湾の学生であったが、日本の三重県四日市に軍属として派遣されていた。その間に、もともと趣味で作句していたものを投句したとのことである。16歳で内地に行き、終戦前の44年に、17歳で台湾に戻っている。

また『ホトトギス』以外に、俳句を詠む台湾人の出現はかなり早い時期に、沈の前掲論文の『台湾日日新報』に掲載された事例と、筆者の調査による山本孕江が選者を務めた台湾の日本婦人向け雑誌『台湾婦人界』俳壇にも、掲載されている。

沈の前掲論文に述べる『台湾日日新報』に最初に掲載された台湾人の俳句のうち、1912年の7月掲載の呂錦城と1913年同紙掲載の呉文龍（緑堂）を挙げる。

花生挿む短夜夜風に馬鳴けり	呂 錦城
憔悴の身扱て句案ずや瀬祭忌	呉 文龍（緑堂）

呂錦城は北部の「碧潭句会」同人に送別句会を催してもらっており、呉文龍（緑堂）は南部嘉義の句会「朱樂会」に属している<sup>65</sup>としているから、句会の同人か又は繋がりを持っていたと思われる。

また山本孕江が選者となっていた『台湾婦人界』の俳壇には、日本婦人とともに、台湾婦人が数名入選している。この雑誌は、1934年から1939年にかけて発行されたもので、以下その句である。

梧桐花に空ふかく澄む夏日かな	藍 錦城（1934年10月号）
露ひめし一葉一葉や朝ごころ	王 来傳 同上
ふるさとの風災偲ふ秋の夜	黄氏寶桃（1935年2月号）
駅にゆく一筋みちや稲の花	劉氏雅頼（1935年11月号） <sup>66</sup>

王来傳と黄氏寶桃は、同誌の短歌にも選歌されており、ひとりで俳句と短歌を詠むという、現在における台湾独特の日本文芸短詩愛好者スタイルが、既にこの時期から形成されていることを示すものである。

以上3種の異なるメディアに存在する台湾人の俳句創作参入は、『ホトトギス』では1928年であり、既に1912年から少数参入している。台湾女性も少数ではあるが、1934年から詠んでおり、日本文化を吸収する意気込みを感受させるのである。

こうして台湾俳句の歴史を追う中で、日本語教育と日本文化の移入により、日本短詩文芸を嗜む台湾の人々が、徐々に増えてくる傾向を掴むことができた。今後これら台湾人の俳句歴をより詳細に調査すると、新たな戦前台湾俳壇史が見えてくるかもしれない。

もう一つまとめるならば、日本俳句結社に台湾人が少しずつ参入してきた結果、日本人

と台湾人の俳句に、傾向の違いがあるか興味のあるところであるが、筆者は、殆ど無いと判断する。比較する台湾人の作品が圧倒的に少ない上に、これまでに挙げてきた台湾人の作品を見れば分かるように、作風も題材にも内地人と殆ど差がない。特別着眼点が違うという特徴もない。

それも故あることで、台湾人で日本短詩文芸に関心のある人は、先ず、その結社に入って、日本人の詠み方を習得しようとするはずであるし、お題は大体一律に会員に出されるため、それを進展させて、台湾人として特色を出すまでには至らなかったと推察する。まして、日本に統治されている反感や悲哀を含むと勘ぐられるものはない。本章冒頭部で述べた、初めて台湾の地から『ホトトギス』に投句した日本人の俳句例には、苦力にさえ日本人統治者としての目線は表現されておらず、人間本来の視線が注がれていると筆者は感じていた。そういう俳句の神髄を、台湾人も感得していたかもしれない。

そういう意味から、特に富裕層の台湾人も内地人に対し、卑下する意識も少なく、むしろ、当時は、日本人に早く同化することが、台湾人のよりよく生きるすべであり、その嗜みの一つ俳句も、共有することを望んだであろう。これが、第二章で黄靈芝が言う、日本趣味であり、戦前で言えば被植民側根性なのである。そういう中で、台湾人の俳句は、日本人でさえ苦勞した台湾季語に悩まされ、かなり理解困難であったろうと思われるが、それにもめげず、内地人と共に作句したのであるから、その意欲と能力は、並大抵ではなかったであろう。

以上、本筋は台湾季語であるから、元に戻すが、最後に一つ付け加えるならば、次のようになる。

第二次世界大戦後、日本統治だった時代への不満を、大っぴらに発言できる時期になっても、日本語短詩文芸をする台湾の人々は、それをせず、日本語禁止令下にあっても、むしろ懐かしみ、国民党政府への抵抗として、日本語文芸をする方向へと進んだ。その理由は、後の章で逐次述べるが、その一因として、以上に述べた日本人と台湾人の結社における作句意識を醸成する交流が、日本人を快い存在として、一部の富裕層である台湾人の意識に残ったのではないだろうか。

しかし、その時期にあっても現在にあっても、なお、日本や中国とは関わりなく「政治に関わらない」ことを標榜して運営される「台北俳句会」の台湾日本語俳句について、この後、考察していくのである。

### 3 台湾俳句の有終の美

ここからまた、日本人の台湾俳句史に戻る。

1938年の「雑詠」は年間通しで、計59句である。同時に、日中戦争勃発の翌年であるためか、戦地や部隊などからの投句が増えている。「雑詠」欄はその時代を反映するものとなり、小田黒潮や長谷川素逝などの戦地の句が巻頭を占めるようになる<sup>67</sup>。「台湾など地方性を詠んだ句よりも、戦地の俳句が時代を反映するものとして有力視されてきている」<sup>68</sup>というのが阿部の評である。北満州からの投句として小田黒潮が、〇〇部隊から長谷川素逝が投句して巻頭句となるということは、時代の反映もさることながら、『ホトトギス』といえども、国家の戦時体制に、総動員させられている感も拭いきれない。また、戦場にあっ

でも、文芸を嗜む日本人の、心の豊かさと心意気に感動させられるのである。

この年の「各地俳句界」に台湾の作品はないが、これまでこの選者をしてきた齊藤雨意が辞任して、上林白草居が1月から虚子の命を受けて担当することになった挨拶を兼ねて書いている。「各地俳句界」の投稿がやや減っているのに、この欄の振興を祈念する旨述べているが、次の年の台湾からの句は、また多数選句されている。

1939年の「雑詠」では、51句が入り、そのうち久しぶり山本孕江が、10句の入選で第一位である。この年の4月号から「ハガキ句会」という名称の各地俳句会が始められている。場所や地域を指定して行われるハガキ投句による俳句会で、選句は虚子である。新結社はない。

1940年の2月号「ハガキ句会」台湾地区では、山本孕江をはじめ11人が選句されている。新結社の報告なし。

1941年の「地方俳句界」は、7月号に台北の「ゆうかり子規忌句会」と11月号に基隆の「蓬莱丸船員句会」の二句会の報告があるのみだが、「蓬莱丸船員句会」が新結社の句会である。そしてこの号では、『ホトトギス』編集上、初めて「各地俳句界」の俳句紹介を俳句毎に横配列せず、全句とも作者と共に縦に続けて掲載している。戦時中の紙面を惜しむのでことは不明であるが、台湾のみでなく、他所の俳句会も同様の記述である。それをそのまま例示・記述しておく。

“花すぎし我船に客の乗ることも 露州” “海の神秘土産話に帰省かな 風石” “うららかやブラジル丸と並び航く 洋舟” “足が出て手が出て飛びぬ蛙の子 右城” “上陸の埠頭に飛べる蜚かな 知水” “碇泊の三日はながし籐寝椅子 今城”

ところで『ホトトギス』10月号に、山本孕江はまた、「南方俳句への関心」の中で、季節について述べている。またというのは、『ホトトギス』昭和2年8月号の台湾特集の中でも、山本を含む有能な俳人たちが書いていたのだが、この号でも同様に、「台湾に在っての句作上の唯一の悩みは季の問題」として、「必ずしも内地の歳時記そのままに準拠することなく、台湾の実際の季節感に即して作句すれば別に不都合は無く、修練を積みさへすればおのづから途は開けてくると思ふ」と述べる。台湾での季の問題は、ある程度解決できるというのである。また、「ホトトギス同人の諸兄、来たりて在台俳人を啓発せられよ」と強調文字にして強力に訴えている。つまり長年台湾在住の同人にとって、「季に対する観念の影のやうに薄れてゆくことは当然考へられることで、俳句を作ろうにも感激が湧かなくなる、といふ結果に到る譯である」<sup>69</sup>としながらも、有名俳人が来台して、指導してほしいと懇願するのである。これには、山本自身がこれまでに感得した台湾季語の表現法を、地元台湾に於いて広めることへの力不足と、中央の俳人たちへの助力を要請する、悲痛なまでの思いを感受させる。ここでは、当時この地で指導者たるべき山本自身が、台湾俳壇における季の問題を進展させえない非力の述懐とも受け止められる。以上の筆者の感想は、阿部の言う「外地の指導者は句作数年の者が多いから、群を抜いた指導者がいないとか、異動が激しく会員に定着性がないから、中央の優れた俳人による指導が切望される」<sup>70</sup>という見方とは、やや異なるものである。

この年の「雑詠」の前後半合わせると、107句にものぼり、また入選句数が復活してい

る。

次に1942年の「各地俳句界」では、2月号<sup>71</sup>に「蓬萊丸句会」の1句会3句のみで、1941年に結社した「蓬萊丸船員句会」と同じ会員の露州と洋舟・今城であるから、同一句会であろう。以来敗戦まで、『ホトトギス』に台湾での句会報告は見えない。

この年の「雑詠」は121句の入選で、昭和に入って1928年が142句と1929年が124句で、それに次いで第三番目に多い入選句数である。「地方俳句会」に投句しない分をこちらへ集中的に力を傾注したのであろうか。それとも同人でない俳人が増えたと言えようか。1941年1942年と入選句を大幅に増やし、有終の美を飾った後、1943年になると、「雑詠」の入選句は急激に減って51句となり、1944年には41句と更に減るのは、戦争の激化と共に、句会どころではなく、個人で投句するゆとりさえ、ままならないということか。阿部の俳句批評はあっても減句の解釈は無い。そんな中、先に述べた台湾人李錦上は、戦時徴用の最中、1943年の2月号の「雑詠」に、三重から投句しているのであるから、多感な16歳の台湾学生が、如何に俳句に打ち込んでいたかを表明しているのである。

1945年の「雑詠」入選句は、5月号までで17句である。というのは、『ホトトギス』は6月号から9月号まで休刊となったからである。それでも、4か月休んだだけで復刊できたというのは、敗戦とその混乱期に関わらず、俳句を求め、俳句を作り続けていた作者がいたということであり、人々の心にとって、俳句はかけがえのない支えのひとつであったろうと阿部は言う。そして、下記の句をもって、敗戦までの『ホトトギス』「雑詠」の台湾俳句は終わるとしている。

機翼の燈見失ひたる星涼し

びんろう (1945年5月号)<sup>72</sup>

虚子の選句が、台湾の風光と時代特徴と言うところに主眼があったから、台湾の風光から始まり、戦争によって閉じられたというのも、当然の帰結であった<sup>73</sup>とするのは、いかにも含蓄がある。そして、この台湾花蓮港からのびんろうの俳句の並びに、スマトラ・パレンバン・ジャワ・ビルマ・マライなどの投句地があり、中には投句地を隠して〇〇としている句が7句もある。3段割り付けの小さな文字になって印刷された「雑詠」欄に、これ等の投句地が戦況を語り、その最中に俳句を詠む男たちの姿が、垣間見えるのである。

こうして虚子は『ホトトギス』によって、台湾俳人の作句苦悩を受け止めつつ、自身も台湾の風光をいかに表現させるかを、研鑽していったのではないだろうか。

おわりに

戦前の台湾俳句の変遷を、阿部誠文の『台湾俳壇史』を中心に、沈美雪の「俳句の地域性と国際化：台湾俳壇を中心に」の主張を加味しながら、筆者独自の方向性から、戦前の台湾俳壇史を概観してきた。即ち台湾俳壇史の特殊性について、特に戦前の台湾俳壇史における結社興亡の根拠と、台湾俳句史の永遠の苦闘と課題である台湾と日本（当時は内地）両地の季題の齟齬という二つの側面について、文学史ではなく、文化史的視座に強く依拠して分析してきた。

その結果、筆者は、戦前の台湾俳壇史における結社興亡は、内地から台湾に移動してきた俳句の素養のある人々が、その任地に於いて結社し、同人を集めては次の任地に転勤していくために起こる現象であるという阿部の論を、諸方法で裏書きした。更に、それら俳句結社する主要な俳人たちの移動が、台湾開発の諸産業と関わっていることをも、具体例を示して立証した。また一方、明治末期において、台湾に移住して日本人が俳句を詠むとき、台湾と日本両地における季感の差異について、苦勞した。その悩みに応えるべく、小林里平が『台湾歳時記』を編纂したことである。或いは山本孕江を代表とする大正末期から昭和10年代にかけて活躍した台湾俳人たちが、常に内地の『ホトトギス』の指導者たちとの交流と指導の中から、季題の齟齬をいかに表現するかに苦闘したことを明らかにした。そして、次章において、それは、戦後、黄靈芝の『台湾俳句歳時記』に受け継がれていったことを示すことにしよう。この台湾季題と日本季題との齟齬は、永遠の苦悩の産物であって、今日に至ってようやく、台湾人黄靈芝によって、終局的に台湾季語の集大成に繋がったと言えよう。その季語の区分は、過去日本人が思いつかなかった新しい発想に基づくものである。日本の四季に合わせるのではなく、台湾の気候に基づく斬新なカテゴリーの創設である。日本起源の俳句が、台湾の俳句として自立した証と言えよう。この書に関しては、「台北俳句会」会員の句作意識と関連させ、第二章において、小林里平が編纂した『台湾歳時記』と比較しながら述べることにする。

＜ 注 ＞

- 1 小林里平『台湾歳時記』政教社、1910年。
- 2 黄靈芝『台湾俳句歳時記』言叢社2003年。
- 3 服部烏亭『相思樹』竹風吟壇会は、「日治時期台北地区文芸期刊目録」によると、発行は台湾民報で、1904年創刊 1910年に6巻4号終刊とあるが、筆者の調査では、1916年に『終刊 相思樹』五平太号が、吉川五平太追悼特別号として刊行されている。  
本稿引用は、酒井邦之輔『相思樹』3巻11号1907年(明治40)8月号と『終刊 相思樹』五平太号による。
- 4 渡部常三郎『緑珊瑚』台北緑珊瑚会、1907年-1911年5巻2号で停刊。
- 5 島田讓二「正岡子規と渡辺香墨」『華麗島文学史:日本詩人の台湾体験』明治書院、1995年。
- 6 1897年(明治30)、正岡子規を主宰として、柳原極堂と共に松山で発行した月間俳誌。その後1898年に、21号から高浜虚子が継承し、東京に発行所を移した。
- 7 黄美娥「日治時期台北地区文芸期刊目録」台北市文献委員会、2003年、49-60頁。
- 8 『ホトトギス』1928年5月号(第31巻第8号—381号)「雑詠」1928.5.1 49頁。
- 9 『ホトトギス』1898年11月号(第3巻第2号)附30頁 台北会(台湾台北)(台北西門街2丁目38番戸林幸治郎)とある。
- 10 『ホトトギス』は課題句のみであったが、1908年から虚子によって雑詠を始められた。途中雑詠が中止されたが、4年後また再開された。
- 11 「四月十八日臨時小集。南溟に於ける我党の俳況御申上候(台北南門田貂、空鳥)」とある。  
前掲書『ホトトギス』、1901年8月号(第4巻第11号)。
- 12 阿部誠文「台湾俳壇史」(三)、俳誌『燕巢』、2000年3月号、51頁。
- 13 阿部前掲論文(四)俳誌『燕巢』、2000年4月号、39頁。
- 14 『ホトトギス』1910年1月号187頁。
- 15 沈美雪「俳句の地域化と国際化:台湾俳壇を中心に」沈美雪博士論文、2007年、51頁。
- 16 阿部前掲論文(六)、俳誌『燕巢』、2000年8月号、39頁。
- 17 渡辺香墨・堀尾空鳥・小林里平・藤井烏榎らは法院関係者である。

- 
- 18 島田前掲論文、147 頁。
- 19 軽便鉄道は、サトウキビや物を運搬するためのものであった。標準軌道の半分しかないので、五分車と呼ばれ、それが、清朝以後の日本台湾総督府により、次第に、標準の軌道に替えられて、縦貫鉄道の完成に到った。軽便鉄道は現在も、台湾に溪湖五分車など 6 箇所が存在する。
- 20 島田前掲論文、131-168 頁。
- 21 沈前掲論文、23-36 頁。
- 22 『台湾日日新報』1907 年 1 月 26 日第四面 北鳴が「台南の文芸界」を批評。同紙 1907 年 3 月 16 日第三面「日日俳壇」において、貂が『相思樹』の新選者について見解を述べている。同紙 1907 年 6 月 28 日第三面「日日俳壇」において、小奴が「趣味の朦朧」と題して、緑珊瑚納涼の課題による烏榎・枕流・空鳥の句作についての批判。同紙 1907 年 7 月 12 日第三面「日日俳壇」における小鼠の投稿「貂君獅子君」。同紙 1907 年 7 月 27 日第三面「日日俳壇」において、貉が「月並論」と題して、論評。同紙 1907 年 8 月 23 日第三面「日日俳壇」において、小奴が「貉に与ふ」と題して、貉を非難している。同紙 1907 年 9 月 10 日第三面「日日俳壇」において、雲臥道人が「寄緑珊瑚」と題して緑珊瑚を批評している。本文に記述しているが、この後に、寄稿についての編集者からの苦言がある。
- 23 『緑珊瑚』一周年記念号、緑珊瑚、1908 年、2-3 頁。
- 24 前掲書『緑珊瑚』、1908 年、55 頁。
- 25 前掲書『緑珊瑚』、1908 年、58 頁。
- 26 柳田久太郎編『終刊 相思樹』五平太号、1911 年。
- 27 阿部前掲論文「黄靈芝『台湾歳時記』を読む(五) —小林里平『台湾歳時記』との比較(一)」『燕巢』2000 年 5 月号、41 頁。
- 28 島田前掲論文、141 頁。
- 29 『台湾日日新報』1907 年 2 月 27 日、第三面。
- 30 小林前掲書、1 頁。
- 31 小林里平『台湾歳時記』政教社、1910 年、13 頁。
- 32 『台湾日日新報』1909 年 10 月 8 日、第四面、俳壇小語(百七十四)句雀翁。
- 33 web サイト[旅々台北]台湾鉄道の歴史
- 34 沈前掲論文、32 頁。
- 35 阿部前掲論文(十)、38 頁。
- 36 阿部前掲論文(十三)、34 頁。
- 37 『ホトトギス』1920 年 3 月号、62 頁と同年 10 月号、58 頁。
- 38 生蕃は、戦前の日本統治時代、台湾の高山族のうち、漢民族に同化していなかったものをさして用いた語。(しこ)は、「醜(しこ)」を語源とする説が有力である。「醜」は醜く良くないことの意味もあるが、古くは強く恐ろしいことや頑丈なことを意味したことから、生蕃と同義に使われて、(しこ)と読んでいたのであろう。
- 39 阿部前掲論文(十八)、33 頁。
- 40 阿部前掲論文(二十一)、33 頁。
- 41 阿部前掲論文(二十三)、33 頁。
- 42 阿部前掲論文(二十七)、33 頁。
- 43 沈前掲論文、68-70 頁。
- 44 阿部前掲論文(31 数字は原文通り。以下同様)、31 頁。
- 45 『ホトトギス』1920 年 10 月号、58 頁と同年 8 月号、78 頁。
- 46 阿部前掲論文(34)、32 頁。
- 47 池内たけし「台湾の旅(一)」『ホトトギス』1927 年 7 月号、66-73 頁。同(二)同年 8 月号、58-74 頁。同(三)同年 9 月号、65-76 頁。同(二)同年 8 月号、65-76 頁。
- 48 山本孕江「台湾の俳句と私」『ホトトギス』1927 年 8 月号、46-47 頁。山本岬人「台湾」同年 8 月号、48-49 頁。江副東洲の「面舵取舵」同年 8 月号、50-55 頁。大野きゆうの「偶感」同年 8 月号、56-57 頁。
- 49 『ホトトギス』1927 年 8 月号、46-47 頁。
- 50 『ホトトギス』1927 年 8 月号、75 頁。
- 51 『ホトトギス』1927 年 11 月号、51 頁。
- 52 『ホトトギス』1927 年 8 月号、47 頁。
- 53 『ホトトギス』1927 年 8 月号、49 頁。
- 54 阿部前掲論文(41)、37 頁。
- 55 今井祥子「近代俳句史の周辺で—台湾と俳句」『立教大学比較文明学紀要 境界を越えて 比較文明学の現在』第 5 号、2005 年、143 頁。

- 
- 56 阿部前掲論文 (45)、36-37 頁。
- 57 阿部前掲論文 (48)、32-33 頁。
- 58 阿部前掲論文 (66)、34 頁。
- 59 『ホトトギス』1936 年 6 月号、87 頁。
- 60 『ホトトギス』1937 年 7 月号、67 頁。
- 61 阿部前掲論文 (70)、33 頁。
- 62 『ホトトギス』陳武王 (1928 年 5 月号) 109 頁。吳金城 (1929 年 2 月号) 108 頁。陳綠泉 (1934 年 1 月号) 116 頁。陳綠泉 (1937 年 5 月) 78 頁。黃朝木 (1937 年 6 月号) 108 頁。陳鎮城 (1938 年 2 月号) 113 頁。黃朝木 (1938 年 4 月号) 285 頁。
- 63 『ホトトギス』「各地俳句界」朝木 (1937 年 6 月号) 55 頁。
- 64 『ホトトギス』張子鴻 (1937 年 8 月号) 122 頁、張子鴻 (1938 年 11 月号) 95 頁、李錦上 (1943 年 2 月号) 41 頁。
- 65 沈前掲論文、53・54 頁。
- 66 4 人の台湾人：藍錦城『台湾婦人界』1934 年 10 月号、160 頁、台中吟壇の一員として掲載。王來傳同紙 同号、163 頁、中和庄在住。黃寶桃 同紙 1935 年 2 月号、144 頁、基隆在住。劉雅頼、同紙、1935 年 11 月号、97 頁、石間在住。
- 67 北満州から小田黒潮の投句、「銃眼に蘇聯の千鳥見ゆるなる」他 3 句が、1938 年 2 月号の巻頭句、『ホトトギス』71 頁。〇〇部隊から長谷川素逝の投句、「み戦は極寒の野をおほひ征く」を含む 4 句が、1938 年 1 月号の巻頭句、『ホトトギス』97 頁。
- 68 阿部前掲論文 (83)、34 頁。
- 69 『ホトトギス』1941 年 10 月号、119-121 頁。
- 70 阿部前掲論文 (76)、37 頁。
- 71 阿部の言う 1 月号は、2 月号の誤植ではないか。
- 72 『ホトトギス』1945 年 5 月号、4 頁。
- 73 阿部前掲論文 (83)、39 頁。



## 第二章 黄靈芝の『軍民導報』と『台湾俳句歳時記』

### はじめに 本章の問題と方法

この章では、黄靈芝主宰の「台北俳句会」創設と黄の略歴を追いながら、関連する時代の変容を述べ、「政治に関わらない」ことを不文律にして運営される「台北俳句会」の深層に迫る前提部分の章とする。更に、第一章で詳述した台湾俳句における季語の悩みは、なお現在の悩みであるが、黄が如何にして解決したかを探る。

戦前の台湾俳句と「台北俳句会」の繋がりを考えてみるに、黄は、「戦前の台湾俳句は、終戦により日本人が引き上げると同時に打ち切れ、今日の台湾俳句との間の繋がりはない」<sup>1</sup>とする。確かに、個人的に繋がっていた呂鵠城や頼天河などの会員<sup>2</sup>もいるが、結社の流れとしては、どこも繋がってはいない。更に、第一章後半に述べたが、戦前から俳句を嗜んで現在もなお「台北俳句会」現役会員であるのは、李錦上ただひとりである。その李も、小学校教員として永年勤め、定年退職後しばらくの間は、「台北俳句会」の存在を知らず、趣味として俳句を詠んでいた。その間に黄靈芝は、「台北俳句会」<sup>3</sup>を1970年に創設した。しかし、李が『台北俳句集』にその名を刻んだのは1993年の巻23からで、これは1993年の2年後に発行されている。そういうわけで、李錦上との繋がりからも戦前の俳句結社とは関係性は無いのである。

黄自身が俳句や短歌を詠み始めたのは、後述の戦後1951年1月頃からで、『軍民導報』<sup>4</sup>の文芸欄への投稿がきっかけと思われる。「弱年より俳句が好きだったとはいえ、正直言って、私には句の良否がよくわからなかった」<sup>5</sup>とし、俳句を始めた具体的な記述がないので、『軍民導報』<sup>6</sup>の投稿者たちと関わり始めた頃に、本格的に詠み始めたと思われる。この『軍民導報』という新聞のコラム欄が、黄にとって作家としての重要な転機を作るのであるが、そのことと、その時代背景を知る上でも、この新聞が大きな役割を果たすことを分析する。そのために黄靈芝の著書を中心に『軍民導報』を主な分析資料とし、岡崎郁子の著書・論文と菅野敦志・森田健嗣・簡月真などの論文で補強する。

そのことの詳細については後述するが、戦前の日本語俳句結社とは関わりがない無いとは言え、黄には、戦前との最高のつながりを示すものがある。それが、『台湾俳句歳時記』<sup>7</sup>である。これは、第一章で取り上げた台湾季語に対する台湾俳句を詠む人々の苦悩を継承し、現在においてなお、台湾風土の中の季感・季語（季題）と日本の季語との齟齬に悩む「台北俳句会」会員のために、黄靈芝が精魂込めて編纂したものである。これは、かつて小林里平が編纂した『台湾歳時記』<sup>8</sup>を、新たに改善したばかりではなく、台湾人が台湾の日本語俳句を詠む台湾人のために、台湾人の主宰によって編まれたという画期的なものである。したがって、戦前の日本語俳句の季語では解決しえなかったことを、発展解決させたと言える。その意味から「台北俳句会」は、戦前の日本語俳句と季語と密接な繋がりを持っていると言えるのである。しかし、どこの俳句会とも繋がっていないことを、黄自身の台湾人独自の日本語俳句論に根差した俳句と季語を、『台湾俳句歳時記』に集約することによって、主張しようとしたのであろう。この『台湾俳句歳時記』についても、戦前の『台湾歳時記』と比較しつつ詳述する。

## 第一節 黄靈芝の略歴とその周辺

はじめに、「台北俳句会」が設立されるまでを、主宰黄靈芝の概略から辿ってみる。殆ど『台湾俳句歳時記』と『黄靈芝作品集』巻18<sup>9</sup>を資料としたが、一部、岡崎郁子著『黄靈芝物語』の「黄靈芝略年譜」<sup>10</sup>からも引用した。

黄は、俳句や短歌などの日本語短詩文芸にのみ優れているのではない。小説や彫塑にもその才能を発揮、骨董の目利きでもある。それらの才能が開花されるには、生い立ちの中に、その要因が含まれると思われる。ここでは、俳句表現と「台北俳句会」の運営方針を中心に、その関係性を探るが、他の分野とも共通するものが見えてくるのではないだろうか。特に、黄の家族関係を含む生い立ちは、「台北俳句会」の主宰として貫く「台北俳句会」の不文律に関係性を持つものと推測されるのである。その関係性は、第三章以降に詳述していく。

黄靈芝（本名黄天驥）は、1928年台湾台南市に、9人兄弟の末子として生を受ける。父は事業家で、台湾総督府評議員など多くの肩書を持つ名士であり、4千坪の敷地に大邸宅という環境の中に17歳まで育つ。1935年に、台湾各地の台湾人有力者の子弟の例にもれず、日本人子弟の通う台南の付属幼稚園から花園尋常小学校に入学した。クラスでただひとりの台湾人であった。当時の学制として日本人子弟は尋常小学校へ、台湾人子弟は公学校へ入った。

1941年台南第一中学に入学した直後、20人近くの上級生から暴行を受け、肋骨1本が折れ、一晩中血尿が止まらないという目に遭った。台湾人のくせに、日本人の中学校に入ったという理由であった。肋骨一本折れ、一晩中血尿が止まらなかった。その恐怖症から、二年次の終わる頃より1年間休学し、年を改めて三年に上がった。

1945年終戦の年、重病の母が空襲のため転々と疎開したためか、12月に死去。その間、父は、日本の憲兵にスパイの嫌疑をかけられて、大陸へ脱出して不在であった。1946年、受験資格を偽って台湾大学に入学。台北市に住む次姉夫婦宅に寄寓する。もともと小説家を志していたが、台湾大学の講義は、終戦後大陸から来た大学教授たちの異邦人の言語で行われたため、言葉の分からない授業は、時間の浪費でしかなかった。黄は、非識字者も同然であったため、さほど登校せず、言語が分からなくても務まる美術家になろうと考え直し、ある芸術家のアトリエに通い彫刻を学んだ。12月、父が大陸より帰台する。

1947年、1月父逝去。黄は4月に咯血し、療養のため大学を中退、5か月の入院生活後、台南の生家に戻って療養を続けた。そのため、体力を要する彫刻の夢は捨てた。その頃から、死をテーマにした小説「蟹」の執筆を始める<sup>11</sup>。この年、二・二八事件起こる。

1951年、前年から台北市の三兄宅に移り、『軍民導報』の文芸欄等の投稿者たちに黄が呼び掛けて、日文の文芸の会をつくった。この時期以後については、第二節に引き続き詳述する。

## 第二節 『軍民導報』と1950年代初期の社会と文化

## 1 『軍民導報』の文芸欄と黄霊芝の名もない日本文芸の仲間たち

『軍民導報』と黄との関わりとその経緯を、『台湾俳句歳時記』から要約する。

政府は公的に日本語を禁じたが、そうなると台湾人は新聞を読まなくなり、政府が何をしているのかさっぱりわからなかった。殊に山の先住民ら。そこで政府は特例として『軍民導報』と呼ぶ日本文新聞を発行した。永続はしなかったものの黄の自分史的には一つの燈を掲げてくれた新聞である。そこにささやかながら文芸欄があり、当時咯血して天井ばかり睨んでいた黄に「仲間」を贈ってくれたのだった。詩や文を投稿していた若者が数人集まることになり、黄たちは一つの文芸の会をつくった。病床にあった黄が幹事を務め、月に1回私が題を出し、または自由題で作品を私に送ってもらい、これを綴じて皆に回覧する、という方式のものであった。会には別に名称はつけていない。内容は俳句、短歌、詩、コントにわたり、漫画をよくする人もいた。総勢は当初9人だったと覚えている。のうち一人減り二人減りして最後に陳綿連、羅活萍、謝喜美と黄の4人となったが、1964年に台湾における最初の（多分）中国文自由詩社『笠』が発足した際に、陳綿連と羅活萍がそちらに加入して去り、謝喜美も故あって日本人妻だった母とともに日本に去り、実質的には会は解散した。黄は顧みて、あるいは戦後の台湾における最初の日本文による文芸（俳句を含め）の会だったのではなかろうかとも思う。少なくともその一つである<sup>12</sup>とする。

『軍民導報』が発行された経緯は、岡崎の前掲書と菅野敦志「1950年代初期台湾の中国化一『改造』と『中央化』の影響を中心に」<sup>13</sup>に詳しい。この新聞は1950年6月1日から発行され約1年半で廃刊となったが、国民党政府国防部総政治部が『台湾新生報』に業務を委託し、同紙に折り込まれて配布されたもので、12月1日から単独で販売されることになった。表裏2頁で構成された1枚の新聞であった。しかし菅野は、

1950年代には、幾つもの可能性が反共動員の名の下に現れては消えていったが、反共宣伝と動員のための『軍民導報』で一時的に復活し、『国民導報』として後に続くはずだった政府による日本語メディアも、結局は、日本語の排除による中国化の促進という台湾社会の『改造』の下で幻となってしまった。そして、『軍民導報』に設けられた文芸空間を継承できたはずの『国民導報』計画が実現を見なかったことで、当時の台湾人の日本語による表現空間は閉ざされたままとなってしまったのである<sup>14</sup>

とする。

筆者の調査によると、『軍民導報』は実際には、随筆、小説、文芸のみではなく、読書などをはじめ、人生案内、趣味、家庭、娯楽等の多くのジャンルを名づけた投稿欄が、投稿者の自由な表現の場になっていたと思われる。つまりコラム欄であった。その中でも特に、文学関係の創作を投稿する者たちに黄が声をかけて9人の文芸の会を作り、各創作を綴じて回覧し、読み合ったのであろう。この会でも、コントや漫画をする人がいたのであるから、『軍民導報』の文芸欄は、その時期の文化の一面を表現するものと言ってよいであろう。黄は9人のうち陳綿連、羅活萍、謝喜美の3人の名前を挙げているが、後の6人は誰なのか分からない。そこで更に、『軍民導報』を詳細に探る。

『軍民導報』の文芸（コラム）欄が出来たのは、1950年6月1日の創刊から7か月余り経った1951年1月14日からで、ジャンル記載なしで「趣味を鑑賞する」という題の投稿者、一言居士から始まっている。15日は「明るい家庭は?」として月下老人、16日は「読書への道」として伊曲北、18日は随筆のジャンル名で、「一攫千金の夢」と題し、無言居士のペンネームで投稿している。このように、以後、翌年の3月28日までの文学創作関係を見ても、随筆「夜の巷を行く」の夢遊病者（1951.1.25）、同「紫煙党の弁」の曲北（1951.2.22以下、曲北の随筆には「拳闘家の“寿命”」1951.3.8、「若い娘さんに」1951.3.22の投稿あり）、同「陋習を打破せよ」の独身者（1951.2.1）、同「“パパお帰り”」の張健（1951.3.28）があり、文芸というジャンル名で、「わたしの良妻賢母親」の曲新（1951.1.24）、同「年を送る言葉」の阿片老人（1951.1.31）、同「砂上に楼閣築く」の巡礼者（1951.2.14）、同「晩年のショウ様」の曲北（1951.2.21以下、曲北には文芸に「奈翁の文学趣味」1951.2.28、「ジョージ四世のラブ・ロマンス」1951.3.7、「読書狂の天国」1951.3.21等がある。）、同「芸術心と本省作家」楊三郎（1951.3.26）の投稿者名に見られるように、全てペンネームを使っているため、黄靈芝の挙げている名のない文芸の会の残り3人が、いずれにあたるのか分からない。また、このペンネームの投稿者は、随筆・文芸のみならず、読書欄にも書き、その読書欄には、雪夫が4回も投稿しており、人生案内には、煩惱生、小天狗が、娯楽にはY・R・生が3度も顔を出している。その他趣味や家庭欄においても、ジグザグ生、妄信者、新入生、久米仙人、お玉杓子、美容師、カメラ狂など、本名はひとりもない。

そのことから、創作意欲のある者たちは、ペンネームによって自由な創作を楽しんでいたと思われる。そこにはまた、文章の端々に政府の御咎めがあっても、本人がばれない安全策をも感じ取らせる。何故ならば、政府機関が発行しているとは言え、日本統治時代の一切を排除するためのメディアにおける日本語禁止令が、1946年10月から出ているのである。したがって、日文で何を書いてもいいわけではなかったであろう。黄の前掲書<sup>15</sup>によってまとめると、黄は、「句会に赴く時、私は短刀を1本鞆に入れていた。鬪り者にされたくなかったし、会員の誰彼に手を出す者がいたら飛びかかるつもりだった。芸術に国境ごときけつたいなるものは存在しない。理不尽を私は許さない、ちなみにこの短刀は今も私の枕元にある」と述べる。そしてそのことについて、「大袈裟と言うことばがあった様だ。でも台湾とはこのように、いつ靈魂を土足で踏みにじられるか分からない一期をもつ。したがって宣伝することは出来ず、多くは会員が知友を紹介するに止どまった。嘘ではない台湾の戦後文芸の一齣である。少なくとももし台湾人が『……信長の首打ち落とす』などと書いていたら、終身刑は必定であった」<sup>16</sup>と述べる。この文章は初め、1998年発行の『台北俳句集』巻25の「あとがき—戦後の台湾俳句」に書かれたもので、戒厳令が解けてから12年の歳月が流れた後であったから、黄が「台北俳句会」主宰として、やっと表現できる時が来たのであろう。

更に付け加えるならば、黄は「あとがき」に「ありげな問題のいくつか—国際交流での一」と題して、次のように述べる。戦後台湾へ渡ってきた人たちは、中共との戦いに敗れ、国土を置き捨てて台湾に奔ったのであり、戦に敗れた理由としてその前にあった日本との戦争を挙げる。日本に亡国の恨みを持つ人々にとって、日本語で俳句や小説を書いている黄のことを、批評家が「日本人の糞を食べて生きている男だ」と書くことは、「彼らの傷の深さがわかるというものである」<sup>17</sup>と表現する。この俳句集が1994年に出版したものであ

っても、政府側に立つ批評家たちの言い分を受諾する表現を取らざるを得ない、黄の政治的配慮を感じるのである。

また話を元に戻すと、岡崎の前掲書には、掲載日を特定せず、短編小説では久美、酔月、心田、千武、連欣を挙げ、随筆は、錦連の他姓名不詳者4人、詩は陳子雄、羅活萍、黄靈芝、黄世雄を上げ、「ほとんどが筆名を使用していることと、作家や文学者とは限らないこともあって、作者の本名や詳細は不明な点が多いが」<sup>18</sup>として、陳子雄は陳武雄、錦連は陳金連、羅活萍はのちの羅浪等、一部の本名を挙げている。また、随筆について、掲載日を挙げて、筆者と同じ無言居士、曲新、夢遊病者、曲北、張健らの作品も追加している。この張健は、岡崎によると、元、日文新聞の記者で文芸欄の仕事をしており、戦後になってこの『軍民導報』の文芸欄の編集に携わり、投稿者の作品について短評なども書いていたが、投稿者たちのうち張に会ったのは、ごく少数だったらしい<sup>19</sup>。これらの人も残りの6人に入るか否かは、黄靈芝も書いていないから、黄にとってそのことは、重要ではないのであろう。

ところが、このコラム欄が出来てからしばらくして、『軍民導報』本紙そのものが発行から約一年後<sup>20</sup>には停刊し、継承されるはずの予定紙の『國民導報』にも引き継がれないまま12月1日に暫定停刊し、そのまま廃刊となった。菅野によると、『軍民導報』の発行継続については、賛否両論闘わされたが、毎日一万部あまりを発行していたための財政面と、『國民導報』の文字は国文を徐々に増加させ、2年間のうちにその使命を達成するものとして停刊出来ると計画されていたため<sup>21</sup>などが主な理由と述べている。

岡崎と筆者の調査からは、『軍民導報』紙上で俳句、短歌などの投稿は見出していないが、黄が呼び掛けてつくった文芸の会では、そのジャンルの作品も回覧されたのであろう。しかし筆者は、それらの綴りは未だ見てはいない。

いずれにしても、国民党政府が、反共政策のため国文（中国語）を解さない台湾人に、日文による『軍民導報』新聞を発行し、文芸や読書欄に投稿者を募ったことが契機となって、結核の病床にあった黄靈芝に生きがいを与えた。岡崎によると回覧した綴りには、作品に対する黄の批評も加えていたらしい。したがって黄は、呼びかけによって出来た日文による文芸の会は、戦後台湾における最初の日文文芸の会であったと誇りに思っているのである。

更にこの参照箇所の後には、戦後の日文禁止令以後の日文から中文へと流れていく文学作家たちの動向と時代の変化が伺えるのである。そのことに関連して、序章と第三章に詳述しているが、1964年に、『台湾文芸』と『笠』の二つの文学雑誌が創刊されていた。これら両雑誌共、当時日本語禁止令下において国語（北京語）を創作言語とし、70年代以降の文学作品に基礎的影響を与え、次代の後継者育成に多大な貢献をした雑誌である。これに対して、『台北歌壇』『台北俳句集』は、日本語による日本伝統文芸の短詩雑誌であるから、国民党政権下の日本語禁止令下の雑誌としては、前記2雑誌とは対峙した関係にあったのである。その『笠』に陳綿連と羅活萍が加入して、名前のない黄の文芸の会から去ったとあるから、年度の特定はできないが、1951年『軍民導報』停刊以後にその会が発足したのものとして、約10年あまり続いたことになる。だが、明記するものは無い。

いずれにせよこの時期は、国民党政府の国語化政策に沿って移行せざるを得ない時期の真只中であつたと言えよう。事実、その後「台北歌壇」を創設する呉濁流も「台北俳句

会」を創る黄霊芝も、『台湾文芸』と『笠』の2誌に投稿しているのである。それは当時の文学者たちの必須の変化とも言える。しかしその後、呉濁流も黄霊芝も日文の短歌・俳句の会を創設、黄は2010年に至るまで、俳句に限らず他の文学、小説等については、一貫して日文の創作を続けている。

## 2 『軍民導報』の役割とコラム欄

更に、『軍民導報』が担っていた政府の反共抗ソ等の政策徹底の役割は、約1年半の暫定的な措置として区切りをつけ、「社会教育からみる1950年代の戦後台湾国語普及について」<sup>22</sup>の台湾成人の「国語」補修教育の強化などにみられるように、他の方策に移行されて役目を終えることになった。森田の前掲論文によると、台湾成人の「国語」補修教育の強化を目的として、1951年の2月から「分年完成失学民衆補習教育五年普及計画」が開始され、台湾全省の失学民衆の調査に着手し、同時に非識字者一掃計画と国語推進工作を進めたが、実際には1955年に完了せず、1959年まで延長され完了することになった<sup>23</sup>とある。ちょうど『軍民導報』は12月に停刊したが、その年の2月からこの計画が実施されたことは、時期として符合する。したがって当然、この文芸欄に楽しみを見出していた投稿者たちの心情とは、無関係の停刊だったのである。

ところで、『軍民導報』紙面の文芸・コラム欄以外に目を向けてみよう。前記の文芸・コラム欄は、大体第二面最下部の広告欄の上あたりに位置している。

例えば、1951年3月8日の文芸欄は、曲北の随筆「拳闘家の“寿命”」であるが、その左横側には「共匪のスパイ一箇吉銃殺さる」という見出しの記事がある。この曲北の随筆「拳闘家の“寿命”」は、欧米のボクサーたちの舞台事情について述べた趣味的なものであるが、その傍に、台湾政府が起こした二・二八事件から間もないその当時の情勢を彷彿とさせる記事がある。それを横目にしながら、文芸欄の投稿者たちは、この欄を楽しんでいたのであろうか。わざわざ傍らにこの見出しを持ってくるというのも、政府の意図である反共抗ソの方針が貫徹されていることが明らかである。共匪のスパイなどと嫌疑をかけられた人々の中には、知識人も多かったわけであるから、この割り付けによって、投稿者の物書きたちに反共抗ソのプロパガンダを意識させる意図があるのは自明である。黄霊芝は投稿者のひとりとして、この欄を利用していたのであろうが、その時の心境を述べた記録は見出せない。

更に上半面冒頭に「第14回婦女節一けふ盛大な慶祝会—蔣婦人の親臨を仰いで」として、日本統治時代の婦人会の組織をそのまま踏襲している様子が伺え、更に「血書で忠誠を誓う—総統復職慶祝に絡む佳話」として、血書で誓ったという記事である。日本語禁止令を出し、中国語（北京語）を国語として普及させるために計画進行中であるにも拘らず、社会や慣習はそのまま踏襲している様子が、この『軍民導報』紙面の見出しからつぶさに読み取れるのである。血書なる伝統的日本の慣習様式が、台湾軍人に最高の決意表明として顕示されているのである。恐らくこれら軍人は国民党政府軍人であるはずだが、「そのことは居合わせた民衆代表をいたく感激させ、云々」と表現するなど、当然の台湾の風習のごとく載せている。国民党政府軍人がなぜ「日本流」の血書を採用したのか、日本軍と同じような強硬姿勢で人民に臨む姿勢を示したのではないだろうか。日本文化、精神主義的な

文化を国民党政府が流用したと思われる。

また、血書の見出しの記事の上に、「山地同胞に国語普及一民政庁で具体的草案」の見出し記事が載っている。森田の前掲論文には、台湾全省に対する政府の「失学民衆（無識字の人々）教育」を推し進めた経過が述べられているが、1951年の3月8日のこの『軍民導報』第二面のこの記事は、着々と実施に移されている「五年普及計画」を裏書きしているのである。そして、簡月真の「共通語として生きる台湾日本語の姿」<sup>24</sup>によると、特に台湾山間地では、日本植民地時代にもたらされた日本語は、半世紀以上にわたって日本社会との交流が絶たれたまま、限られた場面では、公用語つまり北京語をあまり話せない高年齢層が、日本語を使って同世代との間で意思疎通を図っていると述べている。そのことは裏を返せば、山地の多種民族たちの日本語教育はかなり徹底してなされており、それをひっくり返して北京語に教育し直すには、よほどの覚悟と期間が必要であっただろう。だから、五年計画もその後4年も計画延長を要したのであろう。

これらの見出しから、日本語をメディアから禁止しながらも、日本語使用のメディア『軍民導報』によって反共抗ソの国威発揚の政策徹底を図ろうとし、日本残滓の風習を尊重するなど、台湾の強権的な支配のために、日本文化を流用せざるをえなかった国民党政府の矛盾した苦肉の策が、感じ取られるのである。

更に反共抗ソの例を挙げると、1951年3月22日の文芸欄は曲北の随筆「若い娘さんに」であるが、上半面には「反共抗ソへ—在米華僑も努力」「反共美術展—搬入を開始」「反（中共の）暴行運動に農民も呼応」等が、また、1951年3月26日の文芸欄は楊三郎の「芸術心と本省作家」であるが、上半面には「狭義な構想捨て美術も反共抗ソ—程部長記念大会で挨拶」の見出しが躍るといふ具合に、美術展も農業も全て反共抗ソ一色のプロパガンダ紙である。第二次世界大戦中での、日本の新聞の見出しに通じるものがある。

以上、『軍民導報』第二面のただ1頁に内包される見出し分析から、当時の社会情勢を推察すると、支配勢力の交代による矛盾と混乱に満ちた政策の中に、日本語に慣れ親しんできた台湾人の物書きたちの、時勢に無頓着に、そしてその態度はやや抵抗的に読者に映りつつ、上半面の見出しとは隔絶世界を創出しているのである。特に1951年3月26日の文芸欄は楊三郎の「芸術心と本省作家」であるが、その最後に編集部からの「お断り」の小さな欄があり、「昨二十五日は美術節であり、それに因んだ文を載せる為、本日の家庭欄を文芸欄に置き換へました。ご諒承を願ひます。」（原文通り）と告げ、「狭義な構想捨て美術も反共抗ソ—程部長記念大会で挨拶」の記事に対抗するような内容である。つまり、本省芸術家の本来あるべき姿や過去日本で学んだ芸術家や作家たちは、本道や純芸術に生きてきたなどと言っているのである。この欄の編集者が張健であったからであろうか、臨機応変に投稿を差し替えていたのであろう。政府当局は、このような文芸欄には、あまり監視の比重を置かなかつたのであろうか。物書きたちのささやかな抵抗を見る思いである。

更に言えば、婦人節、青年節、芸術節など3月の1か月間だけでも何々節というのが多々あり、その行事など催されているのが、各々の見出しに現れている。良くも悪くも日本統治時代の陰影を色濃く映し出しながら、プロパガンダ紙『軍民導報』は存在し、その第二面の文芸欄等に寄せられた投稿作品は、上半面の反共抗ソの記事とは別個の、独自の空間を表現するために編集されていたと言えよう。それら投稿者のひとりが、黄靈芝であったのである。しかし筆者は、黄靈芝の俳句はもちろんのこと、投稿作品を見出しではない。

岡崎の前掲書には、掲載日は特定してないが、『軍民導報』の文芸欄から黄霊芝の詩「自殺」のタイトル名のみ挙げ、これが『黄霊芝作品集』巻2に含まれる詩「自殺」という作品に当たるとして、全文を掲載しているが、ここでは取り上げない。恐らくこの詩を書いた1951年（満23歳）頃は、黄霊芝の言う「『軍民導報』にささやかながら文芸欄があり、当時啜血して天井ばかり睨んでいた」頃であったから、黄霊芝が生きることに最も苦しんだときの体験を、詩に綴ったものと思われる。そしてその文芸欄は、投稿者たちである「仲間」と繋がる契機になり、時期的に符号する。その後、名も無い日文による文芸の会を立ち上げたから、『軍民導報』の文芸欄は真の意味で、黄にとっての生きがいとなったのであろう。

更に岡崎の前掲書には、短編小説や随筆などの文学を中心に持ち上げて書いているが、実は文芸のみではない。まとめると、1951年1月13日に、今後読書欄、文芸欄、随筆欄を設けるとの記事が見えることから、創作の発表はその日以降ということになるとの内容は、<sup>25</sup>筆者の調査によると、確かに次の日の1月14日から趣味や家庭などのコラムから始まっている。つまり、文芸欄というより、いわゆるコラム欄として設けられたものであることが分かる。その日以前の『軍民導報』には、全くそのような欄は無いのである。

したがってこの新聞は、当時の政治・社会情勢を知る上で日文しか読めなかった人々に、重要な役割を担ったプロパガンダ紙であった。特に1951年1月13日までには無かったコラム欄を設定することにより、人々のこの欄への関心を買いつつ、一方で政府の政策に関心を向けさせ、プロパガンダに利用しようとしていたのである。投稿者たちは利用されようがされまいが、構わず自分達独自のコラム空間を繰り広げて、生きがいの一つにしていたのである。そのため、『軍民導報』の持つ意味は大きいと言えよう。そして、この小さいコラム欄は、当時のある文化の一面を現出しているとする。筆者は岡崎の文学を中心とした分析とは別の政治・社会・文化的視点から、この『軍民導報』のコラム欄の役割と黄との関係性を考察した点において、新たな分野を進展させたと思う。

### 第三節 戦後の日本俳句会との関わり

ここから黄の略歴のうち、戦後の日本俳句会との関わりに移る。

1953年（25歳）に結婚、1954年に長女、1956年に次女が生まれる。黄の『台湾俳句歳時記』<sup>26</sup>を中心にまとめる。

1956年に、黄は、日本大使館員や商社の日本人が集まって設立した俳句会「台北相思樹会」<sup>27</sup>に誘われて会員となる。これには、1952年日華条約締結により、日本と中華民国政府との国交が樹立され、台湾に日本大使館が置かれた背景がある。（以下、その箇所の概要である。）その時は、卸任帰国した主宰下村氏に代わって「馬酔木」の会員の竹下宏氏が指導し、台湾人は黄と許玉燕（書家）2人であった。

あるときその会合に招かれた客人は、『雲母』の同人である亀岡嶽水であった。その縁で黄は『雲母』を購読、投句した句は、最初から二句選に入るなどよい作品とされたが、すぐに一句選に落ち、「俳句とは何か」という大問題にぶち当たっていた時代であった。それよりもその頃に日本人は中国大陸に興味を持ち始め、出国訪問や交流が盛んとなり、俳句誌にもその記事が載ったりした。このことがひたすら反攻大陸を念願し、戒厳令を布きつ



ばなしにしている民国政府の怒りを買ひ、政治とは関わりのない大切な『雲母』誌はしばしば没収され、届かなくなり、黄は余儀なく『雲母』を去った。これは小説の面で私淑していた平野謙、本多秋五、山本整ら諸氏の拠る『群像』誌から離れたのと同じ、『文学界』も同じであった。

一方、「台北相思樹会」も会員などの帰国など、そして吉村幹事の帰国が機となって解散した。こうして黄は、蛙は元の蛙に戻り、かの天守閣を再び守り始めたと表現する。そういう訳で、黄の日本俳壇についての知識や了解には断層があり、年度的に多くの無知を持つと言う。

以上のことを例に、黄靈芝作品集を自費出版したとき、27年前に亡くなった松本たかしに贈ったというくだりを添えて、日本俳壇との関わりを述べている。日本俳壇に対する黄のとんちんかんぶりは、日本俳壇の台湾に対するとんちんかんぶりと二様は無いとも、釘をさす。

以上が黄の自分史概略であるが、戦前の俳句結社とは繋がらなくとも、戦後の俳句会とは多少の関わりはあることが分かる。しかし、『雲母』に関わりながら「俳句とは何か」を大問題としていたこと、日台国交の断絶による俳句会からの脱退など、理由はいろいろ述べてはいるが、日本と台湾の俳壇と俳句の差異を、実感していた頃である。もともとこの文章が書かれたのは、1998年出版の『台北俳句集』巻25の「あとがき」であり、その巻末には多くの台湾季語を載せている。さらに、その前年1997年出版の『台北俳句集』巻24の「あとがき」には、「台湾歳時記と台湾季語」について相当の頁を割き、季の認定から具体的な季語の例などに、詳細な分析を加えている。このことについては後に述べるが、台湾俳句についての黄靈芝の主義主張は、日本の「歳時記」に根差したものではないことを述べているのである。日台国交断絶があろうとなかろうと、黄が台湾俳句に求めているものは、日本人の俳句ではないところに感じられ、黄なりの独自性を表しているように思われる。

#### 第四節 「台北俳句会」の創設

また黄靈芝の略歴に戻る。

1957年に2回目の喀血。1962年にフランスで開催の第二回巴里国際青年芸術展で、彫塑「盲女」入選。1963年に3回目の大喀血、手術のため日本への渡航申請をするも、政府の許可がおりなかったため、一切の治療を放棄して陽明山に転居、果樹園などの重労働に従事する。1965年に台湾美術協会員になる。1968年(40歳)に「台北歌壇」の会員となる。日文中編小説「蟹」を中文に直し、『台湾文芸』に発表、2年後に第一回呉濁流文学奨<sup>28</sup>を受賞する。そうしていよいよ、「台北俳句会」誕生の経緯である。以下、黄自身の原文からまとめる。

呉濁流文学奨受賞した縁で誘われ、1968年呉建堂主宰の日本短歌の会「台北短歌会」に入会した。翌年1970年の夏に第三回アジア・ペンクラブの会議が台北で挙行され、日本から川端康成氏を団長に中河与一(作家)、五島茂夫妻(短歌)、東早苗(俳句)ほか文芸や学術関係者が来台した。当時の戒厳令下でのこの種の国歌的行事は常に政府の御用作家が

優先して招かれたから、その行事のあとに黄たちの「台北歌壇」が内々に招き、翌々日だったかに黄が命じられて故郷の、小さいながら台湾の古都台南へ案内した。その汽車の中で台湾にも俳句の会がほしいという話が湧き、帰北のあと俳句の連座をした。これが「台北俳句会」の発足である。実質的には会員が全島に跨り、「台湾俳句会」であるべきだったが、当時「台湾」の2字には反国思想の嫌疑が実しやかにかけられやすかったため、殊更にこれを避けたのだった<sup>29</sup>と言う。

こうして1970年に「台北俳句会」は創設された。会員は「台北短歌会」の会員の殆どが、そのまま「台北俳句会」の会員になった。このときが、日文短詩文芸をする会員たちの、独特の嗜み方の始まりであろう。つまり日本とは異なり、ひとりで短歌も俳句も両方詠む方式をとったのである。それはやがて、「台北川柳会」が設立されると川柳も合わせて詠む人が現れ、一人三役という台湾独特の日文短詩文芸の嗜み方式が定着していったのである。

同じく俳句会の創設について、「台北短歌会」主宰呉建堂（孤蓬万里）が述べているものをまとめると以下ようになる。

黄は俳句の素養が高く、筆者との間にチャンスを見て「台北俳句会」を独立させる話が早くから交わされていたが、この車中で東早苗の勧めもあって決心がつく。台北に戻ったあと、第一回目の俳句会が「台北歌壇」の主宰で行われた。初めの頃は俳句も『台北歌壇』誌上で発表していたが、1988年から独立してパンフレットを出した。日本では歌句を一緒にやる人は、二兎を追うものとして嫌われる傾向がある。しかし我々台湾人にとっては、どちらも外国文学であり、未熟ながら同時にやっっていこうと、約8割が両方に顔を出している。月の第2日曜に句会が行われ、黄靈芝が主幹、頼天河と陳錫恭が編集委員、第4日曜に歌会が行われ、呉建堂が主幹、陳継森と傅彩澄が編集委員である<sup>30</sup>とする。

台北短歌会主宰が述べるように、それぞれの会合に、同じ会員たちが参加したのである。1988年に俳句会独立のパンフレットを出したと呉建堂は書いているが、筆者の調査では、俳句会の第一回の創刊号は、中華民国60年度の『台北俳句集』1として1971年10月10日発行になっている。この創刊号と呉建堂の言うパンフレットが同一のものか否かは分からないが、筆者は手元にある創刊から現在に至るまでコピーを含む欠番なしの『台北俳句集』1の創刊号が、独立した最初の号と捉えて今後も述べていく。1988年というのは、その根拠が分からない。

筆者の調査によると、その時俳句を寄せた会員は25人である。その人数で発足した俳句会は、徐々に会員を増やし、巻10ではその倍以上の57人に成長し、巻14から巻23までは平均67人の会員を擁していた。全盛期の1980年後半発行の巻16、巻18には最高の73人が俳句を載せている。この人数は、創刊から巻39までの俳句集に俳句を掲載されている人達のみであるから、それ以外の会員もいるはずである。黄がこのことについて15周年を迎えた『台北俳句集』巻15の「あとがき」に、「15年間に集まった同好者は186人を数えるが、今はその半数たらずが残っているに過ぎない」として、呉濁流をはじめ6人の会員を亡くしたことを、とり返しのつかない思い出<sup>31</sup>と述べている。巻24以後の掲載者は徐々に減ってはいるが、それは、老齢により鬼籍に入った人たちが大半を占めると思われる。ただし、黄が「とまれ台北俳句会は本年（1998）7月をもって満28周年を迎える。山を登ってから山を下りるように、老齢のもと、いくら水盃はとらぬと約束し合っても、駄々っ

子には困り果ててしまうさまに、会員の数は百単位からゼロへと歩む。こんちきしょうめ、何か折檻の法はないものか<sup>32</sup>と悔しがる様に、会員減少の辛さを見るのである。筆者がこの論文を手掛けた時から現在まで、多大の協力を惜しまなかった幾人かの人々が、既に他界している。それでは新入会員はどうかと言えば、入会者を増やすのはなかなか困難のようである。しかしながら、2009年発行の巻39には50人の会員が掲載されており、2010年に『台北俳句会40周年記念集』を発行している。

現在は、「台北俳句会」では若者である事務方の朴青春氏によって、俳句や川柳(第1日曜日)の月例会がインターネットで配信されている。現在はネットによって句会も成立する時代となり、句会に不参加の会員にも月例会の様子が詳細に分かるようになって来ている。会員の訃報もこの会報で知らされる。月例会報には、その月の台湾季題がカラー写真入りで説明されており、さながら黄靈芝の『台湾俳句歳時記』のネット版というところである。つまり、黄の『台湾俳句歳時記』をネットに載せて、会員の台湾俳句における季題を浸透させる戦略と見える。その季題を詠んだ過去の会員の俳句も、同時に載せているところがいい。7月の会報の季題は「亭仔脚(ティンアーカア)」である。その説明と会員が過去に詠んだ句が8人分挙げてある。これは、黄の『台湾俳句歳時記』86頁にある季題の説明と俳句である。

また、「台北俳句会」の「台北」の読みも、「タイホク」と「タイペイ」の二通りが、何の支障もなく混用されている。「タイホク」は戦前の日本語教育を受けた世代で、「タイペイ」は朴青春氏が日本語を勉強している際には、日本語の先生はタイペイと発音しており、戦後日本は外国の都市・地名が自国の発音に沿って話すようになったからとのことである。ここにも、「台北俳句会」構成員の長い歴史と変動が、顕示されているようである。

次の節で、黄靈芝の『台湾俳句歳時記』について述べるが、その前に、黄の略歴を追加しておく。

1971年1月に、『黄靈芝作品集』巻1を、10月に同じく巻2を自費出版する。同月に『台北俳句集』創刊号発行。『黄靈芝作品集』は、主に1972年以降の各年度の『台北俳句集』に載せた「はじめに」と「あとがき」を集約したものである。以来『黄靈芝作品集』と『台北俳句集』は今日まで継続刊行されている。また、俳句に限らず短歌も発表、「蟹」はもとより数々の中篇小説や随筆・評論・論文など、枚挙にいとまがない。

そして1990年に、日文の「台湾歳時記」を俳誌『燕巢』<sup>33</sup>1月号より連載開始する。「台湾歳時記」は総集編を『台湾俳句歳時記』と改名し、2003年に発行して、黄の永年温めてきた台湾季語(季題)の独自の区分で構成した歳時記を、頑強に立ちはだかる日本の歳時記に対峙させたのである。

## 第五節 黄靈芝の『台湾俳句歳時記』

### 1 『台湾俳句歳時記』の発刊まで

1990年に、日文の「台湾歳時記」を俳誌『燕巢』1月号から連載開始することになった経緯を、黄の集大成『台湾俳句歳時記』「台湾歳時記と台湾季語」から一部を引用しつつま

とめる。原文は、黄霊芝らしい軽妙洒脱な文章であるから、全原文そのまま載せたいが、紙幅の都合で一部割愛する。

俳誌『燕巢』の人々が1989年に「台北俳句会」を訪問した折、主宰羽田岳水が戦前台湾中部で教鞭を取っていた縁もあって、ぜひとも「台湾歳時記」を編みたい旨話があった。黄は、

『台湾歳時記』については何時か書かねばならない義務のようなものを、私は随分と前から心のどこかに端折っていた。戦前の日本領時代から受け継いだ文芸の一ジャンルとしての俳句—日本文であろうと中国文であろうと—文芸的または文化的意味合いを肯定するためにも、または二十数年にわたった、かなり困難な運営による台北俳句会およびそこで励んでこられた幾多の俳句会員たちへの責任からも、いずれは書かねばならない一本ではあった。

事実上、この時を遡る20年ほど前に、「台湾歳時記」的一書に関わったことがある。東京の東邦出版社が企画した民族学的色彩の濃い本であったが、歳時記的性格をも兼ね持っていた。台湾における漢人のうちの福建族についての催事を私が書き、客家(広東族)については吉原弥生女史(中央研究院民俗学研究所の王崧興博士夫人)が執筆された。大判の原色版の写真275枚を収め、タテ37センチ、ヨコ30センチの堂々たる本であったが、装丁の終わった段階で、民国政府当局から国策に悖るものとして発売禁止令を受け、紙屑として世を去った(台湾で印刷したのが、間違いのもとであった。省みて「亡び去った」一書だと思ふ)<sup>34</sup>。

と悔いている。

筆者が最初にこの『台湾俳句歳時記』(「台湾歳時記」)を手にしたとき、発行所が台湾でなく、日本の言叢社であることを訝しく思ったのだが、この本が2003年の発刊で、いかに民進党政権に代わった時期とはいえ、黄らしい細心の注意を払った措置だったのである。そしてそれはまた、同じ轍を踏むことになるのではないかと逡巡した結果だったのだろう。

上記まとめの末尾( )部分の「台湾で印刷したのが、間違いのもとであった」と「省みて『亡び去った』一書だと思ふ」とは、『燕巢』の1996年10月号(『燕巢』創立40周年記念号原載)時にはなくて、「台湾で印刷したのが、間違いのもとであった」は、2000年発行の『黄霊芝作品集』巻18の掲載分に加筆されている箇所である。原色版の写真275枚を収め、縦37センチ、横30センチの堂々たる本であったものが、それを編むまでの苦労も包含して、台湾民族の思想牽制が発禁という形で下されたことに、黄の抑圧された憤りを見るのである。しかし、言わずにはいられない黄なりの抵抗の一行であり、2000年に民進党が国民党政権を倒したことが、ここでは後押しとなったかもしれない。そして、「省みて『亡び去った』一書だと思ふ」というやや諦観気味で冷静な表現は、2003年のこの『台湾俳句歳時記』においてである。黄は、強烈に怒りを表現すれば、再度発禁を食う危惧を、国民党政権になっても感じている。だがこの口惜しさは、何らかの方法で知らせたいという、黄ならではの感情吐露と捉える。如何に政権交代という時期が到来しても、黄らしい、段階を追った慎重な怒りの表現であろう。

「そんな苦い経験もあったし、40数年にわたった強権統治のもとでの人民がかちえた処

世術とは、鼯が奏でる音楽以外に醍醐味がないことも、地団駄を踏んでまでして諦めて去った人々への哀悼にせよ共感にせよ、道は一本しかないのかもしれないかもしれなかった。私は同じ愚を繰り返すのであろうか<sup>35</sup>と、「台湾歳時記」を連載するにあたって14個もの克服すべき問題点を列挙して、この大事業に取り掛かったのであった。

その問題点の主なものを、簡略に書き上げる。

(1) 寿命。歳時記を書くとしたら数年はかかるから、病弱な黄にやり遂げられるか。(4) 季の認定は難しい。北海道石狩で大根を9月1日に播くとすると、台湾では11月になって播くとなるので、暦の権威と詩が感性を得て誕生するという一派で争いが起こる。台湾内に於いても、北部・中部・南部でも差がある。(5) 季語には奇妙な分野がある。「桜」だけで「桜の花」まで含まれ、桃には「桃の実」と「桃の花」が二種類ある。その区別はつきにくい。その実、感性はそれぞれ異なる。榕樹（ガジュマル）はその名を聞いただけで、黄には深い緑陰が感じられ、一扇をもって憩う老叟が見えて、夏に尽きると考えるが、日本ではそこまで考えられないであろう。(6) 地方性の問題がある。面積にして九州よりやや小さい島であるが、世界の民族学者の中には「台湾ほど広いところは稀だ」と言う。北部南部の自然現象の違いから、言語や文化の異なる原住民や移住定着した台湾人など多様。(7) (8) (9) は、発音の問題で、北部南部の違いと台湾語の読み言葉と話し言葉の差異と北京語での読みの違い、そして日本語表記した台湾語は、正確には伝えられない。

(11) 次は植民地根性だ。といて叱られるならば「日本趣味」と言い直してもよい。たとえば鯖。ゴマサバにせよマサバにせよ、台湾の伝統文化における彼の地位はほぼ下郎か猫の餌にすぎなかった。腥しい安価だからでもある。が今日、「紀の鯖火土佐の鯖火と焚きそめぬ」「秋鯖のずしりとおもしたなごころ」などに、すでに口中、泉の湧きて溢るの士、多分、少なくないらしい。これが今日の台湾の一樣相だったとしたら、いったい鯖は旨いのか旨くないのか、どう書けばよいのかわからなくなる。このことは鯛といえど何だか目出度くなり、赤棕（チャツァン）といえど何だか食欲がなくなるのに似ている<sup>36</sup>。

など、黄の悩みはつきなかったが、1989年12月号の『燕巢』に「台湾歳時記」の発足が告げられて最早取り消されなくなったと言う。以来この文章を書いた時点までで6年有余、全稿掲載を終えるのに9年余りかかった。病気がちの黄霊芝にとって、一大事業である。

そうして、次の取り決めと構成でスタートした。①月に4題。②各題とも本文329字とし、例句を8句収める。黄と羽田主宰が選句する。③校正は黄が自身とする。この原則はほぼ守られたと言う。

但し、筆者の調査によると、1990年の1月号から1頁に3季語<sup>37</sup>を載せ、途中から2月までは1頁に2季語になり、3月から本来予定した2頁に4季語の割り付けに変えていることが分った。したがって、1頁3季語の場合は、本文300字以内で例句は4句である。つまり最初から月に四題としてスタートしたのではないのである。何故スタートは3題だったのか、何故途中から順次2題になり、最終的に、現在の2頁4題の割り付けになったのか、羽田岳水は逝去し黄は病のため、確かめようもない。ただ、最初は試行しながら、最終割り付けに確定したのであろう。確かに、一目4題は見易い。

『燕巢』連載時から『台湾俳句歳時記』に上梓するにあたって、かなりの内容変更をしていることが、磯田の論文<sup>38</sup>に詳述されているので、ここではそちらに委ねる。

ところで、前述(11)で黄は「次は植民地根性だといって叱られるなら『日本趣味』と言い直してもよい」と言っているが、ここにも、黄独自の台湾日本語俳句観が顕示される。その「日本趣味」については、黄の前掲書<sup>39</sup>に詳述している。まとめると以下のとおりである。

黄たち一軍の外国人が、日本人と何ら変わりのない純粋な日本語で短歌や俳句をつくったりすると、多く的人是はずびっくりする。それでお仕舞になるのは、その作品は作品として取り上げられる前に、「日本趣味」として片づけられ、「趣味」であればとても本場物にはかなわないという先入意識があるからで、このことは、日本人のつくる漢詩の場合と二様はないとする。

更に日本画に例を取って、隋・唐からの技法が伝わり、原始絵画と接触し変貌して今日の日本画になり、中国人が国楽と呼んでいる一連の絃楽器も、他国からもたらされたものを、今日の中国を代表する楽器に発展させた。したがって、黄らの俳句が一席の地を与えられるためには、変貌ないし変質することも方法の一つであるが、変貌は文化の成長における必然の過程であり、時間の問題に過ぎない。しかし、これを意識的に一つの目標に向かって進化させたい。少なくとも台湾という風土の中に棲息しているわれわれが、いたずらに吉野桜や盆踊りに見惚れ、刺し身や蒲焼きをのみ食べたがったとしたら、折角、台湾に住んでいる意義が無くなるとういうものであるとする。

即ち、台湾日本語俳句として台湾の独自性を持ちたいというのである。日本固有の俳句であっても、台湾の俳句としての地位を築きたいのである。そのことを基盤にした黄靈芝の『台湾俳句歳時記』なのである。

次に、黄の言うところの1910年上梓の小林里平著『台湾歳時記』との違いを述べた部分から、まとめる。

(13) 小林の歳時記には、例句はほぼ欠に等しい。例句のない歳時記は存在を主張する根拠が弱い。例句は自分でもいくらでも詠めるが、多くの方々の句を納めての共同作業とした方が、一時代を代表する書物であろう。本書への参与感も湧くであろうし、時代考証の手がかりをも後世に残しうるはずだったから、黄は大方の作をこれに収め、自身の句は収めないことにした。そのため皆に例句を懇願して集め、7年近い間に集まった句は、一万句に達すると言う。例句のことについては、後述するが、例句へのこだわりは、黄独特のものがある。更に、次のこだわりは、日本人以上のものがある。例えば

(14) 完璧を目指して、天下第一級の『台湾歳時記』を書くために、漢字一字の「連」のシンニョウの頭が一点で、「蓮」のそれが二点であると言うことなど拘ったのに、平成7年版の辞書で両字とも同じ一点シンニョウになっていることに、たいそう不愉快な思いをしている。この点について、完璧を期す黄が、羽田岳水のファクシミリの機械に訂正を求めたりしたこともあるとして、その憤りの根拠についての詳述に、相当の紙幅を割いているのである。

更に、次の問題を挙げている。①台湾独特の季題。たとえば土地公正（とちこうせい）、鱧魚（れんぎょ）など。②名前は同じか似ていても内情の異なるもの。たとえば「神の留守」は台湾では、陰暦12月24日から翌正月4日までの10日間に限る。③日本と基本的に

は変わらないもの。たとえば大根播く、アイスクリームなど。以上を含めて『台湾歳時記』は成り立つと言う。

## 2 小林里平著『台湾歳時記』との比較

そこで筆者は、第一章に詳述した小林里平の『台湾歳時記』との比較を試みる。

第一に、本章冒頭にも述べたが、黄靈芝の『台湾俳句歳時記』は、かつて小林里平が編纂した『台湾歳時記』を新たに改善したばかりではなく、台湾人が台湾の日本語俳句を詠む台湾人のために、台湾人の主宰によって編まれた画期的な書と言える。したがって、戦前の日本語俳句の季語では解決しえなかったことを、発展解決させたと言えよう。日本の風土に合わせた「歳時記」では、台湾に生まれ育った「台北俳句会」会員には、季感として合わないがために、句作に根本的に影響するのである。俳句とは、季語と定型によって成立するものであるから。黄主宰の『台湾俳句歳時記』によって会員たちは、季語の意味がよく分かったと、筆者の調査に答えている。勿論、訪台の外来者が句作するにも、当然必携となるものである。

岡崎の論文によると、「この一書は、台湾人の手になる最初で最後の『台湾歳時記』となる宿命を生れた瞬間から背負う、歴史的に残る書物」<sup>40</sup>とするが、最後の書となるか否かはともかく、この後に詳述する黄の望む一季語につき一作品として、総季語集として大成した作品であることは間違いない。若い時から病弱であった黄の、命を懸けた大事業であった。そのため、連載発足の際まず問題になるのは、自分の寿命であり、それが前述の問題点(1)として、最初に挙げられたわけである。しかしその危惧は当たらず、その連載は完成し、一冊の書物として完成したのである。

更にこの書の凡例冒頭に、「ここに収めた季語ないし季題は台湾特有のものおよび日本のそれとは言葉を同じくしても意念を異にするものに限定し、意念にさほどの違いのないものはこれを省いた」<sup>41</sup>とあり、それらに通し番号をつけて、396の季語を集め、各所に主な季語のカラー写真を挟む。

小林里平は内地から台湾に移入し、この地で俳句を詠むとき、日本の風土に合わせた季語で俳句を詠むことは困難であると感じた。その差異に悩まされながらも、その困難性の一助にしようと、台湾で俳句をする内地人(日本人)のために『台湾歳時記』を編んだのである。そして、小林が台湾季語として取り上げたものは、第一章の『台湾歳時記』発刊で述べたように、『台湾歳時記』の「凡例」に、「一、本書の目的は人事、動物、植物の三部類中台湾に特殊なる行事季物を蒐集説明するにあり。一、仮令台地に特殊と雖も、既に内地の歳時記類に記載説明しあるものは概ねこれを略す。但し台地に見るもの、其説明する所と全く異なるものは間々之れを再説す」<sup>42</sup>とあり、台湾独特の季題を集めたものであることを表示する。したがって、日本の『歳時記』には載っていない季語を、日本の季節区分に合わせて振り分けたというものである。つまりその区分は、春の部、夏の部、秋の部、冬の部の4区分で、それぞれの内訳も人事、動物、植物の3区分である。総季語数は222語であって、黄の約半分余で写真もない。

第二に、黄の区分けは日本の歳時記とは異なる。日本では、先に春夏秋冬と新年の区分が普通で、その下位区分として時候、天文、地理、人事、動物、植物となるが、黄は、先

に人事、自然・天文地象、自然・植物、自然・動物に分け、各々の下位区分けとして、年末年始、暖かい頃、暑い頃、涼しい頃、寒い頃とする。日本では春夏秋冬と新年になるところを、年末年始、暖かい頃、暑い頃、涼しい頃、寒い頃とするのは、誠に台湾の風土にふさわしいと筆者も感じる。日本から台湾へ往来するたびに、その差異に戸惑うことが多いからである。これは、台湾に住んでいる人の発想である。戦前の小林里平の思いもよらぬ区分だったであろうし、独創的で日本固有の既成の枠にとらわれない黄独自の区分なのである。

第三に、黄本人も述べているが、小林里平の『台湾歳時記』の例句は数えるほどで、黄の例句は膨大である。例句あってこそ歳時記の存在根拠があるというのが、黄の持論である。一方小林の『台湾歳時記』は、台湾独特の季題を、台湾の地で初めて出会う季感を表す事物を選択し、その説明を台湾に来た内地人にするのが主であったと思われる。小林が、最初『台湾日日新報』に連載をしていたころは、新聞と言う多数の読者を得ていたため、その役割を十分に果たしていたことであろう。

第四に、小林が季語の説明文に、どれほどの文章構成や修辞に拘ったか、その苦心を意識させるものは感じられない。ところが黄は、8例句の前置きとして、一季語につき329字で説明し、ひと月に4季語載せることを自分に課した。その割り付けスタイルは、後に単行本として出版の『台湾俳句歳時記』にも同じ体裁を取っている。頁を捲るたびに、1頁に上下2個の季語があり、2頁で4個の季語を一目で見ることになる。特に329字に限定して、きっかりでないといふと黄は自分を許さないことを、同じく前掲問題点の最後(14)に詳述する。

① 329字に限定しなくてよいと言われても、黄には厳しさを自分に課したい自虐的嗜好があり、329字全部使うのは守銭奴のごとく卑しい感じだったし、逆に325字で終わっては低脳に近かったから、327、28字を目標とした。② 初案600字をいかにして縮めるべきかに苦労した。③ 329字が一遍の作品であるような、夢であってもよい、黄にしか書けない洒脱な歳時記こそが目標である。

と言うのであるから、確かに単なる季語の解説書の叙述ではない。次にその一例を挙げる。日本人にも周知の「臭豆腐(ツオトウフ)」[161 臭豆腐(ツアウタウフウ)]は、次のような解説らしき一作品となる。『台湾俳句歳時記』人事の中の寒い頃161番の季語である。

午後になると門前に臭豆腐売りがやってきた。一旦腐らせた豆腐を油で揚げ喉ばかりか腹の底まで爛れるような唐辛子のタレをかけて食べる。戦後に新しく渡来した中国の点心である。さすがに上海は大都市だ。腐った豆腐まで売っている、という昔の父の言葉が思い出されたほど、世にかくも臭いものはまたとあるまい、としか思われない、臭さが身上の食べ物。向かいに住むドイツ人の奥さんが飛び出してきて怒鳴る。が、荷曳きの主はタバコをくゆらし、耳も痒くならない。だがアーレ、いつの間にか台湾人までもがこの代物に魅せられている。とにかく、この臭いを嗅ぐや忽ち腹が減りだす始末だ。殊に厳冬、街角や亭仔脚で一皿の臭豆腐を前にする時、頬がひとりでに弛んだ。かくて戦後半世紀を経、見知らざりし文化が根づき、栄ゆ。

老板(ラウパン)の故国のはなし臭豆腐

許秀梧



臭豆腐やうやく慣れて住みなじむ	呂鵲城
くさい仲らしき二人の臭豆腐	陳錫恭
臭豆腐売るは守銭奴めけるとも	葉七五三江
くされ縁の二人仲よき臭豆腐	陳蘭美
廟庭に午後の賑はひ臭豆腐	施碧霞
釣銭の油じみみて臭豆腐	劉竹村
臭豆腐奢って別るる勝賭博	黄靈芝 <sup>43</sup>

散文では随筆や短編小説に才能を発揮してきている黄にとっては、はじめ 600 字ほどの文章を 329 字に収めるのは、苦勞ではないかもしれないが、一般的にはその厳しさをわが身に課すというところが、黄らしいのであろう。そこには、単なる解説書にたくない黄のプライドと、黄だからこそその意気込みを感じるのである。筆者がこの季語の説明文を読んで真っ先に思うのは、最後は古文調で終わるのでいいのかということである。これは 329 字以内に収める黄なりの苦肉の策であらう。市井の何気ない様子を軽妙に織り込んでいるため、いつの間にかこれで良しと、納得させられてしまうのである。

臭豆腐は台湾独特の食品ではなく、中国大陸から入ってきたという由来や、やっこの頃から台湾に居場所を得たこと、中国人を守銭奴と揶揄しながら、臭豆腐の旨さに次第に虜になっていく台湾人の嗜好傾向を、例句を並べて更に強調する。黄靈芝ならでの、秀逸な出来である。臭豆腐のみならず、中国からの食生活や風習などが、次第に台湾に浸透してくるにつれて、恐れや反発を感じながらも、それらに浸っていく台湾人のやるせなさままで表現されている。

岡崎は前掲論文で、「一点紅（イッティヤムホン）」<sup>44</sup>の季語の文章が大層好みだとして、「名乗りではなく、迂闊にも年頃になってしまったために何となく紅を点じてしまった、そんな感じの、花というよりは蕾を恥ずかしげに擡げたいたいけな野草。開くというより蕾むのがお好きで、香りもどうか勘弁して、という謙虚さ」「腰の弱い茎を尺余に伸ばし、虐げられたに違いない切れ込みの不揃いな葉をつけ、無口なあの子にどこか似ている。だから僕は君が好きだ」を挙げている。身を削るような、真剣の煌めきを感じられるとのことである。いずれにしてもこの文章には、楽しんでつい引き込まれる魅力がある。

最後に、各々の歳時記にある季語について、例を挙げて比較してみよう。

例えば、黄の『台湾俳句歳時記』に出てくる 161 の「臭豆腐（ツオトウフ）」は、人事の「寒い頃」の季語であるが、小林の『台湾歳時記』にはどこにも無い。「戦後に新しく渡来した中国の点心である。さすがに上海は大都市だ。腐った豆腐まで売っている、という昔の父の言葉が思い出された」と黄の書く通り、戦後に中国から渡台したものであるから、1910 年（明治 43 年）に発刊した小林の『台湾歳時記』には、当然収録されてはいない。「臭豆腐」は、台湾の名物食品であるから、このことによって、歳時記の時代の変移を知らされるのである。

また、日本でも知られる「春聯」は、黄の『台湾俳句歳時記』では、人事の「年末年始」にあたり、小林の『台湾歳時記』では、春之部の冒頭に置かれている季語である。

黄の『台湾俳句歳時記』では、他の季語同様、335 字の説明に加えて、8 句の例句が挙げられている。説明は、「旧正月の俗で、新春を迎えるべく添付する門聯のこと」と書き始め、

紅い紙に吉祥の対句を墨書し、門の両側に貼るが、他に「春」「福」などの単字や吉祥の単句その他「福祿寿」「黄金万両」などの例を挙げ、それらを扉や門頭・家具などに貼る等、簡潔に説明して、春聯の由来や年末から初春を迎える町の風情を描写する。

以下、例句8句のうちから3句を挙げる。

春聯の儀仗兵めく首相邸	陳繼森
春聯や学あるらしき倉庫番	鄧瑞貞
春聯を書く達筆の男ぶり	黄靈芝

このように、説明の後に春聯の例句を挙げると、その季語の説明と共に、台湾のその頃の情景が彷彿と浮かび上がってくる。華やかに着飾った儀仗兵が居並ぶ首相官邸は、台湾の新春風景であろうし、学あるらしき人が倉庫番すると言うのは、戦後の国民党政府に都合の良い世の中で、学歴があっても就職できない台湾人が多かった時代の様相を、物語っているのか。また、春聯を書く頃は、腕に覚えのある男たちが、衆人・家人の見守る中で春聯を書いて見せ、賞賛に気をよくして男を上げる機会でもあるのだろう。こうした世相を生き生きと映し出すが故に、黄靈芝は、例句をたくさん挙げたのであろう。

一方、小林里平の『台湾歳時記』で、春之部の冒頭に置かれている「春聯」は、台湾地元の人である黄靈芝著に収まる「春聯」とは、視点が異なる。他国に移住してきた日本人が、未知の国の知りたい知識を、満足させる説明となっている。「春聯」について「台湾の俗、新年には家々門頭、必ず紅紙に、吉祥の対句を書きたる、門聯を添付するの例である、但連句を添付するのは、決して新年のみ限ぎるにあらず、新居、出産、結婚、登第等、苟しくも事の慶すべきある、必ず之を添付するの例である、そして総て之れを称して門聯といふのであるからして、新年の分は他の門聯と区別するため、特に之を春聯と称するのである。」<sup>45</sup>と書き始め、今の春聯は、その昔桃符から変じたもので、春聯の対句中多くは桃符の句を用いているとする。

そして、桃符の説明と春聯の形式つまり2枚を一对として、戸口の左右に添付することやその語句の例として「左門丞・右戸財」などを挙げ、その営業の種類によって、酒楼は「聞香須下馬・知味可停車」などと書き、その語句の長短の聯よっても、呼び名が異なるなど、詳細に説明する。そして、「此等は何れも書房教師の内職に書いて売るものであって、歳由市には皆大道に出て書きながら売つて居る、一枚大抵五厘乃至三錢位であるが、時として富豪の用ゐるものには十錢乃至二三十錢するものもある。」<sup>46</sup>と、429文字で述べる。例句はない。確かに、台湾季語の詳細な辞典といったところである。当時の明治末期の春聯の価格や貧富の差が春聯の価格に反映されることなど、単なる知識としてではなく、当時の社会状況を写して、なかなか面白い。現在、台湾での春聯の価格は、いくらなのか分からないが、日本統治時代の円は台湾ドルに代わり、台湾歴史の推移を感じとらせる。

また、春聯の文字を書くのは、小林の明治末期には書家の内職であり、大道で書いていたものが、現在では、書家に限らず、書に自信のある男たちの腕の見せ所の時代であることも分かって、情景を比較すると、なかなか興味深い。

黄靈芝の方は、台湾地元の人々は当然知っているから、細かな説明は必要としないし、むしろ例句によって、使われ方や季語が持つ雰囲気や醸し出して、作句の一助にしている

と思われる。

おわりに

第一章を受けてこの章に入る時、「台北俳句会」との繋がりには台湾俳句の季語であると確信していたのであるが、次に展開する「政治に関わらない」主義主張を展開するための大本である黄霊芝自身の掘り下げを先にしておく必要を感じた。その結果、この時代における『軍民導報』の重要な役割が黄霊芝の生い立ちとの関係性に有り、それを契機に、黄のそれからの人生が大きく展開していくことを見出した。更にこの新聞が、単に日文しか読めない台湾人にコラム欄を楽しませるだけでなく、国民党政府が反共・防ソのプロパガンダを行うためや政策を普及する手段として、あるいはまた、台湾人の反逆に対する脅しとしても利用していたことを、具体的に『軍民導報』を分析して明らかにした。黄自身の視点とこれまでの文学の視点からの論考に加えて、拙論はこの新聞のこの時代における重要な役割を、文化的社会的視点からいっそう深め発展させた。

但し、コラムに投稿していた人々が、政府のプロパガンダをどう受け止めていたかを、具体的な資料で示してはいない。その資料は見出せなかった。しかし、本論にも述べたように、いかなる脅しの記事であろうが、彼等独特の世界をコラム欄に現出していたかに見える。それがせめてもの、政府に対する抵抗であったのであろう。

黄の生い立ちの中に、「台北俳句会」のその後の運営や会員の指導に於いて、多くの関係性がみられることは、次の第三章で展開する。

更に黄は、「台湾歳時記」を9年あまりも費やして俳誌『燕巢』に連載し、その集大成を台湾独自の分類構成で、『台湾俳句歳時記』として発刊した。現在もなお日本の風土に合わせた季語では解決しえない台湾季語の問題を、主に台湾で日本語俳句を作る「台北俳句会」の会員に供するためである。初めて台湾人による台湾人のための台湾俳句季語を集約したものである。黄独特のプライドをかけた季語の説明と多くの例句は、『台湾俳句歳時記』の偉大なる事業を申し分なく支えていると言えよう。

< 注 >

- <sup>1</sup> 黄霊芝「台湾の俳句—その周辺ほか」『國文学』創刊50周年記念号2005年9月号、90頁。
- <sup>2</sup> 『台北俳句会集』創刊時より参加の呂鶴城と巻2からの頼天河等は、戦前、台中にいた阿川燕城の指導を受けている。第一章にその名が出ていないのは、『ホトギス』に掲載された台湾人を中心としているためである。これら2名の俳句歴は、黄霊芝前掲論文91頁による。
- <sup>3</sup> 「台北俳句会」の年間俳句集で、その年度に詠んだ俳句を各自20句挙げ、次年度に発行する形式の俳誌である。その形式は現在も、創刊当初と変わらない。
- <sup>4</sup> 中華民国国防部政治部が、1950年6月1日創刊、1951年12月1日に停刊の約一年半の短期間に、中国語が読めず日本語が多民族間の共通語であった台湾人のために、政府の反共政策を浸透させる手段として、便宜的に発行した広報紙。一日一万部発行。
- <sup>5</sup> 『台北俳句集』巻6、1977年、1頁。
- <sup>6</sup> 中華民国国防部政治部が、1950年6月1日創刊、1951年12月1日に停刊の約一年半の短期間に、中国語が読めず日本語が多民族間の共通語であった台湾人のために、政府の反共政策を浸透させる手段として、便宜的に発行した広報紙。一日一万部発行。

- 
- 7 黄霊芝『台湾俳句歳時記』言叢社 2003年。
- 8 小林里平『台湾歳時記』政教社、1910年。
- 9 黄霊芝『黄霊芝作品集』巻18、自費出版、2000年、214-225頁。
- 10 岡崎郁子『黄霊芝物語』研文出版 2004年 267-269頁。
- 11 黄霊芝『台湾俳句歳時記』、283-285頁。
- 12 黄霊芝前掲書、281頁。
- 13 菅野敦志「1950年代初期台湾の中国化—『改造』と『中央化』の影響を中心に—」日本台湾学会報、第10号 2008年、28-30頁。
- 14 菅野前掲論文、30頁。
- 15 黄霊芝前掲書、285-286頁。
- 16 黄霊芝前掲書、286頁。
- 17 黄霊芝『黄霊芝作品集』巻18、137-138頁。
- 18 岡崎前掲書、28頁。
- 19 岡崎前掲書、187-188頁。
- 20 この数字は、1950年6月1日の創刊からではなく、独立販売されたときの12月1日から算定したものであろう。岡崎は、1951年12月1日に停刊する以前に、既に文芸欄が7か月で終了したとする。
- 21 菅野前掲論文、28-29頁。
- 22 森田健嗣「社会教育からみる1950年代の戦後台湾国語普及について」『天理台湾学会第15回研究大会研究論文報告集』B2-1~B2-15、2005。
- 23 森田前掲論文、B2-10頁。
- 24 簡月真「共通語として生きる台湾日本語の姿」『国文学 鑑賞と解釈』2005年 第70巻1号 197頁。
- 25 岡崎前掲書、28頁。
- 26 黄霊芝『台湾俳句歳時記』、281-283頁。
- 27 当時の日本勸業銀行台北支店長下村非文（のち「山茶花」主宰）氏が、1954年に創設。
- 28 原文通り、台湾では賞ではなく、この字を書く。黄霊芝前掲書、224頁。
- 29 黄霊芝『黄霊芝作品集』巻18、224-225頁。
- 30 孤蓬万里『「台湾万葉集」物語』岩波書店、1994年、57頁。
- 31 黄霊芝『台北俳句集』巻15「あとがき」、56頁。
- 32 黄霊芝『台湾俳句歳時記』288頁
- 33 大阪府豊中市の羽田岳水が主宰する俳句結社。主宰は2011年没し、後継者がいないため『燕巢』も解散した。
- 34 黄霊芝『台湾俳句歳時記』言叢社 2003年、300-311頁。『黄霊芝作品集』18集、2000年、186-208頁の文末に、『燕巢』創立40周年記念、平成8年10月号原載。多少加筆とある。
- 35 黄霊芝『台湾俳句歳時記』、301頁。
- 36 黄霊芝前掲書、305-306頁
- 37 1990年1月号の台湾歳時記(2)には、各95字の説明と各俳句4句構成の「新正」「霊芝」「補冬」の3季語が、1頁3段組で収められている。
- 38 磯田一雄「戦後台湾における日本語俳句の進展と日本の俳句結社—『七彩』・『春燈』・『燕巢』とのかかわりを中心に—」『東アジア研究』第57号、大阪経済法科大学アジア研究所、2012年、1-14頁。
- 39 黄霊芝『黄霊芝作品集』巻18、23-25頁。
- 40 岡崎郁子「黄霊芝論 その一」『吉備国際大学社会学部研究紀要』第8号、1998年、324頁。
- 41 黄霊芝『台湾俳句歳時記』、14頁。
- 42 小林前掲書、凡例2頁。
- 43 黄霊芝前掲書、129頁。
- 44 黄霊芝前掲書では、146頁186番目の植物の季語。
- 45 小林前掲書、1頁。
- 46 小林前掲書、2-7頁。

はじめに 本章の問題と方法

台湾が、世界で唯一日本語の俳句を詠んでいる地であることは、あまり知られてはいない。日本統治下において日本語を身に付けた台湾の人々は、戦後日本から解放された戒厳令下で、日本語禁止令<sup>1</sup>が出ているにも拘らず、台北市で創設された「台北俳句会」に参加し、日本語俳句を詠み続けた。本稿では、日本語俳句を詠むことと、禁止されることとの葛藤と、その状況に置かれることの混迷の分析を目的にする。そしてまた、「台北俳句会」の会員だった故頼天河の一句「老眼に簡体字習ふ文化の日」<sup>2</sup>に内包される、台湾日本語俳句をする人々の、鬱屈した葛藤から考察する。同時に、その他の会員の「日本語俳句に関わる自分史」(以下「俳句自分史」と略表記する)の事例を、戦後の台湾における生活経験の自己表現として、日本語俳句に結合した人々の視点から分析する。

台湾の作句する人々の「俳句自分史」をもとに、聞き取りの補充により、特に「政治には関わらない」<sup>3</sup>を暗黙の共通認識とする「台北俳句会」独自のスタンスに迫る。「台北俳句会」主宰黄靈芝は、「政治には関わらない」を自らのモットーとして、それに共鳴する会員たちの参加を得ていると思われる。この俳句会が戦後の台湾において、日本起源の俳句を日本語で詠むという行為そのものが、大きな視点から見れば政治的なのであるが、そのことが、台湾の人々であるはずの彼らを、既に他者化している。即ち、国民党政府が推進する中国語(北京語)ではなく、旧支配者の日本語を使用し、その文芸を楽しむことは、新政府やそれに従う人々を中心とするならば、「台北俳句会」の会員たちは、それらに対立する側に立つ存在となる。彼ら自身が意識するとしないと関わらず、台湾の空の下、同じ空間に日本語俳句をする自分たちとその他の人々との意識と対立を孕んでいるのである。こうした状況を、黄靈芝たちの政治と句作を通じて考えたい。

次に、頼天河が詠んだ前記の句の「簡体字」は、現在、中国で使用されているものであり、台湾は繁体字である。台湾の祝日に「文化の日」はない。この謎の多い俳句が語るものを分析し、その他の俳句にも、「政治には関わらない」故の無いはずの政治或いは無意識の政治性を、詠みこむか否かの葛藤が投影されていることと、その「台北俳句会」を取り巻く世界、特に東アジア関係を含む台湾社会の空間に着目した視座の2点は、管見の限りでは、台湾の人々の日本語俳句に関わる先行文献には無い。

従来、台湾における日本語文学における俳句は、小説など散文学に比較すると、その研究は少なく、分析も限定されている。その一つに、近代俳句史における戦前台湾の日本人俳句の季題と戦後台湾の人々の日本語俳句集大成として編まれた『台湾俳句歳時記』について述べたもの<sup>4</sup>がある。他方、日本語使用に比重を置く論稿を挙げると、戦後台湾の人々の日本語短歌集『台湾万葉集』を取り上げ、これは戦後日本語から中国語に切り替えを強いられたことの結果と捉え、後の台湾語文学興隆へ繋がるとし、その根拠として「台北俳句会」主宰などの言に触れたもの<sup>5</sup>がある。また、「台北俳句会」主宰黄靈芝の事例研究の中で、日本語で作品を書く理由を、彼にとっては母語・道具であって、アイデンティティ

とは関わりないとし、『台湾俳句歳時記』<sup>6</sup>刊行の意義を述べたもの<sup>7</sup>もある。そして、黄智慧の、俳句を含む短詩を、二重植民後の心理的抵抗の表現形態としたというもの<sup>8</sup>がある。また、俳句は短歌のような叙事性に乏しいから、黄智慧の言う「抵抗」と「悲哀」などの二重植民後の心理的抵抗の表現ができないため、俳句にそうした内容の作品はないとした磯田の見解<sup>9</sup>がある。

そこで特に序章において、磯田の「台湾における日本語文芸活動の過去・現在・未来―俳句を中心にその教育文化史的意義を点描する―」における「台北俳句会」の日本語俳句に関する考察に着目し、問題を提起した。次が磯田の見解である。

黄智慧の論に俳句が殆ど出てこないことについて、黄靈芝が「短歌は感情を詠むものだが、俳句は感覚で詠むもの」と言っているように、俳句は短歌のような叙事性が乏しいためであるとする。つまり二重植民後の心理的抵抗の表現ができないのは、俳句構成の音数制限による、叙事性の欠しさに起因するとする。9.11同時多発テロの時、日本の新聞の短歌欄には何週間にもわたって多くの作品が寄せられたが、俳句欄にはこれを詠んだ作品が非常に少なかったのは、短歌と俳句の違いを端的に示していると言う。俳句の形態が、「抵抗」や「悲哀」などを詠み辛くしているというのである。

しかし一方で筆者は、その論に異論を唱え、次のように考察する。一般的に俳句は、短歌のように字数が多くないゆえの、叙事性が制限される側面はあり、俳句独特の特性である「有季」の規制もあるので、短歌ほどに多くを叙述することは困難である。だからこそ、季感も含めて巧く感情の迸りが詠めたときの感動もまたひとしおなのである。現に今回の東日本大震災の時、各地の俳句結社や全国的俳句組織において、そのことを詠んだ俳句が多数認められた。字数制限による表現の困難さはあっても、迸る感情は詠めるのである。拙論の冒頭<sup>10</sup>に述べているが、全米あるいは世界の俳句を詠む人々の中には、あのテロについての感情と情景を俳句に託した人が大勢いたことは間違いない。言語の相違、例えば五・七・五の日本語音数と英語のシラブル数（ただし、英文俳句もシラブルを極力少なくし、短文の中に詠みこむことを良としている）による構成の違いはあるものの、どうしても表現したいならば、俳句にもそれは可能である。しかも、「台北俳句会」の俳句は、後述の「台北俳句会」会員の代表作に見られるように、殆どが人事詠（生活経験）の俳句であり、感情も十分詠み込まれている。

しかし、日本語俳句を英語俳句と同列に比較するのは疑問だと言うならば、日本の俳句の特殊な分野としてのプロレタリア俳句の例句は、枚挙に暇がない。勿論特別なジャンルを例示せずとも、政治や反戦を表現する俳人も多く、第一章に述べた長谷川素逝や小田黒潮など<sup>11</sup>は、戦地の体験を、やむに已まれず俳句に込めていったのであろう。どうしても詠みたいならば、句作は十分可能である。筆者の見解としては、大方のプロレタリア俳句の俳人が、後にそれを全く詠み込まない作風に移っていくように、露骨な表現のプロレタリア俳句を、一般の俳句と同じ土俵で論じるのも躊躇される。ジャンルとしては俳句であり、一分野の例句としてのその存在は、俳句史的に論じられるべきであらう。また反戦や戦争批判の句も、プロレタリア俳人ではない俳人達も詠んでいる例は少なくない。ただ、一般的には知られていないか、もしくは、俳句創作に不慣れた人々の、俳句は花鳥諷詠を詠むものという固定観念があるからであらう。いずれにしても、俳句に詠めないことはないのである。

黄智慧の論では、政治的な数多くの短歌・川柳を掲載する中に、俳句のみは1句を除き明白に政治的とは判別し難い句を、11句取り上げていることを筆者は重視する。短歌・俳句・川柳の形態や表現内容の違いよりも、俳句として表現できるにも拘らず、「台北俳句会」の俳句には、それを詠んだ俳句がないからと推察する。何故ないのか。それは「台北俳句会」に、「政治には関わらない」という暗黙の共通認識があるからだと言説を立てた。

日本統治時代を恋しく懐かしむ思いや、黄智慧の「抵抗」と「悲哀」などの二重植民後の心理的抵抗の表現等が、本章で言う「政治には関わらない」の対極に当たる政治的表現なのである。このように、先行の諸論は、「台北俳句会」が持つ暗黙の共通認識である「政治には関わらない」ということの独自性に、注目してはいない。

筆者が政治性のない俳句について問うと、「われわれの俳句に政治を見出すことは難しいだろう」と主宰黄も言う。ではどうして黄は、「台北俳句会」の俳句には政治性がないとするのだろうか。「政治には関わらない」の共通認識はあると仮定して、事例とともに分析していく。同時に、暗黙のうちに意識しなければならない根拠、そこには、植民された側同士のせめぎあいと、去った支配者日本と来台した支配者国民党のはざままで、強かに生きつつ呻吟する人々の諸相とが、人事詠（生活経験）の俳句表現と密接な関わりをもって提示されるはずである。

戦前の日本統治時代に受けた植民地の人々の経験は多様である。「台北俳句会」に集う人々は、当時の日本統治下で、過酷な経験の記憶がないのかもしれない。その好ましい記憶が、日本語俳句会参加への誘引になっているとも考えられる。したがって、俳句会の人々が、植民された側であるにも拘らず、過去の支配者であった日本の俳句を作り続ける意味も、その戦前に存在するのであろう。当時の記憶された生活経験が、今なお彼らの内なる欲求を高揚させ、擬似的過去の記憶の再構築へと向かわせていると推察する。

本分析のもとになる資料「俳句自分史」は、「台北俳句会」会員全員に依頼し、その回答を聞き取りで補足したものである。内容は自由記述でよいが、俳句との出会いとその頃の社会状況、そして「台北俳句会」に入ってから詠んだ代表作、また日本語俳句を詠む理由とそれに対する周囲の反応、「台北俳句会」の今後について等、数項目例示し、その中の自分の書きたいことを選択する方式で、書いてもらった。それ以外に自分の言いたいことを重点的に述べた人もいる。本稿には、それらから適宜抜粋した。事例の実名公表については、本人たちの承諾を得ているものが大半だが、諸般の事情を考慮して、必要な氏名以外は匿名とした。

## 第一節 「台北俳句会」創立と主体性の行方

序章と第二章に述べたように、戦後1970年に、戦前の台湾俳壇における俳句結社とは全く繋がりなく、戦後になって初めての台湾の人々による「台北俳句会」が設立された。会員たちの中で、これまで俳句を習っていたのはほんのわずかな人で、その他はみな「台北俳句会」設立後、この会で詠み始めている。ではなぜ日本語禁止令下に、このような日本語文芸である俳句結社が設立されたのか。設立までの経緯とその時代の文化的背景は、序章に詳述している。そのため主として、その理由に関わる主体性について分析することに

なるが、再度背景を要約して、前置きとする。

1946年からの新聞・雑誌などメディアにおける日本語禁止令下で、次の相対峙する雑誌が創刊された。1964年には、新しい国語である北京語で、文学雑誌『台湾文芸』と『笠』が、次いで1967年に、日本語による呉建堂(孤蓬万里)主宰の「台北短歌会」が発足し、翌年短歌雑誌『台北歌壇』が創刊された。その会員たちの多くがそのまま会員となって、1970年に、同じく日本語による黄主宰の「台北俳句会」が創設され、翌年、『台北俳句集』の創刊となる。日本語禁止令下の時期だけに、この二つの日本語文芸雑誌の創刊は、かなり勇気を要するものであったことは想像に難くない。その理由は、次の黄靈芝の記述にある。

当時の法令としてあらゆる会合はそれが10人を超す場合、事前に警察に届けることを要した。また凡ゆる組織は登記を経てはじめて活動ができた。日本語による文芸の会が登記できるはずは必ずやなく、むしろ危険人物が自首してきたことになりかねないので、私たちは常に島原のキリシタン衆のように蠢いた。何しろ一頃、その筋に身を置く友人から何度となく忠告を受けていた。「君は今に掴まる」「覚悟はしておいたほうがいい」「なぜなら僕が密告しているからだ」<sup>12</sup>

などと言われたとする。更に、上記に続けて同頁には、「そんなわけで句会に行くとき、私は短刀一本鞘に入れていた。勳者にはされたくなかったし、会員の誰彼に手を出すものがあったら、飛びかかるつもりだった。」「理不尽を私は許さない。ちなみにこの短刀は、今もわたしの枕元にある。(戦後、日本通いの船員から買った玩具のような小刀だが、刃には鉋が入り、鋼は紛れない。脇に細見の手裏剣を差添として置く。)」とする。

上記( )内は、当時の「台北俳句会」の様子に加筆した部分である。その加筆には、どんな思いが込められているのだろうか。

この稿「戦後の台湾俳句—日本語と漢語での—」は、2000年発行の『黄靈芝作品集』巻18とそれに先立つ原載が、1998年発行の『台北俳句集』巻25であるから、( )を加筆することにより、当時も、また、この著書発行の2003年になっても、黄主宰の警戒心は変わらない、いやそれ以上に今もなおいっそう、警戒が必要であると言いたいのであろうか。更に「脇に細見の手裏剣を差添として置く」と強調している。確かに現在もなお、「政治には関わらない」という主張は取り下げてはいない。「日本通いの船員から」とか、「細見の手裏剣」とかいう語句に、何となく日本との関係性を感じてしまう。黄にその意図はあるのだろうか。

しかし、以下に述べる諸事により、戦後20年も経った世界情勢と日台関係は、『台北歌壇』を創刊した経緯において、呉建堂の積極性を後押しすることになったのであろう。

主宰呉建堂が「台北短歌会」後の「台北歌壇」を起したきっかけは、1965年(昭和40)、呉振蘭の短歌が宮中新年歌会始詠進に入選したこと<sup>13</sup>である。それまでにもコンスタントに作歌していても、発表を憚っていた呉建堂が、ここに短歌創作を公にするに至ったのである。呉は自著の中で、いかなる経過を辿って、戦後も日本語短歌を詠み続けたかを詳述している。その概略を述べると、以下の通りである。

1955年(昭和30)頃から「文学に国境はない」という言葉を盾に取り、「短い一生のこと、今更中国文学に分け入って苦勞を重ねるよりは、外国文学として日本文学をやっ



くに如かず」といった風気が生まれてきた。小説、戯曲に取り組む者もあったが、そっちの方はなかなか時間もかかるし、手っ取り早くアマチュアとしてもやれる短文芸に、目がつけられる。短歌、俳句、川柳などの発表の場を求めだし、日本に引揚げた恩師や友人をつてに、台湾ゆかりの結社に入り、或いは大衆雑誌や新聞の文芸欄に投稿しはじめた<sup>14</sup>と言う。こうして、呉建堂は機を伺って、主体的に創設・創刊したのである。

それに対して「台北俳句会」は、如何に生き抜いてきたのであろうか。「台北俳句会」主宰黄靈芝は、結社に至る経緯を、次のように述べている。

政府が公的に日本語を禁じたが、そうなると台湾人は新聞を読まなくなり、殊に山の先住民らは、政府が何をしているのか、さっぱり分からなかった。そこで政府は特例として『軍民導報』<sup>15</sup>と呼ぶ日本文新聞を発行し、その文芸欄に病床の黄靈芝が投稿した。他にも俳句・短歌・詩・コントなど寄せてくるものが9人ほどいて、彼らに呼び掛けて名前のない日本語文芸の会を作り、作品の回覧をしたが、長く続かなかった<sup>16</sup>。その後1968年、呉建堂主宰の日本短歌の会「台北短歌会」に入会した。1970年にアジア・ペンクラブの会議が台北で挙行されたとき<sup>17</sup>、川端康成氏を団長とした文芸や学術関係者の団体を、黄靈芝が古都台南へ案内し帰北のあと、台湾にも俳句の会がほしいという話が湧き<sup>18</sup>、俳句の連座<sup>19</sup>をした。これが「台北俳句会」発足の事由だった。実質的には会員は全島に跨り、「台湾俳句会」であるべきだったが、当時「台湾」の2字には反国思想の嫌疑が実しやかにかかけられやすかったため、殊更にこれを避けたのである<sup>20</sup>と述べる。

戦後政府が自分たちの広報の便宜上、日本文新聞を発行したということ、そうした基盤のある中で、日本語を使用する気力を失わず、半ば公然と、あるいは主宰黄以外の大方の会員は、幾分強かに、会に参加していたと思われる。後述の会員の事例によると、前述の黄主宰の危機感と会員のそれとは、幾分差があったと思われる。

そのことから、「台北俳句会」発足の契機が、日本人来台の折の勧めであったという点は、後述の「台北川柳会」もまた、日本人の勧めであったことと考え合わせると、興味深い。自主的ではなく、外国日本の勧めによって、已む無くという条件を採用することが、黄靈芝にとって、必要であったのだろう。設立の当初から既に、黄主宰の信条は形成されていたのかもしれない。第二章に詳述した黄の経験は、いつまでも彼の脳裏を離れられない記憶となっていると思われる。

以上に述べた「台北俳句会」の俳句に、他の『台湾歌壇』や『台湾川柳会』に比較して政治性がないことに気付いたのは、実は以下の黄の論文を読む以前であった。その後、確実な根拠をここに見出して確信を持ち、更に分析を深めた経緯がある。

この黄の主義主張は、2005年に発行された黄靈芝の論文「台湾の俳句—その周辺ほか」にも、堅持されていることが分かる。その中で、「私たちの会では会の中に政治活動と商業行為を持ち込まないことを不文律とした」<sup>21</sup>と明言している。それというのも故あつてのことであるとして、次のように述べる。「終戦後過酷な植民地統治から救ってくれた中華民国の官吏の素行が悪く、終戦の一年あまりあと、台湾人の押さえに押さえた鬱憤が爆発し、世にいう二・二八事件に発展した。死者は、双方合わせて数千とも数万ともいう。その際の痼りが今もって解けない」とする。これは、黄靈芝のみならず、当時の台湾人の多くが抱いた感情かもしれない。その上更に、前述の日本語文芸に携わる「台北俳句会」主宰としての危機迫る経験が、いっそう黄靈芝の主張を強固なものにしていると思われる。また

同前掲論文に、「台湾という一つの社会の中での私たちの日文俳句の会が、外来者であることは間違いなく、それへの擯斥を私は懸念していたが、案外に荘子のいうがごとく、使いみちのない雑木なればこそ伐られずに済み、千年の齢を得て神木たり得るのかも知れなかった」<sup>22</sup>と、台湾の中であって、外来者的立場であったことを、自認しているのである。自認しているがゆえに、排斥されないための「政治に関わらない」という不文律が、必要不可欠なのである。

一方「台北川柳会」の発足は1994年であり、全日本川柳協会の仲川たけし会長から、台湾にも川柳会を結成して相互交流を図れないかとの依頼があり、それがきっかけとなっている<sup>23</sup>。台湾川柳会の設立の経緯を『台北川柳会』（二周年記念特集会報）の中に、黄靈芝が書いた「台湾川柳会の設立」から拾うと、当時、台湾には短歌の会として「台北歌壇」と「台北俳句会」はあったが、川柳の会というのは無かった。川柳は型が俳句と同じというだけでなく、俳句の「軽み」にも通ずるから、この際台湾川柳会を結成しようということで、川柳歴が数十年に及ぶ頼天河を主宰にし、三村昌弘<sup>24</sup>を事務に、俳句会の人たちにも呼びかけ、最初は気心の知れた十名ほどでスタートしたという。

こうした経緯から、「台北俳句会」と「台北川柳会」は日本人の勧めにより発足し、「台北短歌会」の自主的創設とは異なる。確かに吳建堂は、日本の短歌会とは多くの繋がりを持ち、1966年の吳の第一歌集『ステトと共に』<sup>25</sup>は、高校時代の同期生在住の日本の長崎にて刊行されたが、日本の誰かに勧められてということはどこにも認められない。その上、1955年から日台間の経済関係が著しく伸び始めた背景もあって、この時とばかり行動に移したのであろう。更に両誌の刊行後台湾情勢に変化が起き、本来ならば日本が統治した時期には対立すべきであった日本語文学が、台湾語文学と結束して、無意識あるいは意識的に台湾ナショナリズムを支援したことになった経緯がある。それも一因となって、今日に至ったとも考えられる。

ところが、「台北俳句会」の場合は、『軍民導報』と呼ばれる日本文新聞を通じての文芸仲間の永続性の無い下地といい、川端康成氏が団長の文芸や学術関係者の勧めによってという点で、「台北俳句会」自身が主体的に発足したという印象は薄い。

また、「台北俳句会」の創設についての吳の記述にも、「黄靈芝氏は俳句の素養が高く、『台北俳句会』を独立させる話が早くから交わされていたが、台南に日本代表団を案内した帰途の車中で、日本人東氏<sup>26</sup>の勧めもあって彼の決心がつく。（中略）日本では歌句と一緒にやる人は、二兎を追うものとして嫌われる傾向がある。しかしわれわれ台湾人にとっては、どちらも外国文学であり、未熟ながら同時にやっつけようと、約8割が両方に顔を出している」<sup>27</sup>とあるように、殆ど同じ人々が両会の会員であった。

しかしそのことは、「台北俳句会」と「台北歌壇」の詠歌の方針も同じということではない。「台北歌壇」（後2004年に改名して「台湾歌壇」となる。以下「台湾歌壇」とする）では、主宰を初めとして日本に関わる短歌は数多く、大っぴらである。

日本語のすでに滅びし国に住み短歌詠み継げる人や幾人	孤蓬万里	a
悲しかり化外(けがい)の民の如き身を異国の短歌に憑かれて詠むは	傳彩澄	b
指を折り短歌詠み居れば忘れ居し大和言葉が次々と湧く	高秀	c
ハナ、ハタと初めて習ひし日本語の今もなつかし公学校	傳彩澄	d

霧社桜 <sup>28</sup> 今年も咲けり無念呑み花岡一郎、次郎は逝けど	巫永福	e
土下座して吾子救えかしと縋り寄る父子兵ありき共産軍俘虜に	尤ㄉ烈	f
歓喜せる祖国復帰も束の間にボス失踪の悲劇聞かざる	巫永福	g
台湾語北京語英語日本語を混ぜて使いしわが半世紀	文錫燾	h
終戦の玉音放送途切れがちラジオ囲みて涙込み上ぐ	林蘇綿	i <sup>29</sup>

a は、日本語の話せなくなった台湾の地に、短歌を詠み継いでいく人が何人いるのだろうかという、悲しい嘆きの歌である。b は、統治の行き届かない土地の民のような自分が、異国となった日本の短歌に惹かれて詠むとは、何と悲しいことだという哀感を込めている。c は、習い覚えた短歌を詠もうとして、指を追って数えているうちに、いつの間にか、忘れていた日本語が、次々と湧き上がってきて、何とも言えず懐かしい思いになるというものである。d は、日本語を懐かしんで、公学校で初めて習ったときの言葉を思い出している様子である。それは、日本統治時代を快く回顧していることでもある。e は、台湾の歴史上に名高い霧社事件のことで、台湾部族の2人の青年が、優遇してもらった日本と、台湾部族の日本統治に対する不満の板挟みになって、割腹自殺したことを、悲哀と共に思い出しているのである。f は、国民党の敵である共産軍の俘虜が、この息子だけは助けてほしいと懇願する父親の姿に打たれて、詠んだものであろう。このような情景は、誰も心を揺さぶるものではあるが、共産党軍への憐みの情は、国民党へ対する反逆行為なのである。g は、二・二八事件後の巫永福が、実際の体験として詠んだものであろう。歓喜と悲劇の落差が際立つ。i は、日本人として生きてきた自分たちが、玉音放送に涙する様子を、純粋な気持ちで歌いあげている。これからは、日本人でなくなる戸惑いの思いも、交錯するのだろうか。

これらは、日本統治期、日本語禁止令の中またはその後、日本語による日本語文芸や日本統治時代を恋うる心情を、あるいは二・二八事件後の白色テロ<sup>30</sup>の有様を、また国民党政権下でありながら、共産軍俘虜への哀切の情を堂々と吐露して、政治的色彩の濃厚な歌が、数多く詠まれているのである。特に a・b・c の俳句は、日本人として短歌を詠んできた証が迸り出ており、i に至っては、この句を目の当たりにする日本人までも、過去日本人であった人々の思いに、涙させられるのである。

しかし、「台北俳句会」では、創刊号から現在に至る巻33まで、日本語・日本文芸が恋しいという心情を、明確に吐露した俳句は、殆ど掲載されていない。ましてや、政治的なものは殆ど無い。以下、「台北俳句会」会員自身の代表作である。

犬は太郎猫はホアルよ日脚伸ぶ	黄 葉	a
弥生や寺は悲しき顔ばかり	李秀惠	b
鏗一文吐かぬ蟾蜍の面構へ	楊瑞麟	c
異国語で駄々こねる孫四月馬鹿	廖運藩	d
一病をなだめて生きて年あらた	張継昭	e
春雷や妻と二人の膳にあり	巫永福	f
バラ切りて告げ得ぬ思ひ壺に入れ	暁蘭 (陳蘭美)	g
朝顔に白金の星大きかり	李錦上	h <sup>31</sup>

しかし、以下の3句はややその傾向あり、と注目した作である。

出征も凱旋も死語鯉のぼり	北条千鶴子（范友佳）	a
老眼に簡体字習ふ文化の日	頼天河	b
ニニ八やまずの雨となりにけり	黄靈芝	c <sup>32</sup>

だが作者に聞くと、aの「出征も凱旋も死語鯉のぼり」は、台湾からの留学生であった夫と共に、戦後14年後に渡台した日本人妻が、戒厳令の頃、再び日本に帰ったとき、郷里で見た風景を詠んだものである。5人の戦死者を出した自宅の庭に、5匹の鯉のぼりが立てられていたのだが、老いて残された女性のことを思いやって、戦争は悪だと思い詠んだという。台湾での風景ではなかった。台湾には大きな鯉のぼりは無く、駐在員の小さなものしか見ていない。それも今だから見るが、以前は日本のそういうものは絶対見られなかったという。しかし、きれいにオブレードに包んだ政治的反戦の俳句には違いない。

c「ニニ八やまずの雨となりにけり」は、ニ・ニ八事件の日が巡ってきて、止まずの雨が、それに関わる辛苦の思いを持つ人々や作者の涙と、オーバーラップする。「政治には関わらない」を主張する黄靈芝にしては、珍しい政治的な句である。しかし、全く攻撃的でなく、当局に睨まれる表現も無いと言えば無く、ニ・ニ八の語句を句にすること自体が政治的で、当局に睨まれる表現であることから、大胆な句ともとれる。ただひとしお、事件の重さを感じさせる。bについては後述する。

次に「台湾川柳会」について、簡潔に述べる。

日本語を本気でしゃべる終戦後	高瘦叟	a
人民をみなコケにしてテレビジョン	李琢玉	b
反共を聯共にしてパンブルー	林蘇綿	c
対岸の攻撃を孫子で防ぎ	陳清波	d
西進に待ったをかけて現政府	周玓銓	e <sup>33</sup>

1994年発足の「台北川柳会」の川柳には、日本語に慣れた会員の政治風刺と屈折した思いが込められている。1992年に刑法100条の言論による反乱罪も撤廃され、表現の自由が得られた結果、当時を思い出してのびのびと詠んだのであろう。ここに挙げる政治社会批判の川柳は、その逆の政治思想を持つ人々の反発を招くことは承知の上で、敢えてこう詠んでいるが、その批判の受容可能な社会となってきたとも言えるかもしれない。しかし、「台北俳句会」会員の中には政治を詠わないから「台北俳句会」は存続できたと言う人がいる。このことを次の例で見よう。この事例は「俳句自分史」とインタビューに依らず、日頃の筆者との交流から得たものである。しかも以下のとおり台湾の政治情勢については、非常に敏感であり、気を遣っている。恐らくこのため特別にインタビューを申し入れても、断られたであろう。

この事例をAとする。Aは日本生まれ、日本に留学中の台湾人と結婚、その後大学教授になった夫を支えながら、俳句会員になった。女性としては調査当時、80歳以上の最古参のひとりで、いかにも日本の賢婦人を偲ばせる人であるが、台湾名で通している。俳句会

の後、台湾の現状を述べる座談会を催したが、その内容を活字に直して読んだ時、あちら（中国の企業と取引ある人）に悪いしこちら（日本の知人）にも悪いと気を揉んで、自分達の発言を気遣っていた。その内容は、座談会参加者の一人（日本人の研究者）が、台北市街を日本語でしゃべって歩いていた折、馬鹿やろうと振り向きざま怒鳴った女性に出くわしたことであった。怒鳴った者は外省人であるとして、彼女が解説した部分が、気がかりだったのである。また、最近の日本人一般に対する批評をするについても、率直に言えば、日本の俳句結社との絆の関係もあり、結局、座談会に参加の全員が、匿名にすることになった。このように、俳句表現上の事柄ではない座談の内容についても、然りである。この例では特に、この俳句会が存続してこられたのは、俳句表現は「政治に関わらない」という考えできたからだ、誇り高く確信をもって言う。主宰黄靈芝のよき理解者であり、支えともなっているように見える。

しかし言論が自由になった現在においてもなお、政治を詠わないから存続しているというのはなぜであろうか。現に短歌会も川柳会も過去現在ともに、政治社会批判をしても存続しているのである。

発足の契機から考察すると、「台湾歌壇」以外は日本人の勧めが大きな比重となっているが、「台湾歌壇」も「台湾川柳会」も政治に関わるものでも詠んでおり、敢えて避けようとはしていない。しかし、「台北俳句会」では、殆どそれらしき俳句は見出せない。確かに政治を詠わないことが即主体性の有無に繋がるとは言い切れないが、政治的な俳句を詠みたいという思いは「台北俳句会」には無いのであろうか。会員の一部が「台北俳句会」「台湾歌壇」「台湾川柳会」の3会を兼任していればなおさら、その関係性に関心が注がれる。しかし近年、『台湾万葉集』やその続編に名を連ねていた会員も、黄靈芝をはじめ主な会員も、「台北俳句会」のみの会員となっている人も少なくない。そして再度述べるが、黄靈芝が「台北俳句会」を設立する際の、主体性のやや無い経緯からも、「台北俳句会」の主宰に積極的になろうとした意欲は認められない。黄靈芝が積極的に主宰の座に座ることは、戒厳令下の当時としては、危険な目に遭うとの覚悟が必要であったろうし、会員がそのような事態になってはいけないという思いもあったであろう。そのため前述のとおり、日本人の勧めでと言うやむを得ない必要条件が設定されたから、そのことで、政府の咎めを幾分緩和させるとの思惑もあったかもしれない。そういう視点からすると、単に主体性がないと評するのは、厳しすぎるかもしれない。むしろ、黄靈芝なりの戦略であったかもしれない。したがってこれ以上の政治的表現は、慎まなくてはならなかったし、現在もなおその方針は、揺るがないのである。更に会員たちは、敢えてその方針に逆らおうとはしない。政治的なものを句に表現しないことは、彼らにとって自明のことであり、その方針こそが、台湾社会において、永続きする方策であることだと認識しているのである。会員の表現の主体性は、その句会内においては、「政治に関わらない」俳句の中に内包され、潜在していると思われる。そのため、時としてその政治性が、俳句に垣間見えてくるのである。そのことは、第四章に詳述する。

## 第二節 「政治には関わらない」ことと「日本語残留孤児」の居場所

以上から「台北俳句会」における「政治には関わらない」について整理してみよう。「政治には関わらない」は、俳句上に日本統治時代へのノスタルジーとか政治的な場面や思想を表現しないことであることは、既に述べた。発足当時、歴史的社会的に日本語禁止令下であり、いつ自分達にも二・二八事件後の被害が及ぶか不安な情勢であったことは、前述のとおりであったからである。では、俳句上に表現しないことは、現在の直接的な目前の2党対立の政治情勢に関わらないこととは別であろうか。この二つが密接に繋がっていることを、会員同士は認識している。俳句会の中にそれぞれの党を支持する会員が混在することにより、如何なる情報が外部に流出するかもしれないとの危惧は、無意識のうちに抱いている。それはひいては、遠く日本や中国大陸へつながることも意識している。現に、前述の俳句会員の事例は、それを物語る。したがって、対外的に目に留まりやすい俳句誌上においても俳句会内であっても、政治に関連したことは表現しないし、お互いに政治論争もしない。それらは背中合わせの「切実な問題」として、肌身に沁みて認識されていると思われる。そのことは、次の事例C・Dの終末部にも表わされる。その周辺とも合わせて事例を見ていこう。

事例Bは、戦前から日本へ留学していて医師になった台湾の男性と結婚し、1959年夏渡台した日本人妻、現在79歳（2006年調査時 以下同様）である。

最初台湾に来たとき、夫の家族をはじめ友人知人など全て友好的であったが、日本の新聞・雑誌など皆無、まして俳句会も俳句もなかった。初め「台北短歌会」の創設時に入って、そのまま俳句会へ入会した。そのことによって、外部からの嫌がらせは、一切無かった。今は、38年間に及ぶ戒厳令は解け、今は完全に自由であると思っている。台北俳句会の最大の出来事は、黄主宰が「正岡子規国際俳句賞」を受賞のため、2004年秋、生まれて初めて渡日されたことであった。「台北俳句会」は9対1の割合で国民党支持派が少ない。お互いに分かっているから、そのことで論争はしない。「なでしこ会」という日本人の妻の会に入っているが、その10パーセントは外省人の妻である。

僅かな外省人が、前述の「切実な問題」になるのである。

事例Cは台湾新竹縣の地主の家で生まれ、「国語の家」<sup>34</sup>で育ち、調査当時、80歳である。

父は教員で俳句を母は短歌を詠み、兄は慶応大学、次兄は盛岡高等学校で、日本語のほうが使いやすかった。戦後国民党政府になったころは、日本語で話したり日本の歌を聞いたりするのは気が引けたが、うちが200坪の大農家であったから、軍歌のレコードをよく鳴らしていた。すると「チャンコロが怒鳴り込んで来るよ」と言われた。だから特に残留孤児の気持ちが強かった。それまで温かい和やかな日本の環境から、急に冷たい仕打ちを受けるようになったから。戦後しばらくして主人と長男を先送りした悲しみの時に、母と友人に勧められて「台北俳句会」に入った。「台北俳句会」に入っているための外部からの嫌がらせは無かった。自分たちの俳句は「日本語残留孤児」である。司馬遼太郎さんに選ばれたときの句が「頼られてゐて頼りなく秋扇」であり、「一家三代二國語光復節」<sup>35</sup>は頼天河の作である。彼は先生に匹敵する才能の持

ち主で、生きていれば、88歳。廖運藩さんと共に尊敬されていた。

「政治に関わらない」という考え方について、会員同士は民進党か国民党か表には出さない。それを言うとお互いに溝が出来る。政治の話は血眼になる。いろんな職業で国は成り立つ。みんなで楽しく言葉遊びして、ストレスになることは無い。「台北俳句会」の将来について、若い人は幾人もいない。戦前の方々はだんだん少なくなっている、自分だけがついていけたらいいと思っている。

事例BもCも、戦後の生活の中で、日本語を話すことによる独自の体験を経てきたが、「台北俳句会」入会による外部からの圧力は実感していない。だが俳句表現のみならず、「台北俳句会」内部においてさえ、「政治には関わらない」ことがお互いに肝要であることを、歴史的社会的体験によって認識し、暗黙の了解事項と捉えている。それに対して、次の事例もある。

事例Dは、1925年（大正14年）台湾生まれの82歳で、現在もなお「台北俳句会」「台湾川柳会」「台湾歌壇」三つの会員である。

「終戦に異国人となりし台湾兵忍字に行き抜く大正生まれ」

はDの自選の短歌である。（Dのある川柳について、戒厳令が解かれた後だから、柔らかく包んだような表現でなくても、良かったのではないかとの問に対して）

いや、国民党は怖かった。基隆港に上がって来た兵士の怖かったこと、何をするか分からなかった。解放令が出ても怖かったし、今でも怖い。何が起こるか分からないから。日本時代から中等教育で公務員だったから、7月徴兵の日本兵で、復員しても失業しなくて良かった。公務員として安給料であっても生活は出来た。仕事のない人は、惨めだった。公務員の殆どが外省人だから、ひどく虐げられた。彼らは命からがら逃げてきたのだから、反共をスローガンに、台湾を支配していいと思っていた。とにかく怖い。私たちは少しも反共ではない。

少し別のことだが、戦後1年間ぐらい日本兵も基隆港にいて、工事などしていた。ある上官がマラリアの薬キニーネをくれたので、自分は命拾いをした。「台北俳句会」は歴史が古いから、黄先生は政治を詠むことを許さない。（但し、黄靈芝は後述のように、別の表現をする。）台湾は今でも政治的に不安定だし、「台北俳句会」の中でもどんな考え方があるかも分からない。台湾川柳会は歴史が浅く、主宰者の考え方にもよる。だから私は、台湾川柳会で政治は詠む。

と答えている。「黄先生は政治を詠むことを許さない」と「今でも政治的に不安定」と「政治的なものは、台湾川柳会で詠む」の間にある相違は、何であろうか。川柳というものは、皮肉や揶揄や政治的批判を特徴とするものであるとの前提で詠んでいることと、同時に「台湾川柳会」では、会員同士に「切実な問題」である悪意のある外部への吹聴がないという信頼感と、「台北俳句会」とは別の共通意識に保護されている安心感があるのではないか。その上、主宰は別の人であるから、方針に逆らってはいないという思いもあるのかもしれない。

事例Dの戦後体験は、否応無しに、主宰の心を最も敏感に受け止め、実践へと方向付けしているのかもしれない。この事例の今でも怖いというのは、過敏のためかとも思われるが、司馬遼太郎が「台湾では、戦後、大陸から引越してきた国家（中華民国）の権力が君臨し、本島人にとって断頭台の刃のようにおそろしかった。今の年配の人達で、いつこの刃が自分の首に落ちてくるか、という不安を一瞬でも持たなかった人は、いないはずである」<sup>36</sup>とし、その一例を挙げているが、この出版が1994年であるから、本島人として聞いた場合の恐怖は、あながち過敏だけとは言いきれないものもあるのだろう。また、社会情勢の受け止め方も、戦後体験によって個人差があるのではないか。

このように「台北俳句会」の会員達各々の「政治には関わらない」に対する認識は異なるが、主宰が声高に主張しようとしなかりと、政治を詠う意識はなく、それをモットーとしてではなく、自明のこととしているのである。原因は、過去の恐怖政治の記憶であり、現在の2党対立の政治情勢に翻弄されたくないという、会員同士の配慮からくる共通性である。それだけに「政治には関わらない」という暗黙の共通認識が定着していると推察する。

こう述べると、現在でも「政治には関わらない」というのは存在するのかと疑念を持つかもしれない。それは、前述の「台湾川柳会」設立にスタッフとして参加し、現在も時折、句会に参加して俳句を詠んでいる、元「台北俳句会」会員三村昌弘の言葉によって裏書される。「政治には関わらない」という考え方は、「実際に現在もあり、主宰が句会の席上で公式的に明言したことはないが、身近な会員には、日常の会話と雰囲気の中で伝えられている暗黙の方針である。事実、黄靈芝の前では、台湾独立を話題にしない何人かの会員が、俳句会の外では台湾独立を叫んでいる」と言う。「政治には関わらない」と「暗黙」「身近な会員」の語句は、即座に三村の口をついて出てくることから、これは、前述した事例A・B・C・Dの事例の証左である。特に前述のA事例である大学教授夫人の場合は、前述の司馬遼太郎の『街道を行く40台湾紀行』に取り上げられているように、あらぬ嫌疑をかけられて、その大学教授の死と同様になることを危惧するあまり、日頃から敏感にならざるを得ない条件にあると推察される。Bの事例は、戒厳令が解けて今は完全に自由だと言いながら、『台北俳句会』は9対1の割合で国民党支持派が少ない。お互いに分かっているから、そのことで論争はしない」というくだりに、現在もなお、俳句上の表現と表裏一体の政治に関わることはしないと、表明しているのである。

ところで、特にCの事例で注目されるのは、「残留孤児」と「日本語残留孤児」の意識である。「残留孤児」の意識は、当時を経験した人には少なくない。しかし現在に至ってもなお、「台北俳句会」で日本語俳句を詠むことを「日本語残留孤児」と表す胸のうちは、如何ばかりかと察せられる。そして何とも形容しがたいネーミングの上手さに、感服もさせられる。だが本人はこう名付けたからといって、日本統治時代の被植民側の苦渋の記憶を引きずっているわけではない。この事例のごとく日本統治時代には、むしろ日本の恩恵を受けた経験を基盤とした俳句の世界にいたのである。したがって、先の事例Bの言によると、「日本語俳句を『日本語残留孤児』と表現するなら、満州や中国の残留孤児に対して失礼かも知れない。当地の孤児は毎年お花見と紅葉狩りに渡日する幸福な孤児だった」のである。確かに、「台北俳句会」に集う日本語使用の人々は、地位的にも経済的にも恵まれた階層であったのだ。

しかし、これら会員の言葉には、黄靈芝自身の「政治には関わらない」の根本思想は、



共通理解されてはいない。「台北俳句会」主宰の黄は、昔から国なる概念を有害無益なものだと考え、『広辞苑』の国家に関する「排他的な権力組織と統治権をもつ政治社会だ」とする記述を、言いつつ殆ど心の臓を射るがごとくであるとし、これが人の天性なる根性であるとする。人の天性の根性というのは、本来人間とは悪を志向するものという性悪説に立つのだろうか。彼流に言えば国家とは次々につくるべきではなく、相携えて全滅すべきものなのである<sup>37</sup>と言う。更に同じく、黄の『台湾俳句歳時記』の自序の冒頭にも、太陽のエネルギー消滅を前提に、「正直に言って、私は地球がやがて亡びるだろうことをほとんど疑わない」と述べるように、国家なるものを忌避する思想が、その根底にある。地球滅亡と国家の忌避は別物のようにみえるが、これは黄の国家消滅への願いを、地球滅亡の恐れによって警告したものと捉える。そしてこの内容は、何ものからも純粋な立場で独立すべき文芸が、国家と政治に翻弄されてきたことによって、「政治と関わらない」ことを標榜せざるを得ない現実に、怒りを込めて訴えていると筆者は解釈する。それは、第二章における戦前と戦中、戦争直後の黄の経験と記憶が根底となっている。

こういう見地からの黄の主張が、「政治には関わらない」に込められていることは、彼の著書をよく読めば理解できるかもしれない。しかし彼らがそれを、当面「台北俳句会」会員たちの、歴史的に過去・現在において経験してきた、政治的に対立する2党対立の現実に照合させるのは、無理からぬことであり、それもまた現実的に当を得ていることは、説明してきた。

また黄は、他国の言語であり、しかも統治国であった日本語使用の日本語文芸をすることに関して、アイデンティティとの絡みで言及されることと、しかもそれが日本人に多いことに、些か食傷気味である。黄はつまり民族・国家・政治とは関係なく、自分自身のために必要な表現手段だから、日本語を使うというのである。なぜ自分自身のために必要な表現手段なのかを、黄の自著から探ると、「日本統治時代の日本語は、多民族社会の共通語として存在し、2回目の国語いわゆる中国語に置き替えられても、一朝にして日常工具として使いこなすことが出来ない。一家の中に日本語・台湾語・中国語が入り混じって話されることになる」<sup>38</sup>と言う。またそれゆえに、「自国語で編んでいないということでわたしを蔑む人が多いが、わたしが日本文を使っているのはそれが自分にとって最も便利な言葉であるから、責めを負うなら日本に割譲した清朝の官吏だ」<sup>39</sup>と言う。終戦時点で17歳であった黄にとって、日本語使用は中国語に切り替えるに切り替えられぬ身に染みついたものであり、取替えの利かぬ文芸表現のツールとなってしまっていたのである。

そのことは、会員たちが「台北俳句会」会員へのアンケート集計の結果<sup>40</sup>にも、「日本語教育を受けてきたから」「日本語に慣れた台湾人だから」「日本語でないとかちぐはぐ」と回答を寄せていることから分かる。種々の経験履歴である主宰をはじめ会員たちは、日本語教育の結果であるとしているのである。それが、植民地で言語を奪われた悲劇の証左だということになるのだが、彼らの意識はそうではない。日本語短詩文芸を嗜む人々が、日本統治時代の懐かしい快い経験の記憶から、日本語を使用していることは否めない。

岡崎は、黄が「日本語こそが自分のことば」を創作の原点に置いている点では、「台湾歌壇」の歌人たちと同じだが、「日本語」「日本」「日本人」に対する考え方や姿勢となるとまるで違って、親日家とは思えない、日本崇拜も憧れもない、日本語を使っている、台湾の土地から生まれた文芸であり、日本語というツールを使って自分ひとりの道を拓いてい

こうと努力している<sup>41</sup>と指摘している。この点も、黄が「台湾歌壇」や「台湾川柳会」とは異なって、独自のスタンスを取り続ける要因となっていると推察される。

また黄は同じ主張を、筆者に対してもする。十社ほどの新聞記者が来訪した折<sup>42</sup>、「なぜ日本語を使っているのか（日本語で書くのか）」とか、「親日家かどうか」の質問に、「自分は親日家ではない。だからといって日本嫌いというわけではない。好きな人は好きであり、嫌いな人は嫌いなままで、国とは何のかかわりもない。但し私は、親日本語家ではある」と答えたという。その根底には「国は有害無益な存在だ」という日頃の信念が存在し、国を一つの枠として物を考える思考法を、良いこととは思わない、国がなければ愛国心といったひとりよがりの気負いもなく、国を挙げての戦争もなく、政客が権力を求めて争ったり悪を働いたりすることもないはずだとする。しかし黄は、この主張は誰にも分かってもらえないと言う。黄の日本語使用は、またも国家無用論に帰結するのである<sup>43</sup>。

「政治に関わらない」に関しては、「台北俳句会」主宰と会員間の意識の差異があるように見えるが、そのことに関しては後述する。この共通認識をもとに現在に至っており、彼らの創作意欲に何ら支障はないのである。その共通認識が彼らのスタンスであり、台湾の地での居心地の良さが確保される。つまりは戦後の「台北俳句会」が、日本語使用の日本語俳句をすることにより、社会の中心から排除され、その社会空間において、更にこれ以上、状況を悪化されずに生きようとするための共通認識である。そして「政治に関わらない」という共通認識が、その居場所を獲得するために、不可欠なのである。彼らはこの方策を導入することによって、台湾人である会員同士間も、外省人など外来の台湾在住の人に対しても、台湾という空間を安住の地とし、また「日本語残留孤児」としての居場所も、周縁化されながらも安定性と同一性を得ているとの共通認識に到達しているのである。

ところで台湾における国語は、強制的な2度の言語の変更がもたらした産物である。そして、国民・国家・言語の強力な枠組みの中で呻吟し、日本統治時代に身に付けた日本語の置き所を探して彷徨うのが、「台北俳句会」である。つまり帝国主義的・植民地主義的な支配による過去の罪過が、会員らを方向付け、現在の立ち位置にしている。

植民地支配から解放された後に、台湾の日本語俳句をすることは、台湾人としてあるべくして、常に、過去の支配者であった日本人であるかのように、疎外され続けた証であった。それは、黄主宰の前掲論文にも、「外来者であることは間違いなく、それへの擯斥を私は懸念していた」<sup>44</sup>と自認している。それ故に、疎外されないための手段として「政治に関わらない」を護身符とする。台湾自体がどこの国家か定まらず、言語も北京語が国語であるにも拘らず、台湾語も日本語も混在している。その中で生き延びるには、「政治に関わらない」が護身符となったことは、容易に頷ける。熱弁を揮ってこのことを力説する古参の会員の姿が、今も脳裏に焼きついている。「台北俳句会」は、彼らを大海原の孤帆船とすると、「政治には関わらない」として掲げる大義名分と護身符を容認する港だけに寄港して帆を休め、老朽化する船体を案じながら、将来の当てもないのにまた船出していくイメージである。そのことが「日本語残留孤児」としての居場所探しでもあると考える。

事例Cの戦後より持続した感受性に秘かに暖められて、期せずして発せられたこの「日本語残留孤児」の語句は、彼女独特の感受性の吐露であると共に、「台北俳句会」会員のそれでもある。つまり日本に裏切られた「残留孤児」の思いは、植民地時代の日本から恩恵を受けた経験の記憶によって、日本語文芸（短歌・俳句・川柳）へと昇華され、黄主宰の

「政治に関わらない」ことが「日本語残留孤児」の居場所作りと符号して、「台北俳句会」独自のスタンスに到達したのである。

「政治に関わらない」は、Cの事例「会員同士は民進黨か国民党か表には出さない。それを表現するとお互いに溝が出来る。政治の話は血眼になる。いろんな立場で国は成り立つ。みんな楽しく言葉遊びして、ストレスになることは無い」という言葉から生まれる。俳句表現と実生活が表裏一体となった関係性で表わされる。そしてさらに黄主宰の「私は別に政治を詠んでいけないと言っていない。何を詠もうと勝手、また政治を詠んでそれが優れた作品にならないとも言わない。ただ句会は会員みんなのものであり、個人の作が何かのとぼっちりで、他の会員に迷惑のかかる恐れがあり得ることを、その危険性を警戒したい。物事はこじつければ何とでも解釈できるもの、政治はからくりで満ちており、裏の裏に何が仕組まれているか、知れたものではない」<sup>45</sup>という言葉から、黄は、政治を詠まない方が、「台北俳句会」のためだとして、「政治には関わらない」理由付けを明確にする。そうしなければ、黄はその危惧を感じているのである。この言が2007年11月のものであるから、現在もなお継続する共通意識なのである。そしてこれは、台湾内の現在の政治情勢に関わるものとして狭義に捉えられるであろうが、その先に繋がる広義の世界情勢があることを、台湾の空の下、未だに自己もその他も共に安定しない空間にしながら、察知しているのである。その詳細は、次節に述べる。

黄靈芝の「国家無用論」は、もとはといえば、いろいろ他国語を試した上で、最も自分に適して身についた日本語を、誰にも気兼ねなくツールとして使用することを、希求しての主張であろう。彼ら「台北俳句会」会員は、排他化・周縁化されずに主体的に生きたいが、「日本語残留孤児」として居場所獲得に配慮しなくてはならない。黄靈芝の「政治に関わらない」「国家無用論」と「日本語残留孤児」の観点は、ここに一致するのである。

更に言及するならば、文学である俳句は、何者にも束縛されず、純粹に独立し、自己の思いと感性を表現すべきものであるはずである。ところが、個人とは関わりのない、歴史の変遷による外的条件によって、表現の自由を制限しなくてはならない台湾の実情を、黄靈芝は怒りと共に嘆いているのであろう。特に「政治には関わらない」という護身符は、やむに已まれぬ防衛の表象なのであろう。言い掛かりによって、「台北俳句会」それ自身が消滅の憂き目に遭うよりも、永続の方策を講じているのである。正面からぶち当たるのではなく、表現の自由独立の思想を貫徹するための、隠れ蓑なのかもしれない。この事実こそ、台湾社会における「台北俳句会」の存在価値があり、思想的意義も認められるのではないだろうか。

### 第三節 一句に内包される台湾排除の世界空間

老眼に簡体字習ふ文化の日

頼天河

この句について、頼天河が老眼の年齢であることは分かるが、簡体字は大陸の文字であり、台湾使用の繁体字とは違う。文化の日も台湾にはない。謎の多い一句である。しかし、文化の日について「台北俳句会」の会員に聞けば、すぐに答は返ってくる。戦前日本統治期

の「明治節」に当たるという。つまり老いた自分が、今になって頼の銀行マンである故の仕事上や資料探しのために簡体字を学ばなければならない、遙か遠くなった日本の祝日である文化の日（明治節）の今日に、というのである。台湾の国語の変遷と更に簡体字の必要にも迫られる昨今の、台湾の経済事情や世相を、わが身に照らして哀感をこめて詠っている。一見謎めいて解釈困難に思わせるが、実は、一語一語に込められた意味を紐解くと、老眼に込められた台湾の歴史と近隣との関係性が、17文字に濃密に凝縮され、また展開されていることが解明される。句中には、政治をストレートに詠めないが、しかし、自己の存在を、二つの国日本と中国のはざまで、今なお呻吟するものとして、なおかつ台湾人であるはずの自己が、老いて何とも儂げな存在として詠み込まれている。台湾の地の自己は、台湾人であるはずだが、外部の二つの強力な国家の歴史が覆い被せられ、台湾だけの独立したものとはならない。他国を含む空間が、否応無しに拡大される。過去の統治者日本と、統合か独立かと台湾を揺らす相手、中国を含む空間である。これらは以下が裏付ける。

若林正丈は「台湾ナショナリズムが、近代の台湾社会にとっての日本と中国という二つの『忘れ得ぬ他者』との関係から形成された」と論じ、また「歴史時代に登場して以来台湾は、東アジアに盛衰する中国と日本という中心に対する周縁に位置づけられ、ために台湾住民は2度にわたる国家帰属の変更とそれに伴うアイデンティティの緊張を経験してきた」のであり、「台湾ナショナリズムは、台湾の歴史的・地政学的周縁性の産物、或いはそれへの反発の産物として理解できる」<sup>46</sup>と述べている。この五・七・五の俳句「老眼に簡体字習ふ文化の日」の中に、その関係性をいみじくも投影させているのである。この句が頼天河自身の台湾ナショナリズムを内包しているとは断言しがたいが、そこまで言及せずとも、混迷する老いた魂の葛藤である。その魂の葛藤は、台湾が日本に割譲されて以来、常に日本を中心として、その周縁に位置付けられ疎外されているための足掻きでもある。そしてそれは、自分自身は台湾人であるという、アイデンティティの葛藤の表出と捉えられるのではないか。

過去の歴史の中で台湾の人々が、清朝政権下の台湾語から日本統治下の国語として日本語を強制され、戦後、国民党の常用する北京語に変更され、現在は必要に迫られて、大陸で常用の簡体字を学ぶ。その度に、台湾人であることは動揺しつつ、彼らの置かれた空間を探查し吟味しつつ、しかし、常に強力に理不尽に攻撃してくる外的圧力に抗しきれず、再び周縁化に身を委ねて呻吟する。それが台湾ナショナリズムへと高められれば、黄霊芝も「日本語を使うということについては、民族意識に欠けるという意識はあったから、終戦後中国語に切り替えられたとき、台湾意識が高まった。台湾歌壇が創設され、台北俳句会も後に続き、その後各文学も呼応した」<sup>47</sup>と述べる。このように第1節で詳述した、松永正義が論ずる台湾意識の高まりによる台湾文学の興隆は、日本語俳句を含む日本語文学と呼応しつつ、台湾ナショナリズムを支援していたとするその息吹を、現地台湾の知識人たちも、実感として肌身感じていたのである。

しかし、「台北俳句会」が日本語を使うということにおいては、台湾ナショナリズムに助勢した形ではあるが、作品の内容においては「台湾歌壇」とは異なり、かなり時代が下つてからの「台湾川柳会」のそれとも異にする。それについては、前述した。

ところで、再度ここに、黄霊芝の「国家無用論」なる主義主張を取り上げよう。

もう一度言い換えれば『排他を根性とする国』なるものを次々につくらせ、次々に排他させ、排他し返させ、争わせ、それから国際連合を設けて仲裁しようとする。放火を奨励してから火消しの同心を募るわけだ。すると勲章がもらえた。私流に言えば、国家とは次々につくるべきではなく、相携えて全滅すべきものなのである。現に今、ヨーロッパ・ユニオンはこのことに気づきはじめている<sup>48</sup>。

とする。まことに黄靈芝らしい風刺評である。国家間の皮肉な現状を言い果せて妙なりである。しかし、例えば経済の分野で言うならば、ユーロ圏を結成して、通貨の国家枠が無くなったとしても、その後は如何にするかについての言及がない。現実の世界国家間の関係性は、黄の評論通りに運ぶには困難が山積する。果たして、悪の根性を持つ人間たちが、地球上に国境なきユートピアを建設することが出来るのだろうか。とは言えこれは、いつもながらの皮肉の利いた、彼なりの理想像なのであろう。

2004年11月国際俳句規賞授賞式のため来日するまで、黄は生まれた台湾を一度も出たことなく、日本語文芸に現をぬかしていた<sup>49</sup>わけである。それにも拘らず、2度の国語の変更と2度の植民地化<sup>50</sup>を経験し、個人的には、「台湾人のくせに日本人の中学に入ってきて生意気だと上級生になぐられて大怪我をし、ひどい恐怖から一年休学したこと」<sup>51</sup>や第一節冒頭に詳述した「台北俳句会」を創設後、「友人から今にお前は捕まると聞き、俳句会にでかけるときは、短刀一振り鞆に忍ばせ、会員に何かあるときはと覚悟していた」という想起しづらい経験がある。前者は、日本統治期の日本による個人のトラウマ的経験であり、後者は、国民党政府による緊迫した経験である。しかし「台北俳句会」の大体の会員には、総体的に日本に対する嫌な経験の記憶がなく、黄ひとりがトラウマになる経験を持つ。そのことが黄を「台北俳句会」の主体性の曖昧さや「国家無用論」への独自の視座を構築させたのではないか。これら国民党と日本の二つの「他者」は、黄の個人的経験としても、「忘れ得ぬ他者」の記憶を刻んだのであろう。それが前述の、黄主宰と会員たちの受け止め方の差になっているのではないか。

次の事例の張継昭会員は、他国アメリカ合衆国の地にありながら、黄靈芝とはその立場を異にする。彼は台湾の医者の家系の三代目京都帝大医学博士を父に、生まれて小学三年一学期まで、日本語教育を受けて育った73歳である。台南の大学を卒業後、アメリカ留学し、地震学関係の仕事につき、アメリカ国籍である。引退後、日本語・中国語・英語などで小説を書いている。台湾を離れた外国にいて、出自の地に向け日本語俳句を詠み、2党相対立して揺れ動く祖国の実情に動揺する。そのため個人webサイトを立ち上げ、台湾問題の政治記事を発信し、時には台湾に出かけて自説を講じ、「台北俳句会」にも参加して危機感を訴える。「政治には関わらない」どころか、「忘れ得ぬ第三の他者」であるアメリカ合衆国から、積極的に政治に関わろうとする。

しかし、台湾の地に定住し、逃げ場のない「台北俳句会」の会員たちの共感は得られない。先般、張が訪台した折の筆者への報告にも、「台北俳句会」会員の反応は鈍かったと述懐しているのがその証拠である。張は「台北俳句会」の人々とは拠所を異にしているのに対して、彼らは何時、更なる周縁に押しやられ切り捨てられるか分からないという不安定な自己を安定化するために、台湾社会にあるいは俳句会内で、気を遣いながら生きている。そういう足掻きを、張は現実に体験してはいない。行き場のない彼らの鬱屈した思いが、

「政治には関わらない」ということであることも、理解しがたいのである。

E事例は台北市生まれの74歳<sup>52</sup>である。日本植民地時代の国語家庭に育ち、小学4年を終戦の年であったから若い方で、香港にも支社を持つ貿易商である。それゆえ頼天河と同じ条件にあり、大陸との友好関係無しに仕事は成立しないという状況にある。現在、中国寄りの政策を掲げる国民党を、あからさまに非難しがたい立場にある。先の大学教授夫人らとの座談会の折にも、発言には細心の注意を払っていた。「日本語文芸をすることによる外部からの嫌がらせは、今はもうない。日本語俳句はやはり普及も難しく、感覚的にもびったりしない。中国には特に漢詩という素晴らしい詩があるから。台湾の若者に俳句を勧めるのは無理だ。『台北俳句会』は日本語族という跡継ぎの無い老人達の会である。いつまで続くか問題だ」とする。

「台北俳句会」の未来についてCとEの二つの事例は、将来への希望は持っていない。これら事例の殆どの者は、俳句会の将来性はないとの認識があり、主宰黄靈芝もそれを肯定しつつ、強力な指導者が必要だと言う。

また、台湾そのものが東アジアにおいても、周縁化された存在であるばかりか、日米をはじめとして諸大国が中国を承認し、台湾と国交断絶し、政治的経済的な面からもアジアどころか世界の周縁に追いやられてしまっているというのが、会員の本音であろう。「台北俳句会」ではその心情を詠んだ句はないが、呉建堂は、短歌にそれを詠っている<sup>53</sup>。

極東の要衝の島蓬萊を世界の孤児になせしはだれぞや  
容共の国となりたる日本は大陸寄りの姿勢崩さず

1972年に、当時の田中首相が、アメリカに次いで中国を訪問し、日中平和友好の共同声明をしたとき、台湾の人々のショックは、大きかったと言う。1971年に、国連脱退をしたばかりであったし、たとえ政治的・経済的にもアメリカの傘下にある台湾であっても、もともと日本の領土であったのだから、アメリカに追随して、台湾に敵対する中国本土と、友好条約を結ぶ筈がないと思っていたらしい。更に、前述のごとく1970年代前後は、日本と台湾の交流関係が、官民ともに改善の兆しを見せ始めた頃であっただけに、これらの短歌には、その状況と落胆の心情が、如実に表現されていると言えよう。世界から見放された孤児の心境なのである。しかし、その後「台北俳句会」で発行された『台北俳句集』に、その種の俳句は、一見見当たらない。特に1972年は、「台北俳句会」が創設されて3年目にあたる時であり、その筋の友人から脅しをかけられていた頃であるから、少しでも嫌疑をかけられるような俳句は、詠まれようもなかったのであろう。まして指導者は黄靈芝であるから、たとえ会員が作句したとしても、黄に出句しなかったということもありうるだろう。そしてまた、現在において、この当時を回顧して詠んだ具体的な俳句も、見いだせない。このあたりの政治的なきさつは、第五章の張継昭の台湾独立運動に関わって、詳述する。

以上の事から総合すると、「台北俳句会」の世界における位置づけが、さきの短歌に見事に表現されている。俳句会員の脳裏に、常に意識的あるいは無意識的に存在していることは、「台北俳句会」が日本語俳句をすることにより、台湾の地で周縁化され、その台湾は、東アジアとそれに繋がる世界からも孤立し周縁化される危惧を、孕んでいるということ

ある。こうして「台北俳句会」は今なお、複層的周縁化をやむなく受容させられる条件下にあると言える。

最後に付記するが、2003年、短歌誌『台北歌壇』は『台湾歌壇』に正名された<sup>54</sup>。その理由は、『台湾歌壇』の「あとがき」<sup>55</sup>に、創刊当初の呉建堂の念願であったこととして、本来の名称に辿りついたとある。その背景には、台湾独立主張の民進党が政権を執ったこと（現在は国民党政権）があると歌壇のスタッフであったひとは言うが、全く政治とは関係ないと否定する現スタッフもいる。しかし前述のとおり、黄霊芝は当初俳句会名を呉建堂と同じ理由で「台北」にしているが、現在もなお、「台湾」に改名してはいない。「政治には関わらない」の主義は、ここにも誇示されているのである。

こうした日本統治以後の、台湾における「台北俳句会」存続の空間は、台湾人が日本語俳句をするが故の周縁化の形態を、時代の情勢に合わせて変容させていく。その経過の中で、台湾内での言語的・政治的軋轢と、日本・中国2国のはざまでの動揺と、そして世界における孤立の意識という複層的周縁化に対する自己防衛手段のために、「政治には関わらない」という共通認識を、護身符として堅持しているのである。

おわりに

「台北俳句会」の会員の記した「俳句自分史」の事例をもとに、聞き取りにより補充し、「台北俳句会」の暗黙の共通認識である「政治には関わらない」ということを中心に分析を試みた。

その結果、この共通認識は、「忘れ得ぬ他者」である日本と中国の2国を意識しつつ、台湾の地で日本語俳句をするがために、周縁化されざるを得ない「台北俳句会」が、自己をこの地に存続させるためのツールであり、護身符代わりの表象であった。換言すれば、それは「日本語残留孤児」であるところの日本語俳句が、更なる周縁化を防止するため、安定化を図るための苦渋の選択であり、サバイバルの方策であった。そしてそのサバイバルの方策は、現代社会の抱える錯綜した文化の問題として、世界の各地に問題化し顕在化している植民地後の諸相とも関わりを持ってくる。なぜならば、現代社会の経済は、その歴史の経過に伴って、文化の変容を、世界偏狭の地の津々浦々まで展開し、元来の土着文化を隠蔽しつつ他国文化で包含する過程をもつからである。現に台湾の若者たちは、1980年代後半からの日本ポピュラーカルチャーの流入により、日本文化とそれから派生する日本語ブームに強く影響されている。戦後の日本語禁止令を掻い潜ってきた人々には、予想だにできなかったことであろう。これを好機として活かすか否かも関心の注がれるところである。

孤帆船「日本語残留孤児」丸は今や老朽化し、今後いつまで航行できるか未知のものであり、将来の見通しは皆目立たない。いつまでも緊張を解くことが出来ず、安心して寄港できぬまま、いつしか周縁化され消滅の道を進むかもしれない。しかし筆者は、「台北俳句会」が永続すべきか否かを決めることも出来ない。それは彼ら自身が何を目指して日本語俳句を詠むかに懸かっている。現在において存在するのは「政治には関わらない」という「日本語残留孤児」の居場所探しであるならば、今後の東アジアいや世界の情勢が如何に

変化するかによって、その存続も左右されるであろう。何故ならば、台湾の政治・経済・文化等は、近隣国である中国と日本とアメリカの影響を、否応なしに受容しているからである。

日本統治後の台湾の地で日本起源の俳句を詠む「台北俳句会」は、更なる周縁化の不安に耐えながら、今後の永続の当てもなく、日本語俳句の歴史を刻みつつ、今なお航海を続けていくのである。

### ＜ 注 ＞

<sup>1</sup> 1946年10月に、国民党政府は、公文書・新聞・雑誌などの日本語使用を禁止する日本語禁止令を発令した。

<sup>2</sup> 台北俳句集編輯委員会編纂『台北俳句集』24集 台北俳句集編輯委員会、1997年、125頁。

<sup>3</sup> 明文化されてはいないが、主宰をはじめ主な会員の言動に示される暗黙の共通認識。日本語俳句を詠むこと自体が時の国民党政権への抵抗行為即ち「政治に関わること」であったため、詠まれた内容については特に「政治に関わらない」「日本への恋慕色を出さない」ことを意識的に共通認識し、「台北俳句会」存続のための自己防衛対策としているとの筆者見解。

<sup>4</sup> 今井祥子「近代俳句史の周辺で—台湾と俳句」『立教大学比較文明学紀要 境界を越えて 比較文明学の現在』第5号、2005年。

<sup>5</sup> 松永正義「台湾の日本語文学と台湾語文学」『一橋論叢』第119巻 第3号 10月号 日本評論新社、1998年。

<sup>6</sup> 黄靈芝『台湾俳句歳時記』言叢社、2000年。

<sup>7</sup> 岡崎郁子「黄靈芝論その一」『吉備国際大学社会学部 Vol.8 研究紀要』第8号、1998年。

<sup>8</sup> 黄智慧「ポストコロニアル都市の非情—台北の日本語文芸運動について」大阪市立大学院文学研究科アジア都市文化学教室編、橋爪紳也責任編集『アジア都市文化額の可能性』清文堂、2003年。

<sup>9</sup> 磯田一雄「台湾における日本語文芸活動の過去・現在・未来—俳句を中心にその教育文化的意義を点描する—」成城大学文芸学部紀要『成城文藝』第197号、2006年、37-38頁。

<sup>10</sup> 次の例を挙げている。

unseen doves	a living urn	September sunset
cooing softly	New York City holds	somewhere else
the color of smoke	the ashes	a dawn

from the internet World Haiku Memorial Wall

Kiyomi Somekawa, "The Influence of Haiku on Countries Foreign to Japan" WORLD

HAIKU REVIEW The Magazine of The World Haiku Club Vol.3, Issue 2: December 2003, p1

<sup>11</sup> 長谷川素逝の「友をはふりなみだせし目に雁たかく」「おぼろ夜のいくさのあとのしかばねよ」小田黒潮の「互てる夜のラヂオハパロフスクの聴こゆ」「天癩の地なり熱風蒸して吹く」などがある。

<sup>12</sup> 黄靈芝『台湾俳句歳時記』言叢社、2000年、285-287頁。

<sup>13</sup> 「日本短詩形愛好の風気に拍車をかけたのは、呉振蘭の一首、魚群（なむら）追ふ鷗の群が朝なぎの海を变速しつつ飛び行く が昭和四十年の宮中新年歌会始詠進に入選したことであろう」とある。

孤蓬万里『「台湾万葉集」物語』岩波書店 1994年、53頁。

<sup>14</sup> 孤蓬前掲書、51頁。

<sup>15</sup> 中華民国国防部政治部が、1950年6月1日創刊、1951年12月1日に停刊の約一年半の短期間に、中国語が読めず日本語が多民族間の共通語であった台湾人のために、政府の反共政策を浸透させる手段として、便宜的に発行した広報紙。一日一万部発行。

<sup>16</sup> 黄靈芝前掲書、281頁。

<sup>17</sup> 戒厳令下のこの種の国歌的行事には、常に政府の御用作家が優先して招かれたから、その行事の後に私たちの台北歌壇が、内々にお招きし、翌々日に黄靈芝が、古都台南に案内したとあるから、政府主導で行われていたらしい。黄靈芝たちは、政府の御用作家ではなかったことも分かる。

黄靈芝前掲書、281頁。

<sup>18</sup> 誰が言ったとは文中にないが、五島茂夫妻（短歌） 東早苗（俳句） 中河与一（作家）らの名前は上がっているので、東早苗氏が中心となって、俳句会がほしいと口々に言ったのであろう。それは、後述



の呉建堂の記述に裏付けされている。

- <sup>19</sup> 何人か集まって俳句会を催し、それに参加すること。
- <sup>20</sup> 黄霊芝前掲書、285頁。
- <sup>21</sup> 黄霊芝「台湾の俳句—その周辺ほか」『国文学』2005年9月号、91頁。
- <sup>22</sup> 黄霊芝前掲論文、93頁。
- <sup>23</sup> 『台北川柳会』「二周年記念特集会報」1996年7月、7頁。
- <sup>24</sup> 「台湾川柳会」現会員、元東呉大学日本語講師、「台北俳句会」会員、現在大阪在住。
- <sup>25</sup> ステトとはステトコープ即ち聴診器の略称、呉建堂は医師であった。
- <sup>26</sup> 俳誌『七彩』の主宰、当時の皇太子妃の俳句の指導者。
- <sup>27</sup> 次のようにも述べる。「第一回目の俳句会が、『台北歌壇』の主催で行われた。初めの頃は、俳句も『台北歌壇』誌上で発表していたが、1988年から独立して、パンフレットを出した。毎月の第二日曜に句会が行われ、黄霊芝が主幹、頼天河と陳錫恭が編集委員、毎月の第四日曜に歌会が行われ、筆者が主幹、陳継森と傅彩澄が編集委員である」。孤蓬前掲書、57頁
- <sup>28</sup> 霧社事件のこと。1930年10月27日に、台中州能高群霧社で起こった台湾原住民による日本統治時代後期における最大規模の抗日暴動事件。700人ほどの原住民暴徒と日本兵ら50人ほどの死者が出た。
- <sup>29</sup> a 孤蓬万里『台湾万葉集（続篇）』1995年、14頁。 b 同、14頁。『台北歌壇』（116集）1995年、123頁。 c 同、15頁。 d 同、229頁と『台北歌壇』（90集）1994年、122頁と同（116集）1995年、122頁。 e 『台湾万葉集（続篇）』同年、99頁。「この一首は1974年昭和49年頃霧社の桜に触発されて」とある。また呉建堂著『花をこぼして』1981年9頁に「霧社桜又も咲けり恨み持つ花岡一郎・二郎は死すとも」がある。（台北歌壇二月歌会出詠）とある。 f 同、216頁。 g 同、101頁。 h 1996年日本第11回国民文化祭（高岡）「平成今時万葉集」編纂世界公募の特選に入賞した作。 i 「俳句自分史」より本人の自選句。
- <sup>30</sup> 1947年2月28日に中国外省人と台湾本省人の間に起こった大規模な衝突事件後、多くの学者や指導者達が弾圧され、生命を奪われたこと。
- <sup>31</sup> a ホアルは中国語でぶち猫のこと。 b 1993年長男逝去で寺に行った時に。 c 1996年 鏗銭を口に唾えた蝦蟇は台湾では縁起物でお金は来るのは良いが、一銭でも浪費しないという喩え。 d 1993年カナダで孫をあやす。 e 1996年サクラメントシティにて。 f 巫永福氏は90歳を過ぎて「台湾歌壇」も「台北俳句会」も引退し、その後逝去したが、1971年出版の台北俳句集創刊号に掲載されたもの。 g 同じく創刊号に掲載され、恋の短歌で特色のある暁蘭の俳句。 h 第一章に述べた『ホトトギス』入選の句である。本人の代表作をアンケート時に挙げてもらった句であるから、ここに採用した。
- <sup>32</sup> 台北俳句集編輯委員会編纂『台北俳句集』 a 『台北俳句集』（29集）2002年、17頁。 b 同、（24集）同会、1997年、125頁。 c 黄霊芝『黄霊芝作品集』（15集）自費出版、2000年、9頁。
- <sup>33</sup> a 『台北川柳会会報』（第2回会報）台湾川柳会 1994年9月、頁無し。 b 同（第3回会報）同会、1994年10月、同頁。 c 同（第90回会報）同会、2002年1月 同頁。 d 『台湾川柳会会報』（第100回会報）同会、2002年11月、同頁。 e 同（第100回会報）同会、2002年11月、同頁。この100回会報より台湾川柳会に名称を改めた。
- <sup>34</sup> 「国語の家」という貼り紙が玄関に貼られ、日本語の標準化されたものを話す家という意味である。皇民化政策のひとつであった。
- <sup>35</sup> 司馬遼太郎『街道をゆく40 台湾紀行』朝日新聞社、1994年、122・117頁。
- <sup>36</sup> 司馬前掲書、96-97頁に、その一例として、「アメリカ国籍の天才的数学者が、1981年7月3日の早朝、台湾大学のキャンパスで変死体となって発見された。巷説では、彼は台湾独立をとなえていたという」と記述する。
- <sup>37</sup> 黄霊芝『黄霊芝作品集』巻18 自費出版、2000年、275頁。
- <sup>38</sup> 黄霊芝『台湾俳句歳時記』言叢社、2000年、280頁。
- <sup>39</sup> 黄霊芝『黄霊芝作品集』巻18 自費出版、2003年、351頁。
- <sup>40</sup> 染川清美 「俳句が海外に与えた影響～日本語残留孤児としての台湾日本語俳句」『大阪大学 21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」第5巻「イメージとしての<日本>」最終報告書』松本工房、2007年、73頁。
- <sup>41</sup> 岡崎郁子『黄霊芝物語』研文出版、2004年、180頁。
- <sup>42</sup> 2007年秋の叙勲で旭日小綬章を受章した時のこと。
- <sup>43</sup> 2007年11月23日付台湾の黄霊芝から筆者宛FAX3枚中より抜粋。
- <sup>44</sup> 黄霊芝「台湾の俳句—その周辺ほか」『国文学』2005年9月号、93頁。
- <sup>45</sup> 2007年11月23日付台湾の黄霊芝から筆者宛FAX3枚中より抜粋。
- <sup>46</sup> 若林正丈「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」『思想』岩波書店、2004年1月号、109・110頁。
- <sup>47</sup> 2007年12月12日、台北での黄霊芝の聞き取りから。

---

<sup>48</sup> 黄靈芝『黄靈芝作品集』巻18 自費出版 2000年、275頁。

<sup>49</sup> 「台湾人のくせに日本人の中学へ上がった。生意気だ。」と言って、入学式の何日か後、20人近くの上級生から暴行を受け、肋骨一本が折れ、一晩中血尿が止まらない傷を負った経験がある。重病の母を気遣って音が出ないようにちり紙で血を拭った記憶は今も黄氏を苛む。そして、「しかし今、わたしは涙で訴えたいのではない。このような私がなぜ日本語文芸に現を抜かしているのか、その文化的意味合いを考えてみたいのだ。が、考えても分からないため、誰かが代わりに考えてくださいと訴えているのである」

黄靈芝『台湾俳句歳時記』言叢社、2000年、284頁。

<sup>50</sup> 一度目は日本による統治、2度目は本省人（台湾人）から見た外省人中国（国民党）の統治としてとらえている。この見方についての一例として、第三者の立場から、下記の論文の例を挙げる。

「多くの元台湾住民にとって、日本の植民地時代と比べたら、むしろ国民党政権の方がよりいっそう“植民地風”に見える」

Vickers, Edward, “Frontiers of Memory - Conflict, Imperialism and Official Histories in the Formation of Post cold War Taiwan Identity,” Sheila Mayoshi Jager and Rana Mitter Ed., *Ruptured Histories*, Harvard University Press, 2007, p211.

<sup>51</sup> 黄靈芝『黄靈芝作品集』巻18 自費出版、2000年 221-222頁。

<sup>52</sup> 脳卒中療養後 2008年逝去。この「俳句自分史」は倒れる1ヵ月前に書かれたもの。ご冥福を祈る。

<sup>53</sup> 弧蓬万里『台湾万葉集（続編）』集英社、1995年、21頁。

<sup>54</sup> 『台湾歌壇』創立四十周年記念特集 台湾歌壇編集委員会、2008年、「まえがき」と「あとがき」、『台湾歌壇』第9集 台湾歌壇編集委員会、2008年、「巻頭の言」p1。

<sup>55</sup> 『台湾歌壇』第1集（呉建堂創刊138輯）台湾歌壇代表 王進益「あとがき」。

## 第四章 「台北俳句会」における「俳句自分史」アンソロジーの語りを中心に

### はじめに 本章の問題と方法

第三章を受けて、黄霊芝と頼天河の作品や、また「台湾俳句会」会員や周辺に存在する、「台湾川柳会」会員の作品や思いの中から、現在の彼らの立ち位置の深層をより深く分析する。更に会員の「俳句自分史」に含まれる自己推薦の俳句を並べて、筆者の視点で解釈する。勿論、政治性のある俳句をあげてもらうことを目的として「俳句自分史」を募集したのではないため、結論をそこへ意図的に集約できるものばかりではない。会員たちの作句への思いとその表現を受け止めて解釈したいのである。

第三章で、会の主宰であり指導者である黄霊芝は、台北俳句会会員の作品には、政治性を含んだものはないであろうと言い、黄は、その種の意図あるものは、この俳句会では詠まない暗黙の不文律があるとしていた。年に一度「台北俳句会」が発行する『台北俳句集』の監修は黄主宰であるから、当然その不文律通りの選句となり、それらの俳句の中に政治性はないはずである。主宰が選句の段階で、俳句会の趣旨通りに選句する以前に彼ら会員たちは、そのことをおおよそ周知していると推察した。「政治には関わらない」俳句を詠まなければいけないことは、会員たちの幾人かが証言している。

但し中には、そのことを意識していない会員もいる。しかし、その会員は、周りの会員と同様に、政治性のない俳句を詠んでいることも分かった。あるいは第五章にクローズアップした張継昭のごとく、入会時に幹部に政治性を持ち込まないよう釘を刺された者もいる。したがって、彼らの「俳句自分史」を紐解く場合、仮に政治性は無いものとして、アンソロジーにしている。政治性は無いのが「台北俳句会」の特徴である。

事実、一見したところでは、かれらの俳句には政治性は認められない。黄主宰の望む俳句と言えよう。しかし、表面そのままを解釈するのは、本筋ではない。主宰の望むと望まざるとに拘らず、独自の解釈のメスを入れてみざるを得ない。更に言うならば、政治性が認められないことそのことが、政治性を強いられざるを得ない「台北俳句会」の立ち位置を象徴していると言えるのではないだろうか。それならば、第三章で述べたように、抑えても抑えきれない「政治に関わらない」ことと逆の感情が、垣間見えてくるはずである。

これはわずか一部の作品に認められることであるが、人間の根源的な欲求であると思う。したがってこの章の分析は、「政治に関わる」俳句を見出す作業であると同時に、台湾短詩文芸表現の根本に迫る作業である。単なる懐古趣味の表現に限定されるものではない。

事例等の本名掲載は各人の許可を得ているが、諸般の事情を考慮して匿名とする。但し、必要な人物については、本名を採用した。

### 第一節 黄霊芝と頼天河の俳句における台湾に生きること

黄霊芝の第三章で取り上げた「二二八止まらずの雨になりにけり」と、彼のその他の作品について分析しよう。二・二八事件の日が巡ってきて、止まらずの雨がそれに関わる辛苦の

思いを持つ人々や、作者の涙とオーバーラップする。「政治には関わらない」を主張する黄にしては珍しく政治を匂わせる句である。しかし、全く攻撃的でなく、当局に睨まれる表現も無いといえなく、ただひたすらに事件の重さを受諾させる。

事件の重さを、具体的に述べてみよう。

1947年2月28日に起きた、台北市内の街頭でヤミ煙草を売っていた寡婦が、取締官に殴打されたことをきっかけに、国民党政府に対する憤懣を持つ本省人達が敵対し、全台北市内が暴動状態となり、まだ中国本土にいた蒋介石から送られた軍隊によって、徹底的に弾圧された事件である。その後首謀者として本省人インテリや有力者達等、約2万人から3万人が処刑され行方不明になったという。そのために、政府に敵対する勢力は、活動拠点を海外に移していくのだが、そのことは、第五章に詳述する。

一方、この句が政治的であるという解釈は、黄にとって嬉しいことではないと推察される。そのことは、黄と筆者の後のFAX交信に表明されている。

『日本経済新聞』に「俳句に託す台湾の心」という黄のエッセイ<sup>1</sup>が掲載され、「生き残る蟬みて人みて楽しまず」の俳句を挙げた。ただ自分だけのために日本語俳句を詠んでいるという内容であったが、この俳句は、「あれから幾星霜を重ねただろう。戒厳令が解かれて久しい」という文の後に、書かれていた。このことと、自分ひとりのために日本語俳句を詠むのだと述べられて、その裏を考えようとする人がいるだろうか。すぐさま黄にFAXして、「日本語を使えない日々の辛い俳句は他にないか、他の会員の作品にもないか、それらの載っている本を送付いただきたい」と乞うたのだった。黄は、以下のように返信してきた。

FAX 拝受いたしました。

近日中、何かとりまとめて本をお送りいたします。ご参考にしてください。  
ただ、私の一貫した立場として、政治には一切関わらない、という態度を取っておりますので、お役に立つ句は、ほとんどないと思います。日本の方は多く、政治的な見解をもとに、台湾日文文芸を見る傾向が強いようですが、立脚点からして違うと思います。

誰彼会員へのお問い合わせは、よろしいと思いますものの、発表される前に一応当人にお見せしてやってください。語り手と聞き手の間にずれの多いことも多いですから。取り急ぎ、右まで。  
2005. 11. 25 黄靈芝

以上から、主宰として「政治には一切かかわらない」という毅然とした立場を主張し、「台北俳句会」会員を守ろうとする強い意思が感じられる。恐らく2004年12月の「台北俳句会」例会時に催した座談会の録音起こしを、座談会出席者に読んでもらい、匿名にするか否かを打診したことをも、含んでいると思われた。その出席者たちが幾度も、本名で載せるか匿名にするか逡巡し、やっと全員匿名にすることになった経緯からしても、「台北俳句会」会員の台湾における微妙な立ち位置が、こういう座談の場にさえ色濃く反映されてくるのである。うっかり物言えぬ実情があるのであろう。座談者のひとりにAなる大学教授夫人がいたが、自分の発言によって夫の身に何かあっては<sup>2</sup>との思いが、募ってきたかもしれない。台湾に生きるという意味を、初めて衝撃的に実感させられた事例である。

また、2004年11月、黄の「国際俳句特別賞」授与式参列のため同伴した「台北俳句会」幹部の3人が、わたしの読んでいる書物の出版元を見て、途端にその本への関心を示さなくなかったことを思い出す。後に分かったことであるが、その本は台湾では、政治的に偏った本<sup>3</sup>であつたらしい。台湾俳句の調査を始めた当初、大学内の図書館や書店に並ぶ台湾関係の書物は、手当たり次第に読んでいたから、彼らのそうした態度を、ただ訝しく思っただけであつたが、実は台湾の政治事情と関係すると思ひ当たる。それは、単なる「台北俳句会」会員の過敏性による症状であろうか。言語に顕現されない微妙でいて鮮烈な印象を、感受させるのである。

黄のこの返信 FAX は、2005年末のものであるが、この折黄から送られてきた『黄靈芝作品集』巻20<sup>4</sup>は、句集「蟬300句」の特集号であり、その中に先の「生き残る蟬ゐて人ゐて楽しまず」の俳句が収録されている。その句集より筆者の選句によって5句抜粋する。

逃ぐる蟬逃げてくる蟬不意の風	a
蟬しぐれしぐれ放題無人島	b
熊蟬におべんちゃらしてチッチ蟬	c
空蟬の朽葉湿りの中の墓所	d
山へなど蟬の嫌ひな君とでは	e

(以上5句 黄の2003年出版までの作品)

黄は本句集後記に、日本語を使って俳句や文芸をする理由を述べる。「日本語は、他の民族の言語より術が行使しやすく出来ている。— とにかくこれほど有利な工具を存分に持った言語ないし民族は、文芸上他にいないだろう。ずるいといつていいほどだ。だから私は外国人のくせに日本語を使っている。— この句集の句数は、実際には400句以上あるが、何せ数は少ない方が品がよいのだからと」<sup>5</sup>と言う。

この引用以外の文章表現は、広範で深淵な知識を、ユーモアで包み込んで披歴している。そのためか、彼の文章は興味をそそり、飽きさせない。そのことは、俳句表現にも共通で、この句集に収録された句の中から、何句かを抜粋するなどということは、至難の技と言うほかはない。上記5句各々の句は、筆者好みではあるが、なかなか意味深長ではなかろうか。これらはユーモアというより、彼らしい諧謔・風刺の効いた、ある一面では身震いさせる裏があると見て取ってしまう。それが政治でなく自己生活身の描写であろうが、彼の人間性のみならず、その奥を覗きたい一瞬の閃きを、読者の脳裏へと誘う。彼がいか「ただ自分一人のために日本語文芸をする」とは言え、まあ、どうあがいても、日本語文芸をする自分は、台湾の地を居心地がよいとは思っていないのだろう。

例えば a は自分を中心において、自分から逃げ出すものもいれば、自分を慕ってくるものもいるが、そのように頼ってきた者たち同士でも、不意の邪魔者が襲ってきて、安穩とはしてられないという解釈を試みた。b は、第三章終末部に挙げた孤蓬万里(吳建堂)「極東の要衝の島蓬萊を世界の孤児になせしはだれぞや」の短歌に通じるものがある。うるさい位に騒ぎに騒いでも、ほつたらかしの無人島のような台湾よ。何を騒いでいるのだ。世界の誰からも見捨てられているのではないかという孤独の思いであろう。c は、自分の仲間と思っていた人が、国民党政府に迎合した文章を書いた時の、黄なりの嫌味であろう。d は、

自分は空蟬のように、湿った朽ち葉の墓所に葬られているような日々を過ごしている。何と惨めなことだと不遇を嘆いている。eは、前4句とは多少、黄の立ち位置が異なるが、うるさい人ばかりいるところへ、わたしと同じ気持ちを持つあなたと共に、苦勞しに行きたくないなあというもので、やはり、孤立した自分を詠んでいると思われる。

これらの句には、黄自身の持つ台湾社会や世界への独特な見方があり、それは、第三章で詳述した、日本語残留孤児の心境に通じるわけである。そしてその心境は、

昨年でしたか、台湾に駐在する日本の新聞社十社の記者の方々が訪問に見えましたが、会話の中でその人たちが一番興味を持ったのは、私がなぜ日本語を使っているのか(日本語で書くのか)と私が親日家かどうか、ということでした。私は、「自分は親日家ではない」と答えましたが、だからといって「日本嫌い」というわけではない。好きな人は好きであり、嫌いな人は嫌いなままで、国とは何のかかわりもない、とお答えしたのです。嫌いと言えば私は台湾人が嫌いです。中でも私自身が一番嫌いです。但し、わたしは「親日本語家ではある」と申したはずですが、その根底には「国は有害無益な存在だ」という日頃の信念が存在しているわけです。

に繋がる見地である。これは2007年12月「台北俳句会」俳句会例会のあと、何名かの会員にインタビューすることの依頼書に対して、2007年11月27日付返信FAX3ページに亘りびっしり書かれた文章中の極一部である。この短い語句の中にも、彼の置かれた台湾での立ち位置が読み取れる。それは彼の存在した台湾社会と、それに対峙してきた彼との、相互の関係を踏まえた歴史の表出とも言えよう。

これより2年ほど前、黄のエッセイ「台湾の俳句—その周辺ほか」<sup>6</sup>が、発表されていた。実はこの小論文の存在を筆者が知ったのは、かなり後年の2009年11月だった。顧みれば2004年末、私が催した「台北俳句会」定例会後の座談会の時から、その後の黄や会員とのやり取りを契機に書かれたものかと思う。否それ以前から取り沙汰されて、食傷気味のアイデンティティや政治との関わりを、日本の読者に認識してもらおうとの、意欲の論文と推察された。この論文においても黄が主張するのは、会員達は種々の入会理由を持つだろうかと前置きして、「ただ私たちの会では会の中に政治活動と商業行為を持ち込まないことを不文律とした。それというのも、故あってのことである」<sup>7</sup>として、二・二八事件など台湾の政治歴史を述べ、大陸から敗走してきた政府から、如何なる反政府嫌疑をかけられるか知れない不安定な情勢を経てのことであると、「このことから台湾という一つの社会の中での私たちの日文俳句の会が、外来者であることは間違いなく、それへの擯斥を私は懸念していたが」、俳句会は「使いみちのない雑木」だと政府に思われたせいか、今日まで生き延びた<sup>8</sup>としている。従って、第三章に詳述したように、ひとりの会員の一言が、外部にどんな影響を及ぼすかとの危惧があるため、前述の不文律が存在しなければならないのであろう。

ところで第三章で既述しているが、2004年にこの調査を手がけた当初、黄智慧の前掲論考<sup>9</sup>に、その関係の俳句の収録がないことと、磯田がその論<sup>10</sup>の中で、黄智慧の論文に二重植民後の心理的抵抗の表現をする俳句、つまり黄霊芝と筆者の言う「政治に関わる」俳句がないのは、俳句が短歌のような叙事性に乏しいからと、詩形にその根拠を求めていた。筆

者はそうではないのである。それに該当する俳句がない故、黄智慧が引用できなかったとするのが、筆者の本論の仮説であった。そして、その後の調査を積み上げる中で、筆者が会員との交流から、肌身に沁みて感じ取ってきたものを踏まえながら、会員の台北俳句集や「俳句自分史」とアンケートと聞き取りなどに加えて、黄靈芝の著作などから判断して、「政治に関わる」俳句の有無の裏づけを重ねてきたのである。会員各々認識の差異はあるが、「政治には関わらない」は現在においても護身符なのである。政治と商業は一体化している場合が多いので、政治に含めて考える。

なお、黄靈芝の通常の俳句5句を、台北俳句集から参考に挙げておく。

食意地の厚き唇鮫鱈肝	1994年	f
意地悪の風邪も入れやる年祝	1997年	g
風光る岬に夢見の女王岩	2000年	h
七面鳥明日の厨を知らでの威	2001年	i
どの蟬も枝に命中して止まる	2003年	j

上5句は無作為抽出した句であるが、いずれにしても、黄靈芝の諧謔好みは巧みに表現されている。fの「厚き唇」は、人も鮫鱈にも懸けているのだろう。gには、折角の年祝いに風邪を引き込んだ男の無念さが、見ている周囲の者への可笑しささえ誘う。iの明日の命を知らぬ七面鳥を「厨を知らでの威」と皮肉ブラックユーモアは、まさに黄靈芝の真骨頂である。しかも、最後の句の「命中して止まる」という蟬の習性の表現には、事象の本質を適格に捉える黄の才覚が見て取れる。

次に、頼天河においては、「老眼に簡体字習ふ文化の日」と同じ『台北俳句集』巻24の同ページに「半世紀慣れし日本語燈下親し」という句がある。この俳句集は、1994年度に出来た会員の作品を、1997年に出版したものである。毎俳句集とも、作句後3年して出版されている。そうすると、1994年に2作品が出来たことになり、「老眼に」の句は、悲哀を感じさせるが、「半世紀」の方は、日本統治期を回顧するノスタルジーを感じさせる。これら共に、戒厳令が解かれて8年も経った頃であるから、作る頼も編集する黄も、この程度であれば政治に関わりないとしたのであろう。第三章に述べた「一家三代二国語光復節」が載せられた司馬良太郎の『街道をゆく40台湾紀行』の出版は1994年であり、朝日新聞に連載されたのはそれ以前であるから、同時代の作品であろう。いずれにしても、黄の多くの作品の中で、上記の句が台湾の歴史に翻弄されてきた台湾人の思いを、じんわりと滲み出させている。政治に関わらないが故の、内向させがたい感性の発露とでも言えようか。頼天河は既に故人、「俳句自分史」は書けないため、「台北俳句集」から筆者の選句による作品を挙げる。

雑巾のごとバナナ霜枯るる	1989年	a
竹夫人とかを抱きたき夏ふとん	1990年	b
百歩蛇に蕃刀抜かず逃がしけり	1995年	c
ひきがへる相好崩す皺もたず	1996年	d
台湾語日本語巧みに鰻食らう	1998年	e

頼の俳句は、一見して、いわゆる諧謔をこめた俳諧の雰囲気を持つ。更に a 以外は、何となく富裕な大人（たいじん）の雰囲気を感じさせる。c・d は、国民党の政策や役人を百歩蛇に例え、喧嘩せず怒りを抑えて、大きく構えてやり過ぎたということか。百歩蛇はクサリヘビ科の猛毒を持つ台湾の蛇で、樹上から襲うこともあり、噛まれたら、百歩歩かないうちに死んでしまうと言われるほどであるから、国民党が如何に怖い存在かと言いたいのか。そして、自分はそれらを恐れはしないと言っているのだろう。ひきがえるは自分自身のこと。嫌な相手に対して、愛想よくしたり、媚びたりしない気概を持つ男だと主張しているのであろう。嫌な相手はだれだろうか、国民党だろうか。e は、日本が去った後の何気ない一場面を、鋭く切り取って提示してくれている。そこには、全く哀感はなく、堂々と日本語も巧みに使って、鰻を食ってやっているという不遜な態度である。これが戦後の台湾なのということだろう。a はバナナを台湾人に例えると、これまた、反骨の句になる。b は、気の利いたおしゃれな川柳というところか。川柳歴十年にもなる頼だからこそその俳句である。故に、川柳会の初代主宰に推挙されたのも頷ける。

頼天河をよく知る会員のひとりの、頼天河評を付記する。

頼天河さんの「老眼に簡体字習ふ文化の日」について、

簡体字を老人は習わない。中共の言葉だから。若くない人も習わないことはないが、私は翻訳をしていたから習った。頼天河さんは、習っているはずがない。単なる題材として使ったのではないか。文化の日も台湾には無く、明治節のことだ。頼天河氏は俳句の名人だから必然的に川柳会主宰に選ばれた。川柳歴は長く、台中商業学校以来していたが、日本の新聞に投句していて、阿川という選者から俳句を勧められて始めた。天河さんは、諧謔を解する人、指導力もあり、犠牲的精神もあり、毎回会の運営費を出し、俳句会にもよく寄付をしていた。それだけ財力もある。それだけに個性も強くて、よく思わない人もいた。わたしとはよく気が合って、酒を飲んででは句の話をした。私がこれがよい!といったものは、日本に投句すると、よく特選に入ったので、君の選句眼は優れているとよく言われた。いい先輩だった<sup>11</sup>

と言う。筆者との解釈の差異はあるが、事実でないならば尚更、「老眼に」の句をイメージすると、頼の心情が、思いやられるのである。彼の俳句は、川柳歴が長いせいとか、俳諧発祥本来の座の諧謔性を理解してのことか、作風はユーモアと風刺に溢れている。今回の選句は、敢えて俳諧の特徴のないものも入れた。また、この評にもあるように、会員達は、財力のある人が多く、「台湾川柳会」の主宰も、代々の主宰は経済力のある人が任じられたというから、日本語俳句・川柳をする人々は、恵まれた境遇の人々で構成されているのである。それは日本統治期以来の歴史を継続・象徴するものでもある。戦前に日本語教育を十分受けられた台湾の人々は、富裕層であり、それは戦後の今日にも継承されているのである。

以上、「台北俳句会」主宰の黄靈芝と代表的会員であり、初代「台北川柳会」主宰でもあった頼天河の俳句を、詳細に調査してみると、「政治には関わらない」ことを不文律としながら、実は、政府に対する不満をあちこちに込めて、素知らぬふりで詠っているのである。



この二人が、そのことを意識しているか否かは不明である。特に黄については、抑えきれない心の内が、無意識に表現されたい。単なる楽しみのための文芸とはいえ、生き様を心底から表現する文学であり、芸術なのである。

## 第二節 「台北俳句会」会員の俳句とその語り

その他、「台北俳句会」会員の「俳句自分史」の中に、自薦として挙げられた作品を見てみよう。事例を示す大文字のアルファベットは、第三章の事例に符号する。俳句後尾の（ ）内は、全て本人の説明である。

事例B 78歳（2006年時 以下同様） 「台湾歌壇」「台北俳句会」会員、春燈所属  
コスモス短歌会「台北俳句会」支部長。

相思樹の林騒ぎて海光る	1970年	a
それぞれに秘め持つ過去や虫を聞く	1970年	b
子育ての思い出古き扇風機	1988年	c
この草もあの草も菓草芳しき	1989年	d
手鏡の余白の埋めて翳雲	1993年	e
大理石の狛犬喘ぐ油照り	1996年	f

俳句を作るよさは、すべてに注意してものごとを観察するようになった。会員同士の親睦にも大いに役立つ。毎月一回作る会、友と会え互いに競い合い励まし合え友情を分かち合えるのは何よりの収穫である。台湾に住んでいる以上風俗・文化・気候すべて違うので台湾独特の季題で作ることになる。台北句会は年々平均年齢が80歳に近づいているので、多くを望まない。皆が元気で情熱を失わず毎月例会に出席出来るよう念ずるのみ（私自身も79歳）。中国語は、日常の生活の中からすぐに覚えるが、正式に習ったのは遅く補習班（塾）やYWCAで、だから中国語はまずい。台湾の75歳以下の人たちは終戦時小学生だったから、日本語はまずい。

aのざわめく相思樹の林と光る海のコントラストが鮮やかで、bとdには、句会構成員のことかと思わせる節もあり、意味深長である。cは昔の思い出に浸り、eの手鏡に映る、老いた自分の顔と翳雲の対比が、爽やかでいて少しさびしげな思いを感じさせ、fは、台湾の厳しい暑さを、「狛犬喘ぐ」に凝縮している。

後日Bについて、補足のための聞き取りを行った。その中から、次の事柄が感得できた。京大医学部卒の台湾人と結婚して、戦前に台湾に来たBにとって、台湾の人々の温かさを感じる日々であった。日本人と台湾人との差別はなかった。戦後になっても、大陸から來台した人々との軋轢が多少はあっても、日常生活の中に厳しく感じる経験はしていない。従って詠まれる句においては、その人柄もあるのか、露骨な表現はない。政治性を鬱積させる経験が全くないというより、俳句に詠まないことに、抵抗感がないように見える。思

想的には反対派が会員にいても、それには拘泥せずに、句作しているとのことである。

彼女はこの聞き取りのために、わざわざ筆者のホテルを訪ねてきて、2時間ほど話を聞かせてくれたことに、筆者は感謝している。その表情や物腰に、台湾富裕層らしい落ち着きが滲み出ていた。

事例C 「台北俳句会」会員、台湾生まれ、80歳。

文旦の里を尋ね来て草深き

(台北句会へ角川文庫から季題が出された時に出した句、完結編で文旦の季題で、父母の居ない里へ行った時の心) a

弥生や寺は悲しき顔ばかり 1993年 b (長男逝去で寺へ行った時)

頼られていて頼りなく秋扇 c

頼られての句は、司馬遼太郎街道をゆく(40)に選ばれ、日本の朝日新聞に掲載されたもの。主人は、糖尿と車事故で視覚神経がやられ、18年間の闘病生活、病院を転々とした。自分も年老いて、看病に疲れ果てて、秋扇のように捨てられるのではないか(病人を捨てると思う鑑賞者もいるが)という私の心情。

俳句は、心の眼で掴む。俳句は五・七・五で歯切れの良い語呂のよさに気を付けて作っている。言葉の詩だから、また省略文学とも言われているので、無駄な言葉は省き、内容を濃くする技巧が大切だと教わっている。日々の身边に自然とふれ合い素材を見つけ観察し季を忘れないように17字にする。最初はあまり難しく考えずにみたま俳句にならべる。写生の第一歩を意識して学んでいる。湾俳はしない。教わった日本語でしか作れない。その頃、藤山一郎のレコード14枚2700円で送ってもらった。当時レコードは、SP・LP版、今はテープ、CDだけ。

aもbも、美しい情景の中に、亡き両親と息子を偲ぶ心情が、込み上げてくる。特にbは、気丈な彼女が打ちひしがれている心情を、見事に描写している。cは、病床の夫の傍らで、動く扇に込める様々な思いを想起させる。相反する解釈が成り立つのも、また興味深い。司馬遼太郎は、どちらの意味にとったのであろうか。

Cもまた、2004年11月7日に、黄靈芝の「国際俳句子規賞授賞式」のため随行し、来日した。その折にも、次のように語っていた。以下、その折に語ったことをまとめてみると、次の通りである。

C自身の客家出身の父親は地元の名士だったため、小中学校ともに日本人の学校に行き、教育内容が一般台湾人の公学校よりいい教育が受けられたと言う。自分は既に80歳を超えたが、私の小学校は日本人の学校に通っていたからという訳でもないがと言いながら、「教育勅語」は今でも全文言えると暗唱して見せてくれた。そして家には皇民化政策による「天照大神」のお札と「八咫鏡・天叢雲劍・八咫瓊勾玉」の絵が描いてある紙切れが張ってあり、祖先の位牌は仏壇から捨てさせられた。三種の神器の名前も淀みなく口をついて出てくる。「国語の家」という張り紙も玄関にしてあり、日本語の標準化されたのを話す家という意味である。そういう家は他の人の家より日本

人並みに優遇され、いろんな配給も質量共によかった。

Cから頂いたお土産である手作りの干柿や草餅は、筆者の母が作っていたものと殆ど同じだ。教育勅語も、父や母がよく聞かせてくれていたから思い出す、まるで母を見ているようだ。台湾人か日本人か全く分からない。昔なつかし明治大正時代の人みたいに見えるとの筆者の反応に対してCは、

私たちは意識せずに父から教わった通りにこれらを作ってきた。父は日本の生活に馴れていたのだから、そのまま私に伝えられたと思う。今、日本の俳句会の人々とも交流があるが、その人たちからも日本人らしいと言われる。私も本当の日本人を見たかったら台湾においでと言っている。私達は日本語の残留孤児だ

と言う。

また、京都に行った時、美空ひばりの記念館に行きたいと言うので入ると、筆者の知らないひばりの歌まで、次から次へと歌いながら館内を巡っていく。あたかもその歌を知っていて当たり前という自然な様子である。周りの日本人も、とても外国人とは思わなかっただろう。美空ひばりは戦後の歌手であるから、日本語が禁止された時代に、どうしてこれだけ多くの情報を得て歌えるのか疑問に思うが、戦後の日本文化のひとつであるポピュラーカルチャーなどは、かなりの量で裏口から流入していたと、台北俳句会会員の中にも、証言する人がいる。

Cが日本人より日本人らしいと言われることについて、人それぞれの見解はあろうが、国家とは国民とは、言語とは文化とは何か、痛切に考えざるを得ない。「本当の日本人を見たかったら台湾においで」と、自信を持って言える外国台湾の台湾人とは、何者か。国家は違っても、元日本人が、日本人の文化を当然のごとく継承し、如何にも自然に台湾で暮らしている。その日常生活は日本統治時代の継続であっても、言語は中国語を使用しなければならない。しかし、日本語は流暢で、日本に来て、日本人として違和感がない。親戚の台湾での葬儀にも、Cは日本語で弔辞を読んでいるというから、大事な場面では、元日本人であることを、誇示しているのだろうか。

元被植民側であった者が、これほど日本に愛着を持てるということは、本人たちにとって、幸せなことなのだろう。たとえ、客観的に見て、植民地後の悲劇だと評されようが、Cにとっては、自然な生き方であり、当然の生活表現なのである。50年間日本人であった証は、一朝一夕に消滅するものではないのである。その時代に培われた生活態度と生き様は、魂の奥まで浸透しているのである。それを左右する根源が、戦争によって国家を取ったり、割譲したりする政治である。台湾の国民は、その政治の力によって、国籍も言語も文化も変遷させられるが、好ましいと思う言語や文化は、そのままその身に沁みついて、事あるごとに表面化するであろう。Cの場合は、日本統治時代が、好ましい記憶の中にあるという前提である。Cの俳句には政治は詠われていないが、生き様そのままだが、政治と関わっていることを示唆するのである。ここでの政治の意味は、国家の政策である。Cが自分の身体で、自然に表現する日本語も日本文化も、筆者は植民地後の悲劇とは考えたくない。むしろ元植民側の日本人として、これほどまでに日本に、好感を持ってもらえる

ことに、感謝の念を禁じ得ないのである。

事例D 台湾生まれ、1925年（大正14年）生まれ、82歳、「台北俳句会」「台湾川柳会」「台湾歌壇」会員。2014年逝去<sup>12</sup>。

田螺狩の憶ひ出秘めて友の逝く	1998年	a
雪解のグリーンランドの石拾ふ	1999年	b
網の目に星の青さの蛍鳥賊	2003年	c
畦道の縁どり燦々曼珠沙華	2006年	d

川柳より

反共を聯共となるパンプルー（泛藍） e

（共産党を逃れて台湾に来た国民党が、今では大陸へ統合しようと、ブルー色を広めているのは、おかしいではないかと皮肉る意味）

短歌より

終戦に異国人となりし台湾兵忍字に生き抜く大正生まれ	f
終戦の玉音放送途切れがちラジオ囲みて涙込み上ぐ	g
セヌ河の流れを宮殿の貯水池にベルサイユの庭に花の噴水	h
アルプスの南端にあるスロベニア台湾入りの旅券ほほゑむ	i

（中国の旅券では入れないことを詠ったもの）

リタイアしてから初めて、こういう俳句会があると知って入会したが、専門家になるという気はない。

俳句について、aの田螺狩は、台湾独特の風物であろうか、亡き友を偲ぶにふさわしい情景が、これなのであろう。cの蛍鳥賊やdの曼珠沙華は、日本と同じ台湾の季題であろうか。双方とも、色彩鮮やかな光景が、眼前に広がってくる。蕪村張りの雰囲気を醸し出している。bについては、次の段落に述べるとおりである。eの川柳は、国民党政府の矛盾した行動を、堂々と非難している。短歌のf・gは、俳句ではないので、各所に元日本兵や日本人魂が率直に表わされ、戦前の教育を受けた日本人の心をも、揺さぶるものがあるのではなかろうか。h・iのうちiは、自分が中国国民でないことに、喜びを感じて詠んだものである。この様な政治とは関係ない海外旅行でも、政治を意識せざるを得ないのであろうか。中国大陸に対する優越感さえ見えてくる。

第三章のDの事例にあたる人であるから、政治に関わることの有無は兎も角、川柳・短歌には率直な思いを表現している。俳句にはその類の句はない。主宰の意向を堅持している。川柳と短歌は自薦であったが、俳句は「台北俳句集」から筆者が抜粋した。なぜ自薦の俳句がないのか疑問であるが、おそらく筆者の調査の意図を汲んで、自分は短歌・川柳と同じく「政治に関わる」俳句を詠みたいが、そういう俳句は許されないから、自薦の俳句はないと表明しているのであろう。

Dの俳句は、筆者が何冊かの『台北俳句集』から、筆者好みのものを選句したのだが、bは何となく気になる点があった。グリーンランドは、観光するには一般的ではない珍しい土地であり、わざわざ石を拾うことも気がかりであった。後にグリーンランドの歴史を調

べて、この句に託されたDのほんとうの思いが分かり、俳句にも、「政治に関わる」ものを発見したのである。グリーンランドは、台湾の歴史変遷によく似た歴史を持つ。

その歴史は、アイスランドのヴァイキングの定住により、10世紀に始まるが、16世紀までには消滅し、18世紀にヨーロッパ人の再上陸によって、デンマーク＝ノルウェー連合王国領となり、その後デンマーク領となった。しかし第二次世界大戦中に、デンマーク本国がナチスに占領されたので、アメリカ合衆国に保護された。そのため独自性が強まり、戦争後デンマークに主権が返還された後、1953年に植民地から海外群に昇格、1979年以降は、自治領となる。1985年には、デンマーク領でありながら、欧州共同体から離脱している。

特にDがこの句を作った1996年頃は、グリーンランドの欧州共同体からの離脱が、記憶に残る時であったろうし、Dならば殊に、関心事であったろうから、石を手の中で温めて、その人々の苦勞と勇氣を感受しなかったのかもしれない。本人も気づかぬうちに、我が台湾の歴史と現状を顧みて、その感慨を俳句に込めたのであろう。主宰に対する遠慮もあつてか、或いはこの句を忘れていたのかは定かではないが、D自身が、俳句には政治を詠まないと決めていても、無意識に本音は垣間見えることを、実証しているのである。『台北俳句集』には、海外旅行の経験が俳句となって、至るところに表現される。その中で、筆者の求める「政治に関わる」俳句が、たまたま見つかったことは、Dが、第三章の目的に沿う事例であったことを証明するのである。

そしてまた、Dが他の短歌・川柳とは区別し、俳句に「政治に関わる」ものを詠まないと言い、主宰やその不文律の主張を共有しながらも、なお、無意識に俳句にも表現してしまうDの魂の叫びを感じてしまうのである。

事例E 台北生まれ、74歳、「台北俳句会」の世話役、「台湾川柳会」会員。

脳卒中療養後2008年逝去。この「俳句自分史」は、倒れる1月前に記述されたものである。

同じ日文短詩で台湾での日本語族は掛け持ちで参加している。祖父母含めて台北に生まれ。日本植民地時代の国語家庭、小学校は樺山小学校当時は、主に日本人の学校、四年生の時に終戦。入会のきっかけは、歌謡曲の歌詞で五七の日本語口調になれ、雑誌や本で川柳を見て面白半分で作っていた。友達の紹介で「台北川柳会」に参加し、その後俳句会に誘われた。

鏹一文吐かぬ蟾蜍の面構へ	1996年	a
(鏹銭を口に啜えた蝦蟇は、台湾では縁起物で、お金を持ってくるその形相が似ているので、お金は来るのは良いが、一銭でも浪費しないと言う喩え)		
ポーズ取るチューリップの赤シャツの赤	2000年	b (写真撮る時の描写)
蚯蚓鳴く夫婦喧嘩の治まりて	2000年	c (喧嘩後の静けさ)
夏休みぼつんと机にランドセル	2006年	d (状況描写)

俳句をやって、風雅で物を見る目が違ってきた。短詩であり少字数の中に季語を入れて作るのが難しい。特に季重ねや説明調にならないように注意している。入会して

から俳句を作りはじめた。句会に出席すると色々な意見を拝聴し句作の参考になる。俳句の特徴特に季語感は日本以外では表現しにくいと思う。しかし、感覚的に惹かれて作る。もともと俳句は日本語特殊の詩形である。黄先生の台湾歳時記の編集で台湾独特の日本語俳句が「台北俳句会」には沢山有る。心に残ることは、NHK“世界の俳句”番組が台北俳句会の取材に参加して、記念に残るテープを頂いたことである。

本人の説明書きから、その情景は、容易に想像できる。a・b・cは、俳句の元祖である俳諧連歌の一部を思わせる。cも一見、部屋の一隅の描写であるが、ランドセルの持ち主の動向が、自ずと想像されて、微笑まずにはいられない。これも俳諧の一部と見られるのではないか。俳諧の持つ元々の諧謔性を、常に意識しているように思われる。

Eの作品に政治的なものは認められない。「台北俳句会」の会員の中では、若手の事務局局長である。こまごまとした事務一切を取り仕切ってきた者として、更に貿易関係の会社経営者として、台湾の歴史変遷を客観的に見極めながら、主宰黄の側近として、会の運営に当たってきた人物である。第三章のE事例に記述のとおり、「日本語俳句はやはり普及も難しく、感覚的にもびったりしない。中国には特に漢詩と言う素晴らしい詩があるから。『台北俳句会』は日本語族と言う跡継ぎの無い老人たちの会だから、いつまで続くか問題だ」として、今後の存続の見通を楽観視してはいない。

これは「台北俳句会」の俳句意識に関わる典型的事柄でもあるのだが、日本語俳句会に所属しながら、漢詩の良さをしっかり把握しており、現状把握は感情的ではない。小学四年生までしか日本語教育を受けていない世代の独自の感性かもしれない。特に経済や商業の面から、台湾独立についての独特な見解も所持していたであろうから、今後の「台北俳句会」の将来性についても、個性的な方向付けが期待されていたであろう。しかし故人となつては、もはやその才覚の披歴を、目の当たりにすることもできない。

事例F 台湾生まれ、1928年（昭和3年）生まれ、80歳、「台湾歌壇」「台北俳句会」「台湾川柳会」の会員。

冷酒や黄色い声の黒田節	a	
異国語で駄々こねる孫四月馬鹿	b	(カナダで孫をあやす自分の姿)
月下美人五人侍らす酒五合	c	
洗い髪元慰安婦の佐渡おけさ	d	

(以上4句、1993年作1997年出版『台北俳句25集』から筆者選句)

高等商業高校のときは、日本人の一員として兵役に服そうと素直に思っていた。だから、美しい日本語を残そうとする「友愛会」に今年から入会した。毎年息子の住むカナダに行っているが、そこで手に入れた櫛の木刀の素振りを、毎朝夕300回やっている。その木刀は台湾製であった。

わたしは客家の出身だが、みな共通語は日本語でしゃべっていた。役所に行くと公務員はみな外省人だから、日本語を話すのは気兼ねしたが。当時、日本からの俳句誌『春燈』『リーダーズダイジェスト』等、墨で塗るなどの嫌がらせを受けた。十何冊も

そっくり無くなって、再度送ってもらったりしたこともある。

「台北俳句会」の「政治には関わらない」というモットーは、当時戒厳令下だったから今はもう無い。(黄霊芝さんやAさんは、今でも言っているが) それは今でも、国民党・民進党の対立があり、外省人が占める公務員は、退職してからも好待遇でいいじゃないかなどの不平等感がある。それぞれ立場があるからだろう。本能の中に、過敏性が存在している。

日本語文芸をする意義は、文芸そのものが好きだから。北京語で本を読むし、本も書いている。日本語以外も好きだが、日本語は、血となり肉となって腑に落ちる。北京語は、翻訳して理解しているため、歳を取るほど理解が困難になってきている。

a・dの「黒田節」や「佐渡おけさ」の語句は、まさにFが日本人として生きた証であり、日本を無意識のうちに懐かしむ心情を、素直に表現している。その生活や文化は、元慰安婦という表現にも、日本統治時代を彷彿とさせ、哀感すら感じさせられる。本人の言うとおりに、国民党政府への気兼ねはない。bは異国で、異国語の孫の守りをする老爺の姿と、四月馬鹿の取り合わせが、いかにも台湾人富裕層家族の典型を描写する。この俳句の現実には、次の第四節と第五章に描く張継昭の人生とも、繋がる雰囲気を持つ。

Fは豪胆な気質であり、戦後をその気質のままに生きて来たが、bの句にあるように、カナダに移住した子供のために、孫の守りに半年交代で出かける。「台北俳句会」の会員の多くは台湾富裕層で、子弟を海外留学させ移住させているのは珍しくない。その親世代も高等教育を受け、知識階級である。

そしてFだからこそ、「政治に関わらない」という意識はないと、言い切れるのかもしれない。しかし一方で、黄霊芝やAが未だに持ち続ける危機感には、理解を示す一面を持つ。戒厳令下で彼が経験したことは、主宰黄とAなどとは異なるが故の、認識の違いであろうが、そのいずれをも包含して、「台北俳句会」は、運営されているのである。

事例G 台湾生まれ、82歳、「台北俳句会」「台湾歌壇」「台湾川柳会」会員。

「たんがら短歌会」(日本の歌林の会の台北支部)会員、日本番傘本社の同人。

元旦の日記明るき文字ばかり          2004年          a          『台北俳句集』巻32

短歌・俳句・川柳の3方面で活躍している中国文化大学財務金融学部・文学部教授、短歌では「台北歌壇」のちの「台湾歌壇」の中堅会員、日本の歌林の会会員(主宰は馬場あき子女史)1996年日本第11回国民文化祭(高岡)「平成今時万葉集」編さん世界公募の際応募し7827首応募作品の特賞(大賞)に入選。賞金は十万円。選者は馬場あき子女史、作品は、

台湾語北京語英語日本語を混ぜて使いしわが半世紀          b

呉建堂氏の「台湾万葉集(完結篇)」に80首入選「孤帆萬里半世紀」として単行本出版。台北短歌会、台湾歌壇合同作品集には每期欠かさず入選し、歌林の会の月刊には毎月

5首か6首掲載されている。その他「平成万葉集」やNHKにも入選。例えば、

今宵咲く月下美人のつかのまの命あわれみ雨よな降りそ c

(岩田正 歌林の主宰馬場あき子女史の旦那選)

俳句では「台北俳句会」(黄靈芝会長)のほか 大阪の羽田岳水主宰の燕巢俳句会の同人(2007年3月2日推薦)、かつて「週刊サンデー毎日」の俳句欄に、連続半年毎月入選半年。

川柳では日本番傘本社の同人、番傘川柳一萬句集(三期)に多句入選。

◎短歌、俳句、川柳三方面で活躍している、これは日本では珍しい。

私は出生した時には日本の国籍を有したが、第二次世界大戦終戦で国籍変換を余議無くさせられた。私は「日本語常用家庭」の一員として表彰され、小学年の時は皇室北白川宮殿下賞を受けた(これは日本の皇民化教育の奨励で伏秀皇民政策励行の賞品です。私は日本精通、日本びいき、今では台日文化経済協会(日本の日華親善協会の姉妹会)常務理事兼文化委員会主任委員。・彰化銀行連続半世紀勤務、10年間取締役就任、日本モラロジー研究所参与(この機構は世界の有名な倫理道德教育機関、日本コンサルタント協会台湾支部前会長、台北市道德科学研究会理事長、文化大学財務金融学部教授、国際工商経営研究社前社長(chairman, International Management Council)等歴任。

◎短歌の処女作は中学の頃、和歌研究会に入り、

古里のたより待ちかね玄関で郵便員の行方見送る d

(上級生に「生意気な奴」と睨まれた)

◎黄靈芝先生の「台湾俳句歳時記」の季語例句には30句ほど入選しました。

◎台日親善強化の為、私は台日文化経済協会常務理事兼文化委員会主任委員だが文化経済合作交流強化にもっと努力したい所存である。日本へのNo VISA ありがとう。多くの日本人が、日本から短歌・俳句・川柳に入会や投句ありがとう。

◎文化大学 日本文学部の修士課程(MASTER DEGREE)の学生が、提出した修士論文「黄靈芝先生の文学活動について」の審査委員に、私が部外委員の教授として担任した。私は財務金融学部の兼任教授だったけど日本の短歌、俳句、川柳に研究の成果があるのが理由でした。

◎黄靈芝先生は台北俳句会の会長だが、「台湾俳句歳時記」の出版発行の功勞で、正岡子規の国際俳句賞」と日本天皇陛下の旭日文化勲章受章の榮に浴し、台北俳句会全員光榮至極に感じている。

俳句の季語については各地特殊事情が有ります。例えば台湾では新暦元旦と旧暦(農曆)元旦と有り、台湾には台湾独自の季語を使って然るべきだと考えています。今日の文化交流強化の成果から、日本側からの台湾俳句会への参加(入会)、台湾俳人の日本俳句会への入会参加奨励、双方の相互訪問交流俳句会の開催の頻繁化などを考えたら如何か。台湾側はいつでも門戸開放して歓迎している。

日本自身でさえ、現代俳句と伝統俳句が両立しており、旧カナ現代新カナが両立し



ているので、季語、定型の両立もやむを得ないだろう。短歌の場合 3000 年前の万葉集ばかりにこだわらなくてもよいだろう。それを台湾では万葉集を BIBLE バイブルと視ているのは再検討を要するかと思う。実用目的現在現実需要にかなうものであればそれで良いのでは無いか？革新・創新 INNOVATION が、日本の短型詩としての短歌・俳句・川柳にも提起されて良い日が、やがて近づいて来る事だろう。

◎私の作品は、台湾における関連結社の出版資料で求められると思う。多忙な為省略させていただくが、必要有れば収集の協力をしてもよいと考える。

◎私は親日派の台湾老人だから、台日文化経済交流親善強化に微力ながら全力を尽くさせていただきたい。

子も孫も日本語知らず特選に入りしわが短歌誰にのこさむ e

反日派は日本語日本文に不通だから、接近しにくい。反日派は親中派。台湾に強い台湾は親日派。日本親善派『TAIWAN IDEOROLOGY』独立派 新聞の反日派『聯合報』聯合派、反日派は、『聯合報』を晩報（夕刊） 中国時報、これらは台湾統一派 親日派は『自由時報』で日本びいき、台湾の執政業民主進歩党、台湾団結聯盟（台連・独立派）がある。

人類は昔から、Ideology 闘争が後を絶たない。例えば資本主義 CAPITALISM と共産主義 COMMUNISM のごとし。学術上における論争はやむを得ない。台湾社会も政治上、経済上、独立派と統一派が、「不俱戴天」の闘争を続けている。私は日本びいき日本親善派である。だから台日文化経済協会の役員であり、日本統治の半世紀が無かったら、今日の台湾はありえない。BEST に考えても経済、社会、生活的には、恐らく「済南島」なみだったに違いないと考える。持つべきは台湾の知己である。今後も倍増の御提携をお願いしたいと思う。

a の「明るき文字」は、元旦の新しい心象としての文字ともとれるが、台湾で使用する繁体字ではなく、日本の現行漢字または中国使用の簡体字の両方の意味にもとれる。そのため、読み手の受け留め方に、差が生じやすい句である。単なる新年の清々しさとだけ受け留められない台湾の現状を感じる。つまり、元旦は、台湾の正月ではなく日本統治時代の正月を意味し、日本で使用の漢字を使って日記をしたためると、明るい気分になるという解釈と、他方は、中国の画数の少ない簡体字を使って日記を書くと、ページの面の白い部分が強調されて、紙面が明るく見えるというものである。前者ならば、過去・現在の日本に対する愛着が滲み出ているが、後者ならば、台湾の歴史の変遷に感慨をもよおしながら日記を書く G の姿が、思い浮かぶのである。

b は、台湾の歴史をわが身に置き換えて述懐する老人の悲哀と感慨が、短歌という詩形に、余すことなく表れている。c は、月下美人に古語の仕様「雨よな降りそ」を配して、その高貴な花の短命を惜しんでいるのは、F 自身を詠んでいるかと思わせる。d は、処女作らしい少年のみずみずしさの溢れた句である。上級生というのは、おそらく内地人であったであろう。彼はそのことに触れてはいないが、黄霊芝が第三章で経験したことと同様に、優れた台湾人に対する内地人の嫌がらせは、ここにもあったのである。F にとって、忘れえぬ

作品であろう。bもeもまた、台湾の言語変遷の歴史を回顧し、日本語の優れた短詩の価値を理解のしようがない中国語使用の子孫に、伝えることのできないもどかしさを嘆いている。台湾の使用言語に振り回されてきた世代の、偽らざる哀感であろう。声高ではないが、日本語を懐古している点では、「台湾歌壇」ゆえに出来るという一面もあるだろう。

正式国交のない日台関係に於いて、広範囲にわたる日台交流親善の活動に貢献し、かなりの功績をあげている人物である。彼のような傑出した人物が、民間レベルの日台交流を支援し先導しているおかげで、日本の文化文芸は、今なお台湾で存続出来ているのかもしれない。特に経済的な交流は、その下支えになっていることは、間違いない。こういう会員の存在は、会社経営等特に富裕層の会員たちの、良き協力者であろう。しかも短詩文学においては、有名な日本人作家に引けを取らない素養と見識を備えている。Fの更なる活躍が望まれる。

以上、BからGの事例によって、黄靈芝主宰が、如何に「政治に関わらない」作句を不文律にしようが、会員各々の思いは多様であり、各人の主張は、無意識にあるいは意識的に、俳句に込められていることを述べてきた。特に筆者が印象に残るのは、D事例である。「政治に関わる」ものは、俳句ではなく、短歌・川柳に詠むとしていたのだが、筆者が選句した俳句の中に、偶然にも「政治に関わる」俳句が存在したということである。一見それとは分からない俳句の中に込められた、俳句会員の願いを読み取ることは、単なるこじつけではなく、彼らが否応なしに翻弄されてきた台湾の歴史を共有し、共感することであろう。それは、過去、台湾の歴史に関与した日本人として、僅かながらの償いでもあると思う。

### 第三節 「台湾川柳会」の変遷

次は現「台湾川柳会」の主宰頼柏弦への聞き取り事例である<sup>13</sup>。( )内は筆者の質問。

頼柏弦 台湾生まれ 78歳 「台湾川柳会」主宰、2011年逝去。

川柳

待てど来ぬ台湾国の朝ぼらけ	1994年	a	第 2回川柳会会報
暴君も老いさらばえば粗大ごみ	2002年	b	第 92回川柳会会報
慈父増えて雷親爺死後となり	2002年	c	第 98回川柳会会報
夫婦仲嵐のあとの赤い虹	2006年	d	第 147回川柳会会報
妻こぼすグチを集めて座右銘	2007年	e	第 158回川柳会会報

過去の第100回前後の「台湾川柳会」会報に取り上げている川柳は、過去の「台湾川柳会」の歴史の時事句、現在は高压政治の残滓はあるが、今はこんなではない。(「台北俳句会」は「政治には関わらない」がモットーだが?) 今は少しはあるが、悲劇はもう前向きに行こうという時代、「台湾川柳会」でも、そういう句はあまり好まれない。過去の悲劇にこだわらない。完全に無くなってはいないが、どこの政治も同じで

はないか。(しかし間に大陸が入った2党の争いに見えるが)それはある。過去の恐怖があるし、しこりがある。川柳も過去の悲劇ばかりにこだわってはいという雰囲気になってきた。

Hさんは良く時事を詠む。しかしこれは過去の事実になりつつある。ひとつの事実をとっても、それぞれの境遇が違うから、感じ方が違う。だから、川柳は川柳らしく風流に行こう、時代と時は、いろんな感情を薄める。国民党と民進党の両方の新聞を読んでいるが、日本語文芸をする人への批判はない。私は台中の出身(こんな一等場所にオフィスを構えるだけのビジネスの成功者といえますね?) 亡くなった李琢玉さん(元「台湾川柳会」主宰)は日本人より日本人らしい人、あらゆることに精通、自分の信念を曲げない。彼がいたから、十何年も「台湾川柳会」は続いてきた。指導者として彼に学びたい。

(あなたは人柄がいいと聞いているが、そして、Dさんは、「台湾川柳会」の方が政治を詠いやすいと言っているが)との質問に、次のように話している。

私は過去を引きずるのはほどほどに思っている。漢字の川柳をしる、と多くの人に言われている。黄靈芝氏も湾俳をやっている。自分は喜寿、昭和3年生まれ78歳、他の人よりも若いと思っている。日本で生まれて終戦まで日本にいた江戸っ子、それまで「台湾川柳会」もしたことはなかった。10年前に入会した。李さんは、「お前は日本生まれだから、日本を肌身に感じているか川柳をやるのに相応しい。」と言っていた。15歳までの日本で、川柳などやれる時期ではなかった。(「台北俳句会」の人も戦後に始めた人が多い。)

アメリカン俳句の意義はなんだろう。日本語以外の語を使うのは賛成できない。漢俳と英語俳句は違う。日本俳句の良さが出てこない。日本語だからいい。日本の短詩を無理にグローバル化するのは、賛成ではない。漢字までは許せるとしても、日本特有のものだから。

頼天河さんは、「台湾川柳会」が1994年発足して、3、4年で亡くなった。頼とは付き合いは無い。李琢玉さんや阿川弘之・今川乱魚氏・蔡焜燦氏などの資料を、あなた(筆者)に提供する。

この前60年ぶりに、戦前日本滞在時の友と再会した。日本の新聞記事にもなった。

息子は立命館大学卒28歳、日本にはまっている。日本文化は深いから、日本文化でないとダメという気になっているので困る。日本も古いものはいいが、新しいものはどうも。飛行機内の日本の若者の非常識さについて驚いた。

楊瑞麟さんの人柄の良さ、才能は非常に優れている。

「台湾川柳会」の将来を思い、若い人を入れようとするが、肌で感じる環境がないと無理なところがある。俳句会も川柳会も高齢化している。半分くらい日本からの投句だから、「台日川柳会」としようかと思っている。今160回目 最近の分、余ったものを進呈するが、互選句 例会の分総合選句のこれらを見れば、今の傾向が分かる。過去の悲劇・悲哀・非情の世相を抜け出している。過去のことを引きずらずに前向きに行こうとしている。今は圧力が無いから、こういうものは選句されない。批判の句は、

その時代なりにいい句ではある。Hさんは、1・2年前に辞めた。

主宰になって3年半、日本生まれ東京育ちであっても、日本文芸の素質が少し足りない。将来、50代くらいの若者を引き入れて、語学も肌で感じなくてはならない。専攻は理工科で、理屈がちになるが、性（たち）を学びたい。

頼柏絃は、戦前は日本に住み、現在は中国と日本へ行き来する貿易商である。過去を知りながらも現在置かれた台湾の立ち位置を直視し、前進しようとの決意や覚悟を感じさせる。川柳は100回目から「台湾川柳会」と改名したが、主宰頼の作品には、政治性・時事性のあるものから日常生活の機微に触れたものへと変遷する様子が、感得できるのではないか。

頼柏絃と次の事例Hについての作品解釈とその変遷については、後に述べる。

#### 事例H 1932年台湾生まれ 76歳「台湾川柳会」会員

日本語を本気でしゃべる終戦後	1994年	f	第2回川柳会会報
李登輝のブームを煽るあっち岸	2001年	g	第82回川柳会会報
生涯を飽かず付き合う垢とゴミ	2002年	h	第92回川柳会会報
建国を目指す行進曲がゆく	2002年	i	第93回川柳会会報
緑なす黒髪の世に何時もどる	2002年	j	第93回川柳会会報

「本気」というのは国民党への反感・反発。当時国民党は強盗蔣匪介石。今でも蔣匪チャンコロと呼ぶ。「台湾川柳会」主宰の頼柏絃さんは貿易会社社長だが、こういうことは言わない。自分は教師をしていた。中山北路に住む。日本の「恩太鼓座」はどう読むのか。日本の文化は奥が深く、多くの興味が湧く。このように日本語を話す機会が出来てうれしい。黄智慧さんも「台湾川柳会」で一緒に詠んで研究もしているから、訪ねるといい。

日本語新聞に『聯合報』『中国時報』『自由時報』の主な新聞があつて、『自由時報』は中立で親日派である。今回このように日本語を、こんなに自由に話せる機会があつて、大変うれしい。

とこのように言いつつ、名残り惜し気に別れを告げて出て行った。外国人でありながら、こんなにも日本語に焦がれている様子を、そしてその焦燥感漂う後ろ姿に、幾ばくかの愛惜の情を禁じ得なかった。そこに過去日本人として生存した日本人の魂を感受したのである。そのことが彼らの歴史にとって、肯定されるべきことか否かは、ここでは言うべきこととは思えない。ただ台湾には、こういう日本の言語や文化を強固に身につけた人々が、今なお現存し、新しい歴史の波に翻弄されながら、過去を断ちがたく生存し続けていることを、筆者は目の当りにするのであった。

次に「台北川柳会」の変遷を、頼柏絃主宰と事例Hの川柳を例に、詳細に見てみよう。

「台北川柳会」の発足は1994年であり、全日本川柳協会の仲川たけし会長から提案されて発足した事情は、第三章に述べた。この時は、1987年に長期戒厳令が解除されてから、

大分経っており、日本語も気兼ねなく話せるようになった頃である。1992年には、刑法100条の言論による反乱罪も撤廃されていた。そのため、川柳の本来の特徴である政治批判や揶揄も、大っぴらに出来たのであろう。その社会情勢の変化をバックに、政府を批判して生き生きと謳いあげることが、当時の台湾人の喜びでもあっただろう。

Hの川柳は、時事的な政治性を持つものが多く、戦後の政権国民党を、あからさまに皮肉るのである。特にfは、川柳会発足当初のものであり、研究者たちがよく例に挙げる川柳である。戦後の台湾人たちの心理変化を捉えて、なかなか秀逸の出来である。日本統治時代からやっと解放されたとたんに、第二の圧政に驚愕し、無意識に反発の日本語が、口をついて出てくる。過去には嫌だった日本語を、本気で使うようになった人々の抵抗感が、手に取るように伝わってくる。しかしこれは、解放令が出た後の、日本語が自由に話せるようになっていた時に作られたのである。しかしまだ国民党政権のもとで詠んだものであるから、こういうことが言えるようになったことが、意義あることなのであろう。gは、李登輝の施政を煽る中国に対する非難であり、iは、親日派の民進党が、2000年に国民党から政権を奪った年であるから、この党が台湾独立を旗印にしていたのであれば、Hがどういう気持ちで行進曲を聞いているのだろうか、考えさせられる。これは、日本最員の彼のことから、川柳特有の揶揄ではなくて、期待感を持って時事を写しているのだろう。hは日常の生活の一コマを、諦観を込めて一生付き合うのかと嘆くものである。しかしこれが、国民党政権時代を振り返った作品というのであれば、垢とゴミは国民党政権を指して、政治批判になる。iの緑なす黒髪の世界とは、日本統治時代を指し、その時に早く戻りたいとの心情であろう。Hは1994年のこの作品から2002年の作品まで、頼主宰の言う時事川柳を詠むことが多かった。勿論そのほかの川柳も詠んでいる。2002年を最後に、徐々にその種のもものが無くなり、いつしか「台北川柳会」から遠ざかっていったという。

頼柏絃の川柳を見ると、a・bまでは、当時の風潮を謳歌するものである。暴君は蒋介石のことで、怖かった国民党やその党首も、粗大ごみにたとえている。それでもaに詠むように、1994年は国民党政府であるから、台湾はまだ、台湾人の望む社会にはなっていないのである。解放令の後であっても、川柳の特色といえども、少々勇気がいるものではなかっただろうか。2002年のcとそれ以後のd・eは、政治性のない時代風刺と、日常生活のおかしみを小気味よく描いている。2002年が、政治批判が無くなる分岐点であると言える。

その理由は、2000年に、日本外交に積極的な民進党が政権を執ったからであり、台湾社会では、政治批判をする対象が無くなったからである。その詳細は、第五章に述べる。このため、政治性の強いものは次第に影を潜め、その他の特徴を川柳に込めるようになったと思われる。更に2002年11月100回川柳会において、川柳会の頭の文字を台北から台湾に替えたのである。「台北歌壇」と「台北俳句会」が、長年躊躇してやりきれなかったことである。しかしどんな政権になっても、政治の批判はするというHの川柳魂が、本物なのかもしれない。その魂を貫き通せないのが、台湾社会の昨今であろう。

こうして、「台湾川柳会」主宰と会員の聞き取りから、台湾社会の現状が見えてくる。戒厳令が解かれ、のびのびと政治や社会の批判が出来る時代が到来し、「台湾川柳会」としても今まで抑圧されていた思いを、思う存分川柳に込め、過去の鬱憤を晴らした時期もある。そうして、いち早く「台北川柳会」を「台湾川柳会」に改名したのも、この川柳会であっ

た。しかし主宰は、思う存分政治や社会の批判をしたことを過去のものとして、現状を語る。現在の「台湾川柳会」の会報で互選される川柳は、政治批判ではなく、時事問題や社会生活の機微に触れたものが多く、露骨な政治批判はない。かつて先鋭的な政治批判川柳で高評を博していた会員も、会に出にくくなっていると言う。

その原因は、中国大陸と台湾の経済関係にあると推察する。第三章で挙げた頼天河の一句にも見出せるが、川柳会主宰もまた仕事は貿易商であり、中国大陸との繋がり無しに経営は成り立たない。2000年に成立した念願の民進党政権は、再び2008年に国民党へ移っている。政治は変遷し、経済に直結することが、このささやかな日本文芸の会の活動にも、表明される。

おわりに

以上、「台湾川柳会」の変遷の分析から言えることは、設立当初は、国民党政府に対する鬱憤を晴らすために、種々の揶揄や皮肉を込めて川柳に詠むことが盛んだったが、民進党が政権を執ってからは、攻撃の対象が無くなり、その後また、国民党が政権を奪還すると、中国貿易で生活が成り立っている会員たちも、現政権への批判ばかりはしてられない立場になる。そこで、批判の対象は国民党ではなく、一般社会の事象へと変化していくのであり、政治とは関係のない「台湾川柳会」の表現傾向へと変化していくのである。そのことは、「台北俳句会」の暗黙の共通認識に回帰していつていると思うのである。「政治には関わらない」ことで、どの政権であっても存続できるという戦略を取ろうというのである。政治の変遷は経済・文化にも多大な影響を与え、この俳句会の創立以来の普遍の共通認識が、今やクローズアップされる時代になっているのである。

「台北俳句会」会員の俳句アンソロジーは、各人固有の個性を彷彿とさせ、特殊性を表出させている。しかしその各々の事例は、日本語短詩文芸を嗜み、楽しみながらも、台湾割譲から現在に至るまでの歴史変遷を背景に、二つの中国と日本を意識しつつ成立している。その意識が濃厚であるか否かは各人異なるが、根底には常にその意識が存在し、それなしには語られないのである。二つの中国については、第五章で詳述するが、2000年と2004年の総選挙では、民進党が政権を握り、2008年と2012年の総選挙では国民党政権へと逆転する流れの中で、台湾民心は動揺し、そのはざまに「台北俳句会」の会員たちも同様に揺れ動く。しかし、政治は俳句会に持ち込めないから、各人各様の対処法と表現法によって、台湾空間を生き抜いている。ささやかな個人的趣味を持ち寄る集いであっても、台湾の地である日本語短詩文芸であるが故の無意識の緊張が、否応なしに生じる。第三章に詳述したが、俳句会内部にも、対立する政党の各々の支持者がいる。大半は日本最良の政党を支持しているであろうが、対立する政党支持者から、いかなることが外部に伝わって、その結果「台北俳句会」が存続できなくなるか分からないという危惧が、常についてまわる。日本語文芸であるという過去の侵略者の言語を使用して文芸をすることは、よそ者扱いされることであり、その上、時の政府に睨まれるという二重の排他性を被ることだけにはなりたくないのである。その中であって、各人各事例の無意識のエネルギーが、そこはかたなく湧き上がって来るのを感じる。混迷する歴史の中に、力強く生きる証が垣間見えるの

である。その意味でこのアンソロジーは、意義あると思う。

これら「台北俳句会」会員の中に、特殊な立ち位置を持つ張継昭の事例がある。アメリカ・カリフォルニア州都サクラメント在住の張（通称 Andy）を、ディアスポラの知識人として、「台北俳句会」との関わりを示す。「台湾川柳会」の主幹頼柏絃やその会員の聞き取りと対照的な事例として、今後の台湾日本語俳句の方向性を探ってみた。その結果、現在でも、「台北俳句会」の「政治に関わらない」の共通認識は不変であったとしても、各自の思いの方向性を探りつつあることが、確認されるのである。そのため、無意識的に「政治に関わる」俳句をつくり、一見そうとは分からない表現の中に、会員の真の欲求を詠み込んでいるのである。抑えても抑えきれない本心が、そこに投影されるのである。それが、芸術の神髄と言えるのではないか。しかし、これは、極一部に認められる傾向であって、「台北俳句会」の全般的な特徴ではない。これらのことが、今後、次の台湾の歴史と如何に繋がっていくか、注視される場所である。そして、次の五章で張継昭と「台北俳句会」との関わりを詳述し、「台北俳句会」の立ち位置を更に明確化する。

#### ＜ 注 ＞

- 
- <sup>1</sup> 黄靈芝「俳句に託す台湾の心」『日本経済新聞』 2005. 11. 21 付文化欄。
  - <sup>2</sup> 台湾大学の教授が大学構内で何者かに殺されたが、それは国民党政府の仕業だと思われるとの記述。第三章注 34 に詳述する箇所と同じ。  
司馬遼太郎『街道をゆく 40 台湾紀行』 朝日新聞社、1994 年 96-97 頁。
  - <sup>3</sup> 国立翻訳館主編 蔡易達・永山秀樹訳 『台湾国民中学歴史教科書 台湾を知る』 雄山閣 2002 年。
  - <sup>4</sup> 黄靈芝『黄靈芝作品集』 卷 20 「蟬 300 句」 特集号、自費出版、2003 年。
  - <sup>5</sup> 黄靈芝前掲書、234 頁。
  - <sup>6</sup> 黄靈芝「台湾の俳句—その周辺ほか」『國文學』 2005 年 9 月号、88-94 頁。
  - <sup>7</sup> 黄靈芝前掲論文、91 頁
  - <sup>8</sup> 黄靈芝前掲論文、93 頁
  - <sup>9</sup> 黄智慧「ポストコロニアル都市の非情—台北の日本語文芸運動について」 大阪市立大学院文学研究科アジア都市文化学教室編 橋爪紳也責任編集『アジア都市文化額の可能性』 清文堂、2003 年。
  - <sup>10</sup> 磯田一雄「台湾における日本語文芸活動の過去・現在・未来—俳句を中心にその教育文化史的意義を点描する—」 成城大学文芸学部紀要『成城文藝』 第 197 号、2006 年、37-38 頁。
  - <sup>11</sup> 2006 年、俳句会後の聞き取り
  - <sup>12</sup> 2014 年 6 月に逝去。多くの資料と証言に感謝して、御冥福を祈る。
  - <sup>13</sup> 当時主幹であった頼柏絃氏は、2011 年 11 月に死去。多大のご協力に感謝して、冥福を祈る。

## 第五章 張繼昭 (Andy Chang) と「台北俳句会」との関わり

### はじめに 本章の問題と方法

本稿は、張繼昭 (Andy Chang 1934～) の歴史的経験と記憶から、その主張する台湾独立運動<sup>1</sup>に到るまでと、ディアスポラとしての台湾独立活動について論点を絞る。しかし、それは単に歴史的経験と記憶のみに留まらず、台湾に在る日本語俳句会「台北俳句会」との関わりによって、庶民のささやかな嗜みである俳句創作の営みの中に、影を落とす政治性をも追求することになる。そしてまた、政治活動を推進する現在の張の置かれた位置と未来性を、分析・展望することでもある。

張は、「政治に関わらない」(政党支持に関わることや、過去戒厳令下では、支配者だった日本を鼻屑すること等を指す) ことを不文律とする<sup>2</sup>「台北俳句会」に席を置き、戦後留学帰化したアメリカ・カリフォルニアの地から出自の台湾と日本等に向け、台湾独立の呼びかけをするディアスポラの知識人である。

本稿での台湾独立運動は、台湾以外の他国での活動を中心に置く。国民党が中国大陸から敗走して、台北に台湾政府を開いた2年前の1947年に起きた2.28事件<sup>3</sup>を契機としている。その後の国民党政府の弾圧によって、台湾島内での政府排除のための台湾独立活動は、困難になった。そのため事件直後から、日本を始めとする世界の各地に活動家は逃れ、1950年代から70年代にかけて、台湾から留学している学生達に呼びかけて、外国からの台湾独立活動を開始した。当時東京で台湾独立活動の母体となった台湾青年社の一員が、今なお現役で台湾に在住する。これら過去の台湾独立活動の歴史の中で、張は彼らと共に行動をしていない。2000年代の民進党政権になってからの活動家である。したがって張の台湾独立運動の契機も活動も、何ら過去の運動との繋がりはない。

ここにこの論題を提示したのは、外国から活動を存続する張と、「政治に関わらない」ことで台湾に生き抜く方策をとる「台北俳句会」との関わりから、現在台湾が置かれている世界の中の立ち位置が見え、台湾の独立運動と大きく関わっていることを立証すると考えるからである。台湾の政治情勢は、台湾の歴史のみに留まらず、中国・日本・アメリカを含む世界の関心事であることは自明であり、今後の国際情勢に関連して重要な意義あることと思う。

先ず本稿でいう知識人とは、どのような存在なのかを考える。エドワード・W・サイードが、二つのタイプに分けたグラムシの立論を引用している。ひとつは、「教師や聖職者や行政管理者といった伝統的知識人」であり、いまひとつは「有機的知識人」である。グラムシによれば、「有機的知識人は階級なり運動と、それとも、知識人を利用して支配権の拡張をはかる階級なり運動と直接結びつく」としているもので、「他方の教師や聖職者と違って、いつも動いているし、成長している」とする。ここでは、この後者の範囲に属するものであり、また同書でサイードがジュリアン・バンダの定義を引用して、尚且つ「知識人が真の知識人といえるのは、形而上的で高尚な理念に衝き動かされつつ、公正無私な、真実と正義の原則に則って、腐敗を糾弾し、弱きを助け、欠陥のある抑圧的な権威にいどみかかるときだ」<sup>4</sup>とする部分が、知識人としての張にふさわしい言葉である。この人物像を



分析・描写していく中で、そのことは判明可能であるし、張と対峙する側から評すれば、知識人とは言えないかもしれない。筆者はここで、どちら側の誰をテーマにするにしても、主人公の生き方の正当性よりも、如何に生きているかその生き様に視点を当て、客観的に分析したいのである。

ところでディアスポラの知識人とは、簡潔に言うならば、「自分の国を出て、外国の地から出自の国に向けて物を言うこと」である。もともとディアスポラとは、戦争や迫害などによって自らの意志に関係なく自国を追放され、やむなく強制的に外国の地に移動・離散させられ、自国に戻れない者達を言う。例えばユダヤ民族などについて、イグザイル（放浪の民）という語句と共に用いられてきた言葉である。しかし現在では、かなりその意味する範囲が拡大されてきている。例えばサイドの言葉をまとめるならば、今日の世界では故郷からまったく切り離されているのではなく、いつもそれを思い起こさせるものと接触し、じらされるだけで満たされない苦い思いがついてまわるといった中間的状況に位置づけられる。この不安定などちつかずの立場を常に感じながら生きることを余儀なくされている者であり、こうした苛立たしい中間的存在であるのが、ディアスポラの知識人<sup>5</sup>なのである。したがって本稿では、他国にありながら、出自の土地へ往来しつつも、その土地へ向けて自己の信条を主張する人々の総称とする。

レイ・チョウ（周蕾）は自著で、「私はいま、離散状況にあるディアスポラ人、北アメリカに住む香港の人間として書いている」<sup>6</sup>と自称しているから、この書をもって米国から出自の香港を取り込む中国へ向けて、中国の政治・教育・人民等諸事について分析・批評するディアスポラであり、その基盤に「香港における昨今の政治的雰囲気は、私に言わせれば矛盾に満ちたものだ。香港と中国との歴史的差異が、本土とは全く相入れないほど強調されるべきまさにこのときに、中華化の力が信じがたいほど強くなってきているのだから」<sup>7</sup>との思いがある。その思いは、後述の張の思いを共有する。上野俊哉は、「移動や亡命状態を表す他の言葉や概念とはさしあたり区別して論じられなければならない」<sup>8</sup>とするが、筆者は広義にとらえて、張をタイトル通りに規定する。張がそれであることは、逐次分析する中から解明される。

張は俳句と「台北俳句会」において、台湾独立を表現できないばかりか、その俳句会内では政治的活動も出来ない。だが、文学に造詣深い故に、「台北俳句会」の会員として台湾に繋がり、米国や台湾・日本で講演活動を行い AC 通信<sup>9</sup>[資料 2- (1) 参照]によって多数の受信者を持ち、また著作（AC 通信を基にまとめたシリーズ）<sup>10</sup>によっても台湾独立を説く。また台・日・米等各地で講演会を開催し、AC 通信の内容を心情に訴える[資料 1 参照]。更に「台湾人民建国宣言」をニューヨークタイムズ広告欄に掲載し [資料 2- (2) 参照]、また米国政府高官に請願し[資料 3 参照]、東アジア広域にわたって署名活動を展開しようとする。これら張の台湾独立論とその活動の源流は何か。特に少数の代行<sup>11</sup>者たちによる戦後台湾歴史の経験と記憶が彼の思想を養成したこと、「台北俳句会」の暗黙の規約が、日本語禁止令の戒厳令下で生き残る方策であったことと関わらせながら、彼の著書等を基に進める。世界における台湾そのものの立ち位置が張の台湾独立主張の背景となって、その困難性・混迷性を表出する。台湾人ディアスポラの知識人として台湾独立を呼びかける張の活動は、その他多くの活動家の中にあって、注目に値する存在であろう。

しかしなぜ張は、異国で台湾独立を主張するのか。ここには、台湾の歴史的な経験、と

りわけ近代以降の歴史経験と記憶が関係していると考えられる。張が戦後アメリカに留学帰化し、台湾に戻らないことその事実が、そのことを象徴する。戻れないとの意識を持ちつつ、台湾の現状に危惧を持ち、政治活動に奔走せざるを得ない心情を分析したい。

台湾は戦前、帝国日本植民地主義的政策の支配を受けた。そして1945年以降台湾は、中国大陆を追われてきた国民党政府の支配下に置かれた。それら各時代によって台湾の支配者は変遷したが、台湾に戦前から居住し結果的に被支配者に追いやられざるを得なかった台湾人は、様々な側面で被支配者としての経験を強いられてきたという意識があることは、否定できない。その二重植民地の被植民意識は、幾つかの論文<sup>12</sup>に取り上げられてきた。それは、日本統治時代を経験した日本語を国語とした世代に、特に顕著である。

本稿では、張の台湾独立論が持つ背景と意味と展望を述べることにする。台湾独立運動についての先行論文は、独立運動に至る台湾の歴史的根拠について論じたもの<sup>13</sup>、その根拠の一翼となった代行を重視したもの<sup>14</sup>、独立運動を台・日・米に亘って詳述したもの<sup>15</sup>や、公然化した独立運動を台湾に関わる日・米・中三国の歴史を含んで述べたもの<sup>16</sup>と、2000年の台湾総選挙を目の当たりにした学者の眼で捉え、独立運動と2000年台湾総統選挙後の新情勢について述べたもの<sup>17</sup>がある。

また個人の事例を研究したものというよりは、独立運動をした本人が台湾独立運動にかけた自己の闘争12年を著したもの<sup>18</sup>や、自己の体験的・自伝的台湾論を基に、台湾の国際法上の地位法的視座から分析したもの<sup>19</sup>があり、また、「祖国統一」と「台湾独立」の狭間で、台湾問題に具体的に焦点を絞って考察したもの<sup>20</sup>もあるが、移動やディアスポラの視座から知識人をテーマに追跡調査したものはない。その部分については、張の「私の俳句歴」を基にした個人の事例を、戦後台湾における米国留学事情を台米双方から多角的に考察したもの<sup>21</sup>と、張が在住する米国の華人特に台湾人コミュニティを論じたもの<sup>22</sup>に照合しつつ、張の台湾独立運動の背景と軌跡を検証する。張と「台北俳句会」との関係は、台北の日本語文芸活動から論じたもの<sup>23</sup>より分析し、AC通信の対象受信者と独立運動に関わっては、若林の議論を参照する。更に、独立運動にかけた台湾人学者の40年ぶりの帰国に同行取材した記事<sup>24</sup>と、日本で台湾独立運動に奔走していた頃のことを台湾の学者夫妻にインタビューしたもの<sup>25</sup>とを実証例とする。同時に張の活動ツールであるAC通信を始めとして、先述の各種の著作と活動を参照引用し、筆者から張への質問に対する回答と資料のEメールと、「台湾独立運動関連年表」（1945-2002年）・『NEWSWEEK』・『朝日ジャーナル』の参照とで、更なる詳細な分析を試みる方法を探った。

## 第一節 張継昭から Andy Chang への軌跡

### 1 Andy Chang と呼ばれることの意味

張は1934年台湾嘉義生まれである。彼の綴った「私の俳句歴」<sup>26</sup>を基に、その略歴から見えてくるものを考察する。「私の俳句歴」は、筆者が会員の「俳句自分史」を基に、戦後台湾の戒厳令下で日本語俳句を詠むことについて考察する意図で、希望者に募ったものであり、寄稿された中の一事例である。「俳句自分史」の内容は、自由記述でよ

い良いが、俳句との出会いとその頃の社会状況、更に「台北俳句会」に入ってから詠んだ代表作、また日本語俳句を詠む理由とそれに対する周囲の反応、「台北俳句会」の今後について等数項目を例示し、その中の自分の書きたいことを選択する方法を採った。それ以外に自分の言いたいことを重点的に述べた人もいる。そして更に後日、寄稿者各自の「俳句自分史」について、聞き取りを実施し補強している。以下、張継昭の「私の俳句歴」である。

### 私の俳句歴

私の名前は張継昭と言いますが、アメリカ国籍を取得してからは Andre Chang、普通は Andy で通っています。台湾に生まれ育った人間の「土地なき民の悲しみ」は、同じ漢字の名前でも幾通りの違った読み方があり、米国の名前やいくつもあるペンネームを入れるともっと多くなります。

生まれは昭和9年ですから、台湾では日本語世代の最後に属しています。父は医者の家系に生まれた医者三代目で、京都帝大の医学博士でした。母は彰化高女を出て父に嫁ぎ、京都で6年ほど過しました。私は生まれた時から日本語で育ち、日本語教育は小学校三年と一学期だけです。四年生の時に米軍の空襲が激しくなったので田舎に疎開し、日本語教育はそれだけとなりました。

1957年台南にある成功大学の採鉱科を卒業、1959年に兵役を済ませてすぐアメリカへ留学しました。ミズーリ大学修士、テキサスのライス大学地球物理（地震学）博士。92年までアメリカで地震学関係の仕事をして参りました。

引退後は小説を書き始めました。日本語、中国語、英語などいろいろ、日本語の小説は二冊上梓しました。中国語のペンネームは「暗地」、「红柿」と言います。

その後1998年にマイクロソフトのサイト編者から誘われて、アンディチャンの「AC通信」を立ち上げ、主に台湾問題の政治記事を書いております。この記事は「台湾丸」シリーズとして日本、台湾、アメリカでかなりの読者を持っております。政治ものの著作に「台湾丸の沈没?」、「ガンバレ台湾丸」、「連宋の乱の真相（台湾丸第3集）」、それぞれ日本語、中国語版。最近の発表は去年十月に上梓した「台湾丸の難航」があります。

インターネットのAC通信はかなりの読者が居り（千人以上）、日本、アメリカの他のサイトにも転載されています。二年前、台北の友愛会というクラブに招待されたとき、自己紹介で「張継昭です」と言ったらみんな黙っている。続けて「アンディチャンのAC通信を書いています」と言ったら、30人ぐらいが「オー、あのアンディさんなら知っている」と立ち上がってくれました。それからはもっぱらANDYを使うようにし

ています。福田定一は知らないけれど、司馬遼太郎なら知っているのと同じです。アンディでなくANDYならこの国でも通用します。

俳句を始めたのはまったくの偶然からです。母は台北俳句会の創立当初からの会員でしたので、台北俳句会の俳句集は時々読んでいましたが、アメリカで暮らしているの  
で別に俳句を始めるとは思っていなかったのです。92年になって俳句会の会員で親友  
の陳錫恭さんに無理やり入会させられたのが実情で、その後はアメリカから投句する  
会員、母子二代の俳句会員は母と私だけです。その後黄靈芝先生のご紹介により大阪  
の「燕巢」に入会、羽田岳水先生のご指導を仰いでいます。

俳句を始めて俳句の難しさを知り、俳句の奥の深さがわかったと言えます。私のような  
評論を書くものにとって俳句は簡潔明瞭を最良とする訓練となりました。俳句は詩  
である。季語定型はもとより、まず詩情があることを心がけております。

代表作と言うほどのものではありませんが、年代別に並べてみると；

ポインセチア真っ赤な嘘が風に揺れ	1995年	a
一病をなだめて生きて年あらた	1996年	b
薄暑かな体臭薄く老いにけり	1998年	c
それぞれに違ひそれぞれ紅葉かな	2000年	d
亀鳴くや甲骨文字の壺の罅	2002年	e
チューリップ合唱隊のごとく揺れ	2002年	f
団栗は地球のごとく自転せり	2003年	g
賀状書く白髪が増えたまだ元気	2004年	h
牧牛の烙印あはれ夏の雲	2005年	i
なんとなく「膨張係数」木々芽吹く	2006年	j <sup>27</sup>

俳句は詩であるといっても、花鳥風月、生活俳句、老病俳句、父母兄弟俳句などいろ  
いろあり、基本的には「いま、ここ、われ」を俳句の真髄と心がけております。自己  
と時空、自己と自然が一体となることの詩です。

漢字俳句はやっておりません。漢詩にはすでに確立した五言、七言の形式があり、俳  
句をまねる必要もないし、漢字で三五三の形式にして無理やりに詰め込む事にも疑問  
があります。むしろ和歌の五七五七七の形式で漢詩を作るほうが適していると思いま  
す。英詩の俳句形短詩は開発の余地もあるかもしれません。

台北俳句会は基本的に日本語世代のもので、若い世代を育てることに苦心しなければ  
自然に衰退してしまう恐れがあります。私はアメリカに住んでいるので台湾の世代を  
育てることができず、黄靈芝先生に頼るほかありません

以下は、冒頭の段落についての、張自身の説明である。

『土地なき民の悲しみ』は、小学三年の時家にあった、ポーランド独立を書いた全三冊のタイトルで、『土地なき民』はディアスポラのこと、台湾は日本植民地から中国の奴隷国家になって、私や多くの台湾人が同じ道を歩んでいるが、ユダヤ人のように外国に移住して故郷の独立を願っている人間のことです。アメリカに留学しても、祖国の建設に尽力することができない。中華民国とは中国人が台湾人を奴隷扱いにしている専制政権であり、この『悲しみ』は、外国にいて故郷を思う者達の心境です<sup>28</sup>。

「私の俳句歴」は、2006年に筆者が「台北俳句会」会員に向けて募集したものであるから、筆者は当時この語句に注目することなく、俳句を中心に考察していた。しかし年を経るにつれて、「台北俳句会」が台湾において、その存続を如何に確保しようと苦闘してきたかを解明していくうちに、会員のひとりで外国の地から参加している張継昭に行き当たった<sup>29</sup>。「私の俳句歴」は一見、何の取り立てて論ずることもなさそうな文面であるが、実は張が主張する台湾独立論に関わる台湾の歴史的経験と記憶が、諸々内包されているのであった。上記の張自身の解説の「土地なき民」「専制政治」等の語句に、客観的には多少感情的に聞こえるが、それらは滲み出ているのである。

更に張の同じEメールの説明を続けると、

同じ漢字の名前でもいく通りの違った読み方があり、米国の名前やいくつもあるペンネームは、生まれ育った時は日本語でチョウケイショウと呼ばれていた。終戦後は台湾語の呼び名でティオケーチャウ、この呼び名にまだ馴染めないうちに、中学では中国語読みのチャンチーチャウ、これは大嫌いだけど、パスポートにも標記されている名前。チャンと呼ばれるのが嫌いだからアメリカに渡ってすぐに、Andreを使い出した。なぜAndreかというと、心はやはりアメリカに馴染めないからフランス式の名前で日本語のアキラをAndreとした。このように外国で暮らす台湾人の多くは、外国名を使うようになる。中国語で呼ばれるのが嫌だから、英語の名前で呼ばれるようにしたい、そのうちアメリカの生活にも慣れ、アメリカに帰化し、多くのアメリカ人はアンディと呼ぶようになった。それで、ペンネームを考えた時は『暗地』とした。『暗地』を中国語でアンディと発音する。暗い土地とは、土地なき民の心境、つまりディアスポラの心です。ところが台湾人の（AC通信の）読者から、何故中国語を使うのかと聞かれて困った。なるほどこれは台湾語読みではアンディにはならない。そこで最終的に『红柿』は台湾語で発音するとアキラです。

とする。

侵略された国や人々が、侵略者側の言語と氏名を強制されるのは歴史上の常であるが、同様にそれは、台湾の歴史にも色濃く込められている。日本植民地支配から中国国民党の支配言うなれば代行時代となり、国語は日本語から中国語へ変えられ、国民党を中心とした政策を不満とする者の中には、海外に出て行く人々もいる。それは人々が否応なしに影響されざるを得ないその状況に追い込まれる結果とみられる。そしてまた、その海外の事情に適応して個人の名前も変化させていく。個人の名前の変化は、台湾人の移動の軌跡と心情の起伏を

も無意識的あるいは意識的に反映させているのである。殊にアキラは日本名である。しかも彼の著書で、ワシントンでの生活を描いたエッセイ風小説『フライデイ・ランチクラブ』<sup>30</sup>と小説風半自叙伝『不孝のカルテ』<sup>31</sup>の主人公名が、アキラなのである。この日本名をどう解釈するかは、後述する。

更に「私の俳句歴」に戻ってまとめると、そのことが例示される。

張の生まれは昭和9年で、台湾では日本語世代の最後に属する。父は医者の家系に生まれ、医者三代目で、京都帝大の医学博士である<sup>32</sup>。母は彰化高女を出て父に嫁ぎ、京都で6年ほど過した。張は生まれた時から日本語で育ち、日本語教育は小学校三年と一学期だけである。四年生の時に米軍の空襲が激しくなり田舎に疎開し、日本語教育はそれだけとなった。1957年台南にある成功大学の採鉱科を卒業、1959年に兵役を済ませてすぐアメリカへ留学した。ミズーリ大学修士、テキサスのライス大学地球物理（地震学）博士を取得した。92年までアメリカで地震学関係の仕事をしてきた。

ところで戦前の留学先が日本であることは、日本の植民地であれば言うまでもなく、日本政府としても優秀な人材は台湾に貢献させるべく、日本への留学を推進した。その当時張の父は日本で留學生活を送り、嫁いだ母と共に帰台して子ども5人を育て上げた。そして父同様日本に留学させた長男・長女・次男のうち二人の息子は医者、長女は医者に嫁がせ、日本に永住させた。三男の張と次女の末娘がアメリカへ留学した経緯は、張の前掲書『フライデイ・ランチクラブ』と『不孝のカルテ』に詳しい。

しかし張は、上の兄弟3人が日本に留学したのに対して、日本の敗戦を機に留学先を米国にした。当時1950年代から80年代にかけての台湾における米国留学についての事情は、成瀬千枝子の「戦後台湾におけるアメリカ留学（Ⅰ）（Ⅱ）」<sup>33</sup>に詳述されており、張が留学後も帰台出来なかった事情も提示されている。

張自身も、

「中国人の台湾人に対する差別統治に不満をもってアメリカに渡った人間は」<sup>34</sup>

と書き、

留学するならアメリカが一番、ことに理工科はそうだった。ところが入学して分かったのは、台湾では炭鉱と石油の他に職がない。しかも当時の学生はみな、中国人の白色恐怖政治に抵抗して留学を考えていた。台湾人の大学生は殆どアメリカに留学して、中国人の独裁政権から逃れたかった。だから私は大学3年で既にアメリカ留学の許可を取っていた。留学するなら復興期の日本ではなくアメリカという一般風潮で、みんな留学したら帰らない決心だった<sup>35</sup>。

と当時の状況を述べる。

成瀬によると、それだけの理由ではなかった。

戦後台湾においては、1950年から1999年までの間に、未曾有の留学ブームが起こり、多くの若者が米国を留学国として選んだ。特に1980年代半ばにかけて、8万5千人あまりが台湾から留学し、その9割がアメリカに留学している。1954年国民党政府遷台初公布の改訂「国外

留学規定」には、留学試験に合格すると、男子は軍事訓練の終了後出国が許可されるとしていた。それを終えて留学した彼らのおよそ9割は、戦前とは対照的に学業終了後も帰国せず、ビザの留学生資格を移民の資格に変更して、米国に残留したのである。

張が1959年に渡米したのも丁度その頃であったから、前述の彼自身の記憶と当時の社会状況とは符号する。そしてそのまま米国に残留した理由を、さらに成瀬の前稿の中からまとめて、関連する項目を挙げると、次のようになる。

1) 中華民国が1949年内戦に敗れて台湾に撤退して以来、アメリカ政府は「緊急援助留美学生計画」を執行して、米国に残留する留学生に多額の支援を行い、1950年朝鮮戦争勃発後、中華人民共和国封じ込め政策の一環として、中華民国国民党の政府に対して、経済的・軍事的援助も行った。大陸からの武力攻撃を恐れていた台湾の人々は、米国への依頼心が強まり、アメリカを盲目的に崇拝する風潮が広まった。2) 台湾では、遷台したばかりの国民党政府が、「大陸反攻」を国是として戒厳令を発布したため、人々は言論・思想の自由を奪われ、経済や教育は混乱に陥り、政府の政治上の厳しい統制の下での生活をするよりは、対照的なアメリカでの生活を選択した。3) 台湾内の就職難は、戦後の日本を含む外地からの大量帰台による就職難のためであった。4) この点について台湾では、公務員は殆ど中国人で占められているという意識が、戦後から現在に至るまで、台湾人の持つ不満のひとつであるという。先の「俳句に関わる自分史」の事例の中にも、そのことは挙げられている<sup>36</sup>。4) その他台湾の将来が不確実であったために、外省人の子弟でさえ帰台させずに米国に残留させた。何時中国に帰れるか不確定であるし、中華民国の国連脱退に関連する台米・台日国交断絶など台湾の孤立が深まる中での事情があった。そして留学はある種のステータスとなって、50年代60年代初期は外省人のそれが多かったが、次第に力をつけた台湾人の子弟も増え、米国を目指す若者が増加していったという。

この論文で興味を引くのは、外省人の子弟が、積極的に米国に留学したということであろう。当時の米・台・中そして日本の関係が複雑であったことの証であろうが、それらの米国政府の中華民国からの留学生への支援は、公務員を殆ど占める外省人子弟に向けられたという本省人の怒りの声が聞こえそうである。しかし、力をつけた本省人が、その選抜を勝ち抜いていったのであろう。

先に挙げた2)の中に白色テロ（白色恐怖政治）の記述はない無いが、前述の張の記憶は、事件が起こってその肅清が生々しい痕跡と記憶を継続する時期だけに、その恐怖が留学とその先での残留を後押ししたことは、否定できない。つい最近のAC通信<sup>37</sup>にも、「2.28」を忘れるなという内容がある。成瀬の調査にこの事件が含まれないのは、調査が公的資料に基づいたものであり、当時の本省人の生の声の資料が少ないためであろう。成瀬が北米華人社会を、特に女性移民を中心に研究していたとは言え、この種の事例は多くあるのではないか。その部分において張の当時の留学生としての本音が、拙論<sup>38</sup>によって語られるのである。また張は、兄弟上の三人が日本留学時に親からの多大の支援を得ていたにも拘らず、自分は独力で奨学金だけで留学生活をし、妹まで引き受け、最終的に結婚後は両親まで米国に引き取るという経緯を、前掲書に記している。それが可能だったのは、台湾からの留学生には特に、奨学援助を厚くし、移民法改正をしてさえ優秀人材を確保したいという対中政策事情が、米国政府側にあったと言えよう。当時張は政治的な広範な情報は入手できる立場にはなかっただろうから、台湾における若者達の、ただただ不安な現状と将来への不確実性から離脱し、二

度と帰らぬ覚悟で自由と希望を求めて米国へ留学していったのであろう。

以上のことから、張の現在に至る人生に起こった経験とその記憶は、台湾の戦後の歴史と社会事情をそのまま反映したものであったのである。

## 2 張と「台北俳句会」

続いて俳句との関係を、同じく張の「私の俳句歴」から考察する。

俳句を始めたのはまったくの偶然から母は台北俳句会の創立当初からの会員でしたので、台北俳句会の俳句集は時々読んでいましたが、アメリカで暮らしているので別に俳句を始めるとは思っていなかったのです。92年になって俳句会の会員に無理やり入会させられたのが実情で、その後はアメリカから投句する会員、母子二代の俳句会員は母と私だけです。

と、俳句との関わりを述べ始める。俳句を始めて俳句の難しさを知り、俳句の奥の深さが分かり、彼のような評論を書く者にとって、俳句は簡潔明瞭を最良とする訓練となったと言う。前述「私の俳句歴」の俳句は、張自薦の句である。まず、俳句について述べると、a・d・e・f・g・i・jの句は、何気ない情景であるが、その目で見れば、全て政治的な句と言えなくもない。b・c・hの張自身の老体を、台湾に例えると、張の一喜一憂がより強調されて、心に響いてくる。張の解説は聞いていない。

尚、「私の俳句歴」の最終段落は、張の俳句観である。俳句にも俳句観にも彼の主張する「台湾独立論」の表現はない。それというのも、彼が「台北俳句会」に入会を勧められたときは1992年であったが、

参加と同時に政治のことは書かない、言わないように注意を受けました。俳句会が成立したのは40年前のことで、まだ戒厳令が敷かれていた時代ですから、文学の集いと雖もさっそく国民党の注意を受け、スパイが句会に参入してきたのでした。もちろん私が参加したから、と言うものではありません。何かの理由で退会し、また入っただけの事です。誰もこういうことは表立って言わないけど、すぐ会員たちの知る事となるそうです。今でも俳句会の中には国民党员（筆者は支持者と聞いている）がいます。これは事実です。私の記事はいつどのように転載なさってもかまいません。俳句会の人々は台湾で特務の監視下で生活してきたので、今でも国民党に対する恐怖心がありますが、私にはありません。この数年の間二十数回も台湾で独立建国の為に講演会を行ってきましたが、尾行はなかったようです。或いは尾行が巧妙なので気がつかなかったのかもしれませんがね<sup>39</sup>。

と、入会当初に釘を刺されていた事情を述べている。したがってこの「台北俳句会」では、張が政治活動をしている人という認識はなく、ごく一部の親友のみ知ると言う。

それでは何故「台北俳句会」と繋がっているのか。それは張の生い立ちの環境から来ると考えられる。次は同じくEメールから、



母は当時の女学校の図書館の本を全部読みきったほどの読書好きで、家には本がたくさんあったけど、私だけが母親の血を受け継いでいたようで、小さい時から本を読むのが好きでした。戦争で米軍機の空襲がひどくなって、田舎に疎開するまでに（小学校4年）本棚の本を全部読みきったのは、私ひとりだけです。夏目漱石全集、明治大正文学全集などは戦後読みました

とあるように、「わたしの俳句歴」の冒頭の『土地なき民』などの書物は、小学校三年までに張の家庭の本棚から読まれたものの一冊であり、それが現在のわが身になろうとは、張自身も予期しなかったことであろう。第一次世界大戦と第二次世界大戦に翻弄されて土地を奪われ、国を捨てて国外に職を求めて出ていくポーランドの農民達の姿を、殊に米国に出稼ぎに来た自分自身を重ね合わせて、彼の思いは出自の土地台湾へと馳せるのであろう。

このように、家庭環境によって生まれた物書きの才能は、自分の専門職以外の分野であるAC通信や小説・評論の領域に生かされ、俳句や川柳を詠む原動力となっていると思われる。したがって、政治活動とは一線を画していても、この文芸活動は張の台湾独立運動のエネルギー源となって、台湾に繋がっているのではないか。更に言えば、日本に対する好ましい記憶を持続させるために、不可欠のものとなっているのではないか。

ところでここで、黄智慧の「ポストコロニアル都市の非情」<sup>40</sup>における俳句の扱いについて再度、考察してみよう。第三章で取り上げたが、本論文を書く契機は、次の通りであった。黄智慧は、戦後の台湾における日本起源の短詩文芸である短歌・俳句・川柳の例を挙げて、日本殖民時期から次の来台国民党政府に向けての抵抗の証として、「指を折り短歌詠み居れば忘れ居し大和言葉が次々と湧く」「日本語を本気でしゃべる終戦後」等を筆頭として、短歌・川柳に込められた新政府への反感或いは日本びいきの内容を込めた短詩を諸々挙げている。これらの短詩は、マスメディアにおける日本語禁止令を含む戒厳令、そしてそれからの解放という史実を背景に、そしてその開放から出来たものである。ところが、俳句に関してはその種の内容の例句は挙げられていない。黄が言うように「新来の統治者（国民党）は日本語を聞いても分からないから」とし、これらは「二重植民後の抵抗の形態である」と言うのであれば、俳句も同様に抵抗や日本びいきの句が例示されるべきであるが、それらしき1句を除いて、明白な句は無い。ということは、それらを見つけられなかったのではないか。

即ち冒頭に犯人を明かしてしまった推理小説のごとく、筆者は「台北俳句会」では政治的な内容の俳句は、禁止されていたと始めに明かしているのだが、張は政治活動家である故に、参加当初に「政治に関わらない」決まりを聞かされていたのだった。張から筆者がそのことを知らされたのはかなり後であって、それまでに筆者は、その「台北俳句会」独自の暗黙の禁止令に辿り着くまで、これら短詩文芸の短歌・川柳との比較にかなりの時間を費やしていたのであった。そのため、「台北俳句会」主宰の黄靈芝に直接問うてみたが、「この俳句会に政治的な俳句を見つけるのは難しいでしょう。」「私は別に政治を詠んではいけないとは言っていない。ただ句会は会員みなのものであり、個人の作が何かのとぼっちりで他の会員に迷惑のかかる恐れがあり得ることを、その危険性を警戒したい。物事はこじつければ何とでも解釈できるもの、政治はからくりで満ちており、うらのうらに何が仕組まれているか知れたものではない」<sup>41</sup>との答えであった。その後漸く見出したのが、次の論文であった。黄自身が

日本の文学雑誌の「世界俳句特集」に寄せた「台湾の俳句——その周辺ほか」の中でこの件について述べ、「私たちの会では、会の中に政治活動と商業行為を持ち込まないことを不文律とした」<sup>42</sup>と明言していた。政治活動と俳句表現とは別ではないかと言う人がいるとしたらそれは詭弁で、政治活動が禁止ならば当然、俳句に表現できるはずはないのである。では俳句には、その種の俳句は皆無なのかという点については、第四章に記述のとおり、ここでは扱わない。張との関わりの部分のみとする。

## 第二節 張継昭と Andy Chang のはざまから生まれくるもの

### 1 忘れられぬ他者・日本への想いそして二つの中国

ここでは張が、特に日本人を AC 通信などの活動対象としていることと、派生的に繋がる事柄について分析する。

張が初めて政治問題についての評論『台湾丸の沈没?』を日本語で出版したのは2000年であり、ここから「台湾丸」シリーズが始まる。大学の専門も就職先も、政治とは関係のない仕事であったにも拘らず、張が台湾独立運動に関わっていくことになった背景には何があるのか。直接の契機になったのは、日本人があまりにも台湾のことを知らない、ということであったと言う。張は1992年の年末に職を辞してから父母の世話を始め、99年98歳の父親が亡くなるまで続いた。その間『フライデイ・ランチクラブ』『不孝のカルテ』を発表した。そのあと99年にマイクロソフトのメールマガジンが刊行され、このうちの政治、国際問題などを他の日本人記者たちに誘われ受け持ったことから、これが閉鎖になっても「アジア国際通信」を書き、最終的に張の第二の人生は、「台湾の直面する問題を日本の読者に伝える」という目標に定まった。その後独立し、AC通信として台湾問題を取り上げて記事を書き、今日に到っている。以上のEメール<sup>43</sup>のまとめは、張が台湾独立運動に照準を定めたことを具体的に物語る。更に同メールによると、2000年に台湾では民進党候補の陳水扁が国民党候補を破って始めて台湾人政党の総統が誕生したが、直ちに激烈な国民党の嫌がらせや政治的ボイコットが始まり、政治は難航した。これら一連の記事をまとめて『台湾丸の沈没?』(2000. 中国語版2002)、『ガンバレ台湾丸』(2003、中国語2004)、『連宋の乱の真相』(2004)、『ラファイエット事件<sup>44</sup>の研究』(2006. 日本語で発表と同時に中国語に翻訳)『台湾丸の難航』(2005)『台湾丸の針路』(2010. 日本語と中国語の対訳)などを出版することによって、活動の拡充を図ろうとした。

そこで筆者は、張の作品は何故日本語なのか、対象は台湾の人々ではないのかを問うと、「日本人があまりにも台湾情勢について知らないことに驚かされ、日本人に伝えることにした」と言う。台湾情勢に詳しくないのは、日本人のみではないだろう。それではいっそう、日本人を啓発あるいは情宣の対象に定めた理由が理解できない。日本人に情報を与えて理解させることの意義はどこにあるのだろうか。

張の職を辞してからのその後の方向性の決定には、やはり台湾で過した日々の記憶が、特にここでは戦前の日本統治時代の台湾富裕層としての経験が、「忘れられぬ他者」日本を懐古し、脳裏に蘇えってくるのではないだろうか。若林正丈の「台湾ナショナリズムと

『忘れ得ぬ他者』<sup>45</sup>は、そのことを具体的に説明している。それによれば「台湾ナショナリズムとは、端的に言えば『台湾独立』の運動と思想、すなわち、台湾において独自の政治共同体、つまりはネーション (nation) が存在している、あるいはネーションを形成すべきであり、その共同体には国際社会において固有の名前と主権的地位が与えられるべきである、とする思想と運動である」<sup>46</sup>とする。

また「台湾ナショナリズムが、近代の台湾社会にとっての日本と中国という二つの『忘れ得ぬ他者』との関係から形成された」<sup>47</sup>という関係論的視点から言えば、本来ならば、戦前の日本統治期 50 年間の日本人に対する被植民者の怒りも、多少なりともあるはずだが、前述した台湾人張の良き日々を過ぎた日本統治時代の経験が、無意識に日本人に向けて台湾情勢を説明し、共感を得ようとの志向性を持つと推察できるのではないか。

しかも先に述べたが、第二の人生に入ってから著したエッセイ風と半自叙伝風小説二冊の主人公の名前がアキラである。その兄弟の名前も全て日本名である。アキラは張自身を描いていると見られる。ここに日本統治時代に対する良き記憶の証左が見て取れるのである。もし嫌な記憶であれば、たとえ小説であっても、自分に当たる登場人物に、日本名を付けるはずがない。以前台湾人の日本育ちで川柳に優れた人が創作した、台湾・日本・中国に亘る壮大な舞台設定の日本語長編小説<sup>48</sup>を贈られ読んだが、そういう名前の使われ方はない。また張は、ペンネームを「红柿」としている。これを台湾語風に発音すると「Ang-Kee-La」つまり張の本名となるとのこと。こういう表現は、日本に関わった富裕層の人々全員ではなく、張自身が個人的に抱く特別な日本統治期の快い経験の結果とも考えられる。筆者は以前、「植民地時代に身体化された日本語は、彼らの自己表現の根幹となって、日本統治時代の良い思い出と共に、いつまでも精神的身体的に内在するのである」<sup>49</sup>と論じたことがあるが、そのことは、特に張において顕示されていると言えよう。

更に「植民地時代に身体化された日本語」と言うように限定化すると、張の場合は、小学三年までしか日本語は学んでいないので、それには当たらない。しかし長じてから独学で自分のものにしたと言うから、彼の日本に対する格別な思いが、日本語習熟に志向させたのであろう。但し語学について言うならば、張は5カ国語を操る。

あるいはまた、両親が留学滞在し、上三兄弟も留学して帰化し在住する日本は、張にとって一種の憧憬の地であったかもしれない。また現在においてもその思いは継続しているとも考えられる。その台湾歴史変遷の上に立つ個人的な感情がある故にいつそう、日本人には台湾の実情を理解して欲しいとの欲求が、日本人向けの AC 通信に講演に、張を駆り立てていくのではないか。しかも退職後の仕事を共にする仲間は日本人が多く、日本人コミュニティとの関わりが、自然と出来てくるように見える。本人も無意識にその方向性を持って、環境をリサーチしていくのではないだろうか。そのことが、張の日本人との良い経験の記憶と重なって、親密感や安心感を与えているのではないか。米国社会での張が置かれたコミュニティの問題は、後述する。

更に若林の前掲論文によると、中国という語には、内戦により中国大陸を追われてきた中華民国と、それを含めて一国統一を図ろうとする中華人民共和国との2つがある。この2つのもたらした経験は、張の記憶の底に持続的に固定化され、折ある毎に意識上に浮上してくると推察される。そしてそれらは、若林の言う「台湾ナショナリズムは、台湾の歴史的・地理的周縁性の産物、あるいはそれへの反発の産物として理解できる」<sup>50</sup>というこ

とと、張が台湾の日本統治期に持った快い経験から一変して、中華民国国民党政府の政策を逃れて渡米帰化することになった経験を経て、ディアスポラとして台湾独立運動に携わること第二の人生の目標に定めた理由とは、一致するのである。勿論これは張ひとりの歴史的経験であり、張と同様な経験をした者たちの典型的な一事例でしかない。歴史的には日本と中国から周縁化された台湾在住の台湾人としてではなく、米国留学と帰化という、よりいっそう二重に周縁化させられた、ディアスポラの止むにやまれぬ行動と言えよう。ここで言う二重の周縁化とは、戦前の日本植民地支配と戦後中華民国政府国民党の植民地的支配である。そして、米国に渡ったディアスポラ張らは、アメリカ人社会においてはマイノリティであることから、更なる周縁化を経験することになる。

張がミズーリ大学修士・ライス大学地球物理（地震学）博士号を取って就職した米国の地震関係の仕事場には、米国人でも博士号を持っている者がいなかったせいで、嫉妬から嫌がらせを受けたという。先の成瀬の調査にもあるように、米国での専門知識を持つ人材不足による、アジアからの留学生受け入れの体制が整ってきた1960年代においても、その傾向はあった。陳天璽の「台湾系華人移民」<sup>51</sup>で扱っている一般移民についても同様の記述があり、マジョリティからしてみれば、移民の流入により雇用機会が奪われ、異文化の衝突による事件や犯罪の多発など、移民が社会に与える不安要因は多く、彼らにとって厄介な存在なのである。更に引用すると「その後、第二次世界大戦から80年代頃までの華人移民は、台湾や香港からの者が多数を占め、台湾の人たちは一獲千金というよりも、より高い教育水準や生活の安定を目的にアメリカに渡った。こうした人々は、専門知識を身につけ、修士号や博士号を取得し、医者や技術者などとして職を得て市民権を取得しアメリカに根付く者が多い」<sup>52</sup>としているから、当時張も、大学を卒業した留学生として、台湾からの多数の移民の一部分を占めていたのである。しかし陳は、「いかに自由で平等な国アメリカであるといっても、『ガラスの天井 (the glass ceiling) 』にぶち当たる。これは、アメリカ社会におけるマイノリティの昇進状況を表す際に使われる表現であり、つまり昇進への門戸はガラスで出来ており、一見誰でも制限なく平等に昇進できるように見えるが、実はやはり、白人以外の者には限界があるということを意味している」<sup>53</sup>と指摘する。まさに張に対する職場のいじめは、陳のこの稿が裏付けている。

以上から言えることは、いくら自由の国米国といえども、戦後1945年直後から張が留学した1960年代においても、更に現在に近い1980年代であっても、移動し流入してきた他者であるディアスポラは、大なり小なりその社会に占めるポジショニングによって、周縁化される要因を、否応なしに内包させられるのである。近年では、出自の国に帰還して、そのディアスポラの特性を発揮して、東西の間を繋ぐ役割を担うことも出来よう。しかし、そうは出来ずに他国で生き抜くことを余儀なくされた者達は、真のイグザイルでありディアスポラなのである。特に台湾からの留学生を含む移住者は、二度とこの地を踏むことがないと決意しての出奔であったと見られる。

## 2 張におけるディアスポラコミュニティ

張のアメリカ留学後の足取りを追ってみよう。大学院を終えて就職したのはワシントンであったが、西海岸のサンクレメンテに引っ越した。引退前はヴァージニア（ワシントン

郊外)に住んでいたが、ワシントンから台北まで飛行機を二回乗り換えて、22 時間かかる。出来れば西海岸に引っ越したいと思っていて、ようやく引越したのが 2003 年春であった。

そのコミュニティについての歴史的地理的説明は、張の E メール<sup>54</sup>に詳しいが、紙幅の都合により割愛する。引っ越して間もなく、ロサンゼルス台湾人(米国籍台湾人のこと)から連絡があって、「台美人論壇」というグループに、『台湾丸の沈没?』について講演を頼まれた。それ以後「台美人論壇」のメンバーになったが、サンクレメンテはロサンゼルスよりもサンディエゴの方が近いので、サンディエゴの同郷会に参加する方が多かったという。そのサンディエゴの同郷会月刊誌に、毎月中国語の記事を連載し、ロサンゼルスの同郷会で講演をし、台湾問題の討論会などに参加するようになった。2007 年頃からロス在住の日本人に講演を依頼されるようになり、やがて日本人と台湾人数人が「緑の会」を結成して、張がロサンゼルス日本人に対して台湾問題の講演を行うようになった。2006 年 7 月には、シンシナティで行われた在米台湾人教授会において、「ラファイエット事件の真相」(中国語版 2006 年 6 月)を台湾語で講演しているが、それについては触れない。ここでは、海外のディアスポラコミュニティが如何に存在し、そのコミュニティが、台湾独立運動をする張と如何なるつながりを持っているかを辿る。

「台湾人民独立宣言」は、NY タイムズの 2010 年 7 月 10 日に、「台湾人民建国宣言」と改名して広告欄に掲載された。

『独立ではない、建国だ』と言うことが大切である。サンフランシスコ平和条約によって台湾の地位は未定となり、台湾人は国籍をなくした。だから、台湾人は中華民国から独立するのではなく建国するのである。これは重要なことで、この違いを理解していないから台湾人は団結できないのである<sup>55</sup>

という具合に、『台湾丸の沈没?』の「台湾人民独立宣言」から 4 ヶ月(計画から 6 ヶ月)経って、ニューヨークタイムズに掲載する前日の AC 通信 324 号に、「建国宣言」と改名する意義を鮮明にしている。掲載までの紆余曲折の詳細についても、同じ号に述べられているが、台湾人が如何に思想的に混乱し、建国に団結尽力するのがどんなに難しいかを表わしている。

そして、張の関わるアメリカ西海岸のコミュニティでは、賛成してこの宣言に参加する者も多いが、多様な独立意識と各々の出自の背景を背負いつつ、その方法選択の差異によって、意見統一が困難である。それは、台湾内部での台湾独立の意識統一の困難性の上に、ディアスポラ意識の多様性をも包含して、よりいっそうの複雑性・混迷性を表出する。例えば張は政党に属さず、台湾で活動していないし、表に出ることもしないと自分のことを評している。そのためか、サンディエゴの同郷会の月間雑誌に記事を書くと、その内容によってその都度、国民党と民進党いずれからも攻撃・批判を受ける羽目になる。個人的な批判で居辛くなり、主にロスの「南加州台湾会」に行くようになる。その「南加州台湾会」は、張の働きかけで一時は 80 人ほどになったが、もともと台湾人のグループがもとになり、派閥意識が強く団結しないので、これらの諸団体の代表が集まって合作するような討論会を作った。しかしニューヨークタイムズに独立宣言を発表したことで、たちまち 12~14 人ほどになった。張がニューヨークタイムズに独立宣言を発表したことは、『南加州台湾

会』の会議で意見を提出して、12人が賛成して始めた。しかし、途中で邪魔が入って計画が頓挫し、最終的には張ひとりで宣言を書き、台湾で諸団体の同意も募金も全て張がひとりでやったとのこと。すると発表後すぐに、張の売名行為だと批判する人が出てくるという具合に、なかなか一枚岩に団結できないと言う<sup>56</sup>。以上は張の主張であるから、その裏づけはない。ただ、張の立場から活動の困難性についてまとめたものである。

更にその他の例として、張の仲間のひとりに送りつけられた日本に帰化した台湾人からの誹謗メールの件がある。最も台湾情勢を理解して欲しい日本人の批判であるから、打撃であったろう。必死に衆智を結集したと自負したい張にとっては、尚更であろう。しかし、この活動が何らかの圧力によって、頓挫もしくは無いものになり、気泡と化す危惧を持ちつつ進めている<sup>57</sup>のであれば、このことによって仲違いとなって「南加州緑の会」が解散になっても、その独立活動を停止しようとはしなかった。このように張は、いくつかの台湾と関わるコミュニティに参加しつつ、自己主張の拡大に努める<sup>58</sup>。2009年12月1日には、「日本李登輝友の会ロサンゼルス支部」主催の映画「台湾人生」上映会<sup>59</sup>で、アンディチャン博士の補足説明と質疑応答という役割を担っている。この映画は、5人の台湾人にインタビューする形で、ドキュメンタリーとして日本人監督によって制作されたものである。これによっても南加州の諸コミュニティの活動とアンディチャンとのつながりの一端が垣間見えるのである。日本と台湾両方のマスコミに宣伝を依頼しての観客980人で、そのうち戦前生まれが30%で、台湾生まれ20%の中で、日台共栄のために開催している。その質疑応答には、台湾の歴史の上に立っての現状と将来への展望が、観客との間に交わされている。例えば、日本人からの差別、当時の若者の日本人としての愛国心、自分達を捨てた日本政府への恨み、台湾の元日本人を忘れないでというだけでなく、独立を助けてほしい等、30ほどの質問応答をしている<sup>60</sup>。但し、このような会に参加をしても張は、李登輝は台湾独立に力を尽くさなかったとの見解を持つ。

また陳天璽の「台湾系華人移民」に戻ると、陳の論の目的は、台湾系の華人移民の活動やアイデンティティに注目したものであるが、張の関わるコミュニティが如何なるものか、比較対象の一例として見てみよう。台湾独立運動が、陳の取り上げているコミュニティでどのように進んでいるかは分からないが、どういう機能を持っているかを見ると、「サブ・ナショナルな外交使節」的役割を持っているとする。この例では、「百人会 (The committee of 100)」であるが、1990年に結成された非政府組織で、米国と中国、そして台湾の相互理解を構築するために、使節派遣による政府訪問をはじめ、各政府の高官を招き、交流の場を設け、個人的な人脈を活用する。更に、あらゆる機会を利用し、政府及び華人等が互いに抱えている問題を解決するため、対話を続けていくよう橋渡しをしているとする。その具体例の中で、1996年3月中国のミサイル演習により台湾海峡危機が発生した時も、中国と台湾両方に親戚・友人を持つメンバーからの要請で「百人会」の総会を開き、アメリカ上院議員や高官に働きかけて、江沢民とクリントン両首脳の訪問を実現させて、その状況の好転を図った功績の一部は、このコミュニティの力であるとする。このような力を持つためには、経済力も権力もかなりのレベルを要するのであるが、先に述べたこれからの三世世代の若者は、ビジネスにおいて同じく、東西の架け橋になろうとしているという。つまり「はざま」としての役割と生きがいをもつことが、これからの方向付けとなるという。

実は張もまた、アンディチャンとのはざまに揺れ動きながら、中国を見据えつつ、台湾のために自分自身が奔走しようとしているのではないか。台湾人民を鼓舞し、叱咤激励するのではなく、張自身に出来ることを実行することによって、台湾との架け橋の役割を担おうとしているように思われる。二つの名前と国とのはざまに生きる者の使命でもあるかのように。そのことを次に述べる。

### 第三節 張にとっての台湾独立運動とその周辺

#### 1 海外における台湾独立運動

ここでは、張の台湾独立運動の歴史の上で、特に戦後から今日に至るまでの部分について、しかも張と関わる範囲で考察する。そこには、台湾独立運動に携わる台湾在住の人々とは異なる思考・方法・行動があるのではないかと仮説に立っている。結論から言うと、ディアスポラ張の台湾独立運動についての考え方は、台湾在住の独立運動家とは異なると筆者は推察する。張は

中国から亡命した有名な作家が、台湾の政治家や論客は凡庸で物事を学ぶ事ができないと何度でも述べているが、全くその通りである。あまり言いたくない事だが、台湾の独立運動を名乗る人々の多くは体制内運動といって、政府を倒すとは言わないで中華民国を改名するという。つまりキレイごとをいう、本物でない運動家ではないかという疑問が湧く<sup>61</sup>

と非難するのである。しかし台湾在住の活動家と言われる人々は、台湾に在住しているが故に、政治情勢と民心の動きを直に感受することができる。したがって台湾人民の現状と乖離した活動は困難であると判断するのであろうか。台湾の歴史と時機とに動揺する社会情勢との対応で、適時動向を精査し、肌身に感じて方向性を探らざるを得ない彼らの実情があると思われる。それは、「台北俳句会」が独自の不文律を掲げて、自己存続を図ろうとすることを共有すると筆者は考察する。海外の地から呼びかける張とは、立ち位置が異なるのである。それが故に張は、目前のことに惑わされない客観的な判断が可能であり、大局的な動向判断が可能であるかもしれない。その差異でなくとも、「独立系の指導者は必ずしも一枚岩ではなく、個人の思惑が強すぎて一貫しないまま、一代で終わってしまったのがその傾向である」と楊文魁<sup>62</sup>が述べるように、台湾独立運動を唱える者の数ほど多様性を持っていると言われる。だからこそ、なかなか一枚岩になれないと、独立活動家の幾人かは嘆く。張もその中のひとりと言えるかもしれない。否、嘆くというより苦悩しつつ、常に現状を打破しようとの意気込みを維持し続けている。しかも張はただひとり、どこの台湾独立運動の団体にも属さず、独自の主張を展開する。

そこで予め、戦後の外国からの台湾独立運動の歴史を、「台湾独立運動関連年表」(1945-2002年)<sup>63</sup>を基に、他稿で補足しながら概略紐解いて行こう。

張が10歳の時終戦を迎える。1947年2.28事件後、国民党政府の弾圧に抵抗する知識人

たちは海外逃亡する者も多かった。中でも伊藤潔の前掲論文<sup>64</sup>によると、次のようになる。2.28 事件で逮捕を逃れ、香港で「台湾再解放運動聯盟」を結成した廖文毅が、1948 年 9 月に国際連合に「台湾の信託統治」を請願した。またその後廖は、1956 年に東京で「台湾共和国臨時政府」を樹立し、自ら「臨時大統領」に就任した。しかし臨時政府の資金難から、1965 年に国民党政権に屈して台湾に帰国したため、臨時政府はなし崩しに消滅した。

そのため在日台湾独立運動は、戦後に来日した留学生らが、1960 年に結成した「台湾青年社」（後に「台湾青年会」）に中心が移る。台湾青年社の指導者だった王育徳教授は多くの青年層の弟子達を残して、日本で客死した。一方台湾では、海外に留学する者が増大し、特に米国への台湾人留学生が急増し、米国各地で台湾独立関係の組織が相次いで結成された。その主なものの一つが 1956 年結成の 3F (The Communities for Formosans Free Formosa-台湾人のための自由台湾委員会) で、後 1958 年 UFI (The United Formosans for Independence) に改組された。在米の台湾人は台湾の大学を卒業してから留学した者が殆どで、所得が高く、組織的な活動を通じて、米国政府や議会に対して、台湾独立のための効果的工作と説得を展開している。

以上、伊藤のこの説は、前述の成瀬や陳の説を共有している。このような事情から、台湾独立運動の中心は日本から米国に移り、1970 年 1 月にニューヨークに総本部「台湾独立聯盟」（後に「台湾独立建国聯盟」）を発足させ、ロサンゼルスに米国本部、東京に日本本部、パリにヨーロッパ本部、サンパウロに南米本部、台北には秘密の台湾本部が置かれて、世界的な組織に発展した。

張は台湾人留学生の例に漏れず、台湾の大学を卒業した後、帰化を覚悟で米国に留学した。張のその当時の話から、台湾独立のための留学生の組織の話は出ていないから、ニューヨークやロサンゼルス等の組織についての情報は、共有していなかったとみられる。ということは、台湾人の全米的組織までには達していなかったと言えよう。また張が当時それほど台湾独立に関わるほどの意欲も持てない、多忙な時期であったかもしれない。

しかし台湾人の海外への移民や留学が盛んになるにつれて、移動した先の国々で、特に台湾人移入の多い米国では、彼らで作るコミュニティの規模が大きくなればなるほど、出自の土地についての思いはいや増しに増すと思われる。しかし、2002 年 6 月 5 日台湾独立建国聯盟 (World United Formosans For Independence) 機関紙・月間『台湾青年』（日文版、台独聯盟日本本部発行、1960 年 4 月創刊）は、理論機関紙としての役割は一応達成したとして、第 500 号をもって停刊された。台湾独立の理論的バックボーンとなっていたこの雑誌が停刊になった背景には、種々の歴史的経緯が考えられるが、ここでは触れない。

そして現在の台湾独立運動は、理論と活動ともに盛んだった 2000 年前後に比較して、新聞・雑誌はもとより、学術論文も数少なくなり、管見の限りでは、殆どそれらしきものはない。陳光興の「台湾独立運動の終わり—2000 年台湾総統選挙後の新情勢—」<sup>65</sup>の中で論じていることを概略まとめてみると、次のようになる。

今回の選挙（民進党の陳水扁が勝利したもの）は歴史的一戦であっただけでなく、かつてないほどの派手で刺激的な選挙であった。民進党の勝利はポスト冷戦の流れにおける一つのキーポイントである。「冷戦時代の終結」は、「グローバル化」が一義的な客観的状況たる前提条件であるということがはっきり見て取れるし、グローバル化の新たな構造が指摘・暗示するのは合衆国の国家機構・資本が既に平穩にグローバルな覇権を握る位置を



占めているということである。しかし、この陳水扁の登場は、台湾社会が依然としてある種の空白期間であるという感じの中に置かれている。多くの新現象が分析不可能と言う「失語症」状況が生み出されている。この殆どは快適とも言える新情勢をより具体的に捕らえるには、より新しい考えと言語が必要なのではなかろうかと疑問符をつける。

しかしまた、どこまでも反対派であるわれわれのようなものにしてみれば、あたかも新しい情勢の下で発言できる領域が広がり、新政権を批判することの正当性がなくなってしまったかのようにであると、選挙直後の「あとがき」に記している。その後の台湾情勢の変移を予測してのことであろうか、それとも単なる狼狽であろうか。民進党が政権を執ったら、それで運動は完結したのだろうかという疑問符は、台湾の現状を暗示するかのようでもある。確かに現在はまた、国民党に政権が移っている。

台湾の民心は2分して揺れている。独立運動とは、台湾の場合は完了するものなのであろうか。そういう中、未だに継続中のAC通信は、例え張側の意見であろうとも、いかにも貴重な情報源として、台湾情勢を知ることの可能な資料的存在である。しかも、グローバルに人々が世界を移動し行き交う今日、しかも各国に自治独立の火種を抱え、殊に現在では「アラブの春」の人民自治独立の攻勢盛んな折から、このAC通信の果す役割は大きいかもしれない。なぜならば、張の繰り広げる台湾情勢についての主張は、以前から台湾のみに留まらず、グローバルな視野から説いてくるからである。例えば劉曉波のノーベル賞受賞について、中国は諸国に授賞式に不参加を要請したことは、AC通信 No. 339 (2010. 12. 13 配信) に、アメリカは東南アジアの未解決領土について中国に譲歩する事はないと声明したことは、同じく No. 335 (2010. 11. 4 配信) に、アラブの春は同じく No. 379 (2011. 12. 31 配信) など、話題は多岐に亘りその時機に触れて、読者の心底に響かせる戦略である。そのことは、現在の世界情勢に即応し、共感を呼ぶ大きな要因の一つとなっているであろう。

## 2 張の台湾独立運動理論

そこで張のこの理論については、既に『台湾丸の沈没?』を基に述べているが、他の理論と比較しつつ概略述べる。ここでは張がNYタイムズに掲載した台湾人民建国宣言〔資料2-(2) 参照〕を基にする。それによると、

1951年9月に、日本のサンフランシスコ平和条約によって台湾及び澎湖群島は未確定領土となり、同時に台湾人民も無国籍となった。台湾及び澎湖群島の主権は当時600万の台湾人民及びその子孫に属する。台湾人は中国人ではない。中華民国は蒋介石が台湾に持ち込んだ亡命政府の集団で、多くの国は既に滅亡した国と認めている。中華人民共和国(中国)は台湾と澎湖群島が中国領土であると声明した<sup>66</sup>が、これは事実ではなく、国際法的根拠がない。したがって台湾人民の所有する「台湾」という独立国家を建設し、世界に宣言するというものである。

台湾独立の法的根拠について、張は戦後サンフランシスコ平和条約を締結した時点で独立しているとするのに対して、小田滋は「主権独立国家の『台湾』—『台湾』の国際法上の地位—(私の体験的・自伝的台湾論)」<sup>67</sup>の中で、国連脱退の時点としている。この論にしたがって簡略に述べると、国連は1971年10月の総会決議で、国連に議席をもつチャイナは「中華人民共和国・共産党政権」がその代表であると指定し、「中華民国・国民党

政権」を放逐する決定をした。したがって中国大陸にやがては帰ろうとして台湾に逃亡していたチャイナ一派は、ここでその存在を否定されたから、もともと台湾人の住む島は台湾人のものとするとしている。独立の時点は異なるが、張も小田も法的根拠によって独立すべきとする。

一方陳鵬仁の「台湾独立論への疑問」<sup>68</sup>では、同じく国際法上において、台湾は歴史的経緯から、中華民国に返還されるべきものとする。サンフランシスコ対日平和条約第二条B項で、日本が台湾を放棄するに際して、「どの国のために」放棄するか明記せず、新旧政府の承認をめぐる連合国の意見が一致せず、台湾をいずれに返還するか決定を見なかったからであるとする。しかし、1943年の米・英大統領と蒋介石総統が、日本に対して発したカイロ宣言で、「これら同盟国の目的は、満州・台湾・澎湖群島のような日本国が清国人より盗取した一切の地域を中華民国に返還することにある」としている。この宣言と、1954年の米華相互防衛条約第六条でも、同じくそれを認めているから、それらの史実を重視されなくてはならないとする。また、台湾人はもともと中国人であり、台湾人の台湾は実現しにくく、将来的に中共が台湾を「解放」したいと強いることを忘れてはならないとする。また、新井宝雄の「講座・中国問題入門=根拠なき”台湾独立論”」(上)<sup>69</sup>(下)<sup>70</sup>によると、日中国交回復推進の視点に立ち、台湾人は中国とは別の独立した民族だと言うものに対して、大陸とは同根一体であると歴史的に説明し、アメリカの勝手な大統領の言明や、第七艦隊を台湾へ派遣したことなどを中国領土への武力侵略として、独立論に反対する。

以上の各論に於いて、張や小田の台湾独立論の国際法的根拠に対して、陳が誰に返還するのかという点を突いたのは、当然の問題提起ではないかと筆者は考える。カイロ宣言の妥当性の有無を問わずに考察するならば、陳の主張は肯定できる。しかし、どの論者にも見られるように、歴史的経緯から見れば、過去の歴史的事実も相互間の約定も、如何なる国であろうとも国益のためには、簡単にそれを反故にして態度を一変するというのである。史実がどうであれ、現実に即して豹変するのが現実外交のようである。したがってこれら独立論も反独立論も、国際的歴史の流れによって複雑化・多様化・混迷化すると思われる。陳がこの論を発表したのは、まだ戒厳令の解かれぬ時期の、台湾から日本に留学していた学生らが、日本において王育徳を代表に台湾青年社を結成し、『台湾青年』を創刊した1960年の3年後である。台湾本島では困難な台湾ナショナリズムが台頭し始めた情勢の中で、書かれたものである。陳も恐らくその運動に誘われたひとりとして、その運動に疑問をもって論じたのであろう。新井のこの論が1・2月に掲載された1972年の10月には、田中首相の訪中が行われたという、台湾を取り巻く国際情勢の歴史を反映しているのである。

以上台湾独立論について、張の独立論を他稿の一部と比較しつつ概略述べた。概略というのは、冒頭に述べたとおりに、張のディアスポラとしての活動に重点を置くためである。

ここで張の台湾独立運動に戻る。過去の歴史を辿っても分かるように、台湾情勢は一筋縄では行かない。中国・日本の過去からの歴史を背負う他者との絡み合いに加えて、特に国民党政府がアメリカの政策変更の笠下で、中国との関係を現状維持に押さえ込まれている状況では、民進党を支持する張の台湾独立運動は、なかなか容易ではない。張自身も総体的には、アメリカ政府を強力な支援国との見方は崩さないから、アメリカのその力をい

かに有効に利用できるか、かなり苦慮するところであろう。現状では張は、資料3のように、元国務長官のイエーツ氏へ請願した。今後台湾・日本・シンガポールなど東南アジアまで、署名運動を展開し、それをアメリカ政府へ提出する予定等の方法論が確認される。

### 3 ディアスポラの知識人と独立のための方法論

ここでは、張以外の台湾独立運動家について、その歴史とともに辿り、その共有する部分を確認する。ここまで張が、ディアスポラの知識人であることを仮説として論じてきた。

では台湾の独立運動に関わってのディアスポラについて述べる。ディアスポラと言われる人々は、張の言うように、そして成瀬の前掲稿が証明する如く、国民党政府の弾圧から逃れるために他国に渡り、特に戦後の米国に移動する移民となり、帰化を覚悟の上で留学する等、出自の土地を離れていく背景に、その地に存在できない何らかの原因を抱えている者が多かった。何らかの理由は、その地にあっては周縁化せざるを得ない或いはまた、心身の拘束に遇う危惧があったということであり、活路を見出すための移動であった。特に戦後から今日に至るまでの米国への移動は、他国への移動より格段の多さである。その理由は、先に述べた。

ところで張は、台北俳句会の会員としてディアスポラであることは、希少な存在であるが、台湾独立運動としての視座から見れば、多くの活動家の一部であることが、次第に明らかになってきた。現在でこそ台湾問題は、日本のマスコミにはなかなか登場しにくくなっている。それは中国に対する米国・日本の政治的向き合い方に従って、台湾への政治的態勢が変動することと関わってくるのだが、それについては他稿に譲る。ここではディアスポラである活動家について、2・3列挙し、それらから表出されるものを総括する。

まず林景明の特別寄稿「わが闘争記—台湾独立運動にかけた12年—」<sup>71</sup>は、1947年の2.28事件に敗れて海外に亡命した台湾人たちの中のひとりとして、自己の台湾独立運動にかけた12年間の歴史の変遷を、憤りとともに述べる。それは、台湾を追い出した国民党政府に留まらず、亡命者を受け入れる海外各国に対してであった。彼の前掲論文からその部分をまとめると、次のようになる。

台湾では言論の自由が許されなかった人々は、自由主義国家が台湾独立を支援しているからこそ、活動宣伝が許されると取り違える者が多かった。そのひとりが林自身であった。1962年3月、林が日本に来てみると、独立運動は国際的支援を受けているどころか、むしろ弾圧を受けていることが分かった。米国は活動家の留学生にとって好意的に見えていたが、ニクソンの訪中、国連追放、田中角栄の訪中と続いて、蒋介石政権が大打撃を受けて動揺した1972年に、台湾では起こるべき事が起こらなかった。ニクソンが台湾を中国との取引材料にしても、台湾人はどうすることも出来なかった。ここにおいて、景明は日本政府・日本人民が、人為的に台湾独立運動を弾圧・妨害したことに対し、満腔の怒りを込めて、抗議せずにはいられないとし、更に顕著な一例として、政治犯引渡しの国際慣習を無視した1968年の柳文卿強制送還を挙げ、景明自身についても日本に来て12年間、絶えず追い回され、強制収容されたり、未だに強制送還の脅威から解放されていないばかりでなく、独立運動家に対する弾圧が独立運動全体の士気に影響を及ぼすことを懸念している。

そして進歩的知識人を自任する日本人が、かえって「より大きい国益のために台湾を中

国のものと認めよ」と建策して、台湾人の自決権を踏みにじり、「これは中国の固有領土である台湾の現状復帰だ」とうそぶいているのに、我慢ならないと言う。これは、1973年の特別寄稿であるから、この後の世界の、否、米国と日本の台湾への対応態度がいかに変化するかは、次の活動家の事例に述べられる。

独立運動にかけた台湾人学者で当時東京理科大学教授の周英明とその夫人金美齡その娘の3人で40年ぶりに帰国するのに、同行取材した上島嘉郎の記事<sup>72</sup>に、台湾の変化が詳述される。この夫妻は初の台湾人李登輝政権が誕生するまでは、台湾政府（国民党）にとって危険な“政治犯”だった。それが2000年3月生粋の台湾人陳水扁へ政権が引き継がれたことによって、台湾政府の方針が改進黨、今回の帰国となった。この学者の帰国を「浦島太郎が帰ってきた」と台湾の新聞「自由時報」は伝えた。ノーベル化学賞受賞者李遠哲が米国から1994年に帰国し、台湾中央研究院長に就任後、陳水扁を支持すると表明して、民進黨躍進に一役買ったという事件を、陳光興がその前掲論文にも挙げているが、次の許・盧夫妻の事例と同様、台湾独立運動にかけた学者らが、危惧なく台湾に入ることのできる時代が到来したというのである。この周・金夫妻帰国時には、李登輝・現台湾独立建国聯盟主席の黄昭堂や蔡焜燦などと歓談し、台湾の変化を実感して帰っている。

許世楷・盧千恵夫妻に対するインタビュー記事<sup>73</sup>によると、許世楷は日本留学時代の1960年2月に、当時明治大学の講師であった王育徳を中心にした編集会議によって『台湾青年』を創刊し、蒋介石政権を批判し始めた。この編集長は、「台湾独立建国聯盟の主席までつとめた筋金入りの独立派リーダーを、駐日代表に任命した陳水扁総統の決断には驚きました。」と、民進黨政権になっても、米国・日本政府の意向を受けた質問を導入の言葉とする。しかし「主人は33年間、私は36年間、台湾に帰国できませんでした。」と言う夫妻に、台湾情勢の変化を聞きとり詳述している。そして盧の「日本人から、台湾がすごく親日的であるとか言われるのは、蔡焜燦・許文龍たち年代の影響を受けた若い世代のハーリーズが迎えるのだ。私たちにノービザになった御礼を言われるが、台湾人は日本人が自分達を他の国の人と同じように扱ってくれたのが嬉しいのだ」という言葉で締めくくっている。

以上の事例はごく一部の活動家であるが、それらの多くは日本を拠点に活動し、あるいは日本を経由して米国等他国で活動するなど、多かれ少なかれ日本を信頼できる国としていたのである。それは戦前の統治国日本への良い経験と記憶によるものであることは、彼らが富裕層で日本への留学が可能な人々であったことと、2.28事件とそれに関わる国民党政権の弾圧の影響を受けた経験と記憶を共有しているからである。以上のことは張の経験を共有することであり、一時的であっても海外に在住しながら活動したという立ち位置は、今の張と変りはない。張は、過去の多くのディアスポラ活動家のひとりであること、しかも現在なお、張の活動は沸々と血をたぎらせて、世界情勢と睨み合わせつつ、日本に世界へ、台湾情報を送り続けるのである。勿論台湾を拠点に独立活動を続けた活動家は多いが、本稿では、ディアスポラの観点からのみに限定する。しかし、多くの日本に住むディアスポラの活動家の日本に対する怨恨は、1972年の日中国交締結やその前後からの米・日の裏切り行為と彼らが受けとめる事件により、活動家のみならず台湾人まで浸透していったことは否めない。そのことは、彼らの言動の端々に、共通して表出されているのである。

ところで「台北俳句会」は、張にとって如何なる存在であろうか。先述の通り、「台北

俳句会」では、政治活動と商業行為を持ち込まないことを不文律としている。そうであるならば、張にとって何のメリットがあるのか。先述の繰り返しになるが、つまり彼自身の文学的素養のなせるところというだけではなく、日本語の俳句表現は植民地統治国日本の快い経験と記憶を持続させるため、あるいは張自身の日本との良好な関係を維持させるための貴重なツールと言えるのではないか。そのことは逆に、「台北俳句会」を主体とするならば、「台北俳句会」の創立以来変節のない、政治には関わらないという「不文律」を証明する貴重な存在と言えよう。張の「台北俳句会」での存在は、勿論他の会員と同様に政治性の全くない俳句を詠む人であり、台湾独立運動に情熱を傾ける人としては、殆ど知られてはいない。張自身も、自身がディアスポラであるが故に、独立活動ができるとの認識があり、「台北俳句会」会員には、自己の主張を強要はしない。「台北俳句会」が未だに堅持している台湾歴史の根底に流れるものへの不安を、彼なりにしっかり受容しているからであろう。

本稿を執筆中に、台湾総選挙運動と投票、そしてその結果が出た。国民党馬英九が民進党蔡英文を破って当選したのである。馬英九は二期目に入るが、その勝因は中国大陸との経済的連携つまり中国との交易による経済発展の業績を評価されてのことであるとNHKのニュース解説は論評する。それに対して蔡英文は、そのための経済貧富の格差が顕著になることを、そして経済のみならず一つの中国に統一されていく危惧をアピールしていたのだった。経済は政治と連動することは周知のことであるから、民進党を支援する側の台湾人にとっては、痛い敗北であろう。しかし以前の選挙戦とは異なり、民進党が台湾独立を旗印にしていないことは、近年の傾向であろう。かつて1989年には「独立運動高まり緊迫増す台湾」と書かれ<sup>74</sup>、若林正文が2004年4月に書いた「96年以後一総統選がつくってきた台湾独立世論」<sup>75</sup>には、2004年の総統選は台湾独立を目指す陳水扁支持に集約されるのではないかと論じていた。その時期には台湾独立論は有効な旗印であったが、2012年1月の総統選で馬英九の続投が確定した時点において、台湾独立では現状維持を良しとする米国と日本を始め、大方の台湾の民心を惹きつけることは困難と見て取っているのだろうか。この結果の兆しは、2007年2月に「台湾に蔓延する独立疲れ」というタイトルで、独立を明確に支持する人は20パーセントまでで、現状維持の支持者は過去30パーセントから60パーセントに増加して、対立を煽る政治家への嫌悪感を強めているとの記事<sup>76</sup>にも認められた。

このとき張はシンガポールで正月を過ぎ、その足で2012年1月7日に台湾入りして、台湾総選挙の動向を見守っていた。その間結果を予想してか、AC通信のNo. 380 (2012. 1. 10 配信) で、蔡英文が敗北した後の心構えを説いている。まとめると次の通りである。

蔡英文が落選すれば民衆はどう反応するだろうか、負けても失望してはならない、負けてこそ国民党のイカサマ選挙で台湾建国を推進することは不可能と悟る絶好のチャンスである、負けたときこそ本気で中華民国を倒して独立を推進する時であるとする。

同じくNo. 381 (2012. 1. 13 配信) では、投票直前に台湾入りした米国のダグラス・パール、アメリカの元AIT代表が台湾の総統選挙に非公式介入をする発言をしたとして、怒りを露わにしている。その発言とは、2ヶ月前にアメリカの国務副長官のカート・キャンベル博士が、「アメリカは台湾の選挙に対し中立を守り、国民党と民進党のどちらの候補者が当選してもアメリカは当選者を支持する」と公式声明を発表しているにも拘らず、この

声明に反し、ダグラス・パールは12日夜、台湾の中天テレビに出場して「馬英九が当選すれば台湾、中国とアメリカは安堵するだろう。馬英九の当選は台湾の繁栄と現状に繋がる」と発言したのである。パールはすでに引退した人間だから、彼個人の発言とも言えるが、彼は個人の発言であると言わず、しかも「蔡英文氏が当選すればワシントンは安心できない」とさえ述べたというのである。現状維持は、米国にとっても経済のみならず政治的にも必要不可欠な状態であることを言明させてみせているのである。

今回の台湾を二分する総選挙で、民進党は敗北したが、2000年の勝利の時は、これで独立運動は終了かと陳光興をして言わしめた時期もあった。台湾のみならず世界は常に変動している。陳水扁政権の二期目に当たる2006年4月、張が台湾から帰国した時、「台湾から戻ってきて、大いに困惑、失望している。国が潰れそうなのに人民には危機感がない、八方塞がりやで解決の道が見つからない。官と民、野党と与党、みんなが拝金主義になり、憂国の情はない。経済の悪化、南北の離反、不正を糾すべき司法警察が堂堂と不法行為をしている。人民はやる気がない」<sup>77</sup>と嘆いた台湾情勢が、馬英九政権二期目の選挙結果を誘致する温床となり、経済優先の今回の結果に繋がったことを、張自身が最も悔やんでいるのではなかろうか。

## おわりに

ディアスポラである台湾独立運動の活動家張は、戦後の台湾歴史、それは日本近代史の一部でもあろうが、その中に幾人も存在し、ある者は挫折し、ある者は台湾の体制の中に融合し帰国していった。台湾に在住の気骨ある活動家も、断筆宣言<sup>78</sup>をして、活動を離れていった。その中で張は今もなお、前述の独自の方策によって独立運動を継続している。張のこれまでの方策が、今後の独立活動に如何に生かされるか注視される場所であるが、建国宣言起草の段階で、また2年前にも別の台湾の有名な政治活動家に、その宣言に署名することを断られたこともある。この宣言はディアスポラの人々ではなく、独立する主権を持つ台湾人が、外国に向かって為すべき<sup>79</sup>だからと、台湾に住むこれら活動家を優先的に位置づけようとの張なりの配慮であった。だが署名を断られることとなり、まさに祖国のための祖国に向けての活動は、苛立たしい緊張感を張に強いる。ディアスポラの知識人の宿命であるかのようなのである。但し、この有名な活動家のひとは、その後台湾での張の講演会で、彼への賛同と激励を表明して見せたのである。張は彼の意図を如何に捉え、次の活動に繋いでいくか興味のあるところである。

張自身も言うように台湾に居住する者達は、過去の歴史の怖さを記憶に留めているので、「台北俳句会」の会員などへの筆者の質問は配慮が必要だとし、海外在住の自分はその恐怖はないとする。その差異の認識は、台湾在住の彼の言うエリートたちへの思いやりでもあり、或いはまた苛立ちとも受けとめられる。だからこそ張は、無意識にその架け橋になるべく活動を継続しているのではないか。それは冒頭で述べたバンダの定義する知識人としての張が、自分の信ずる真実と正義に従い、弱い台湾在住の人々の側に立って、常に進んでいる姿と言えよう。それはサイドの言う、中間的などちつかずの立場を常に感じながら生きることを余儀なくされている者であり、こうした苛立たしい中間的存在であ

るということの証左であろう。そのことが、張のディアスポラの立ち位置を感受させるのである。張はその中間的存在であることを逆手にとって、その運動を継続させ、大統領や国会議員にも働きかける。今後は広域に渡って署名運動をも展開しようとする。東日本大震災がなかったら、2011年夏から日本を初署名運動の地として、東・東南アジアに向けて活動を始めようとしていた。この震災で急遽取りやめ、張の講演会と募金運動に変更している。

さらにこれら張の活動が、日本人に日本語でなされることの根底には、忘れ得ぬ日本の戦前の良い経験と記憶へと向かう志向性があり、「台北俳句会」会員としての表現活動は、その良き記憶と関係を現在もなお、持続させるためのツールであると言える。同時に、忘れ得ぬ二つの中国に対する逆の想いがあり、それが台湾人への熱烈な想いとなって、活動の原動力の一つとなっているのであろう、

そこで、張の活動の未来性を推察する上での資料として、次のことを述べておこう。張のAC通信を受信する相手は日本人或いは台湾人だけではないということである。確かにAC通信はそれらの人に対して、張側からの台湾問題の情報を提供するためのものである。そのため日台の個人のみでなく、テレビや新聞などのマスコミ関係者からも、通信に対する批評や感想が返信されてくる<sup>80</sup>。更に台湾建国宣言を新聞で読んだカナダの国際司法裁判官から直筆のメール<sup>81</sup>で、張の台湾人民建国宣言によって、台湾は法的に台湾国になったと激励され、感奮させられたこともある。そしてその建国宣言は、他の賛同する張とは別の台湾人の出資で、ロサンゼルス『太平洋時報』や『台湾日報』<sup>82</sup>へと、転載されて行ったのである。張は既存の有名な活動家ではない。しかし、確実にその活動は、関係する人々に影響を与えている。張の活動の過程には、常に困難がつきまとうが、同胞を募り支援者を支えに、その活動を継続する。政治には関われない「台北俳句会」の会員として、一方ディアスポラの台湾独立運動家として、相反する二足の草鞋を履きながら、張はなおも台湾の未来性にかけて行動するのである。時として孤立感に耐えながら。

台湾の未来性は不透明である。台湾独立活動家たちの過去の歴史には、忘れ得ぬ他者日本と二つの中国の経験と記憶がある。戦後の国民党政権の教育を受けて育った若者世代<sup>83</sup>と経済優先の人々が、いかにそれらを払拭し、台湾を一つの中国へと先導していくのか、世界の関心が注がれている。更にまた、それに対峙するディアスポラ張の希求する台湾は、いつ実現するのであろうか。そして今回は、張の経験と立ち位置から論じたものであるが、今後は相対立する側から、論が展開される必要があることは言うまでもないであろう。

#### ＜ 注 ＞

- <sup>1</sup> 近代台湾の歴史特に、戦後日本統治終了以降のものに限定する。
- <sup>2</sup> 「私たちの会では会の中に政治活動と商業行為を持ち込まないことを不文律とした」と主宰黄靈芝が、「台湾の俳句 — その周辺ほか」『國文学』2005年9月号 学燈社 91頁に述べる。
- <sup>3</sup> 台北市内の街頭でヤミ煙草を売っていた寡婦が、取締官に殴打されたことをきっかけに、外省人政府に対する憤懣を持つ本省人達が敵対し、全台北市内が暴動状態となり、まだ中国本土にいた蒋介石から送られた軍隊によって、徹底的に弾圧された事件、所謂2.28事件である。その後首謀者として本省人インテリや有力者達等、約2万人から3万人が処刑され行方不明になったという。
- <sup>4</sup> サイド、エドワード・W. 『知識人とは何か』大橋洋一訳、平凡社、1998年、28-31頁。

- 
- 5 サイド前掲書、88-89 頁。
- 6 レイ・チョウ『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳、青土社、1998 年、44 頁。
- 7 レイ・チョウ前掲書、45 頁。
- 8 上野俊哉『ディアスポラの思考』筑摩書房、1999 年、7 頁。
- 9 AC 通信の前身は、1998 年にマイクロソフト社の『MSN ジャーナル』の政治記事を扱っていた日本時記者らからの誘いで書いていた「ワシントン発:AC 通信」であるが、1999 年の年末に MSN ジャーナルが解散となり、同記者らが新たに発行した『アジア国際通信』に引き続き書いた「ワシントン発:AC 通信」である。2000 年に陳水扁が総統に就任し、中国人の強烈な反対と弾圧で政治が難航し始めたので、新しく「台湾丸の沈没?シリーズ (AC 通信 No. 22 2000. 11. 12 配信)」を書き始めた。『アジア国際通信』に許可を得て退出し、独自の『AC 通信』サイトを 2010 年 12 月 18 日に始めた。この配信には必ず、超の主張に対する意見を述べる欄が設けられており、張と読者との双方向の議論が可能である。読者はどのくらいいるか、張もわからないと言う。 2012. 4. 21 の張から筆者への E メールより
- 10 『台湾丸の沈没?』2000 年 (中国語版 2002 年)、『ガンバレ台湾丸』2003 年 (中国語版 2004 年)、『連宋の乱の真相』2004 年、『ラファエット事件の研究』(日本語と同時に中国語に翻訳 2006 年)、『台湾丸の難航』2005 年、『台湾丸の針路』2010 年 (日本語と中国語の対訳) が、AC 通信の関連著書である。
- 11 戦後台湾の「脱植民地化の代行」という把握は、国民党政権の執政を、黄智慧による「台湾における日本観の交錯—族群と歴史の複雑性の資格から—」『日本民族学』259 号、(日本民族学会 2009 年) 58-60 頁で、戦後の『脱日本化』は、後から入ってきた中華民国政府によるもので、被植民者自身による主導ではなかったとしており、若林正文「台湾の重層的脱植民地化と多文化主義」鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』(慶応義塾大学東アジア研究所 2007 年) 199-236 頁によって概念化され、その代行について、楊子震の「戦後初期台湾における脱植民地化の代行—国民政府の滞在台沖繩人・朝鮮人政策を中心に—」『国際政治』第 162 号 (日本国際政治学会 2010 年) などが、その実証研究を行っている。
- 12 黄智慧「ポストコロニアル都市の非情—台北の日本語文芸運動について」大阪市立大学院文学研究科アジア都市文化学教室編、橋爪紳也責任編集『アジア都市文化額の可能性』清文堂、2003 年、130・140 頁と Vickers, Edward, “Frontiers of Memory - Conflict, Imperialism and Official Histories in the Formation of Post cold War Taiwan Identity,” Sheila Mayoshi Jager and Rana Mitter Ed., *Ruptured Histories*, Harvard University Press, 2007 年 211 頁と黄智慧「台湾における『日本文化論』に見られる対日観」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 71 号、2006 年、167 頁など。
- 13 若林正文「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」『思想』2004 年 1 月号、108-125 頁。
- 14 黄智慧「台湾における『日本文化論』に見られる対日観」『アジア・アフリカ言語文化研究』第 71 号 2006 年、楊子震「戦後初期台湾における脱植民地化の代行—国民政府の在台沖繩人・朝鮮人政策を中心に—」『国際政治』2010 年、12 月号。
- 15 楊文魁「『河清』か 台湾独立志向—台・日・米に見る台湾独立運動の歩み—」『アジア文化』26 号、2003 年。
- 16 伊藤潔「公然化した台湾の独立運動」『中央公論』107 卷 1 号、1992 年。
- 17 陳光興「台湾独立運動の終わり—2000 年台湾総統選挙後の新情勢—」『インパクション』120 号、2000 年。
- 18 林景明「わが闘争記—台湾独立運動にかけた 12 年—」『現代の眼』1973 年 11 月号。
- 19 小田滋「主権独立国家の「台湾」—「台湾」の国際法上の地位」『日本学士院紀要』62 卷 1 号、2007 年。
- 20 趙鳳杉「台湾問題の争点—「祖国統一」と「台湾独立」の狭間で—」『筑紫女学園大学紀要』14 号、2002 年。
- 21 成瀬千枝子「戦後台湾におけるアメリカ留学 (I) (II)」『交流』634・635 号、2001 年。
- 22 陳天璽「台湾系華人移民」『アジア遊学』39 号、2002 年。
- 23 黄智慧「ポストコロニアル都市の非情—台北の日本語文芸運動について」大阪市立大学院文学研究科アジア都市文化学教室編 橋爪紳也責任編集 『アジア都市文化額の可能性』清文堂、2003 年。
- 24 上島嘉郎「遥かなり台湾—独立運動にかけた台湾人学者 40 年ぶりの帰国譚—」『正論』339 号、2000 年。
- 25 許世楷、盧徳、大島信三「インタビュー 私たちが台湾独立運動に奔走していた頃」『正論』339 号、



2005年。

- 26 筆者が「台北俳句会」会員に、俳句を作ってきた会員個人の歴史を記述するため、「俳句自分史」の原稿を募った時の一事例である。そしてこれは、彼自身が付けたタイトル名である。アメリカ・カリフォルニアから、いろいろな色・形の葉っぱを配し、傍らに、この句「それぞれに違ひそれぞれ落ち葉かな」が書かれたデザイン色紙が、一緒に送られてきた。
- 27 aの真っ赤な嘘は、中国のことであろうか。彼はAC通信で、何度も、中国が平気で嘘をつくことを批判する。dは、それぞれの独自性を尊重したい、他からの圧力で、自由な人間性を失いたくないと言うことか。特に主張したい句であろう。gは、良くも悪くも台湾の現状を象徴しているのか。iは、台湾の情景描写をしながら実は、台湾の中国やアメリカ・日本などの圧力に屈して、身動きできない現状を嘆いているともとれる。jは、彼自身の現在の抑圧された苛立たしい心境であろう。春になったのに、台湾を思う気分は鬱々としているのである。これらは通常句であろうが、隠しても隠し切れない彼の心情が、処々に透視される。
- 28 2011.10.27付 張から筆者へのEメールによる。
- 29 染川清美「日本語残留孤児の居場所-日本統治後の台湾日本語俳句の空間から」『日本学報』大阪大学大学院文学研究科日本学研究室 2009年、89-113頁。
- 30 張継昭『フライデイ・ランチクラブ』新風社、1996年。
- 31 張継昭『不孝のカルテ』東京図書出版会、2001年。
- 32 日本統治下における台湾から日本への留学生は、1945年までに20万人、そのうち大学や専門学校の卒業生は6万人余りと言われ、殆どは帰台によって、台湾の高等教育や社会・経済活動に貢献した。
- 33 成瀬千枝子「戦後台湾におけるアメリカ留学（Ⅰ）」『交流』634号 交流協会 2001年20-29頁「戦後台湾におけるアメリカ留学（Ⅱ）」『交流』635号、交流協会、2001年、37-45頁。
- 34 結婚観についてAndyが述べるところに「僕みたいに、生まれた時は日本人で、中国の教育を受けて、しかも中国人の台湾人に対する差別統治に不満をもってアメリカに渡った人間は、生い立ちが複雑なので、とうてい自分を理解してくれる人なんか見つかるはずがないと思っていた」という箇所があり、その一部である。 張継昭、前掲書、48頁。
- 35 2011.8.24付 張から筆者へのEメールによる。
- 36 「俳句に関わる自分史」のひとは、「基隆港に上がった兵士の怖かったこと、何をするか分からなかった。解放令が出て怖かったし、今でも怖い、公務員の殆どが外省人だったから、虐げられた。」とも言う。(全回答の一部) 染川前掲論文、100頁。
- 37 2011.9.12付 AC通信 No.365「台湾人よ、2.28を忘れるな」
- 38 染川前掲論文、参照。
- 39 2010.12.18付 張から筆者へのEメールによる。
- 40 黄前掲論文、130頁。
- 41 2007年11月23日付 台湾の黄靈芝から筆者宛FAX3枚中より抜粋。染川前掲論文、104頁。
- 42 黄靈芝「台湾の俳句 — その周辺ほか」『國文学』2005年9月号、91頁。
- 43 2011.8.27付 張から筆者へのEメールによる。
- 44 台湾の海軍汚職 フランスからラファイエット空母艦を購入するに当たって、死者一人を出すまでに至った事件。
- 45 若林正文「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」『思想』2004年1月号、108-125頁。
- 46 若林正文、前掲論文、108頁。
- 47 若林正文、前掲論文、109頁
- 48 頼柏絃『茜雲の街』台北市致良出版社、1997年。
- 49 染川清美「日台俳句会の国際俳句的視座による一考察—『なると俳句会』と『台北俳句会』の例をもとにして—」『なると』355号、2009年、87頁。
- 50 若林正文、前掲論文、110頁。
- 51 陳天璽「台湾系歌人移民」『アジア遊学』第39号、2002年、19-30頁。
- 52 陳天璽、前掲論文、21頁。
- 53 陳天璽、前掲論文、22頁。
- 54 2010.10.18付 張から筆者へのEメール。
- 55 AC通信(2010.7.9配信No.324)「何故建国宣言なのか」の中の引用であり、そのすぐ後にNYタイム

ズ掲載の建国宣言全文の日本語訳が載せてある。文章表現は異なるが、AC通信の内容を含む。[資料2 - (2) 参照]

- 56 2011.9.11付 張から筆者へのEメールの中からのまとめである。「建国宣言発表に至るまで」については、AC通信 No. 329に詳細な記述がある。
- 57 『台湾丸の針路』16章「この記事を書くのは、独立宣言の計画が潰されるかもしれぬから、せめてこのような計画があったと記録に残しておくためである」と危機感を持った書き出しで始まる。
- 58 張継昭『台湾丸の針路』（日本語と中国語の対訳）台湾北社 2010年、180頁。『台湾丸の針路』は、目次は中国語で、第1章 生為台湾人深覺慰（台湾人に生まれてよかった）から16章（台湾人民独立宣言）に亘る。
- 59 2009.12.9 東サンゲブル日系コミュニティーセンターで、ドキュメンタリー映画「台湾人生（酒井充子監督）」の上映会を催している。その上映後に、Andy・Changの補足説明がある中で、30ほどの質疑応答がなされている。
- 60 Webサイト 映画「台湾人生」ロサンゼルス上映会@台湾の声:痞客邦 PIXNET
- 61 2011年2月8日付 AC通信 No. 343「他山の石で玉を磨け」から。
- 62 楊文魁「『河清』か 台湾独立志向—台・日・米に見る台湾独立運動の歩み—」総合研究誌『アジア文化』No. 26、48頁。
- 63 『台湾青年』台湾独立建国聯盟日本本部、1960年。
- 64 伊藤潔「公然化した台湾の独立運動」『中央公論』107巻1号、1992年、250-257頁。
- 65 陳光興「台湾独立運動の終わり—2000年台湾総統選挙後の新情勢—」『インパクション』120号 2000年、60-69頁。
- 66 中華人民共和国政府が、2005年3月14日に採択直ちに施行した「反分裂国家法（日本では反国家分裂法）」を指す。この法律によって、台湾が独立を宣言した場合、「非平和的手段」を取ることを合法化したもので、各方面で議論を呼んだ。
- 67 小田滋「主権独立国家の『台湾』—『台湾』の国際法上の地位—（私の体験的・自伝的台湾論）」『日本学士院紀要』62巻1号、2007年、53頁。
- 68 陳鵬仁「台湾独立論への疑問」『自由』通号44号、1963年、77-81頁。
- 69 新井宝雄「講座・中国問題入門=根拠なき“台湾独立論”」（上）『公明』1972年1月号、82-93頁。
- 70 新井宝雄「講座・中国問題入門=根拠なき“台湾独立論”」（下）『公明』1972年2月号、138-150頁。
- 71 林景明「わが闘争記—台湾独立運動にかけた12年—」『現代の眼』1973年11月号、234-243頁。
- 72 上島嘉郎「遥かなり台湾—独立運動にかけた台湾人学者40年ぶりの帰国譚—」『正論』No. 339 2000年、322-333頁。
- 73 『正論』編集長大島信三が夫妻のインタビューをし、「私たちが台湾独立運動に奔走していた頃」の聞き取りを掲載したもの。  
『正論』No. 339、2005年、148-158頁。
- 74 『朝日ジャーナル』1989年2月8日号 36-39頁に、沖縄生まれの安里英子が書いた記事で、台湾に注目すべき変化が起き始めているとして、台湾独立運動の高まりを取材している。
- 75 若林正丈「96年以後—総統選がつくってきた台湾独立世論」『中央公論』119巻4号、2004年、98-106頁。
- 76 『NEWSWEEK』2007年2月28日、31-32頁には、求心力低下に悩む陳水扁総統は台湾人意識に訴えかけて、独立志向をあおるのに躍起だが、人々の反応は以外に冷ややかだと台北駐在の記者ジョナサン・アダムスが記す。
- 77 [AC通信: No. 170] 悲劇的な台湾と現状 (2010/12/13)
- 78 台湾の有名な李筱峰という政治評論家が最近、断筆宣言を発表した。声涙下る名文で、今後は政治論文を書かず専門の歴史研究にいそしむとある。李教授は台湾で30年も政治論文を書き続け、台湾の政治評論を書き続け、やがて失望してやめて行った人がたくさんいる。私が台湾問題を書き始めて12年になる。日本語で書いているから台湾の読者は少ないし、日本語のわかる読者も多くはない。私だって李教授のように意気阻喪してやめようと思ったことも何度かある。しかし私は止めない。  
[AC通信: No. 367] 断筆宣言 (2011/09/24)
- 79 張前掲書『台湾丸の針路』、184頁。
- 80 東京テレビのある記者からは、特にTPPの解釈はその通りではと感服しました（2011.11.26付AC通信 No. 375「TPPは戦略の一環である」に対するこの記者からのEメールの転送）とか、ラファイエット

---

事件に対する読後感想（2011.12.8 付 張から筆者への E メール）が届いて励まされ、産経新聞上海支局長からは「米、大和選挙介入の理由」と言う記事（2012.1.22 付 張から筆者への E メール）が張に送られ、張の AC 通信 No. 381 の裏書になることに自信を得ている。

<sup>81</sup> 2012.2.19 付 張から筆者への E メール

<sup>82</sup> 2011.1.31 付 張から筆者への E メール AC 通信 No. 334 にも掲載あり。

<sup>83</sup> 何義麟「日台親和」の虚像と実像 植民地支配の歴史経験は国際協力のモデルか？』『インパクション』120号 2000年7月号、98頁。

## 終章 戦後の台湾空間に存続する「台北俳句会」

### 第一節 先行研究との比較から導かれるもの

本論考の結論は、はじめに、以下の筆者独自の分析・考察によって成立したことをまとめる。

本論は、「台北俳句会」に政治的な俳句がないのは、磯田の叙事性のない短小な俳句形態のためであるという論に対して、異論を唱えるものであった。そのために、「台北俳句会」という俳句結社が設立されるまでの、戦前の台湾俳句の歴史から調査を始めた。

まず第一章に於ける阿部誠文の「台湾俳壇史」について、次の点に留意し結論した。阿部のこの論考によると、『ホトトギス』内の「地方俳句界」上にある台湾からの投句作品あるいはその限定された範囲のみで考察しているが故の、一部納得しがたい論述に遭遇した。筆者は、文学史としてではなく文化史的に辿り、他資料の活用の必要性を論じ、本稿では『台湾日々新報』も参照資料に加えたが、『ホトトギス』内部の「地方俳句界」や「雑詠」の投句以外の欄も、結社の動向を探るに良い資料があることを実証した。他資料の活用については、沈美雪が、『台湾日日新報』等を引用して、結社変遷の事実を明確にするなど、多角的迫り方を工夫していた。筆者も、台湾での結社同士の対立による興亡について、更に詳細な調査を加え、先行論文の検証と進展を行った。しかし、結社の対立は台湾俳句の特殊性とは言えない。日本国内でも往往にしてあることである。

そこで拙論では、台湾独自の特色を見出そうとした結果、50年の短期間に、結社の興亡が、非常に頻繁であることが分かった。『ホトトギス』の中から、多岐に亘ってつぶさに調査すると、その数が100社にも上っている。当時内地の俳句結社が何社あったか不明であるが、2005年の段階で全国の俳句結社は、800～1000社<sup>1</sup>と言うから、未だ人口の少ない明治時代末期から昭和時代の戦前までの、台湾という狭小な地域であれば、かなりの数であったと推測する。

そうして、その理由に関連し、台湾開発による俳句結社の会員たちが、職場を移動する転勤との関係性について、詳細に分析追跡した。特に台湾開発により、鉄道開発が進むにつれて、その沿線に俳句結社が移動していくことを、『ホトトギス』の「地方俳句界」や「雑詠」その他の欄などから調査し、導き出したのである。俳句結社と台湾開発、特に鉄道沿線との関連性について分析したのは、筆者の論考の特質と捉える。

更に、台湾に移入して俳句をする人たちにとって、永遠の課題となった内地の「歳時記」に適合しない台湾風土と気候について、如何に苦悩しつつ句作していったかを分析したが、その苦悩や格闘の状況を、『ホトトギス』から詳細に抽出してまとめたことで、その苦労の実態に迫ることが出来たのではないか。特に、阿部における小林里平の『台湾歳時記』と黄靈芝の『台湾俳句歳時記』の比較は、十分とは思えない。そのため、第二章で新たに筆

者なりの独自の視点で比較した。

台湾季語の問題は、現在の台湾日本語俳句を詠む台湾人にとっても、喫緊の問題であった。そして小林里平の『台湾歳時記』から今日に至る台湾季語の集大成が、黄靈芝の『台湾俳句歳時記』であることを、筆者は、これら二つの著書の比較によって明らかにした。戦前の台湾における日本人による日本人のための『台湾歳時記』は、現在に於ける世界俳句の中の、台湾に於ける台湾人による台湾人のための『台湾俳句歳時記』に生まれ変わり、黄靈芝の推奨する台湾独自の日本語俳句を詠む人々に貢献し、その拠所となったのである。

以上のことから、拙論では、明治時代末期の日本人のために供されるべく編纂されたものが、今日、台湾人のための独自の『台湾俳句歳時記』へと変化・再編纂され、黄靈芝が主張する台湾俳句の独自性を獲得した証であると結論付ける。即ち、日本の俳句を台湾で詠んでいるのではなく、台湾における台湾独自の俳句を詠むための原点が、ここに顕示されたと言えよう。

第二章は、中心論である第三章の「台北俳句会」が創設される以前の、黄靈芝主宰の略歴を追いながら、関連する時代の変容を述べ、「政治に関わらない」ことを不文律にして運営される「台北俳句会」の深層に迫る前段階の章である。黄の生い立ちに内在する経験は、「台北俳句会」を創設し運営するにあたっての重要な基盤となった。そのことを文学の視点から述べた岡崎郁子の『黄靈芝物語』を中心に検討した。

その結果、黄が俳句をする契機となったものは、『軍民導報』という国民党政府が発行した新聞であった。そのコラム欄に投稿して同様の趣味をもつ仲間を得たことが、黄の日本語文芸への目覚めであった。岡崎の論をより発展させた筆者は、その新聞の文芸欄実はコラム欄であったが、それ以外の欄の機能を包含するその時代の政治・社会・文化情勢を探りつつ、その後の黄の人生の展開と「台北俳句会」設立との関係性へと繋がる事柄を浮き彫りにした。即ち、日文しか読み書きできない台湾人に、国民党政府がその政策をプロパガンダするための一種の方便として、コラム欄を設定し利用したことを導き出した。過去の論考には無い一面を進展させたのである。

更に、第一章で詳述した台湾俳句における季語の悩みは、なお現在の台湾で俳句を詠む人々の悩みであることを明らかにし、黄が如何にして『台湾俳句歳時記』によって解決したかを、この章に追加し、歴史的・文化的に筆者独自の比較をした。戦前の台湾へ移入した日本人の季語の悩みは、戦後の台湾で俳句をする人々の悩みに継承され、黄の命を削る大事業によって解消されたことを示した。

第三章では、第二章に述べた黄靈芝の生い立ちと「台北俳句会」の「政治に関わらない」の不文律に関連して、主宰黄と「台北俳句会」会員の各々の事例を考察することによって、「政治にかかわらない」俳句を詠んでいるその表現と背景とを、「台湾俳壇」や「台湾川柳会」と比較しつつ、政治・社会・歴史・文化等の多方面から明らかにした。

磯田の論ずる「台北俳句会」の俳句は、俳句自体があまりに短小形態のため叙事性がないことから、政治性のない俳句になったというものであった。しかし、拙論は、俳句の形

態によるものではなく、日本語俳句をするがゆえの台湾社会から周縁化される「台北俳句会」が、政治性のない俳句を詠むことによって、よりいっそう周縁化されないための方策をとり、混迷の台湾を生き延びようとしていると結論した。その理由は、黄霊芝の生い立ちとそれに関連する台湾の歴史・政治・社会・文化など、多方面の影響によるものであることを裏書きした。過去の論考に、「台北俳句会」特有の「政治に関わらない」俳句表現を、黄主宰の生き方や台湾の歴史・政治・社会・文化的多方面から指摘したものはなかった点で、拙論は特殊性を持ち、意義があると考えた。

しかし第四章では、それぞれの俳句を更に分析すると、一部の俳句に「台北俳句会」の「政治に関わらない」の不文律に適応しない俳句が見出されたことをまとめた。第三章で筆者は、「政治に関わらない」俳句が「台北俳句会」の特色であると決定づけたのであるが、そういう不文律の中にあっても、本来持っている俳句の芸術的表現性は、「台北俳句会」会員の持つ人間本来の自由な表現を、無意識に誘引し、迸り出る思いを隠すすべなく俳句の中に包含することを見出した。勿論そのことは例外であって、そのような句の全体に占める割合は僅かであるから、「台北俳句会」の特徴ではない。

第四章で取り上げた一部の俳句に内在する思いは、第五章に特に取り上げた「台北俳句会」会員であり、台湾から帰化してカリフォルニアに住む張継昭の俳句にも、見ようによっては、同じく内在していた。そして出自の地台湾での生い立ちと戦後二・二八事件を経てアメリカに留学・帰化・就職し、今日「台北俳句会」会員になるまでの軌跡の中に、「台北俳句会」の世界に於ける立ち位置を明確化する語りがあることを証明した。

張は、「政治に関わらない」ことを標榜し中立性を謳う「台北俳句会」会員であると同時に、ネット通信よって台湾独立運動をする活動家である。張が「台北俳句会」会員としてその不文律に従いながら、外部では政治活動を行いつつ政治に関わらない俳句を詠むということを、如何に解釈するかということに焦点を当てた。そうして、背景に戦前の日本統治時代の良い記憶と日本に対する張の幼少期の憧れが、介在していると推測した。張の両親も若い時代を過ごし、兄や姉たちも留学・帰化した戦前の日本は、現在もなお、張の脳裏に快い思いを想起させるのであろう。

張継昭会員の事例は、「台北俳句会」の世界と台湾に於ける立ち位置を、浮き彫りにする点で、恰好人材であり、特筆すべき事例だったのである。

以上、本論考は、「台北俳句会」が戦後の台湾に生き延びるために、如何に努力し戦略を練って来たかを、先行研究を踏まえ、会員の「俳句自分史」等の資料によって、筆者独自の分析によりまとめた。戦後の国民党政権下では、日本統治時代の一切を排除する政策のため、メディアにおける日本語使用の禁止令によって、日本語使用が制限される中で、日本語俳句を詠む「台北俳句会」は、台湾社会において存立しがたい集団あり、周縁化された存在であった。しかし、その存続を可能にするための戦略が、「政治に関わらない」俳句を詠むことだったのである。

## 第二節 「台北俳句会」存続における周縁化と中立性・中間性

過去、日本統治期を過ごしたポストコロニアル台湾において、日本語俳句をする「台北俳句会」の活動を、歴史的・政治的・社会的・文化的に、特に国家・国民・言語と文化から分析してきた。特に「台北俳句会」の「政治に関わらない」という、暗黙の共通認識の解明を中心に据えた。中でも、アイデンティティと言語と政治との関わりについて、世界と社会状況を多面的に分析することによって、結論に導いてきた。「台北俳句会」について、特に台湾における俳句と政治との関わりに焦点を絞ったものは、管見の限りこれまでの論考には無い。この分析方法による「台北俳句会」の存在は、過去の台湾歴史を背負って現存するその立ち位置を明確化した。

「台北俳句会」は、台湾の歴史の中で日本統治を受けた植民地経験により身に付けた日本語で、日本起源の俳句を詠む。それが故に誘引される、台湾の地における彼らの周縁化の危惧と周縁化への対処法を分析してきた。周縁化から自己を防衛するため、「政治に関わらない」ことを護身符として、不安ながらも細々と存続しているように見える。今後の将来性について、海外俳句は明るい展望を持つ<sup>2</sup>のに対し、「台北俳句会」はなお見通しが立たぬまま、躊躇しつつその空間をさまようのである。更に言及するならば、東アジアに位置する台湾での日本語俳句の空間は、「台北俳句会」会員の護身符を、よりいっそう高く掲げている。

しかしながらなお、何時それが護身符の役割を失うか、或いはまた、周縁化による他者化への防御が、大きな外圧によって何時無効になるかという危機をも孕んでいる。台湾在住の会員達よりも一層、海外に居住するディアスポラの知識人の会員にとっては、いたたまれない心情になるのであろう。会員たちはそのことを無意識に眼前から排除しつつ、そしてまた、世界俳句での微妙な立ち位置に躊躇しつつ、今日も俳句会に集うのである。

ところで「台北俳句会」の詠む俳句は、表現される内容が「政治に関わらない」ものが大半である。つまり台湾内部を二分する政党活動のいずれにも加担しないばかりでなく、俳句への表現も自粛している。その根拠は、主宰黄霊芝の日本統治時代とポストコロニアル台湾社会で、黄自身が嘗めた経験に裏打ちされた主義主張にある。ただ一人の俳句表現が、「台北俳句会」の存続を左右させる可能性がある。それを、黄は危惧しながら、現在に至っている。

世界地図から見れば極東の美麗島であるその中の一つの町に、ささやかに営まれている「台北俳句会」は、会員たちの日本語による句作の楽しみのみを目的に創設されたものながら、会員各自の自由な感情を詠み込むには、制限付きの俳句会であった。各自が意識するとしないとに拘らず、「政治に関わらない」ことが重要課題として、根底に存在するのである。日本統治時代の日本人あるいは日本国家に対する嫌悪感と、戦後來台した国民党政府への恐怖感が混在し、更に現在では、大陸から台湾を監視・威嚇する中国共産党への不

安感が、黄主宰の主義主張を一層増幅させているとみる。但し「台北俳句会」会員は、日本に対して、快い記憶を持つ者が多いことは、本論に述べてきた。

黄主宰の「政治に関わらない」という主義主張は、黄の生い立ちと「台北俳句会」創設時期の台湾における政治・社会情勢が、強く関わったものであることも、当時国民党政府が発行した日文新聞である『軍民導報』の分析によって補強した。

歴史的に、台湾人のアイデンティティは日本人へ、そして中華民国国民党のそれへと変遷させられ、更にまた、中国人へと同化・変身の兆候がある。その変遷を身体に浸透させてきた黄の、国家そのものに対する疑念と憎悪と排除が、「政治に関わらない」主義に込められている。国家の変遷に拘泥しない自立した立ち位置を確保し、ささやかな趣味としての日本語文芸の楽しみを存続しようとする。その確固たる信念が、「政治に関わらない」という護身符なのである。国民党と民進党、台湾独立とそれを阻む中国、中国と日本・アメリカなどのどちらに偏ることなく、政治的中立性を標榜することによって、外圧から保身するのである。中立性こそ、「台北俳句会」の存続を保障するものと確信しているのである。台湾社会での政治空間は、世界の問題に繋がっていることを、「台北俳句会」の存在が世界に教示しているとも言えよう。そのことは、これまでの歴史においても、また今後構築されるであろう歴史的な文脈においても、ただひとつの台湾問題だけではなく、中国・日本をそしてアメリカに及ぶ、東アジアを超えた世界の問題と言えるのである。

その「台北俳句会」に席を置き、アメリカに在住する張継昭 (Andy Chang) は、「政治に関わらない」俳句を詠みながら、一方では台湾独立運動に邁進するディアスポラの知識人である。サイドが定義するとおり、今日の世界で言うディアスポラは「故郷からまったく切り離されているのではなく、いつもそれを思い起こさせるものと接触し、じらされるだけで満たされない苦い思いがついてまわるといった中間的状況に位置づけられている。この不安定などちつかずの立場を常に感じながら生きることを余儀なくされている者であり、こうした苛立たしい中間的存在」であり、張がそうなのである。まさに張継昭は Andy Chang とのはざまに揺れながら、「台北俳句会」の「政治にはかかわらない」という不文律に従いつつ、その外部に於いては、張の信ずる主張をしなくてはならない。では、そういう規範を強いる「台北俳句会」に、何故参加し続けるのか。それは日本語で育った幼い日々への快い郷愁であり、今なお維持される日本への憧憬でもあろう。その端緒となったのは、読書好きの母の本棚にあった多数の日本文学書だったのである。それらは現在もなお、張の文学的志向の基盤となって、台湾の日本語俳句や川柳の世界に身を置くことに繋がり、台湾独立運動情宣サイト AC 通信や諸文章構成に役立っているという。

そういう繋がりの中で、張は主張の場を分別し、中間的存在を堅持する。「台北俳句会」は「政治には関わらない」の中立性を旗印に、東アジアを包含する台湾空間を生き延びる戦略を取り、張は中間的立ち位置に苛立ちつつ、台湾人民のための独立活動に奔走する。「台北俳句会」の中立性とディアスポラの中間性との関係性によって、日本語「台北俳句会」の存続が織りなされていくかに見える。更に言及するならば、「台北俳句会」も張と同様、



台湾空間ではディアスポラ的存在と言えるのではないか。しかし、戦略的に普遍性を持つ中立性であっても、「台北俳句会」会は先細りしていくのみである。会員は高齢化し、若い世代は入会して来ない。特に最近の傾向に、日本人の「台北俳句会」参加が顕著である<sup>3</sup>。その理由は分からないが、台湾人の会員が減っていることは間違いない。つまり、高齢者が他界していく中、若い世代の入会者がたとえ一時的にあったとしても、長続きしないで出て行くという具合である。若者が日本のポピュラーカルチャーに飛びつくようには、彼らにとって魅力的ではないのかもしれない。

他方苛立ちの中間性もまた、孤独の戦いを強いられる。双方ともに、更に周縁化される不安定性を孕んでおり、張は現実的には疎外感を持つが、常に高邁な目標を維持しつつ、台湾独立運動を存続している。将来的に永続性のない俳句会であると会員たちが諦観していても、禁止されたこともあった日本語によって、過去40年以上も継続してきたということが、珠玉の歴史を伺わせる。例え展望の持てない存在であっても、現在に至る俳句会の歴史そのものが、「台北俳句会」の存在価値であると言えるのではないか。

張の主義主張も、如何に轟々の反論・批判を受けようとも、台湾空間での「政治に関わらない」人々の代弁者として、ディアスポラの本領を發揮し、世界に訴えつつ活動を継続していこう。出自の土地に日本語教育を受けて以来、中国語教育へ変換され、新天地を求めてアメリカに帰化した張の歴史的軌跡は、今も輝かしいものとして、独立運動のバックボーンともなっている。それ故に中立性も中間性も、各々の存続意義を確信しつつ、現在と未来へ全力を傾注するのであろう。

### 第三節 「台北俳句会」と永続性の希求ということ

「台北俳句会」の存続性について会員の方が諦観する中、存続の意義について筆者の見解は、前節で述べた通り今日まで継続してきたそのことに意義があるをしたい。彼らは他国の統治によって、国語やアイデンティティを二遷三遷させられ、その都度動揺と混迷の中を生き延びてきた。そして、時に非難され危険に遭遇することを覚悟の上で、自己の欲する日本語短詩文芸に傾注してきた。その主宰黄をはじめ会員に内在するエネルギーそのものが、意義があるのではないか。

歴史と時代は目まぐるしく移り変わり、日本語使用そのものの立ち位置も、現在では変化している。ポピュラーカルチャーのグローバルな影響力により、今や台湾において日本語を話せることは、若者世代ではかっこいいことであり、おしゃれなアイテムの一つでもある。こういう時代の到来は、戦後の日本語禁止令下に生き抜いて来た「台北俳句会」の会員は、予想すらしなかったことであろう。国民党政府が国語を日本語から中国語に変換するための教育を、いかなる方法で実施したか、また、会員のひとは、「中国語を正式に習ったのは遅く補習班(塾)やYWCAで、だから中国語はまずい」と述べていることにも示し

た。彼らは、苦勞して中国語を習得した時代を、どのような思いで回顧するのだろうか。

日本においてさえ、新入会員の減少問題<sup>4</sup>は取り沙汰されている。俳句の未来性は不確かである。従って台湾日本語俳句の未来性が、不確実で展望が持てないことは、当然の成り行きである。「台北俳句会」の主宰黄や会員の責任ではない。台湾の歴史変遷の中で創設され、その時々の時勢を伺いつつ、この俳句会は生き延びてきたのである。そのことだけでも価値あることであるから、将来性を悲観することはない。

本論考の中間性は、各々の台湾歴史に生きる人々の、喜怒哀楽と苦闘を交錯させている。しかしそれは、柔軟且つ強靱なエネルギーの方向性を、無意識に採用して進んでいるように思われる。「台北俳句会」と張継昭の台湾俳句は、中立性を維持しあるいは装いつつ、沸々と滾るエネルギーを内蔵して、今後も詠んでいくことであろう。

最後に付け加えると、現在では、会員たちの平均年齢よりもかなり若い、パソコン技術にも秀でた会員朴青春によって会報などはメールで配信され、会の運営も前進していると見える。年齢的に物故者もいれば新規加入者（特に日本人が多い）も居て、新情報技術時代的「台北俳句会」の方向性も見えてきているのかもしれない。但し、日本人が会員に増えるということを如何に解釈し意義づけるかは、論議の余地があるのではないだろうか。

黄靈芝はこれまで、日本語俳句であっても台湾に於ける台湾人のための独自の俳句を推奨してきたのではないか。そのための独自性の顕現が『台湾俳句歳時記』であると確信する。勿論他国からの人々の台湾作句のために供されることはいままでもないが、「台北俳句会」が国際交流的会員構成になることと表現される俳句の意味を、しっかり把握しておくべきと思うのは、筆者一人であろうか。これまで黄主宰らが先細りを予期していたが、これが「台北俳句会」のますますの新しい発展の兆しであれば、大いに喜ばしいことである。

以上、台湾日本語俳句を分析・解明したことは、台湾と日本の歴史的関係のみならず、台湾そのものの置かれた東アジアと世界の中での立ち位置を明確にした。このことは、文化・文芸の文脈の枠を超えて、近代歴史における貴重な研究位置を占める観点から、意義あるものとするが、今後も世界の政治情勢は刻々と変化し、経済・流通関係もそれに伴って流動する。その中であって、文化・文芸の方向性も変化し、「台北俳句会」の「政治に関わらない」という主義・主張も動揺させられるであろう。今後の台湾の、世界に於ける立ち位置が、将来の「台北俳句会」の動向を左右するかもしれない。その時この俳句会は、如何なる戦略で、永続性を確保していくのであろうか。これまで培った方策とエネルギーとで、万難を排して存続することを期待し、また本稿が、関連の他研究の一助になれば幸いである。

#### < 注 >

<sup>1</sup> 山下一海・今井千鶴子・宇多喜代子ら編集『現代俳句大事典』三省堂、2005年、214頁。

<sup>2</sup> 染川清美 「俳句が海外に与えた影響—アメリカ合衆国内俳句協会会員と留学生の俳句に対する現在の

---

意識を探る—』『俳句誌 なると』1月号 創刊30周年・300号記念号、なると俳句会、2005年、120頁。

<sup>3</sup> 「台北俳句会」8月報(2014年8月18日配信)によると、互選者48人中29人、出句者48人中26人が日本人(名)である。

<sup>4</sup> 老齢化は日本でも同様で、徳島県下の三つの俳句大会の選者をしている「なると俳句会」主宰福島せいぎも、どの大会でも投句者の年齢が高齢化する悩みを持ち、60歳の若い新入会員が来たと喜ぶ現状と言う。

染川清美 「日台俳句界の国際俳句的視座による一考察—『なると俳句会』と『台北俳句会』の例をもとにして—」『俳句誌 なると』8月号 なると俳句会、2009年、80頁。

## 1 台湾台北「友愛会」にての張の講演原稿

「友愛会」は、日本語で諸事について歓談する会のこと

一粒の虹

2006年4月

Andy

台湾を離れる前日は雨だった。夜中から突風と雨の音がひどくなり、屋根から垂れた電線が悲鳴に似た音をたてて一晩中窓に当たる雨の音を聞きながらうつらうつら寝ていた。明け方に起きて灰色に濁った空を見ると雨雲が北から次々と押し寄せてくるのが見えた。屋根から垂れた電線はときにはライオンのように低く唸り、ときには空襲警報のサイレンのような音を立てていた。

金曜日まで暑い日が続いて、十月の末と言うのに秋の兆しはなく、このたび出版した「台湾丸の難航」を台湾と日本の友人に郵送するため、たくさんの小包をカートに載せて何度も郵便局を往復し、ポロシャツが汗で背中にべったりくっ付いた昨日の炎天が嘘のように思われる。

十二階の窓から眺めると下界と言う言葉があてはまる様に思われる。木々の梢は視界のはるか下の方で、時には風の応援団のように激しく動くかと思えば、時には水の重みにひれ伏すようにうなだれる。土曜日の朝は行き交う車も、いつもなら大きなエンジンの音を立てて走ったり止まったりするバスもなく、行き交う人のいろいろな色の傘が、まるでノロノロ歩く天道虫のように見える。昔は傘の色といえばほとんど黒い「こうもり傘」だったが、いつの間にか赤やら青やら銀色やらが主体となって黒い傘は少なくなった。雨に濡れた黒いアスファルトの上を色とりどりの丸い背中の天道虫がゆるゆる動く。

午後になっても風と雨は少しも衰える様子はなく、部屋にこもって窓から下界を見るしかなかった。でも帰ってきてやるべき仕事はみんな済ませたので安堵と満足感で心残りはなかった。

アメリカから帰ってきて三週間で、本の印刷が一週間、蔡焜燦さんのお陰で李登輝さんと会うことも出来たし、他の友人も手分けして本を受け取ってくれ、会いたい人には会うことが出来た。本を一千冊印刷して六百冊を人々に配り、残りの四百冊は郵便小包で郵送する。これも忙しいスケジュールの合間合間に封筒に入れて宛名を貼り、郵便局に運んでいく作業はかなり重労働だったが、これも無事に済んだ。三週間の間にこれだけやれたのは自分ながらよくやったと満足だった。計画通りに仕事を済ませた満足感をご馳走を腹いっぱい食べたような感じがする。

夕方になって、窓から外を眺めると雨雲の塊が東北から南西に向ってどんどん流れてくる。窓の南端に台北 101 ビルが見えるが、ビルよりも低い雨雲は次々とビルにぶつかって二つに別れ、ビルの先端が見えたり見えなくなったりする。101 階の建物はどれぐらいの高さかわからないが、だいたい 500 メートルだろう。そうすると流れてきてビルにぶつかる雲は 300 メートルぐらいの高さらしい。切れ切れの雨雲なので、下界を見ていると太陽の光が雨粒に反射してキラキラと輝き、時には小さな虹を作って行き交う人々の上に降りかかるのが見える。

雨雲の高さが 300 メートルとすれば、雨は地上 300 メートルのところで雫になり、そこから地上に落下してくるわけだ。雨が出来てから地面にぶつかるのは何秒ぐらいだろうか？これは高校の物理でならったものだから計算できない事はない。

$$h = v_0 t + \frac{1}{2}gt^2$$

この内、初速はゼロだから、 $v_0 = 0$ 、

高さ  $h$  は 300 メートルだから、

$$300 = \frac{1}{2}gt^2$$

$g$  は重力加速度で 9.8 だから、その半分、 $\frac{1}{2}g = 4.9$ 、四捨五入して 5 とすると、

$$300 / 5.0 = t^2 = 60.0$$

60.0 の平方根は・・・ハッパ 64、シチシチ 49・・・だから 8 秒より小さく、7 秒より大きい、約 7.8 秒。つまり、雨が 300 メートルの高さから落下して地面に着く時間は約 7.8 秒かかるということか。

十二階に窓から外を見ながらこれだけを暗算でやれたのだから、あんがはまだボケていないのかもしれない。こんな事を考えながら雨を見ていると雲間から射してくる日光に雨がキラキラ光っているのが見える。

「雨の命は生まれてから死ぬまで 7.8 秒」・・・人間の命に似ていないこともない。人の平均寿命を 78 歳とすれば雨の落下の 1 秒が人間の 10 年に相当するわけだ。

「雨の一秒は人間の十年」・・・イチニサンと数える間に十年が過ぎる。この比喩はなかなか面白い。「貴方はこの一秒の間にどんな事をしましたか？」と聞いたら誰でも目を白黒させるだろう。それよりも自分を振り返って見れば、この十年の間に何をやったのだろうか。「人生五十年、化天ノウチニクラブレバ夢マボロシノゴトクナリ」と信長が好んで謡ったように、あつという間に「貴方の 7.8 秒」が地面に到着する。

人によってはキラキラ光り輝く一生を送る人もいるし、目に見えない雨粒のような一生もある。人さまざまというが、できれば光り輝く人生であったほうがよい。私は一人の人間だから、私でも一粒の虹を持っているし、誰でもそれぞれ自分の虹を持っているはずだ。

### 一粒の雨一粒の虹を持つ

下を見るとちょうど太陽の光が強くなってきたので、下界に丸い虹が出ている。雨粒のひとつひとつが光を屈折させて大きな虹をつくる。雨粒は次々と落ちていくのに、あとからあとから落ちてくる雨粒が同じように光を屈折させて、虹は動かないように見える。

一粒の雨を一人の人間の一生と思えば、多くの人間が集まって一つの事に努力すれば大きな虹を織り上げる事が出来る。多くの台湾人が集まって共同で努力すれば「独立台湾」と言う大きな虹を作れるはずだ。

## 2 台湾人民建国宣言の NY タイムズ広告欄掲載について

文中、台湾独立宣言の日本語訳を含む(斜体強調部分)

### (1) 掲載前日の AC 通信

[AC 通信 : No. 324] Andy Chang (2010/07/09)

[AC 論説] No. 324 台湾人民建国宣言

3月にAC通信No. 315で台湾人の宣言を新聞広告に掲載する計画を書いたが、あのときから4ヶ月たって、ようやく7月10日にニューヨークタイムスで「台湾人民建国宣言」を掲載することになった。

これは台湾人が世界に向けて独立建国の意思を発表し、各国の支持を求めたものである。終戦から65年たって、台湾人が初めて建国の意志を表明した記念的な宣言である。ニューヨークタイムスはアメリカ全国のスターバックスで購入できるので、興味のある方は記念に買うことをお勧めする。

この歴史的な宣言を出すまで、いろいろな紆余曲折があった。同じ台湾人でも発表の目的や文面に異議を唱える人、意味のわからない人がいて、計画を始めてから掲載までに半年以上もかかった。これから書く経緯は、すなわち台湾人如何に思想的に混乱し、建国に団結尽力するのがどんなに難しいかを表している。

#### ●なぜ建国宣言なのか

終戦から今日まで、何人かが「独立宣言」を発表している。しかしこれらの宣言は台湾人に向けて独立を呼びかけたもので、台湾人民が世界に向けて建国の意思を発表した事は一度もない。ジョン・タシク (John Tkasik) 氏など多数の外国政治家、評論家が「台湾人はなぜ自分で建国宣言をしないのか」と述べているのに、誰も気がつかない。

人民に向けて我々は独立すべきだ、権利があると「呼びかけ」ても、人民が世界に向けて「我々は建国する」と意思表示をしない。従って世界諸国は「台湾人は何をしたいのか、ハッキリ言わなければ援助のしようがない」と言う。私はこの事実に気がついたから独立宣言を書く計画を立てたのである。それでも後述するように仲間の意見が揃わず異議がたくさん出てきた。

「独立ではない、建国だ」と言うことが大切である。独立は中華民国から独立することである。サンフランシスコ平和条約によって台湾の地位は未定となり、台湾人民は国籍をなくした。だから台湾人は中華民国から独立するのではなく建国するのである。これは重要なことで、この違いを理解していないから台湾人は団結できないのである。

#### ●建国宣言全文(日本語)

**1945年日本は連合軍に無条件降伏した。1951年9月、日本国は米国など48カ国とサンフランシスコ和平条約を締結した。1952年4月28日、条約の発効により臺灣及び澎湖群島は未確定領土となり、同時に臺灣人民も無国籍となった。臺灣及び澎湖群島の主権は当時六百万の臺灣人民及びその子孫に属する。**

**臺灣人は蒋介石が中国大陸から連れてきた中国人ではない。中国人は長年臺灣に住んでいながら臺灣を国と認めない。中華民国は蒋介石が臺灣に持ち込んだ亡命政府の集団で、多くの国は既に滅亡した国と認めている。中華人民共和国(中国)は臺灣と澎湖群島が中国領土であると声明したがこれは事実ではなく、国際法的根拠はない。臺灣人民は絶対に承認しない。**

**臺灣人民は強い意志をもって「臺灣」と呼ぶ独立国家を建設し、互惠平等な国際関係を建設することを世界に宣言する。臺灣は臺灣人民の所有するものである。我々は天賦の自決権を行使して臺灣人の民主国を建設する。我々は世界各国及び民主を愛する人々の承認と熱烈なる支持を希う。**

#### ●台湾人の定義

SFPTの締結によって台湾は国際地位を失い、人民は無国籍となった。だから当時の600万の台湾人民とその子孫には建国する権利がある。

文章は簡単明瞭に書くのがもっとも難しい。建国宣言は誰が(who)、なぜ(why)、何をするか(what)を宣言

するのである。簡単に目的を述べるだけでよく、歴史的意味や地理的環境、中国人の影響などを書く必要はない。我々は教科書をつくるのではないし、外国人を教育するわけでもない。台湾人は無国籍である、建国する権利がある、意思がある。そのことだけを誰が読んでも理解し同意してくれるように宣言するのだ。

ところが多くの台湾人は台湾に住む中国人にも建国に加わる権利があるという。台湾に住む中国人の殆どが中華民国を支持し、台湾建国に反対だ。極少数の中国人賛同者を入れたがるのは中華民国の心理的影響を受けた台湾人である。中国人の影響を受けたものは宣言の「600万の無国籍台湾人 (people of Taiwan who lost their nationality)」に異議を唱えて、「2400万の台湾の住民 (people living on Taiwan)」全員を入れるべきだと言う。

台湾人は内弁慶が多い。外省人の一人二人が独立建国に賛成と言えれば有頂天になって外省人も入れろと騒ぐ。「台湾人は中国人ではない」と言えれば大賛成なのに、中国人を排除すると「中国人に睨まれる」から台湾に住む中国人も入れろと言うのだ。

以下省略

(2) NY タイムズ掲載の建国宣言 2010年7月10日 NY タイムズ広告欄の原文

**International**  
The New York Times

**Separatists In China Tied To Bomb Plot**  
Arrest of 8 in Germany And Norway Plot to Kill

**Suicide Bomber Attacks Meeting Of Tribal Elders in Pakistan**

**Korean War Panel Finds 138 Instances of U.S. Attacks on Civilians**

**New Threats to Immigrants Set South Africa on Edge**

**TAIWANESE PEOPLE'S DECLARATION OF SOVEREIGN TAIWANESE NATION**

In 1945, Japan unconditionally surrendered to the Allied Forces. In September 1945, Japan signed the San Francisco Peace Treaty with 48 countries led by the United States. When the treaty came into effect on April 28, 1952, the sovereignty of Taiwan and Penghu Islands officially became under United States administration, and the residents of Taiwan also lost their nationality. We do have the right to decide the sovereignty of Taiwan belongs to those six million Taiwanese and their descendants.

Taiwanese people are not the Chinese whom Chiang Kai-shek brought from mainland China. Although they have lived in Taiwan for many years, they have never recognized Taiwan as a sovereign nation and refuse to be called Taiwanese. The Republic of China is Chiang Kai-shek's government in exile group, many countries consider it as a fallen government. Although the People's Republic of China insists that Taiwan and Penghu Islands are part of Chinese territory, it is factually untrue and there is no basis under international law. Taiwanese people never recognize it.

We, the people of Taiwan, hereby declare our strong will and determination to build a nation called Taiwan, and to establish equal and reciprocal relations with all nations in the world. Taiwan naturally and rightfully belongs to the Taiwanese people. We exercise our innate self-determination and right to build a democratic Taiwan. We wish all nations and democracy-loving people of the world to give their recognition and strong supports to our cause.

**Signatories:**

<ul style="list-style-type: none"> <li>ACT Center International Cultural Foundation</li> <li>Taiwan Rescue Action Alliance</li> <li>Taiwan Friends Association</li> <li>Union of Taiwanese Teachers</li> <li>Farmers Association</li> <li>Taiwan Civilian Republican Party</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Taiwan Civilian Democratic Party</li> <li>Taiwan Livelihood Assembly</li> <li>Taiwan Society North</li> <li>Formosa Nation Legal Strategy Association</li> <li>Nation Building Party</li> <li>Taiwan Pro-American Alliance</li> </ul>
---	--

For further information, please contact:  
Taiwan Rescue Action Alliance  
28-1, No. 76, Sec. 1, Chang Hsiao E. Rd., Taipei 109, Taiwan  
traaworld@gmail.com FAX: (02)2392-7636

### 3 イエーツ氏への手紙

Andre C. Chang  
6 Calle Anacapa  
San Clemente, CA 92673  
Tel: (949) 361-2136  
September 25, 2011

Mr. Steven Yates  
1425 K Street, NW, Suite 350  
Washington, D.C. 20005

Dear Mr. Yates:

I watched your interview with FAPA's president Darice Lee in Los Angeles with great interest. I also read your speech "Asia-Pacific Regional Security and Peace in the Taiwan Strait" which you had presented at "Taiwan Strait Safety and Peace Solution Symposium" in Taipei on September 7. I agree with your Part V, Recommendation for a peaceful Taiwan Strait, and hope your recommendations will be accepted by the United States in the future.

My name is Andre (Andy) Chang. I live in California, and I have my own web-magazine in Japan for 12 years. I write in Japanese but many articles are translated in Chinese. As an independent thinker and writer, I am not a member of any political party, like DPP, FAPA, or Roger Lin's Taiwan Civil Government.

I agree with many Taiwanese that Taiwan is still not a nation, and Republic of China is not a legitimate government. But I do not think independence can be achieved by Taiwanese alone. Likewise, the United States will not be able to resolve this issue alone. It should be solved with other problems in Asia Pacific region.

I believe People of Taiwan have the right to self-determination. But the United States do not support the self-determination on the reason that it may disturb the stability of Taiwan Strait. The issue of Taiwan Independence has been put on hold for 66years. It is difficult for the United States to solve this problem alone, and it is difficult for Taiwanese people to struggle alone also.

The unsettled territories in South-East Asia, which Japan had renounced in the Article II of San Francisco Peace Treaty (SFPT) should be resolved altogether by all signatory countries and only those countries signed the Treaty. This will settle the not only territory problems, but also bring peace to the Asia Pacific region. This solution will be a great advantage to the United States. Please read the attached paper and tell me what you think. My e-mail address is [bunsho2@gmail.com](mailto:bunsho2@gmail.com).

You said: "a great power will never stop until it has achieved hegemony. China is striving to be that great power, and it will not stop until it has driven the United States out of the Asia Pacific region." How true.

The question is how to deal with China's unreasonable ambition with reason. In my opinion, the key is to get together with the United States and all involved nations to solve the problem.

You explained the history of the United States China policy in your speech, which in short had gradually evolved from "Containment" to "Commercial Partnership" to "Status Quo." In short, the China policy is gradually losing steam. China has no intention of obeying the world's common rules and honesty.

I suggest the next China policy for the United States is "Law and Order." "Law" is to clarify unsettled territories with all SFPT signatory nations, and "Order" is to form Asia-Pacific Nations Union (ASPACNU) to strengthen the rule of territorial sovereignties. The basis for this is already set in the "Declaration of the Conduct of the Parties of the South-China Sea" which was signed by China and many ASEAN nations in 2002.

Personally, I have been trying to form a PASEA (Peace Association of South East Asia), which is an international civilian group to build a petition campaign in Taiwan, Japan and other ASEAN nations. I have gathered a few scores of names in LA and Tokyo. I hope my petition drive will gather momentum after Taiwan's election.

Of course it would be superbly effective if I could ask congress directly to form "A committee to resolve Asia's unsettled territories." I hope you can help me work with congress to form a committee

Sincerely yours.



## 参 考 文 献

- 安里英子「独立運動高まり緊迫増す台湾」『朝日ジャーナル』12月8日号、1989年。
- 阿部誠文「台湾俳壇史」『燕巢』2000年1月号 - 2002年4月号。
- 新井宝雄「講座・中国問題入門=根拠なき”台湾独立論”」(上)『公明』1972年1月号。  
「講座・中国問題入門=根拠なき”台湾独立論”」(下)『公明』1972年2月号。
- 池内たけし「台湾の旅(一)(二)(三)」『ホトトギス』1927年(昭和2)7・8・9月号。
- 伊藤 潔「公然化した台湾の独立運動」『中央公論』第107巻1号、中央公論社、1992年。
- 今井祥子「近代俳句史の周辺で—台湾と俳句」『立教大学比較文明学紀要 境界を越えて比較文明学の現在』第5号、2005年。
- 磯田一雄「台湾における日本語文芸活動の過去・現在・未来—俳句を中心にその教育文化史的意識的點描する—」『成城大学文芸学部紀要 成城文藝』第197号、2006年。
- 和泉 司「西川満「轟々と流るるもの」試論—「台湾新文学運動」期ではない1930年代を考える端緒として—」『交流』交流協会、2005年。
- 上島嘉郎「遙かなり台湾—独立運動にかけた台湾人学者 40年ぶりの帰国譚—」『正論』第339号、2000年。
- 上野俊哉『ディアスポラの思考』筑摩書房、1999年。  
[AC通信] Andy Chan 配信
- 江副東洲「面舵取舵」『ホトトギス』昭和2年8月号。
- 大島信三「インタビュー 私たちが台湾独立運動に奔走していた頃」『正論』第339号、2005年。
- 小田 滋「主権独立国家の『台湾』—『台湾』の国際法上の地位—(私の体験的・自伝的台湾論)」『日本学士院紀要』第62巻1号、2007年。
- 大野きゆう「偶感」『ホトトギス』1927年(昭和2)8月号。
- 岡崎郁子『黄靈芝物語』研文出版 2004年。  
「黄靈芝論 その一」『吉備国際大学社会学部研究紀要』第8号、1998年。
- 何 義麟「日台親和」の虚像と実像 植民地支配の歴史経験は国際協力のモデルか?」『インパクション』120号、2000年。
- 簡 月真「共通語として生きる台湾日本語の姿」『国文学 鑑賞と解釈』第70巻1号、2005年。
- 『軍民導報』中華民国国防部政治部、1950年12月24日～1951年3月28日。
- 国立編訳館編・主編 易達 永山美樹 訳『台湾を知る』雄山閣出版、2002年。
- 黄 智慧「ポストコロニアル都市の非情—台北の日本語文芸運動について」大阪市立大学院文学研究科アジア都市文化学教室編 橋爪紳也責任編集『アジア都市文化額の可能性』清文堂、2003年。

- 「台湾における『日本文化論』に見られる対日観」『アジア・アフリカ言語文化研究』第71号〈特集〉台湾における日本認識 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2006年。
- 「台湾における日本観の交錯—族群と歴史の複雑性の資格から—」『日本民族学会』259号、日本民族学会、2009年。
- 黄美娥「日治時期台北地区文芸期刊目録」『日治時期台北地区文学作品目録』台北市文献委員会、2003年
- 黄靈芝『黄靈芝作品集』巻15、自費出版、2000年。  
『黄靈芝作品集』巻18、自費出版、2000年。  
「台湾の俳句—その周辺ほか」『國文学』2005年9月号、学燈社。  
『台湾俳句歳時記』言叢社、2003年。  
「俳句に託す台湾の心」『日本経済新聞』2005年11月21日付、文化欄。  
『黄靈芝作品集』巻20「蟬300句」特集号、自費出版、2003年。
- 小林里平『台湾歳時記』政教社、1910年。
- 孤蓬万里（吳建堂）『「台湾万葉集」物語』岩波書店、1994年。  
『台湾万葉集（続編）』集英社、1995年。
- サイード、エドワード・W. 『知識人とは何か』大橋洋一訳、平凡社、1998年。
- 酒井邦之輔『相思樹』1907年8月号、竹風吟壇、
- 司馬遼太郎『街道をゆく40 台湾紀行』朝日新聞社、1994年。
- 島田讓二「正岡子規と渡辺香墨」『華麗島文学史：日本詩人の台湾体験』明治書院、1995年。  
『朱夏』特集「俳人と歌人のアジア地図」せらび書房、2000年。  
『終刊 相思樹』五平太号、吉川五平太追悼特別号、1916年（大正5）。
- ジョナサン・アダムス「台湾に蔓延する独立疲れ」『NEWSWEEK』2月28日号、2007年。
- 菅野敦志「1950年代初期台湾の中国化—『改造』と『中央化』の影響を中心に—」『日本台湾学会報』10号 2008年。
- 鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』慶応義塾大学出版会、2007年。
- 染川清美「日台俳句会の国際俳句的視座による一考察—『なると俳句会』と『台北俳句会』の例をもとにして—」『なると』第355号、2009年。  
「日本語残留孤児の居場所—日本統治後の台湾日本語俳句の空間から—」『日本学報』第28号、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、2009年。  
「俳句が海外に与えた影響—日本語残留孤児としての台湾日本語俳句—」『大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」第5巻「イメージとしての<日本>」最終報告書』松本工房、2007年。  
「俳句が海外に与えた影響—アメリカ合衆国内俳句協会会員と留学生の俳句に対する現在の意識を探る—」『なると』1月号、創刊30周年・300号記念号、なると俳句会、2005年。

『台北川柳会』「二周年記念特集会報」1996年7月。

『台北俳句集』巻1-39、台北俳句集編輯委員会、1997-2012年。

『台北俳句集巻六』台北俳句集編輯委員会、1997年。

『台北俳句会8月報』(2014年8月18日配信)。

『台湾歌壇』創立四十周年記念特集 台湾歌壇編集委員会、2008年、「まえがき」と「あとがき」。

第1集(吳建堂創刊138輯)1968年。

第9集、2008年。

台湾総督府編纂『公学校用国語讀本 第一種 巻12』第三期国語教科書(第六学年後期用1926年(大正5))。

『公学校用国語讀本 巻10』第四期国語教科書(第五学年後期用)、1941年(昭和16)。

『公学校用国語讀本 巻12』第四期国語教科書(第六学年後期用)、1941年(昭和16)。

『初等科国語 七』第五期国語教科書(第六学年前期用)、1944年(昭和19)。

『初等科国語 八』第五期国語教科書(第六学年後期用)、1944年(昭和19)。

台湾独立建国聯盟日本本部『台湾青年』台湾青年社、1960年。

『台湾日日新報』

張 継昭『フライデイ・ランチクラブ』新風社、1996年。

『不幸のカルテ』東京図書出版会、2001年。

『台湾丸の針路』(日本語と中国語の対訳)台湾北社、2010年。

趙 鳳杉「台湾問題の争点一「祖国統一」と「台湾独立」の狭間で一」『筑紫女学園大学紀要』第14号、2002年。

陳 光興「台湾独立運動の終わり一2000年台湾総統選挙後の新情勢一」『インパクション』120号、インパクト出版会、2000年。

陳 天璽「台湾系華人移民」『アジア遊学』39号、2002年。

陳 鵬仁「台湾独立論への疑問」『自由』第44号、1963年。

沈 美雪「俳句の地域性と国際化:台湾俳壇を中心に」弘前大学博士論文、2007年。

成瀬千枝子「戦後台湾におけるアメリカ留学(Ⅰ)」『交流』第634号、交流協会、2001年。

「戦後台湾におけるアメリカ留学(Ⅱ)」『交流』第635号、交流協会、2001年。

林 茂生『日本統治下の台湾の学校』拓殖大学海外事情研究所華僑研究センター、2003年。

『ホトトギス』1898年(明治32)10月号(第3巻第1号) - 1943年(昭和18)7月号(第47巻第1号)。

松永正義「台湾の日本語文学と台湾語文学」『一橋論叢』第119巻 第3号、日本評論新社、1998年。

森田健嗣「社会教育からみる1950年代の戦後台湾国語普及について」『天理台湾学会第15回研究大会研究論文報告集』B2-1~B2-15、2005年。

柳田久太郎編『終刊 相思樹』五平太号、1911年。

- 山下一海・今井千鶴子・宇多喜代子ら編集『現代俳句大事典』三省堂、2005年。
- 山本孕江「台湾の俳句と私」『ホトトギス』1927年（昭和2）8月号。
- 山本岬人「台湾」『ホトトギス』1927年（昭和2）8月号。
- 楊子震「戦後初期台湾における脱植民地化の代行—国民政府の滞在台沖繩人・朝鮮人政策を中心に—」『国際政治』第162号 日本国際政治学会、2010年。
- 楊文魁「『河清』か 台湾独立志向—台・日・米に見る台湾独立運動の歩み—」『アジア文化』No.26、総合研究所出版会、2003年。
- 頼柏紘『茜雲の街』台北市致良出版社、1997年。
- 林景明「わが闘争記—台湾独立運動にかけた12年—」『現代の眼』11月号、1973年。
- レイ・チョウ『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳、青土社、1998年。
- 若林正文「台湾ナショナリズムと『忘れ得ぬ他者』」『思想』1月号2004年。
- 「96年以後—総統選がつくってきた台湾独立世論」『中央公論』第119巻第4号、中央公論社、2004年。
- 「台湾の重層的脱植民地化と多文化主義」『東アジアの近代と日本』慶応義塾大学出版会、2007年。
- 渡部常三郎『緑珊瑚』一周年記念号、台北緑珊瑚会、1908年。
- Kiyomi Somekawa, “The Influence of Haiku on Countries Foreign to Japan” WORLD HAIKU REVIEW, Magazine of The World Haiku Club Vol.3, Issue 2: December 2003.
- Vickers, Edward, “Frontiers of Memory - Conflict, Imperialism and Official Histories in the Formation of Post cold War Taiwan Identity,” Sheila Mayoshi Jager and Rana Mitter Ed., *Ruptured Historie*, Harvard University Press, 2007.